福岡市埋蔵文化財調査報告書第682集

HI　I GAWA

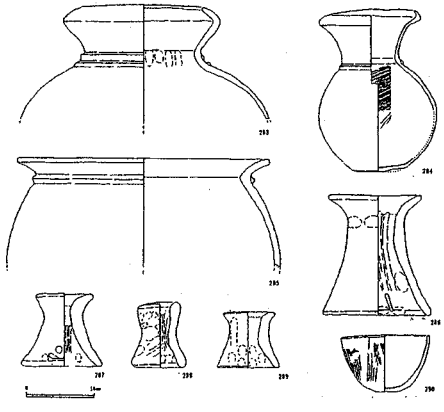
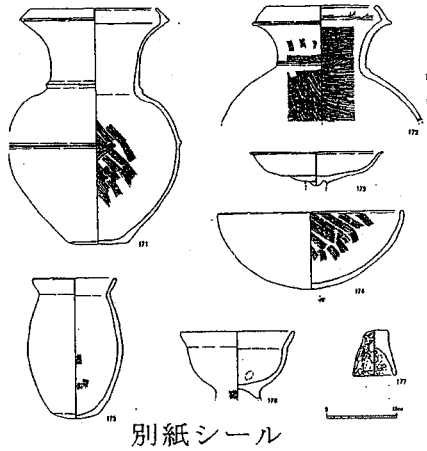
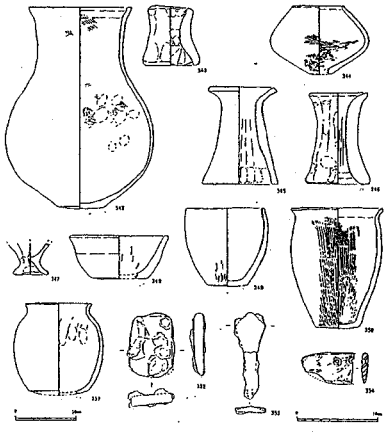
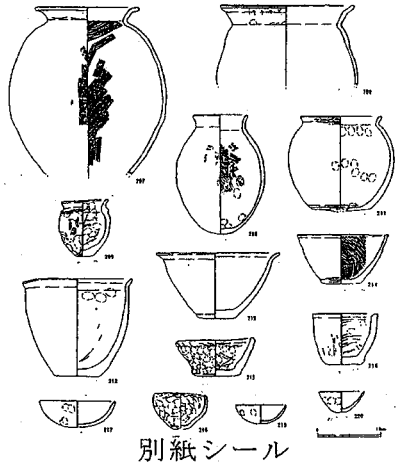
樋井川A遺跡

－樋井川A遺跡第1次調査報告－

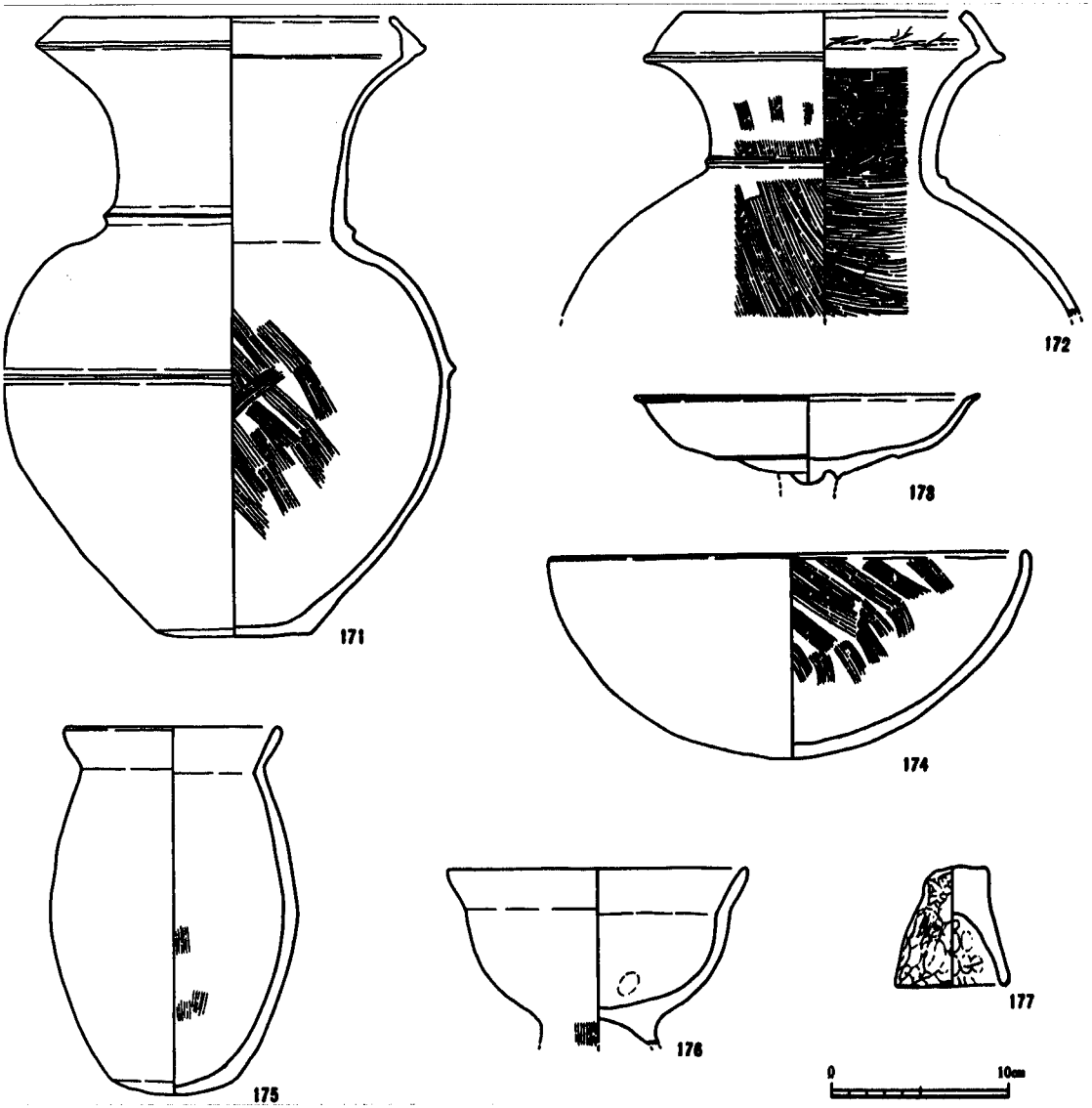
2001

福岡市教育委員会

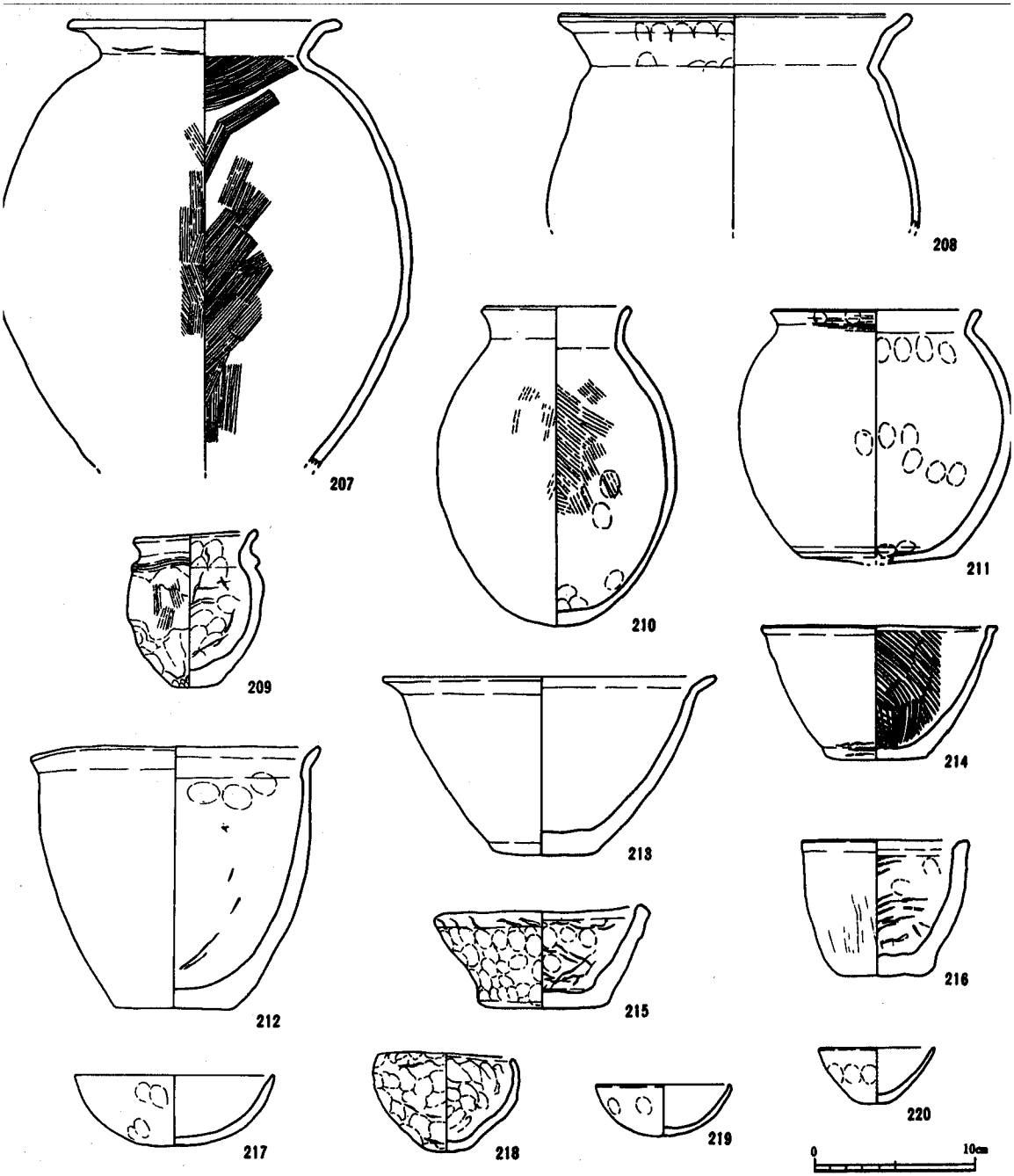
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 682 集「樋井川Ａ遺跡」正誤表

p	行	誤	正
例言	10	屋山博	屋山洋
1	1	。.はじめに	1.はじめに
	29	西田結果	西田結香
	30	屋山博	屋山洋
3	1	「.調査区の立地と環境	2.調査区の立地と環境
13		Fig.1　周辺遺跡分布図	Fig.7　SU558 出土土器実測図.1（1/4）
15	Ph.8	下段　49	47
23	Ph.16	SU079・230 出土土器	SU079・227 出土土器
		上段　72	81
		左　72	70
39	Fig.28		 別紙シール
44	Fig.32		 別紙シール
66	Ph.43	下段　中　379	377
83	Ph.59	457	467
85		Fig.60 SX057・SK083・089...	Fig.60 SX037・SK083・088・089...
87	Fig.61	SK89　上段　中	480
89	Ph.67		上段左 492 右 491　下段左～ 495.494.493
93		Fig.66SD370...781・126・127・262...	Fig.66SD370...781・262...
103		Fig.69...（1/4・1/8）	Fig.71...（1/80）
109	Ph.86	645	625
134	Ph.118		上段左～ 713.714.715.716.717
			下段左～ 718.720.722.721.723
	Ph.120		上段左～ 734.740.735.736.731.738
			中段左～ 724.725.726.727.732.739
			下段左～ 730.733.737.728.729.741
138	Fig.98		中段右羽口 757　炉底 758
141	Ph.124	770	790
158	SX771	4.03 × 3.00 × 20.07	4.03 × 3.00 × 2.00
160	SU249	1.58 × 1.30 × 1.23 × 1.18	1.58 × 1.30 × 1.18
161	SC017	2.80+ α +1.40+ α +0.48	2.80+ α × 1.40+ α × 0.48
175	2		別府大学　本田光子

682集 P39



682集 P44

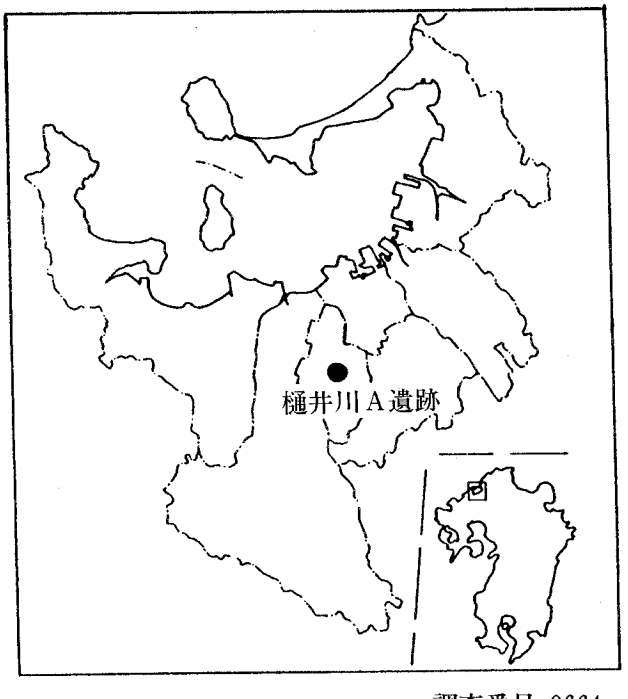


福岡市

HI I GAWA

樋井川A遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第682集



調査番号 9664
遺跡番号 HIA-1

福岡市教育委員会

調査区遠景（南から）

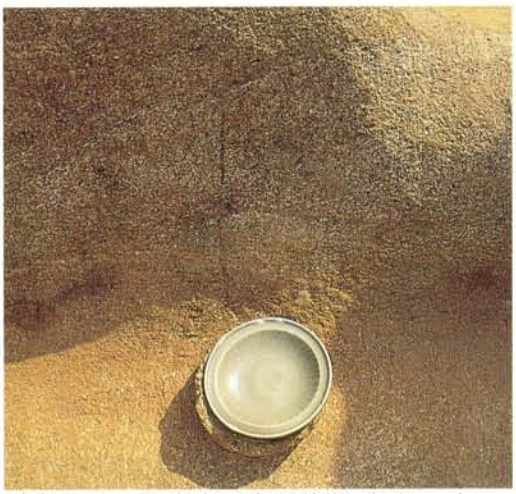
(1) 調査区全景（南から）

(3) Ⅱ区全景（南から）

(2) 環溝・堀（南から）

(4) Ⅱ区建物群（南から）

(1) 地下式土壙　ＳＸ134（北から）



(2) ＳＸ134青磁皿出土状況（西から）

(3) ＳＸ134出土青磁皿

(4) ＳＸ134出土青磁皿・朝鮮碗

(1) 客土下面埋納鉄器出土状況（北から）

(2) 鉄鍋出土状況（北東から）

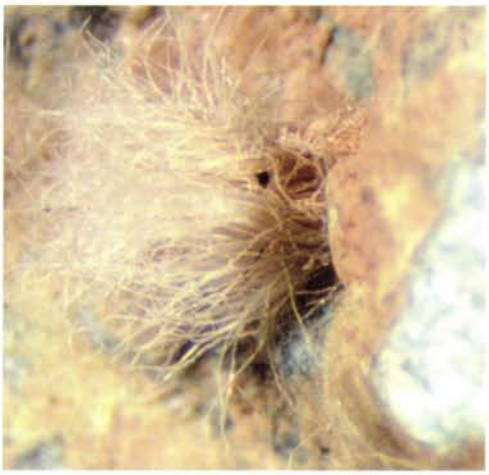
(3) 鉄鍋側面

(4) 鉄　鍋

(5) 鉄鍋正面

(1) 客土下面和鏡出土状況（南から）

(2) 和　鏡

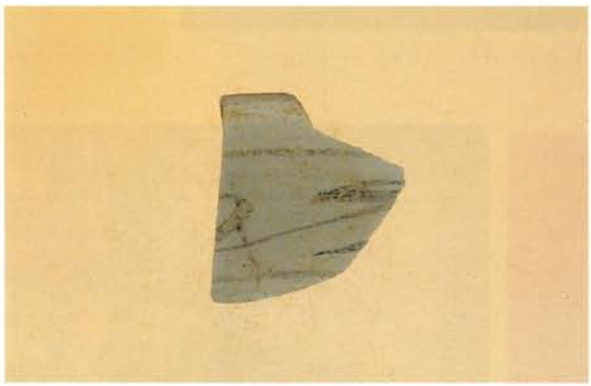


(3) 鏡麻緒

(4) 懸　仏

(1) 金銅刀柄頭

(2) 辰砂壷



(3) ベトナム鉄絵碗

(4) ＳＲ739赤絵水滴

(5) ＳＲ722（南から）

(6) ＳＲ722副葬品

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。そして、これにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市城南区樋井川3丁目において住宅地域での市民公園新設の造成工事に先立って発掘調査を実施した樋井川A遺跡の第1次調査の記録を収録したものであります。

調査の結果、おもに、幅2ｍ程の溝に囲まれた弥生時代後期の集落・幅3ｍ程の堀で方形に区画された戦国時代の名主屋敷などが確認され、弥生時代・中世の集落を研究する上で貴重な資料を得る事ができました。

調査に際し、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第です。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

例　　言

1. 本書は本市都市整備局公園緑地部公園計画課が実施した城南区樋井川3丁目473－2外の樋井川中央公園整備事業にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成9年1月6日～同年10月1日に実施した樋井川A遺跡第1次調査の調査報告書である。

2. 本書で用いる方位は磁北であり、国土地理院座標第2系による座標北はこれに6°2′東偏する。

3. 調査区内のグリッド呼称は5ｍ方眼線の西北交点とした。

4. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居→SC・掘立柱建物→SB・土壙→SK・溝→SD・墓→SR・貯蔵穴→SU・柱穴→SP・地下式土壙その他→SXとし、遺構番号は通し番号として遺構略号のあとに順次続けた。

5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・屋山博・星野恵美・吉岡員代・永井大志・大塚拓史・柴藤裕志・倉光京子による。

6. 本書に使用した遺物実測図は加藤・比佐陽一郎・平川敬治・山崎賀代子・井上加代子・池田美紀・井上愛子・池田光太による。

7. 製図は加藤・横山邦継・平川・山崎・井上・安野良・副田則子による。

8. 本書に使用した写真は加藤・大塚・平川による。

9. 本書の執筆編集は加藤が行い、付編1.は安来和鋼資料館に、付編.2は別府大学文学部　文化財学課助教授本田光子氏に委託した。

10. 本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本 文 目 次

Ⅰ. はじめに ……1
1. 調査に至る経緯 ……1
2. 調査の組織 ……1

Ⅱ. 調査区の立地と環境 ……3

Ⅲ. 調査の記録 ……6
1. 調査の概要 ……6
2. 縄文時代の調査 ……7

3. 弥生時代の調査 ……8
1) 弥生前・中期の遺構・遺物 ……8
2) 弥生後期の遺構・遺物 ……32
3) その他の出土遺物 ……62

4. 古墳時代の調査 ……67
1) 古墳前期の遺構・遺物 ……67
2) 古墳後期の遺構・遺物 ……69
3) その他の出土遺物 ……82

5. 中世の調査 ……84
1) 中世前期の遺構・遺物 ……89
2) 中世後期の遺構・遺物 ……91
3) その他の出土遺物 ……146

6. 近世の調査 ……147
1) 溝と溜井 ……147
2) 墓地 ……153

Ⅳ. 小結 ……155
付編.1 樋井川A遺跡吹調査出土鉄滓等の分析報告書 ……165
付編.2 樋井川A遺跡1次調査赤色顔料の分析報告 ……175

挿 図 目 次

Fig. 1　周辺遺跡分布図　(1／25,000) …… 4
Fig. 2　調査区位置図 (1／2,500) …… 5
Fig. 3　縄文時代出土遺物実測図 (1／3・1／4・3／4) …… 7
Fig. 4　弥生時代前・中期の遺構分布図 (1／600) …… 9
Fig. 5　西北部貯蔵穴実測図 (1／40) …… 10
Fig. 6　SU281・313・374出土遺物実測図 (1／4) …… 11
Fig. 7　SU558出土土器実測図.1 (1／4) …… 13
Fig. 8　SU558出土遺物実測図.2 (1／4・3／4・1／2) …… 14
Fig. 9　SU350出土土器実測図 (1／4) …… 15
Fig.10　西南部貯蔵穴実測図 (1／40・1／60) …… 16
Fig.11　SU003・254・255出土土器実測図 (1／4) …… 17
Fig.12　中央部貯蔵穴実測図 (1／40) …… 19
Fig.13　SU230出土遺物実測図 (1／4・3／4・1／3) …… 20
Fig.14　SU079出土土器実測図 (1／4) …… 21
Fig.15　SU227出土遺物実測図 (1／4・1／6) …… 22
Fig.16　SU227出土石器・土製品実測図 (1／3・1／4) …… 24
Fig.17　東部貯蔵穴実測図 (1／40) …… 25
Fig.18　SU066出土遺物実測図 (1／4・1／3) …… 26
Fig.19　SU786出土遺物実測図 (1／4・1／3) …… 28
Fig.20　弥生時代前期土壙実測図 (1／40) …… 29
Fig.21　SC811実測図 (1／60) …… 30
Fig.22　SK377・424・051・792・SC811出土土器実測図 (1／4) …… 31
Fig.23　弥生時代後期の遺構分布図 (1／600) …… 32
Fig.24　SD127　1群土器出土状況土層断面図 (1／60) …… 34
Fig.25　SD127　グリッド別土器出土量 …… 35
Fig.26　SD127　1群出土土器実測図.1 (1／4) …… 37
Fig.27　SD127　1群出土土器実測図.2 (1／4・1／12) …… 38
Fig.28　SD127　2群出土土器実測図 (1／4) …… 39
Fig.29　SD127　3群上層出土土器実測図.1 (1／4) …… 41
Fig.30　SD127　3群上層出土土器実測図.2 (1／4) …… 42
Fig.31　SD127　3群下層出土土器実測図.1 (1／4) …… 43
Fig.32　SD127　3群下層出土土器実測図.2 (1／4) …… 44
Fig.33　SD127　4群出土土器実測図 (1／4) …… 45
Fig.34　SD127　5群上層出土土器実測図.1 (1／4) …… 49
Fig.35　SD127　5群出土土器実測図 (1／4) …… 50
Fig.36　SD127　5群下層出土土器実測図.2 (1／4) …… 51
Fig.37　SD127　6群上層出土土器実測図 (1／4・1／6) …… 53

Fig.38　SD127　6群下層出土土器実測図（1／4）……54
Fig.39　SD127　7群出土器実測図（1／4）……55
Fig.40　SD127　8群出土土器実測図（1／4）……56
Fig.41　SD127　出土土製品実測図（1／3）……57
Fig.42　SD127　出土石器他実測図（1／3・1／4・2／3）……59
Fig.43　SD127　出土鉄器実測図（1／3）……61
Fig.44　他遺構へのSD127混入出土遺物実測図（1／4・1／3）……63
Fig.45　その他の弥生時代出土遺物実測図.1（1／4・1／3・2／3）……64
Fig.46　その他の弥生時代出土遺物実測図.2（1／3）……65
Fig.47　古墳時代前期の遺構分布図（1／600）……67
Fig.48　SC010・404・SK481実測図（1／60・1／40）……68
Fig.49　古墳時代前期出土土器実測図（1／4）……69
Fig.50　古墳時代後期の遺構分布図（1／600）……70
Fig.51　SC012・015・019・028実測図（1／60）……71
Fig.52　SC081・296・337・301・369実測図（1／60）……73
Fig.53　古墳時代後期出土遺物.1（1／4・1／2・1／3）……76
Fig.54　SC376・427・430実測図（1／60）……78
Fig.55　SC494・772実測図（1／60）……79
Fig.56　SK471・SD029実測図（1／40）……80
Fig.57　古墳時代後期出土遺物実測図.2（1／4・1／3・2／3）……81
Fig.58　その他の古墳時代出土遺物実測図（1／4）……83
Fig.59　中世前期の遺構分布図（1／600）……84
Fig.60　SC037・SK083・088・089・SD375実測図（1／60・1／40）……85
Fig.61　中世前期土壙出土遺物実測図（1／3・1／4）……87
Fig.62　中世前期溝出土遺物実測図（1／3・1／4）……89
Fig.63　SR247実測図（1／40）……90
Fig.64　SR247出土遺物実測図（1／3）……90
Fig.65　中世後期の遺構分布図（1／600）……91
Fig.66　SD370・485・646・137・132・781・126・262・264土層断面図（1／60）……93
Fig.67　SD370・485・646・出土遺物実測図（1／4・1／3）……94
Fig.68　SD137出土遺物実測図（1／3・1／4）……96
Fig.69　SD132・781・出土遺物実測図（1／3・1／4・1／8）……99
Fig.70　SD262・264　出土遺物実測図（1／3・1／4）……101
Fig.71　SX303・371　実測図（1／80）……103
Fig.72　SX400実測図（1／80）……104
Fig.73　SX303・371・400出土遺物実測図（1／2・1／3・1／4）……105
Fig.74　SX713・770・798実測図（1／80）……107

Fig. 75　SX713・770・798出土遺物実測図（1／2・1／3・1／4）……110
Fig. 76　SX771・229・809実測図（1／80）……111
Fig. 77　SX771・809・229出土遺物実測図（1／3・1／4）……112
Fig. 78　SX138・134実測図（1／80）……113
Fig. 79　SX135・130実測図（1／80）……114
Fig. 80　SX138・134・135・130出土遺物実測図（1／3・1／4）……115
Fig. 81　SX136・149実測図（1／80）……117
Fig. 82　SX226・157実測図（1／80）……118
Fig. 83　SX136・149・226・157出土遺物実測図（1／3・1／4）……119
Fig. 84　SX216実測図（1／80）……121
Fig. 85　SX216出土遺物実測図（1／3・1／4）……122
Fig. 86　SK067・780・283・297実測図（1／40・1／60）……122
Fig. 87　SK339・022・実測図（1／60・1／40）……124
Fig. 88　SK067・780・283・297・339・022出土遺物実測図（1／4・1／3）……125
Fig. 89　地山整形　SX209実測図（1／80）……126
Fig. 90　地山造成　SX209・建物SB1001出土遺物実測図（1／2・1／4・1／3）……127
Fig. 91　SB1003　実測図（1／100）……127
Fig. 92　SB1001・1002・1004・1005実測図（1／100）……128
Fig. 93　中世墓分布図（1／100）……129
Fig. 94　中世墓実測図（1／40）……130
Fig. 95　中世墓出土遺物実測図（1／2・1／4・1／3・1／6・1／12）……133
Fig. 96　石塔類実測図（1／12・1／6）……135
Fig. 97　中世包含層・客土土層断面図（1／80）……136
Fig. 98　中世包含層出土遺物実測図（1／2・1／3・1／4）……138
Fig. 99　客土出土遺物.1（1／3・1／4）……139
Fig.100　客土出土遺物.2（1／3・1／4）……140
Fig.101　SD137上層客土内埋納遺物出土状況（1／60）……142
Fig.102　中世客土埋納遺物実測図.1（1／4）……143
Fig.103　中世客土埋納遺物実測図.2（1／2）……144
Fig.104　その他の古代・中世遺物実測図（1／3・1／4・1／2）……145
Fig.105　近世の遺構分布図（1／600）……147
Fig.106　SD064出土遺物実測図（1／3）……149
Fig.107　SD064・SK077出土遺物実測図（1／3・1／4）……150
Fig.108　SK086・078出土遺物実測図（1／3・1／4・1／8）……151
Fig.109　SD063出土遺物実測図（1／3・1／4）……152
Fig.110　SR722実測図（1／20）……153
Fig.111　近世墓出土遺物実測図（1／3・1／2）……154

写 真 目 次

Ph. 1　3区全景（西上から）……2
Ph. 2　SU281（東から）……8
Ph. 3　SU313（東から）……10
Ph. 4　SU374（西から）……11
Ph. 5　SU281・313・374　出土土器 ……12
Ph. 6　SU558（南から）……12
Ph. 7　SU350（北から）……12
Ph. 8　SU558・350　出土遺物 ……15
Ph. 9　SU254（東から）……17
Ph.10　SU255　土層断面（西から）……18
Ph.11　SU230（東から）……18
Ph.12　SU230　遺物出土状況（南東から）…18
Ph.13　SU230　出土遺物 ……21
Ph.14　SU227　土層断面（北から）……23
Ph.15　SU227（北から）……23
Ph.16　SU079・230　出土土器 ……23
Ph.17　SU227　出土土製品 ……24
Ph.18　SU066（北から）……25
Ph.19　SU066　出土土器 ……26
Ph.20　SU786（西から）……27
Ph.21　SU786　出土遺物 ……27
Ph.22　SU811（南から）……31
Ph.23　SD127　A−A′　土層断面（西から）… 33
Ph.24　SD127　B−B′　土層断面（南西から）…33
Ph.25　SD127　1群土器出土状況（南西から）… 33
Ph.26　SD127　1群出土土器 ……33
Ph.27　SD127　2群出土土器 ……36
Ph.28　SD127　3群上層出土土器 ……40
Ph.29　SD127　3群下層出土土器 ……40
Ph.30　SD127　4群出土土器 ……46
Ph.31　SD127　5群〜7群土器出土状況（東から）…47
Ph.32　SD127　5群土器出土状況（南から）… 47
Ph.33　SD127　5群土器出土状況（西から）…… 47
Ph.34　SD127　5群上層出土土器 …… 48
Ph.35　SD127　5群下層出土土器 ……48
Ph.36　SD127　6群出土土器 ……52
Ph.37　SD127　7群・8群出土土器 ……57
Ph.38　SD127　出土土製品 ……58
Ph.39　SD127　出土石包丁 ……60
Ph.40　SD127　出土鉄器 ……60
Ph.41　SD127　出土鉄斧337透過写真 …… 61
Ph.42　他へのSD127混入遺物 …… 62
Ph.43　その他の弥生石器.1 …… 66
Ph.44　その他の弥生石器.2 …… 66
Ph.45　SC081（北から）……74
Ph.46　SC296（北から）……74
Ph.47　SC296　鉄器出土状況（北から）… 74
Ph.48　SC301（北から）……75
Ph.49　SC369　竈部分（西から）……75
Ph.50　SC015・019・028・296　出土遺物 …75
Ph.51　SC376（西から）……77
Ph.52　SC376　竈（西から）……77
Ph.53　SC430（南から）……77
Ph.54　SC430　竈断面（東から）…… 77
Ph.55　SC494（北から）……79
Ph.56　SC772（西から）……79
Ph.57　SC376・494・772　出土遺物 … 80
Ph.58　SK471　土層断面（西から）…… 82
Ph.59　その他の古墳時代出土遺物 ……83
Ph.60　SK083（東から）……86
Ph.61　SK088（西から）……86
Ph.62　SK089（西から）……86
Ph.63　SD084・375　出土遺物 ……88
Ph.64　SD375　土層断面（北東から）… 88
Ph.65　SR247（北から）……89
Ph.66　SR247　遺物出土状況（東から）…… 89
Ph.67　SR247　出土食器 ……89
Ph.68　SR247　出土鉄器 ……89
Ph.69　SD370　土層断面（西から）…… 92

Ph. 70　SD370・485・646　出土遺物 … 95
Ph. 71　SD126・127　土層断面（南から）… 97
Ph. 72　SD137　土層断面（南から）…… 97
Ph. 73　SD137　陸橋部（南東から）…… 97
Ph. 74　SD137　出土遺物 ……98
Ph. 75　SD132・781・262　出土遺物 …100
Ph. 76　SD262　土層断面（西から）……101
Ph. 77　SX303（南西から）……102
Ph. 78　SX303　竪坑 ……102
Ph. 79　SX400　土層断面（北から）……104
Ph. 80　SX400（南から）……104
Ph. 81　SX371・400　出土遺物 …… 106
Ph. 82　SX713 ……106
Ph. 83　SX770 ……106
Ph. 84　SX798（東から）……108
Ph. 85　SX798（南から）……108
Ph. 86　SX713・770・798　出土遺物 …109
Ph. 87　SX771（東から）……109
Ph. 88　SX229　土層断面（東から）……112
Ph. 89　SX229（東から）……112
Ph. 90　SX809（南から）……112
Ph. 91　SX138（西から）……114
Ph. 92　SX135（東から）……114
Ph. 93　SX138・134・135　出土遺物 …116
Ph. 94　SX136（東から）……116
Ph. 95　SX149（南から）……118
Ph. 96　SX226　進入路（北西から）……120
Ph. 97　SX226　奥室（西から）……120
Ph. 98　SX136・149・226　出土遺物 …120
Ph. 99　SX216　出土遺物 ……121
Ph.100　SX216（北から）……121
Ph.101　SX216　進入部（北東から）……121
Ph.102　SK283（南から）……123
Ph.103　SK297（北から）……123
Ph. 104　SK339（南から）……124
Ph. 105　中世土壙出土遺物 ……126
Ph. 106　地山造成面SX209出土遺物 ……126
Ph. 107　2区建物群（西から）……129
Ph. 108　中・近世墓全景（西から）…… 131
Ph. 109　SR570石塔部（西から）…… 131
Ph. 110　SR570　敷石（東から）…… 131
Ph. 111　SR570　土層断面（西から）……131
Ph. 112　SR570　完掘状況（東から）……131
Ph. 113　SR769（東から）……132
Ph. 114　SR733（北から）……132
Ph. 115　SR734（南から）……132
Ph. 116　SR734　棺外副葬品（南から）…132
Ph. 117　SR735（北から）……134
Ph. 118　SR735　出土銭 ……134
Ph. 119　SR726（西から）……134
Ph. 120　SR726　出土銭 ……134
Ph. 121　中世墓出土遺物 ……135
Ph. 122　中世客土土層断面（南西から）……136
Ph. 123　中世包含層出土遺物 ……137
Ph. 124　中世上部客土出土遺物 ……141
Ph. 125　鋤先出土状況（北東から）…… 141
Ph. 126　刀子出土状況（北東から）…… 141
Ph. 127　和鏡出土状況（南から）…… 142
Ph. 128　中世上部客土埋納遺物.1 …… 144
Ph. 129　中世上部客土埋納遺物.2 …… 144
Ph. 130　その他の古代・中世遺物 ……146
Ph. 131　SK086（南から）…… 152
Ph. 132　SD069（西から）…… 152
Ph. 133　SK078（北から）…… 152
Ph. 134　SD063　北辺（西から）…… 153
Ph. 135　SR730 ……153
Ph. 136　SR739 ……154
Ph. 137　SR723（南から）…… 154

。.はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は本市都市整備局公園緑地部公園建設課が計画・実施した城南区樋井川3丁目473－2外9,622|の樋井川中央公園造成事業にともなって実施された緊急発掘調査である。

事業は平成8年に計画され、埋蔵文化財課に埋蔵文化財の有無の確認調査が依頼された。受付番号は8－1－585である。埋蔵文化財課では公園建設課と協議を重ね、平成8年11月19日～同21日にかけ試掘調査を実施した。結果、西側の沖積地の2本のトレンチでは表土下2ｍまで黄灰色シルト～明褐色粗砂の水成堆積層で、遺構・遺物ともに発見されなかったが、東側丘陵上の7本のトレンチから弥生時代・中世の溝・土壙・柱穴が確認され、北側の竹林では石塔類の散布が確認された。(教埋第298号) 現状での保存が望まれたが、2ｍの切土造成が予定されており、協議を重ねた結果、埋蔵文化財課が緊急発掘調査を実施する事となった。調査は平成8年度は南半部の4,500|を対象とし、公園計画課の年度末竣工予定の西側擁壁部分を調査。。区として平成9年1月6日より着手した。東側高台の畑地部を調査区Ⅱ区として調査を続行し、北半竹林の未伐開地については、伐開の完了を待って踏査・試掘を実施し、最終的な調査対象範囲を確定していく事と協議された。

北半部に関しては平成9年4月8日試掘調査を実施し、弥生時代・中世の溝・土壙・柱穴が検出され、協議の結果3,100|を調査対象として平成9年度調査分に追加。この北半部を調査区Ⅲ区とし、排土は場内処理としたため、調査Ⅱ区の完了をもって開始する事とし、5月6日より調査に着手、途中、7月の記録的豪雨や環溝と1基当たり30㎜を超える地下式土壙の多量の排土に悩まされながら平成9年10月1日をもって全調査区の調査を終了した。

調査番号	9664	遺跡略号	HIA－1
調査地籍	城南区樋井川3丁目473－2外	分布地図番号	63(長尾)
開発面積	9,622m²	調査実施面積	7,600m²
調査期間	970106～971001	事前審査番号	8－1－585

2. 調査の組織

調査依頼：都市整備局公園緑地部公園建設課
調査主体：福岡市教育委員会　教育長　町田英俊
調査総括：埋蔵文化財課長　荒巻輝勝（平成8年度）
埋蔵文化財第1係長　横山邦継（平成8年度）　二宮忠司（平成9年度）
調査庶務：埋蔵文化財課第1係　西田結果（平成8年度）　浅原千晶（平成9年度）
調査担当：埋蔵文化財課第1係　加藤良彦（当時）　屋山博（平成8年度）
調査協力：杉村文子　平野義光　坂本隆二　林末孝・チセ子　中山竹雄　吉岡員代　吉岡清巳
吉岡アヤ子　小柳和子　倉光京子　井上紀世子　井上ムツ子　倉光アヤ子　因ヨシ子
和田裕見子　井上ヒデ子　阿比留治　脇坂レイコ　鍋山千鶴子　岳美保子　結城千賀子

結城信子　森山早苗　平田政子　網田美代野　田中栄　橘良平　青木秀雄　鬼塚友子
菊地栄子　平野義雄・ミサオ　田中和祐　木田ひろ子　大塚拓史　永井大志　所崎和久
平山榮一郎　高瀬孝二郎　浦川里絵　小林浩之

整理作業：平川敬治　井上愛子（現小郡市嘱託）　山崎賀代子　井上加代子　国武真理子
木村厚子　窪田慧　芦馬恵美子　池田美紀　池田光太（福岡大学）

Ph.1　3区全景（西上から）

「 .調査区の立地と環境

樋井川A遺跡は福岡市の都心部より西へ2.5km、旧海岸線より南へ6kmの地点、福岡平野の背部をなす脊振山地から北に延びて平野を東の福岡平野、西の西福岡平野（早良平野及び樋井川谷底平野）とに分断する鴻ノ巣山丘陵を中心とする、樋井川・一本松川等の中小河川が多数分岐し、花崗岩の基盤を深く開析し、八手状に延びる狭長な丘陵が多数形成しており、このうちの標高28ｍ程の樋井川丘陵の先端近くに立地する。古代にあっては「和名抄」に見える早良郡七郷の一つ田比伊郷に属する地域である。

周辺では、旧石器時代にカルメル修道院内・五ヶ村池・飯倉Ｅ・Ｆ各遺跡からナイフ型石器、柏原遺跡群で台形石器・ナイフ型石器・細石刀を検出している。

縄文時代は羽黒神社・鳥越古墳・早苗田古墳・タカバン塚古墳・大牟田・箱の池・柏原の各遺跡が早期、前期としては五ヶ村池・七隈古墳群・柏原・大牟田遺跡が、中期としては柏原遺跡・晩期では笹栗・早苗田古墳群・柏原遺跡群があり、主に山麓部に分布する。

弥生時代は遺跡が平野の丘陵部で増大し、前期末に田島Ｂ・浄泉寺・カルメル修道院内・飯倉原遺跡で貯蔵穴の他カルメル修道院内遺跡の木棺墓から錫釧3点・飯倉原では甕棺から細形銅剣・素環頭太刀が出土している。中期では西隣の標式集落の宝台遺跡、甕棺墓から前漢鏡を出土した丸尾台遺跡や別府・飯倉等遺跡が増大し、後期には木棺墓から小形仿製鏡・刀子を出土した飯倉G・住居内から小形仿製鏡鋳型が出土した飯倉D・本遺跡と南側の箱式石棺から鏡が出土した御子神社・居土壙墓から鉄鏃の出土した小笹遺跡などがある。

古墳時代の集落は神松寺・浄泉寺・片江辻・飯倉・田島Ｂ・本遺跡で確認され、首長墓系列の前方後方墳で4世紀末の京ノ隈古墳・前方後円墳で5世紀末の梅林古墳・6世紀中頃の神松寺古墳とつづき、６世紀後半以降群集墳の造営が始まり七隈・干隈・飯倉古墳群等山麓部に140基程が分布する。同期の首長墓としては柏原Ａ－2号墳がある。

古代から中世にかけては製鉄遺跡が目立ち、笹栗・飯倉・柏原遺跡群で製鉄・鍛冶炉等製鉄関連遺構が多数検出され、飯倉遺跡群では奈良から中世の集落・墓地・柏原遺跡群では8世紀後半から9世紀前半にかけての掘立柱建物31棟以上と唐三彩・越州窯系陶磁・長沙窯系陶磁・石帯・硯・墨書土器等が検出され製鉄に関連した有力集団の存在が考えられる。

中世では本遺跡と、13世紀後半～14世紀前半代の居館と水田が確認され「蒙古合戦勲功賞配分状」の恩賞地に比定されている柏原遺跡群、田島Ｂ遺跡では12～13世紀の溝に区画された屋敷が検出されている。

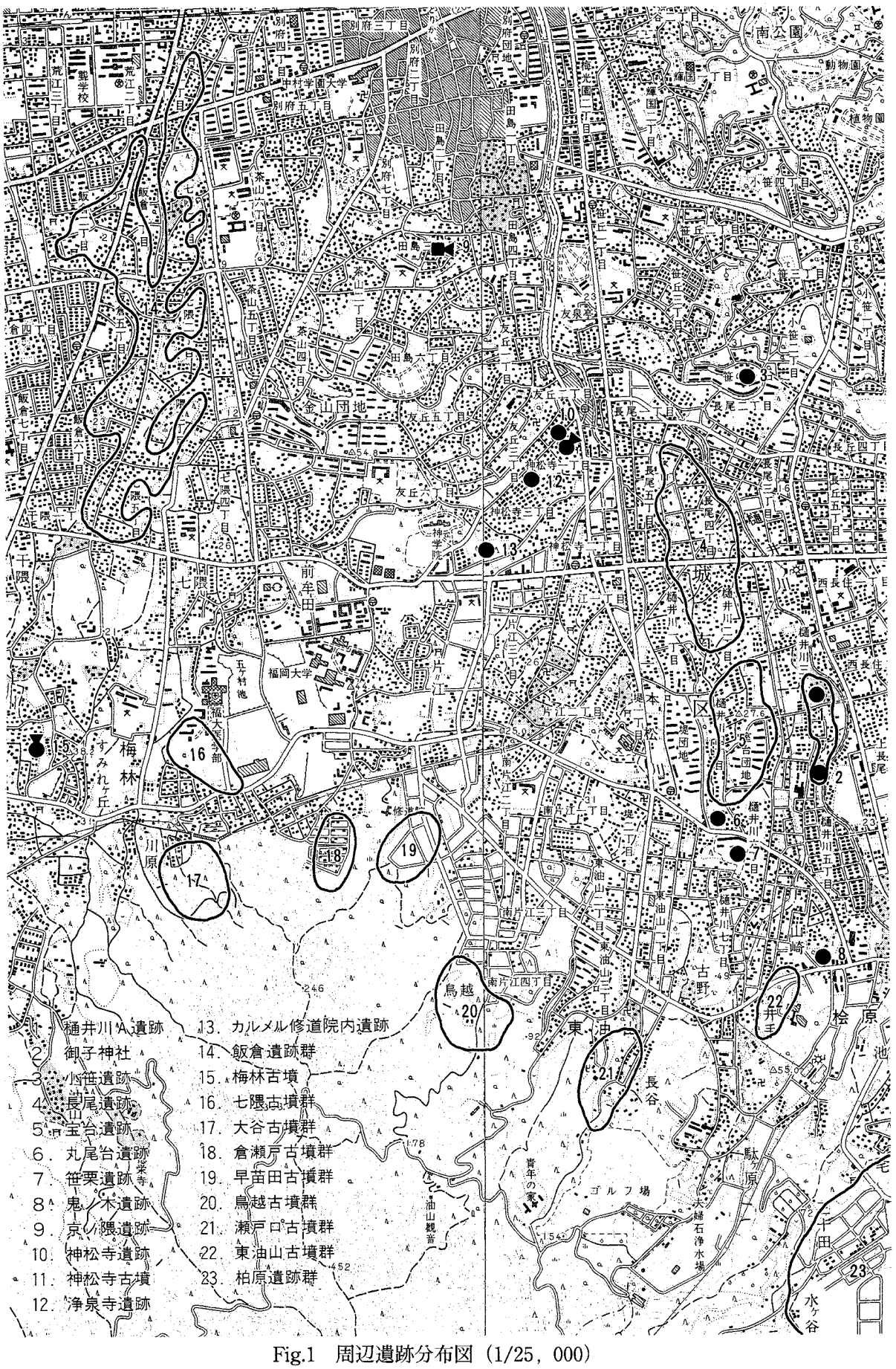


Fig.1　周辺遺跡分布図（1/25，000）

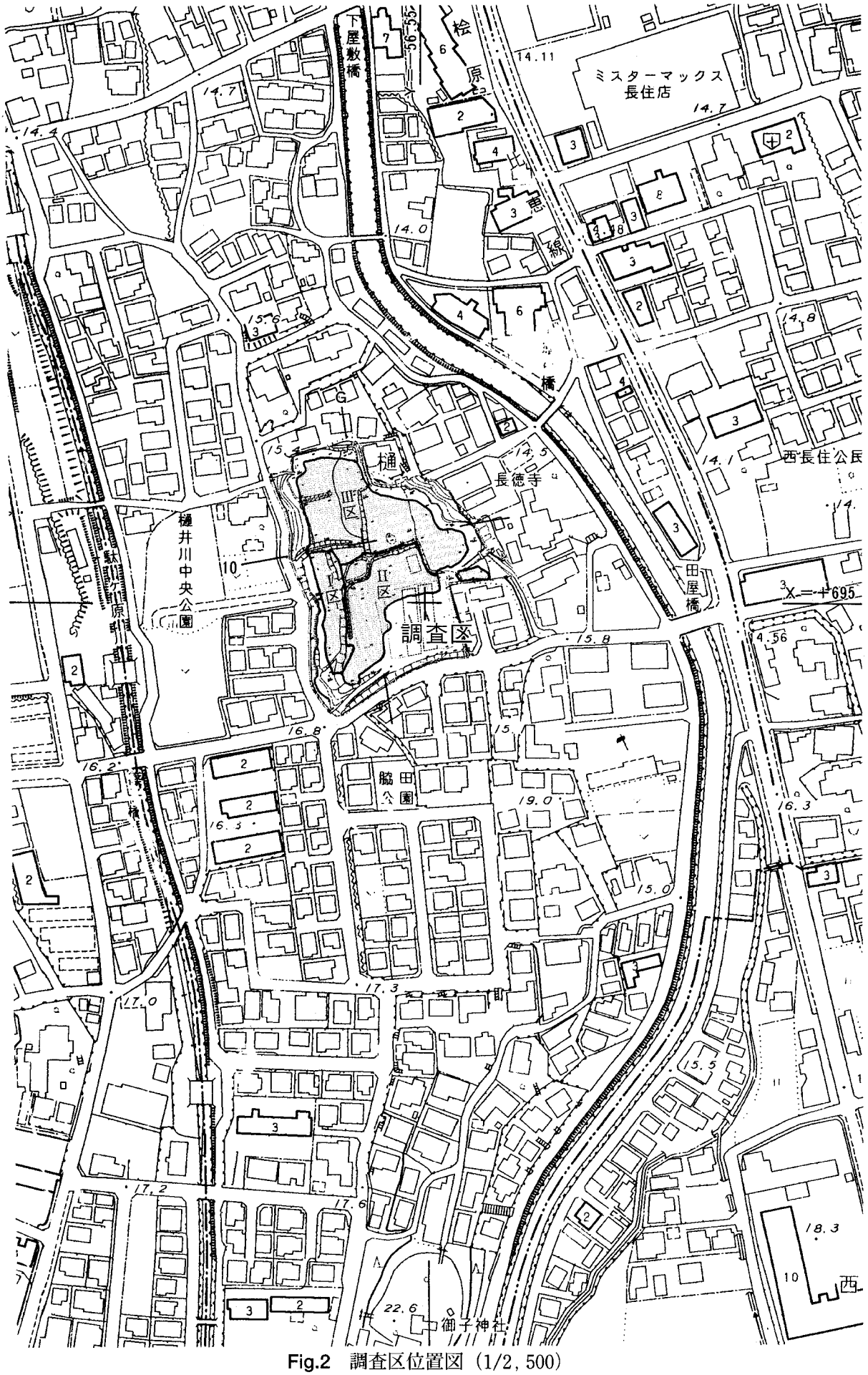


Fig.2　調査区位置図（1/2, 500）

Ⅲ．調査の記録

1. 調査の概要

調査区は舌状の樋井川左岸丘陵の先端部に位置し、最高所の現地表で23mを測る。調査域で最大幅約73m・低地との比高約8mの比較的急峻な地形で、西側から3段のテラス状に開削され、Ⅰ区とⅡ区は畑地・Ⅲ区は竹林である。基盤は花崗岩のバイラン層で、西側斜面にはこの水成堆積層と暗褐色・黒褐色の弥生～古墳時代の包含層が残る。東は樋井川の侵食と思われる自然崖となっている。

Ⅱ．Ⅲ区の最上の平坦部は20cm程の表土直下で花崗岩バイラン土の基盤に至り遺構検出面となっている。Ⅲ区の中央・南縁には近世以降の高さ50～60cm程の低い土塁が残存していた。Ⅱ区の西縁から東10m程の範囲には中世末の耕作面を埋める厚さ1mを越える客土がなされ平坦面を広げている。膨大な土量であるため土層観察用のベルト2箇所を残して、重機での除去を行っている。遺構検出は中世耕作土及び包含層下の基盤層上面で行った。

検出した遺構は整理の便宜上、弥生時代を前・中期と後期の2期に、古墳時代を3・4世紀代を前期5～7世紀代を後期として2期に、中世を11世紀後半～14世紀前半までを前期・16世紀末までを後期として2期に、近世を1時期の計7期に区分してまとめている。

それぞれの各時期の検出した遺構は弥生時代前・中期の貯蔵穴を23基・土壙8基・竪穴住居1軒、弥生時代後期は土壙3基・環溝を中心として溝3条、古墳時代前期は竪穴住居4軒・土壙3基、古墳時代後期は竪穴住居18軒・土壙7基・溝6条、中世前期は土壙5基・溝4条・土壙墓4基・溝1条、地山造成面1箇所、中世後期は方形に堀で区画された屋敷を中心に、溝12条・土壙18基・地下式土壙27基・掘立柱建物2～5軒・墓7基、近世も溝によって区画された敷地を中心に溝13条・土壙9基・墓16基である。

中心となる時期は中世後期で、ほとんど16世紀代である。遺構数65基で最盛期を示しているが、遺物の総量では弥生後期の環溝内土器が総重量約2tと他を圧倒している。中世以降の大規模造成で丘陵上部の遺構が削平されている為、遺構の基数が6基と極端に少くなっている。

検出した遺物は縄文時代中期から晩期の遺物を少量、貯蔵穴を中心に弥生時代の前期中頃～中期初頭の土器・石器、環溝からは後期～古墳時代初頭にかけての夥しい土器・石器・鉄器を検出した。中期が初頭以降欠落しており、これを補完するかの様に西側の丘陵上に宝台・長尾遺跡が立地し、これらは逆に前期・後期の資料が欠落している。前期においては半島系の土器が散見される事が注目される。後期では多量の土器もさる事ながら、多数の鉄器の出土が注目される。古墳時代は後期に住居等が増加するが、遺物の出土量は乏しい。古代の資料は殆ど検出されず、丘陵上に人跡を見るのは11世紀後半以降である。16世紀代に屋敷が設けられ該期の資料が弥生後期に次いで突出している。近世では肥前系の陶磁器を中心に多数の陶磁器を検出した。唐津・高取系の茶碗が見立ち、総じて高い品質のものが多く、近世博多の商家の持物と比べて遜色がない。資料は総量でコンテナ350箱に及ぶ。

2. 縄文時代の調査

今回の調査では遺構の検出はなく、散布地として認識される。資料は全て他時期の遺構・客土等の混入品である。

出土遺物（Fig.3）　1は黒色磨研の精製浅鉢の口縁と胴部で、口縁は波状を成している。口縁下と胴部が稜を成しており肩部には浅い沈線が一条ある。晩期前半か。2は外湾する口縁部が波状を成すもので黒～暗灰黄色を呈し内面にはヨコ条痕後ケンマを施している。3は浅鉢の口縁部小片で肩部が屈曲して稜を成している。調整は不明。4は口唇が内側に肥厚する精製の浅鉢の口縁部である。調整は不明。5は屈曲した胴部から「く」字形に口縁が延びる精製の浅鉢で、表面の摩滅のため調整は不明瞭だが内面に若干ヨコ方向のケンマが残る。6は円盤貼付底部の粗製の深鉢で、底径5.8cmを測る。調整は不明。7は端部の張り出しが若干ゆるい粗製深鉢の底部で、広めの底部から胴部が張り気味に立ち上がる小形のものである。底径4.5cm。外面には指頭圧後ナデを施す。8は口縁が「く」字状に近く屈曲する丹塗磨研の壷で、丹は殆ど剥落しているが、外面にはヨコケンマが残る。9は口径14.6cmの広口の壷で、口唇内面に三角形の粘土帯を貼り付け、外面にタテハケが見受けられるなど違和感はあるが、内傾する口縁端が短く外反する形態から夜臼式期の壷と判断した。10は黒耀石製の鍬形鏃で長25・幅15・厚5mmを測る。両面に丁寧な調整剥離を施している。11も黒耀石製の長脚鏃で、

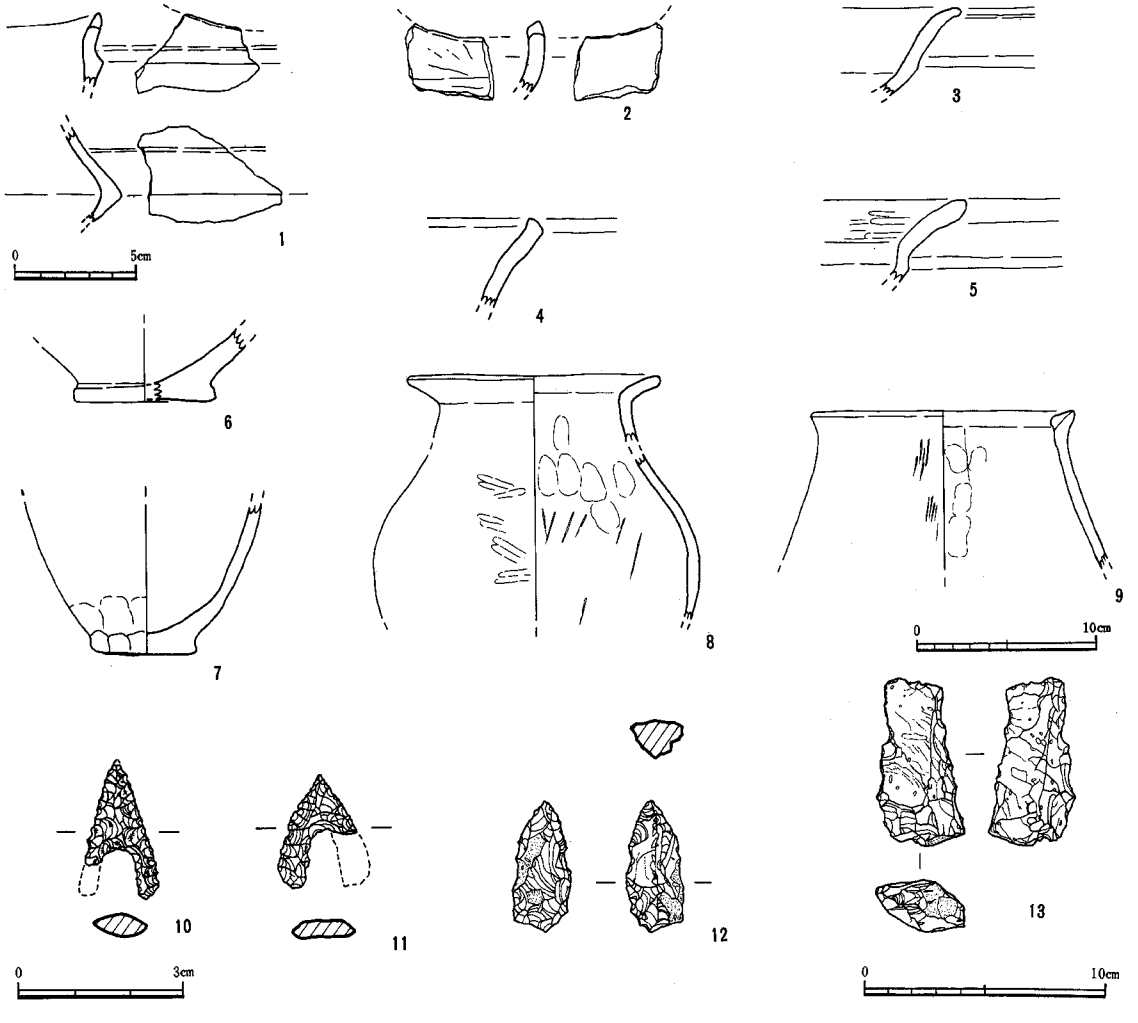


Fig.3　縄文時代出土遺物実測図（1/3・1/4・3/4）

長21・厚3㎜を測る。2点とも片脚を欠損する。12は黒耀石角礫の縁部の打面調整剥片を用いた石錐で、裏面と左側面に自然面が残る。剥片の全周を両面剥離によって調整し、全体を断面三角形に先端を鋭く整形して錐部をつくりだしている。長24・幅10・厚7㎜を測る。先端部には若干の使用痕が見受けられる。13は古銅耀石安山岩の残核で、打面は自然面のまま縦剥ぎの剥離を行い、側面は90度打面を転換している。

以上、石器は縄文時代中期以降で古相を示すが、土器は晩期で大部分を夜臼式が占めている。

3. 弥生時代の調査

1）. 前・中期の遺構、遺物

今回の調査では前期中頃～末にかけての貯蔵穴21基・土壙7基、中期初頭の貯蔵穴3基・円形竪穴住居1軒を検出した。全体的に散漫に分布しているが、西北部・中部・西南部にまとまりがある。

① 貯蔵穴

前期中頃～末で21基・中期初頭で3基検出した。西北部と中部、西南部の三つに大まかに分布を分けられるが、西南端部で密集する以外は散漫な分布である。

形態は平面円形で壁が垂直に立ち上がるⅠ類2基と平面円形で断面フラスコ状のⅡ類15基・平面方形で壁が垂直で土壙との区別が出来にくいⅢ類4基がある。

SU281（Fig.5　Ｐｈ.2）　西北部Ｃグリッドに位置するⅡ類の貯蔵穴で、口径68底径108深60㎝程の小形で遺物は20～30㎝床面より上位で検出され、全て破片である。覆土は床直上に5㎝弱暗灰褐色土が自然堆積し、その上位は地山土混じりのブロック状の埋土で埋戻されている。

出土遺物（Fig.6　Ph.5）　14は板付Ⅱ式の甕の口縁で、直線的な体部から口縁が如意状に外反し、外面には下方から口唇全面にハケメ調整具の木口で刻目を施す。以下外面はタテハケ、内面にはヨコナデを施す。前期中頃。

SU313（Fig.5　Ph.3）　西北部のB3グリッドに位置する口径90低径142深55㎝のⅡ類の貯蔵穴で壁面はほぼ45度の傾斜でオーバーハングする。遺物は中央床上から弧状に自然堆積する。

出土遺物（Fig.6　Ph.5）　15は小形の甕か壷の口縁で、口縁がゆるく外反し端部は丸く肥厚し、外面の下端には若干の段をつくる。調整はヨコナデかケンマで口径15.4㎝。口縁の粘土帯の貼付は確認できないが、無文土器の系統と思われる。16～18は甕で、16は「く」字状に外反する口縁で外面にはタテハケ・口唇下端には刻目を施す。17は如意状に外反する口縁で、口縁下に低い三角突帯を1条貼付する。口径24.6㎝。18は三角口縁の甕で上端が剥落している。全体的に剥落が著しく、口縁下の三角突帯の先端も欠けている。口径25.4㎝。19～21は壷の底部で、19は厚目の底部の上位が強く内湾するもので径10.3㎝を測る。外面にはヨコ板ナデが残る。20は底部上位の湾曲がゆるいもので外面に指頭圧痕・板ナデ痕が残る。径8.2㎝。21は小さく厚い底部

Ph.2　SU 281（東から）

で径6.8厚1.8cmを測る。外面の屈曲が強く垂直を成している。外面には指頭圧痕と板ナデ痕が残る。22・23は甕の底部である。22は薄い底部で直線的に開く。底面は若干の上底になる。外面には板ナデ痕が残る。径6cm。23は比較的厚い底部で径は7cmと小さく垂直気味に体部が立ち上がる小形の甕である。外面には面取り状に指頭圧痕が残る。前期後半。

SU374（Fig.5　Ph.4）　北西部のB6グリッドに位置するⅠ類の貯蔵穴で口径132底径90深86cmと口が開く。床面中央に径24深20cmの浅い柱穴が一つ有る。覆土は床面から20cm程は自然堆積土で以上は地山土ブロック混じりの客土がなされる。上面近くには口縁部の破損した鉢が投げ込まれている。

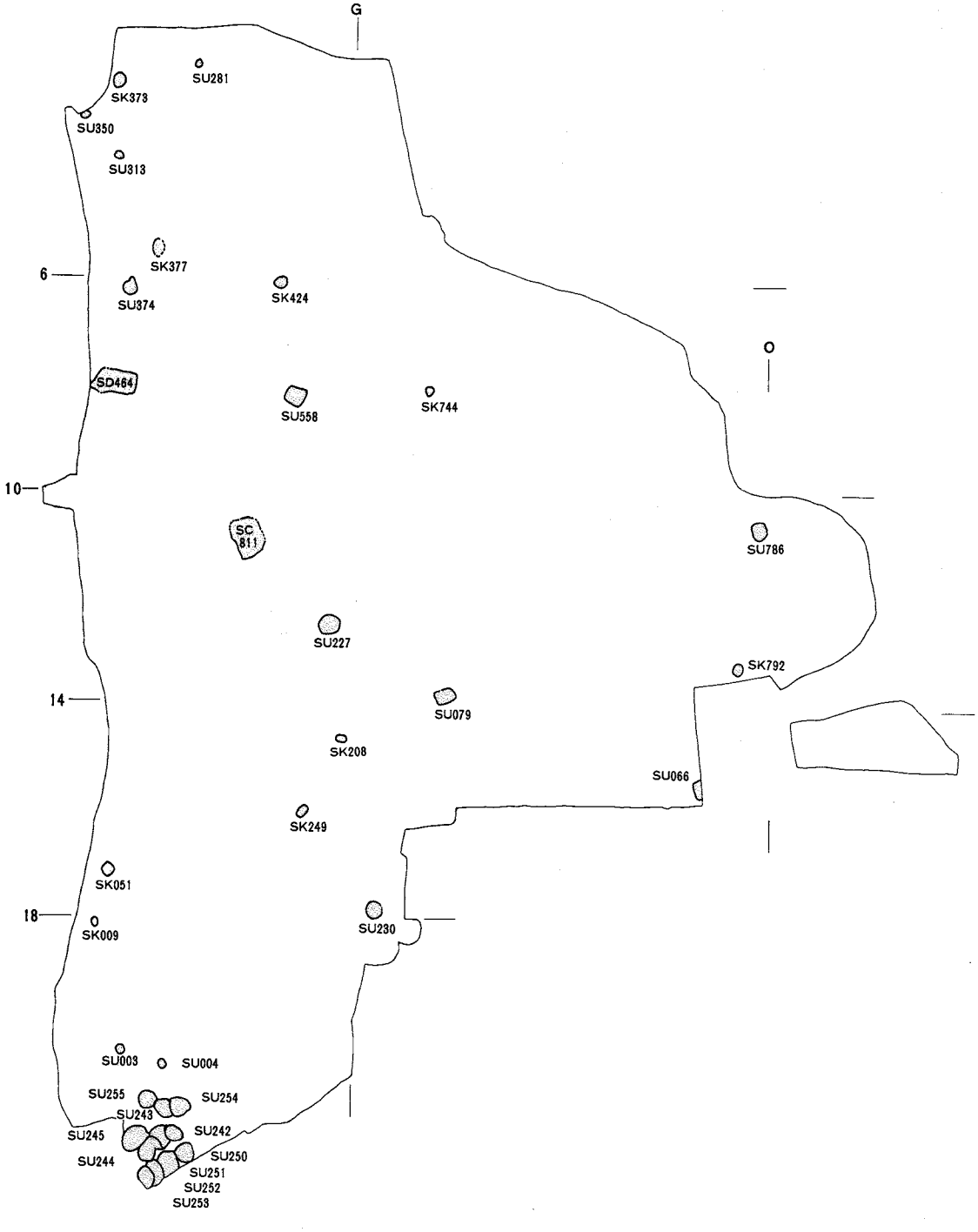
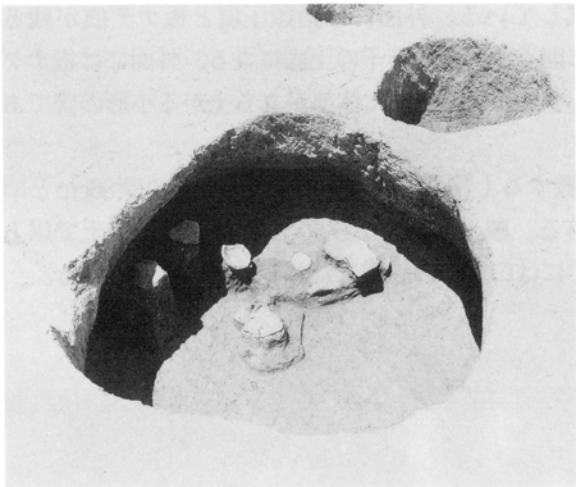


Fig.4　弥生時代前・中期の遺構分布図（1/600）



Ph.3　ＳＵ313（東から）

柱穴の埋土は床上面から上には延びておらず、穴の廃棄時に抜き取られたものと思われる。

出土遺物（Fig.6　Ph.5）　25は穴上面で検出された鉢で口縁の一部を欠くがほぼ完形である。口径34.6器高20.3底部は広く10.1cmを測る。器壁の剥落が著しく調整は明瞭でないが底回りの指頭圧痕が目立つ。胎土は1～4mm大の石英粒を多く含み粗い。26は中形の壷の底部で径13cm。薄い底部で上位がゆるくくびれて体部が外方に開く。24は砂岩製の砥石で幅8.5残存長で13.8cmを測る。底面を欠くが3面を砥面として用いている。前期後半。

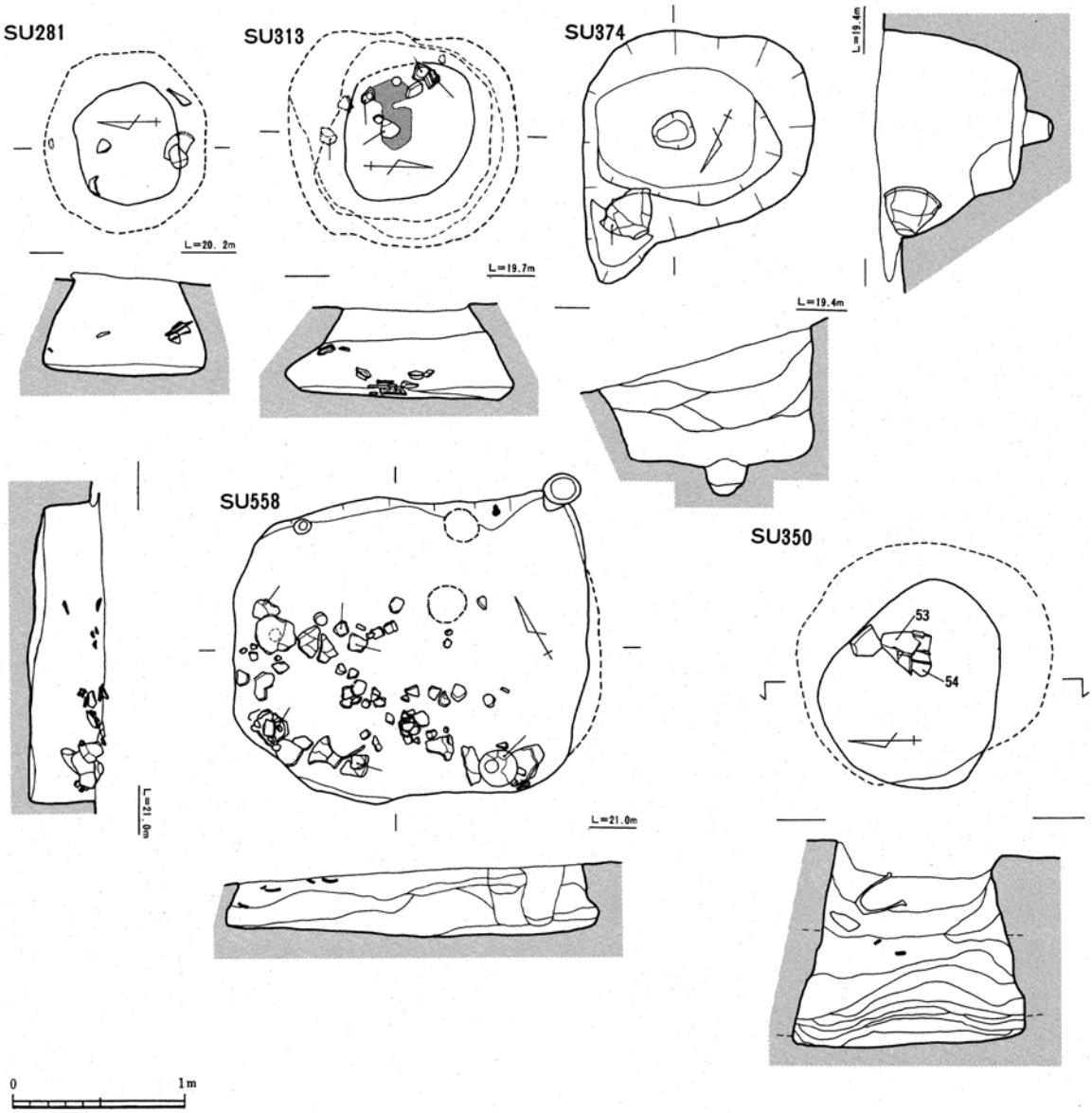
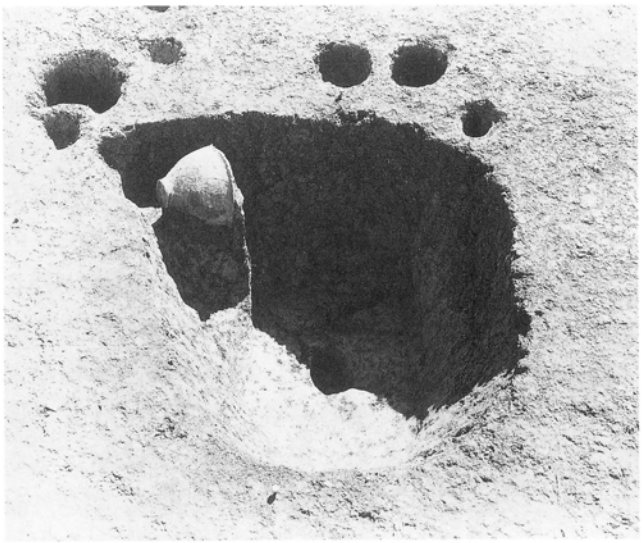


Fig.5　西北部貯蔵穴実測図（1/40）



Ph.4　SU 374（西から）

SU558（Fig.5　Ph.6）　西北部F8グリッドに位置する長方形のⅢ類の貯蔵穴である。長210幅180㎝深43㎝で壁が若干オーバーハングする。床直上から30㎝程と上面に客土がなされ、殊に上面では炭粒、焼土粒を1/2含んでいる。遺物は殆どこの焼土混じりの土層中から破片で検出される。

出土遺物（Fig.7　Ph.8）　27～31は壷で、27は1/2程残存する壷で、口径14器高21㎝程、底径7.6㎝、重心が下位にある偏球形の胴を持つ。底部は薄くくびれはゆるい。口縁外面は肥厚し低い段を持つ。肩部が欠落するため段の有無は不明であるがヨコケンマの器壁にヘラ描の三条単位の連続山形文を施す。胎土は

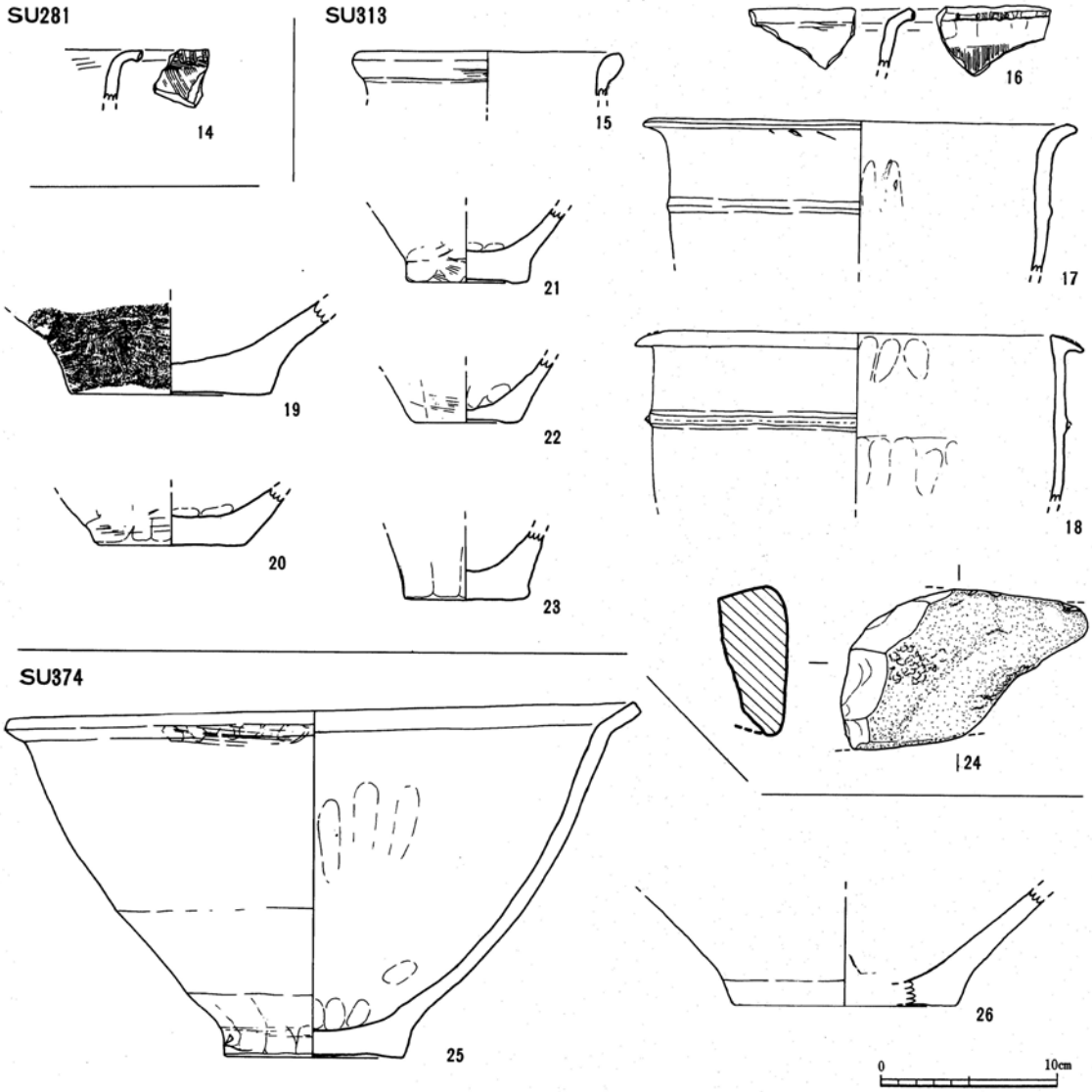
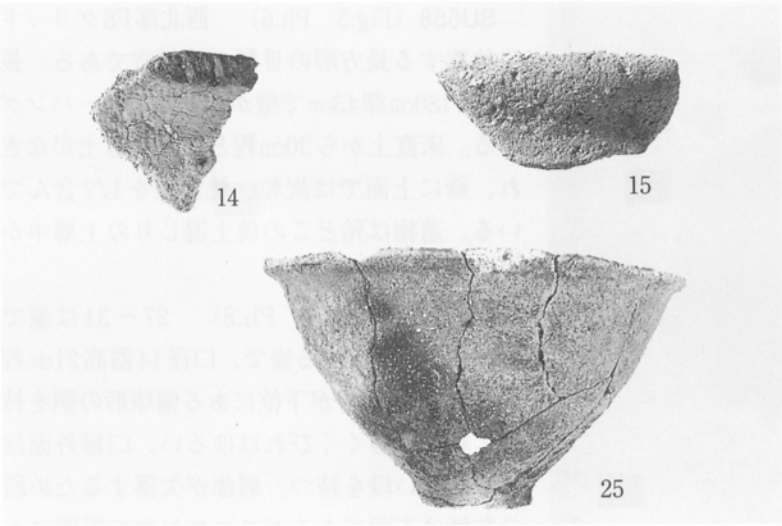
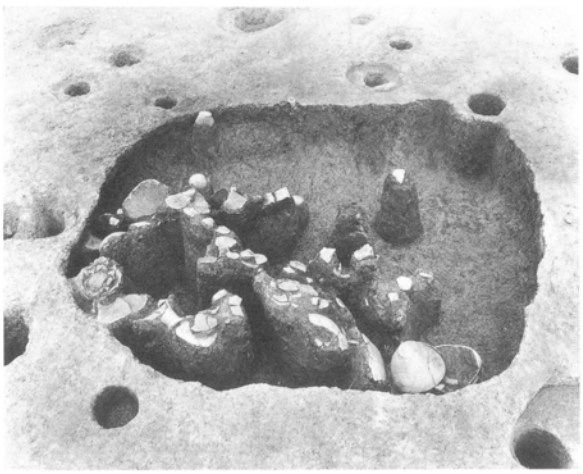


Fig. 6　SU 281・313・374出土遺物実測図（1/4）



Ph.5　SU 281・313・374出土土器

1～2㎜大の石英粒を多く含む。28は肩部に細い沈線を一条施す。下位に重心を持つ球形の胴で径28㎝程を測る。頸部のくびれはゆるい様で頸部が長く延びる。外面にはヨコケンマを施し、内面頸部にはタテ指頭圧痕が残る。胎土は1～3㎜大の石英粒を多く含む。29は胴径34㎝程の大形の壷で、中位に重心がある球形の胴部を成す。底部は薄く、くびれの度合は強い。肩部外面に2条単位の沈線を施し、以下に3本単位の山形沈線を施す。器壁は摩滅が著しく調整不明。胎土は1～2㎜大の石英粒を多く含む。30は同様に肩部に2条単位の沈線を施す大形の壷の破片で、胎土に2～3㎜大の石英粒や金雲母の微粒子を含むなど29とは別個体と考えられる。31は肩部に1条の沈線を施す壷の小片で、大形の壷である。胎土・焼成は29に近く、同一個体の可能性も考えられる。32は高坏で、全体の1/2程を欠く。口径27.5・器高23・脚据径18㎝を測る。口縁内面が肥厚して段を成して内傾し、越ノ越式の口径が内傾した体を成す。脚との境に幅1㎝弱の三角突帯を1条施す。器壁の調整は摩滅が著しく不明。胎土は1～3.5㎜大の石英粒を多く、雲母を少量含む。坏部は深8㎝と深い。33～35は鉢である。33は口縁の一部を欠くほぼ完形品で、口径20.6底径8.2器高12.5㎝を測る。広く薄い底部でくびれはゆるい。胴はゆったりと張り外面にはヨコ板ナデ痕が残る。胎土は1～2㎜大の石英粒を多く含む。34は全体の1/2程度残存するやや小形の鉢で、口径12.2底径6.6器高9.8㎝を測る。底部のくびれはさらにゆるく、張り出した胴は高く延びて口縁は内反する。調整は不明。胎土は3～4㎜大の石英粒を多く含む。35は小形の鉢で口径11㎝を測る。内外面は指頭圧痕が多く残り他とは印象が異なる。内面は黒色を呈する。胎土は細かな石英粒を多く含む。36は小形の甕で口径9.5㎝を測る。ゆるく張って垂直状に延びた胴から口縁がゆるく如意状に外反する。調整は不明。胎土は1～3㎜大の石英粒を多く、雲母を少量含む。37は口縁端部に5×1㎝程の偏平な三角形の把手を2ヶ所貼付する外来系の小形の鉢で、口径15㎝を測る。胴は直線的に延び調整は不明。胎土は1～5㎜大の石英粒を多く含む。



Ph.6　SU 558（南から）

Ph.7　SU 350（北から）

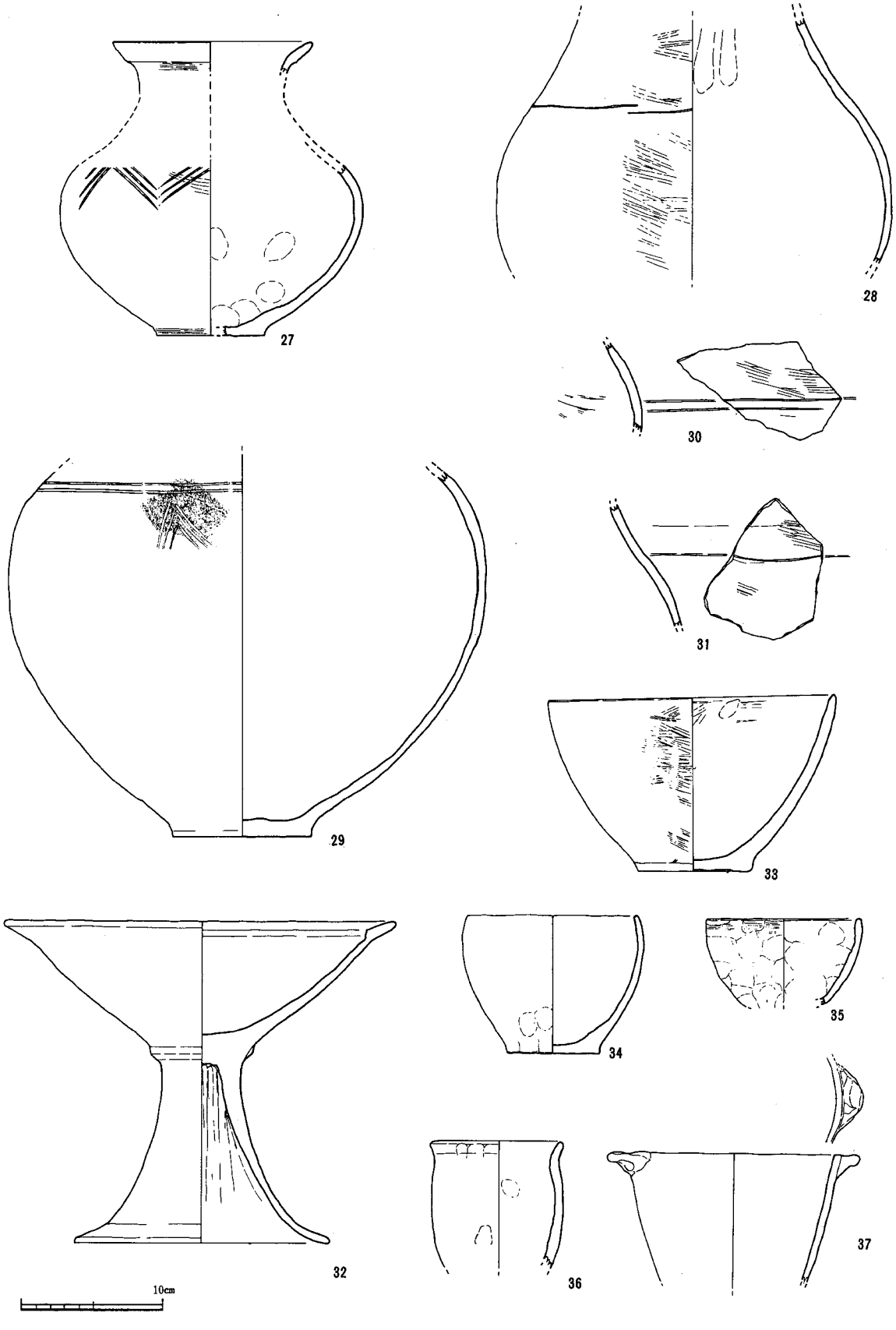


Fig.1　周辺遺跡分布図

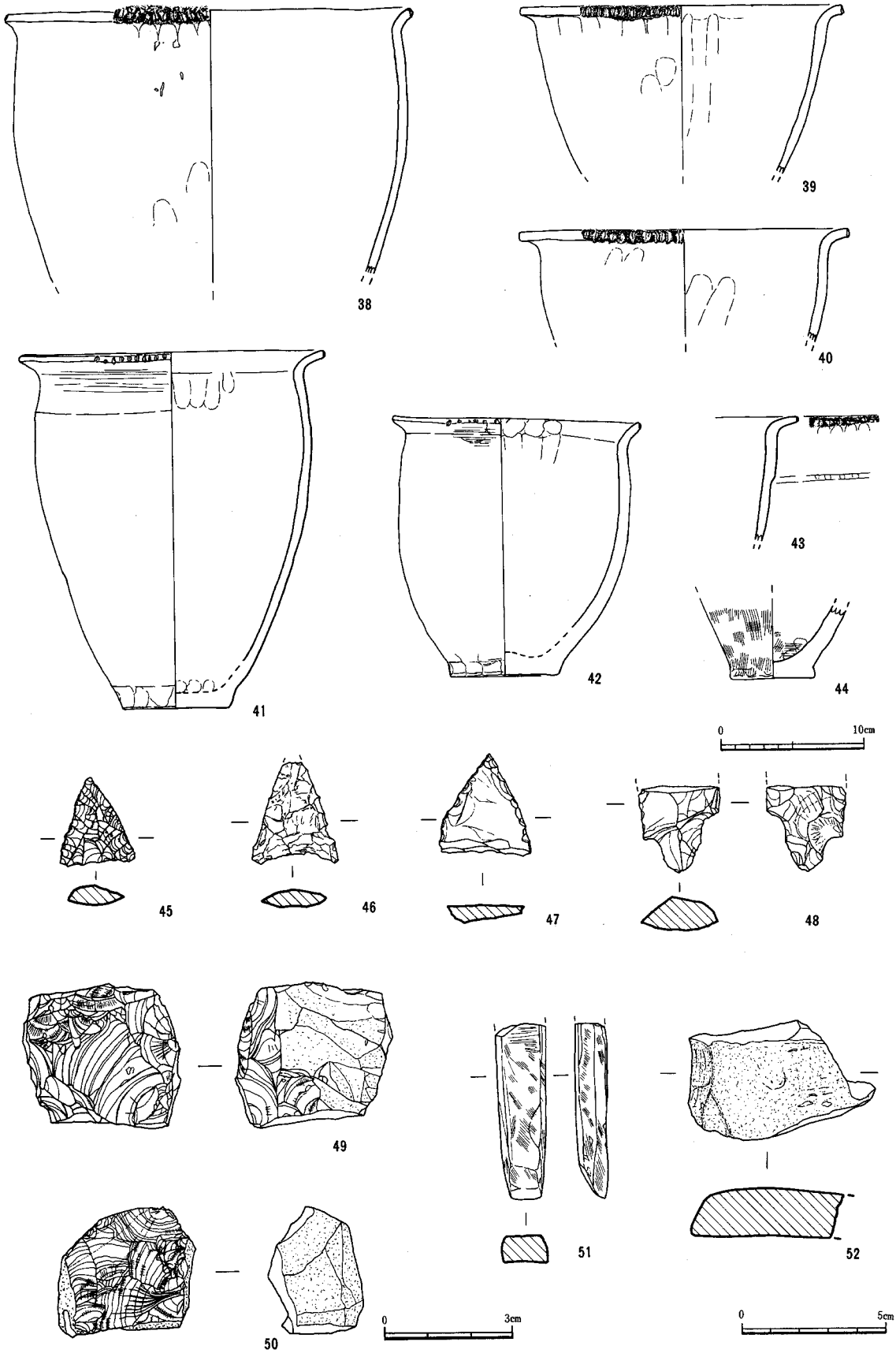
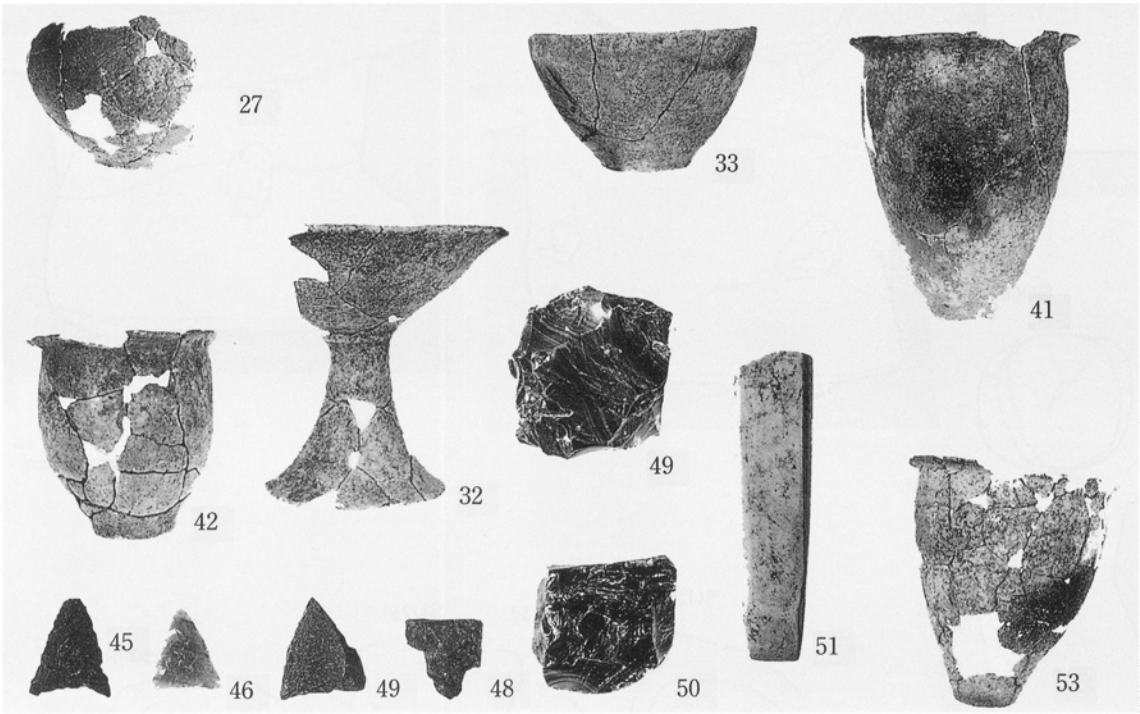


Fig. 8 ＳＵ558出土遺物実測図.2（1/4・3/4・1/2）

SU350（Fig.5　Ph.7）　西北部A2グリッドに位置する。口径118底径146深117㎝のⅡ類の貯蔵穴で残存は比較的に良い。覆土は床上から50㎝幅の地山土と暗黄灰色土の薄い互層となっており客土と考えられる。上面までは自然堆積層で遺物は殆んどこの部分から検出される。

出土遺物（Fig.9　Ph.8）　53は上部で検出された完形に近い甕で口径24.5底径7.2器高27㎝を測る。外底のくびれはほとんどなく、直線的に延びてゆるく張った胴から口縁が如意状に外反する。端部に刻目はない。調整は不明で、胎土は1～4㎜大の石英粒を多く含む。54は「L」字口縁のやや大形の甕の口縁部で、幅の狭い口縁端部と口縁下の突帯に同時に刻目を施す。外面はタテ板ナデ後ヨコナデ、内面は指頭圧・ヨコハケ後ヨコナデを施す。胎土は1～3㎜大の石英粒を多く含む。55は甕の底部で、53同様、くびれはほとんどなく直線的に胴部へ連なる。径8.4㎝を測る。調整は不明。胎土は2～3㎜大の石英粒を多く含む。前期後半。



Ph.8　SU 558・350出土遺物

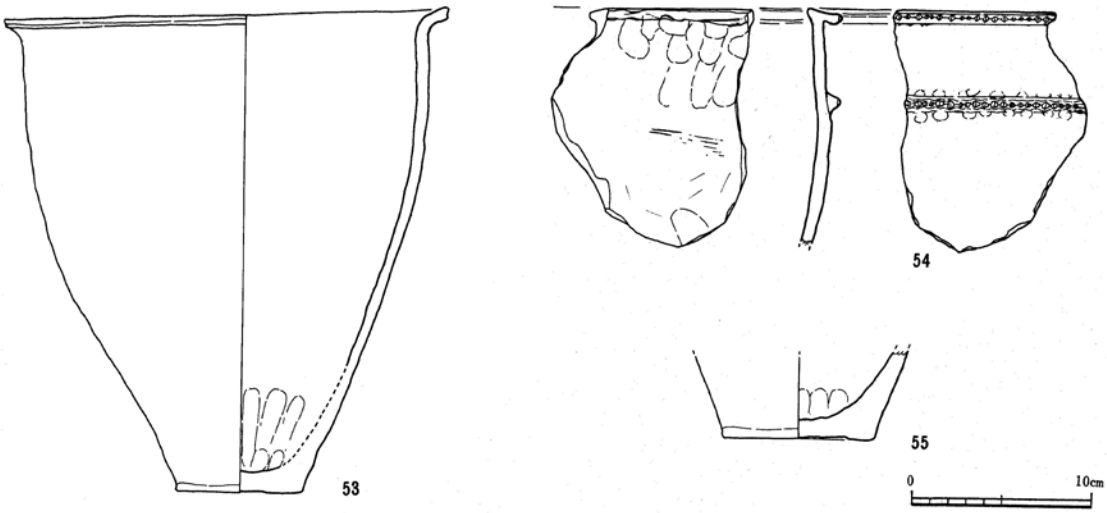


Fig. 9　SU350出土土器実測図（1/4）

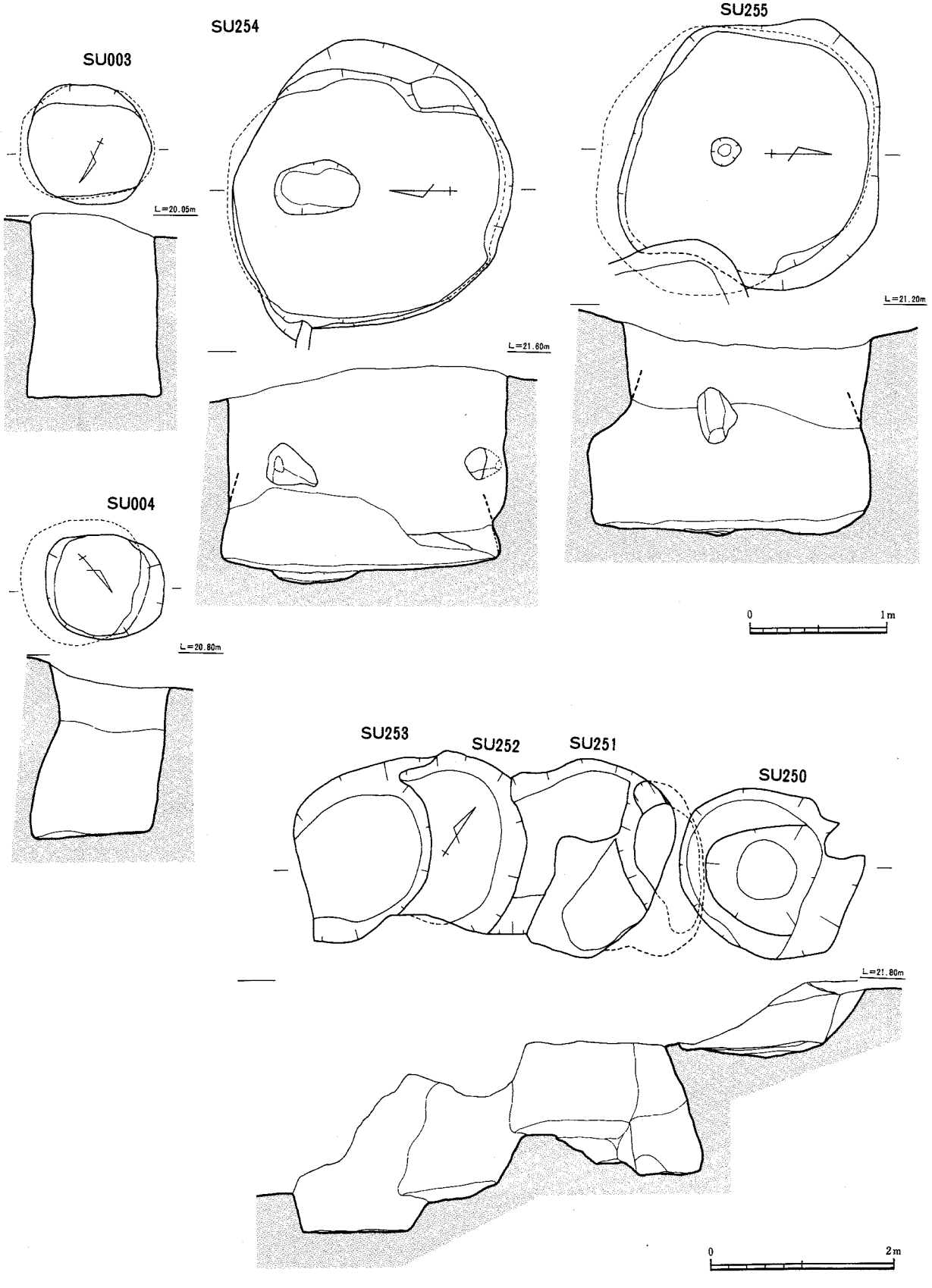


Fig.10 西南部貯蔵穴実測図（1/40・1/60）

Fig.10は西南部の貯蔵穴で、Ⅰ区からⅡ区南端部に12基が密集して分布する。

SU003（Fig.10）　B20グリッドで西側斜面部分に位置する。口径87底径98深127㎝と小形で床上から30cmまで若干オーバーハングし、上は垂直にのびるⅠ類の貯蔵穴である。

出土遺物（Fig.11）　56は甕の底部で径7.9㎝と広い。底部上位は若干内湾する程度で、くびれず殆んど直線的に胴部へと延びる。調整は不明。胎土は1～4mm大の石英粒と雲母の微粒子を多く含む。前期～中頃か。

SU004（Fig.10）　C20グリッドでSU003の斜面上方4m程の位置にある。同様にⅠ類の貯蔵穴で口径88底径85深127㎝を測る。床上90cmまでが中心が斜面上方側に20㎝程ずれ、断面が沓形を呈している。遺物の出土は無いが003と同期と思われる。

SU254（Fig.11　Ph.9）　C21グリッドに位置し、255とともに密集部から2m程北側に離れている。口径218底径205深166㎝のⅡ類の貯蔵穴で、床上から40㎝程までは10㎝程度オーバーハングしており以上は抉れた様になっている。上位の壁面が崩落したものを再度使用したためと考えられる。床中央付近には長径60幅38深8㎝の浅い窪みがある。壁面中位には横方向に径20～30深20～25㎝程の小穴を3ヶ所穿っている。出入時の足掛かりか高床にするための梁の受穴と思われる。

出土遺物（Fig.11）　57は壷の肩部の小片で、低い段をつくって直下にヘラ描の細い無軸羽状文を施す。器壁が摩滅し調整は不明だが、内面には指頭圧痕が残る。胎土は1～2㎜大の石英粒を多く含む。胴径30～40㎝の大形品である。58は小形の甕で口径8.4底径5.4器高7.6㎝を測る。外底は若干の上げ底で、広い底部がくびれてやや張る胴に連なり、口縁は如意状に外反する。細かな調整は不明であるが口縁下と底部に指頭圧痕が面取り状に残る。胎土は2～3㎜大の石英粒を多く含む。59は大形の壷の底部で径9.2㎝を測る。外底は若干上げ底で厚さは18㎜と厚い。底部上位は若干内湾し外方に開く。器壁の調整は不明。胎土は1～4㎜大の石英粒を多く、雲母を少量含む。60は甕蓋の底部で、径6.5㎝。外底は浅い上げ底で、上位は強くくびれ底部端が張り出す。厚みは32㎜と極めて厚い。くびれ部には指頭圧痕が面取り状になされ、ナデ様の粗いケンマを施す。内面はケンマである。胎土は1～3㎜大の石英粒を多く、金雲母を若干含む。前期後半。

Ph.9　SU 254（東から）

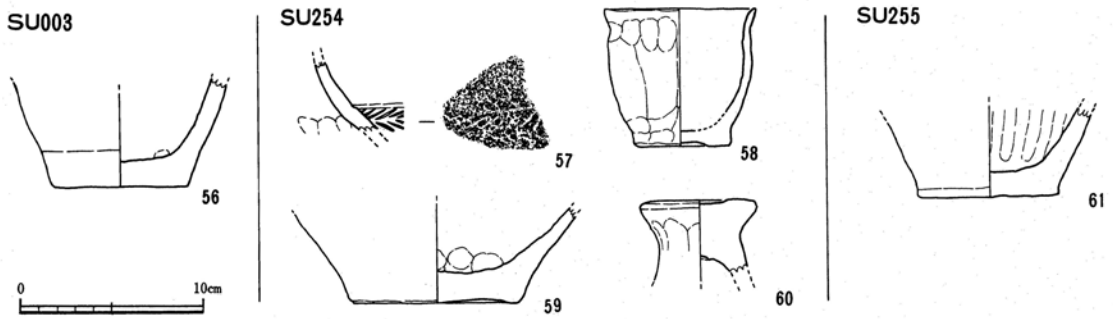
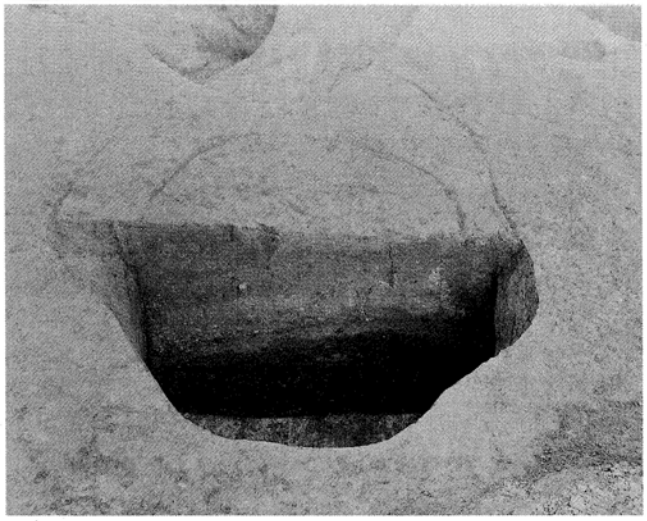


Fig. 11　SU 003・254・255出土土器実測図（1/4）



Ph.10　SU 255土層断面（西から）

SU255（Fig.10　Ph.10）　C21グリッドに位置し254の西側1.5m程にある同形の貯蔵穴でⅡ類。口径250底径192深166cmと規模も同程度である。床から90cm程は20～30cm程オーバーハングしているが、以上の壁は崩落している。壁面中心には径28深15cm程の横穴が254同様に一ヶ所穿たれている。床面中央部にも同様に19×21cm程で5cm程の浅い窪みがある。覆土は5～60cm幅の地山土と暗黄灰色混砂礫土との互層で埋め戻されている。

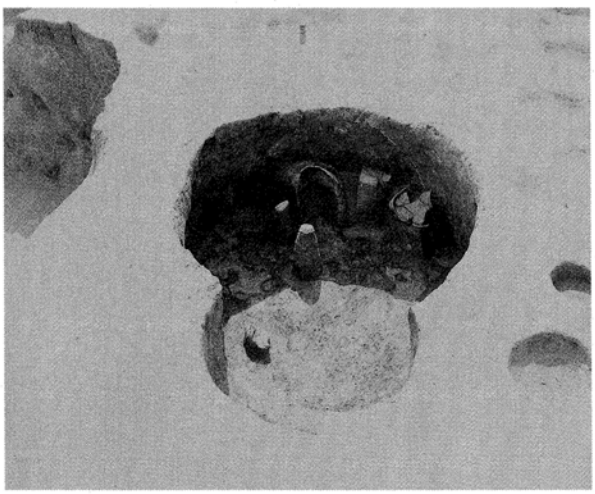
出土遺物（Fig.11）　61は甕の底部で径7.7cmを測る。比較的広い底部でくびれは小さく胴部へと直線的に延びる。胎土は1～3mm大の石英粒を多く含む。内面にはタテ指頭圧痕が残る。前期中頃。

SU250～253（Fig.10）　C22グリッドに位置し、東西方向の線上で4基が切り合っている。いずれも径150～240cmのⅡ類で覆土が地山土と変わらず、検出が困難であった。250は床中央に径1.2mの浅い窪みが、251は床面が2段の階段状となっている。遺物の出土はない。

Fig.12は中央部の貯蔵穴で稜線をはさんで東西に10m程の間隔で4基が散漫に分布している。

SU230（Fig.12　Ph.11）　G17グリッドに位置し、口径150底径190深86cmで壁面が20cm程オーバーハングするⅡ類の貯蔵穴で傾斜の角度はゆるい。覆土は地山土ブロック混じりの灰褐色粘質土を5～10cm幅の薄い単位で床面から70cm程上まで埋め戻している。遺物の大半は床面から30cm程上位のこの層中から検出される。埋め戻し後再度中央に径75深40cm程掘削し、再び薄い単位の客土で埋め戻している。

出土遺物（Fig.13　Ph.13）　62は松菊里タイプの甕である。検出時は明確に確認できたが、著しい風化と大雨による崩落によって破片の接合部が欠落したため、出土状況の実測図と破片の実測から復原したものである。口径13胴径16.8底径7.6器高約20cmと胴中位に重心がある。底部のくびれは強く、大きく膨らんだ胴から口縁が短く外反する。剥落が著しいが外面はヨコナデ後ゆるいケンマと思われる。内面は口縁下5cm程までベンガラ（付編2参照）が付着し、底部には6mm程の厚みで残存する。外面最大径から上位は暗灰～黒褐、以下は明黄褐色を呈し、ベンガラを焼いた甕の可能性がある。



Ph.11　SU 230（東から）

Ph.12　SU 230遺物出土状況（南東から）

63・64は甕で、64は口径27底径8器高21.4cmを測る。底部から胴部へは直線的に延び、口縁は如意形に外反し口唇下端から全面に刻目を施す。調整は不明。63は口径29.5底径8器高35cmを測る。薄い底部から砲弾形に胴部が延び、上位が肥厚して段を成す。口縁は如意形に外反し口唇全面と段の下端に刻目を施す。他の調整は不明瞭。65は花崗岩の叩石と砥石を兼用した石器で長10cm。側面4面を縦方向の砥ぎに、上下面と側縁を叩きに用いている。66は刃厚の薄い磨製石斧で玄武岩製。上半を欠損し幅7.6厚3.5cmを測る縄文系の石斧である。67はやや刃厚の厚い磨製石斧の刃部を叩石に転用したもので叩打によって刃部は幅6mm程の面を成している。刃幅7厚3.6cmを測る。玄武岩製。68は黒耀石の打面調整剥片を用いた石錐で、裏面から両側に二次調整を施して先端部を形成している。長26幅22厚9mmと厚い。前期中頃。

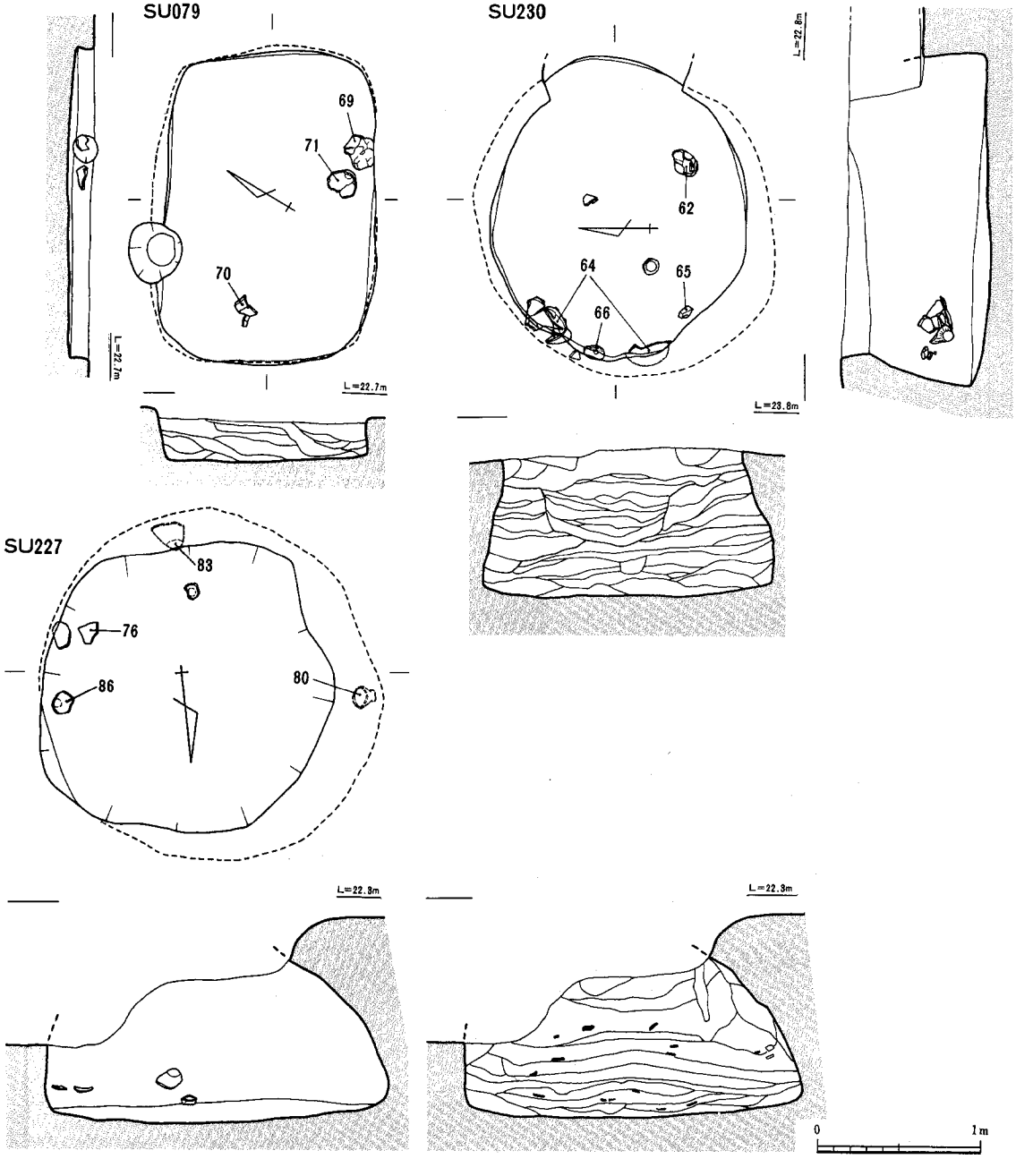


Fig. 12 中央部貯蔵穴実測図（1/40）

SU079（Fig.12）　H13グリッドに位置する長方形のⅢ類の貯蔵穴で、長1.92幅1.34深0.32mを測る。覆土は厚さ10cm前後の暗茶褐色土と暗灰黄色土による薄い層の埋め戻しで、北から南にかけ2度掘削と埋め戻しを繰り返している。遺物はほぼ床直上で検出された。

出土遺物（Fig.14　Ph.16）　69・70は壷で、69は口径13底径8器高21.4cmを測る。図は破片による完形復原。底部のくびれはゆるく胴は扁球状に張り重心は下位にある。肩部に沈線を一条施し、口縁は肥厚するが段は不明瞭になっている。70は壷の上半部で口径14.3cmを測る。肩部に沈線を一条施し口縁は短く強く外反して下位が肥厚して低い段を成している。調整は不明。71は甕の底部で径8.5cm

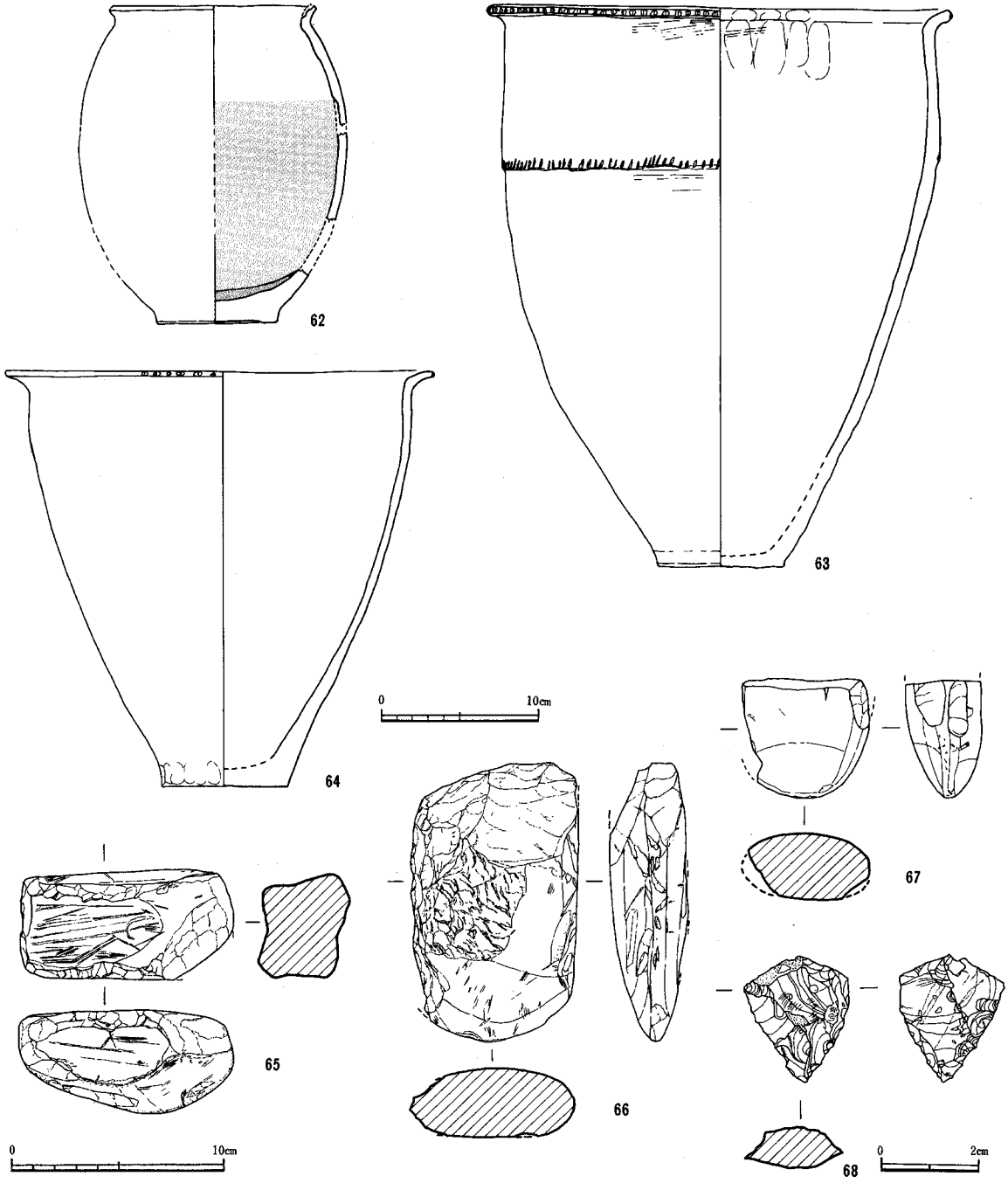
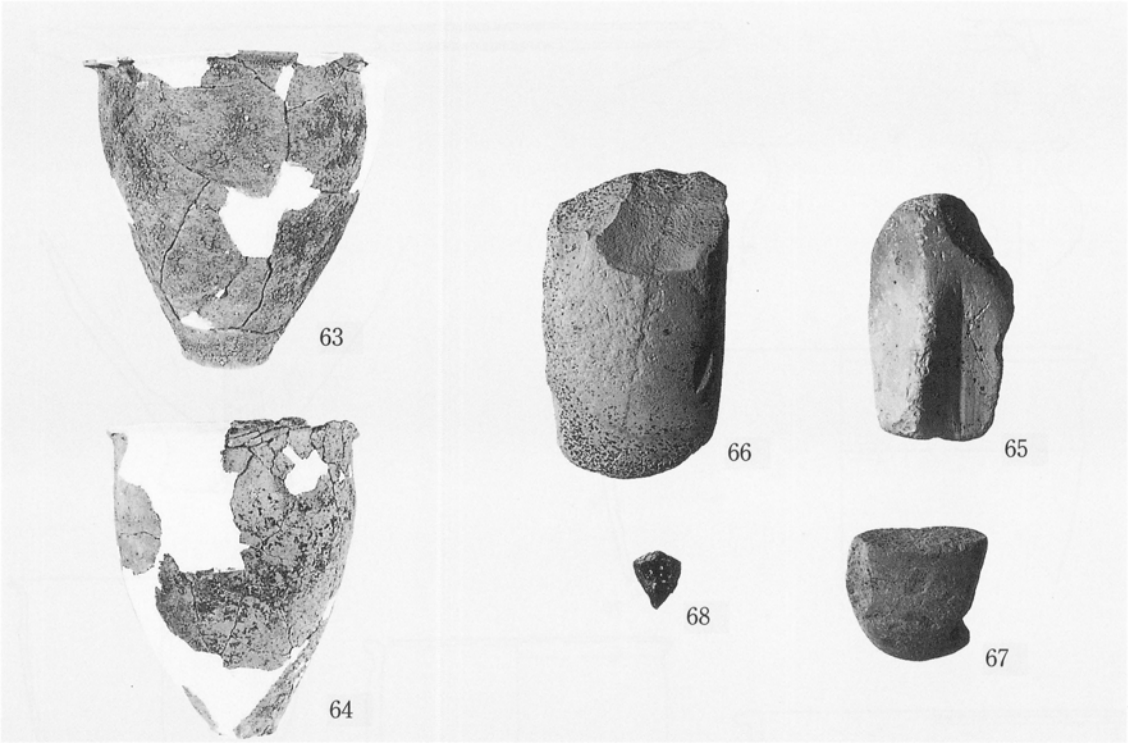


Fig. 13　SU 230出土遺物実測図（1/4・3/4・1/3）



Ph.13　SU 230出土遺物

を測る。薄い底部で外面はゆるく内湾して直線的に延びる。前期後半。

SU227（Fig.12　Ph.14・15）　F12グリッドに位置するⅡ類の貯蔵穴で、口径150底径214深96cmを測り、壁は60cm程オーバーハングして傾斜は45度に近い。覆土は厚5～15cm程の灰褐色土と暗灰褐色土の薄い層の埋め戻しで炭粒が目立ち、床上の5～10cm程には板状の炭化材が見受けられる。遺物は床上20～30cmで壁際で検出される。

出土遺物（Fig.15・16　Ph.17）　72～75は壷である。72は短く「L」字状に屈曲する口縁の小片で調整は不明。73は口径5.5cm程の小形の壷で、球状の胴部から強くくびれて口縁が垂直に立ち上がり端部は短く外反し薄く仕上げる。調整は不明瞭。74は強く張る胴から頸部がすぼまって口縁が如意状に

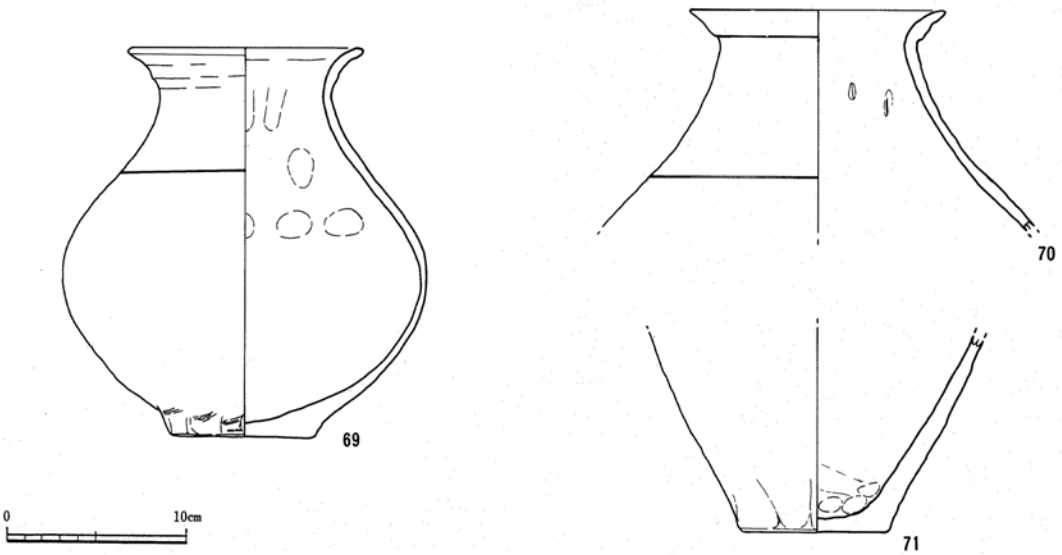


Fig. 14　SU 079出土土器実測図（1/4）

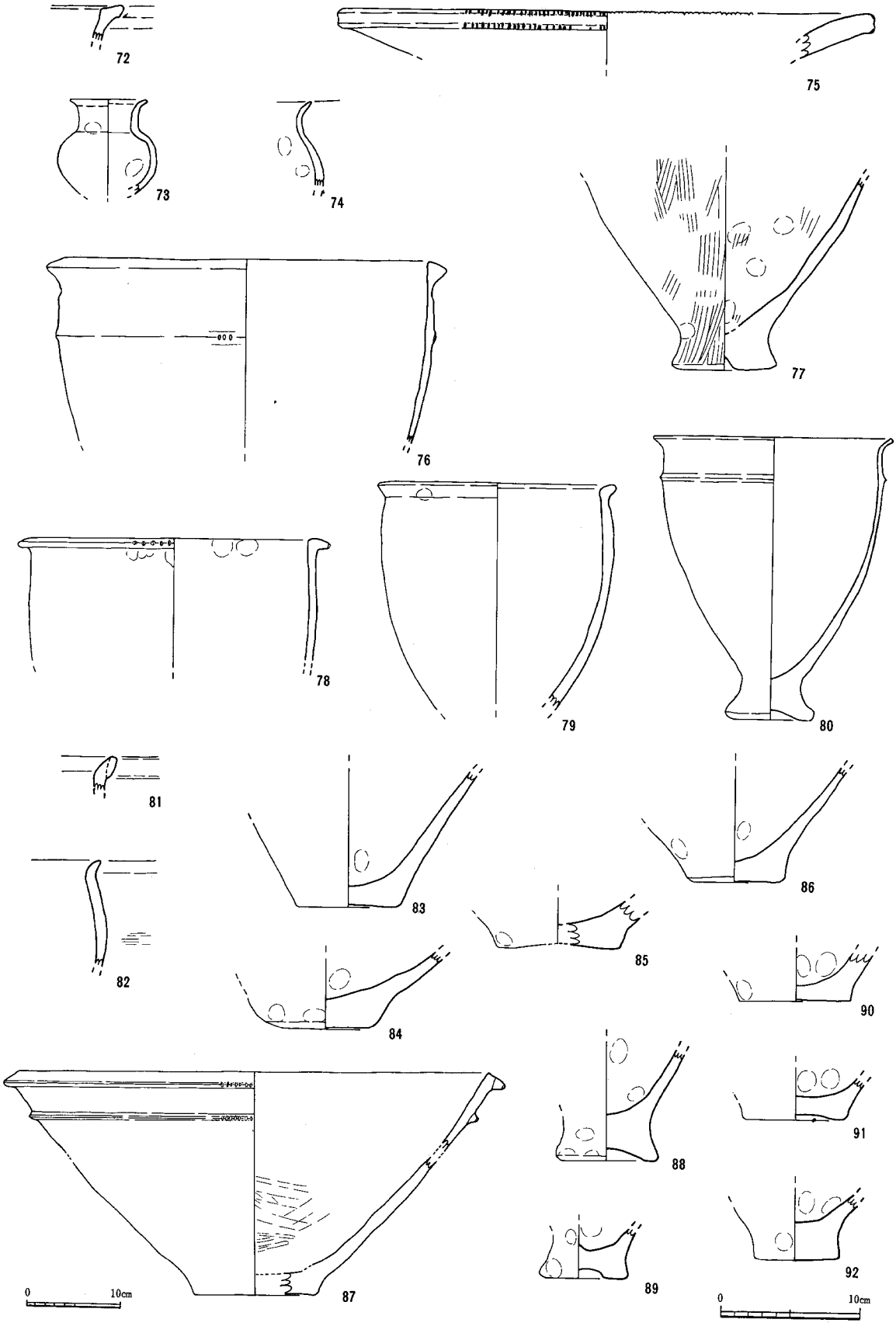
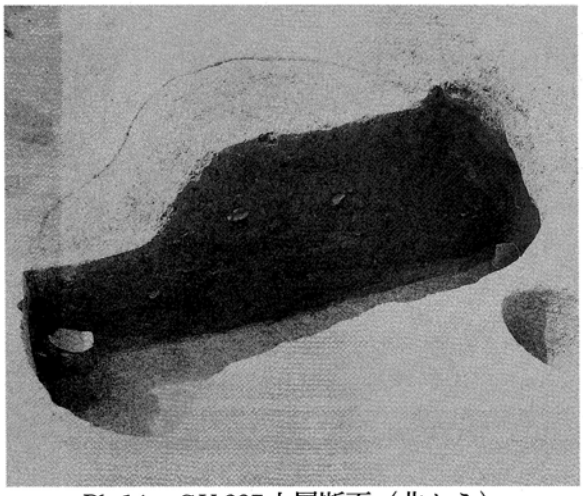
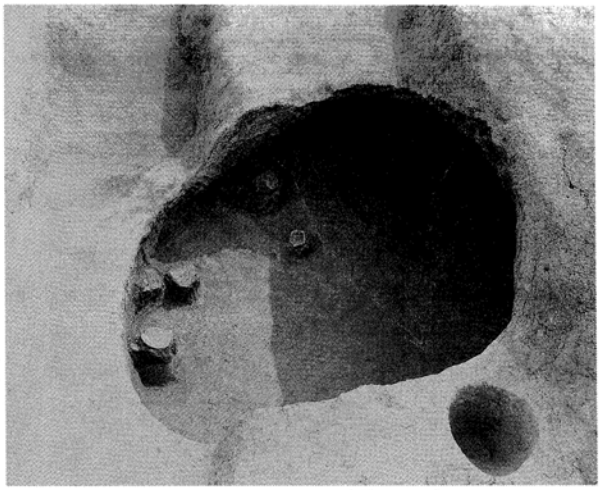


Fig. 15 ＳＵ227出土遺物実測図（1/4・1/6）

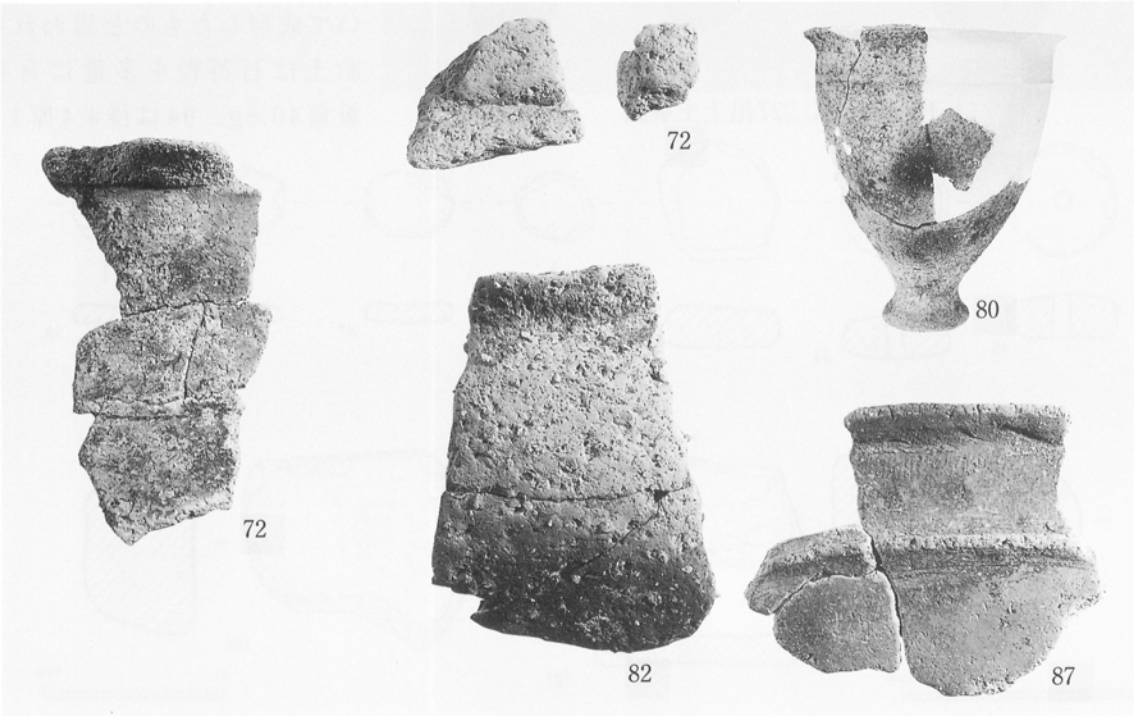


Ph.14　SU 227土層断面（北から）



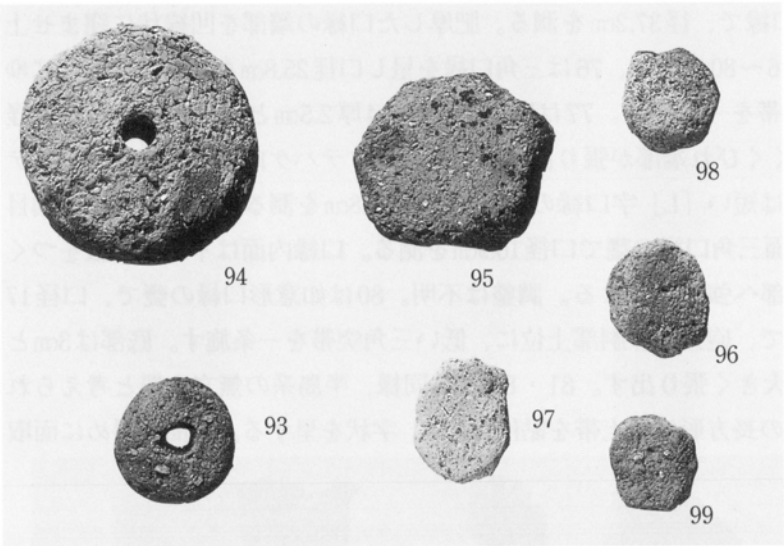
Ph.15　SU 227（北から）

外反する小片で、半島系の可能性も考えられる。調整は不明で、胎土は1～3㎝大の石英粒を多く、雲母を微量含む。75は大形の壷の口縁で、径37.2㎝を測る。肥厚した口縁の端部を凹線状に窪ませ上下端に同時に細かな刻目を施す。76～80は甕で、76は三角口縁を呈し口径25.8㎝を測る。砲弾形にゆるく張った胴の上位に低い三角突帯を一条施す。77は底部で、径7.4厚2.5㎝と厚い底部で外底は径1cm程の上げ底となる。上位が強くくびれ端部が張り出す。外面にはタテハケ内面には指頭圧・タテハケ後、ナデかケンマを施す。78は短い「L」字口縁の甕で、口径18.8㎝を測る。口唇上端には刻目を施す。他の調整は不明。79は断面三角口縁の甕で口径16.9㎝を測る。口縁内面は不明瞭な稜をつくり、上位でゆるく張った胴から底部へ強くすぼまる。調整は不明。80は如意形口縁の甕で、口径17底径6.1器高20.5㎝を測る小形の甕で、砲弾形の胴部上位に、低い三角突帯を一条施す。底部は3㎝と厚く、上位で強くくびれて端部が大きく張り出す。81・82は74同様、半島系の無文土器と考えられる小片で、81は口縁外面に幅1.5㎝の長方形の粘土帯を貼付し「コ」字状を呈する。内面は斜めに面取



Ph.16　ＳＵ079・230出土土器

りして稜を成している。胎土は2～3㎜大の石英粒を多く含む。調整不明。82は松菊里タイプと考えられる甕の小片で、上位で張った胴から頸がすぼみ口縁が短く垂直状に屈曲する。胎土は2～3㎜大の石英粒を多く含み、調整は不明瞭。83～86は壷の底部。83は径7.4㎝を測り、外底は低い上底。外面はゆるく内湾して胴が直線的に延びる。84は径8㎝で端部が摩滅する。外底は若干上低で外面上位で強くくびれる。厚2㎝と厚い。85は径8.6㎝で外低は4㎜程の上底。外面は1.5㎝上位でゆるくくびれる。86は径6.3㎝。外面は2㎝程上位で大きく内湾し、胴が外方へ開く。87は極めて大形の鉢で、口径49底径13器高24㎝を測る。やや広めの底部から直線的に胴部が延び、上位に三角突帯を一条施す。口縁は断面三角で外面端部と突帯に刻目を施す。外面はタテハケ後ゆるいケンマかナデ、内面はナナメ板ナデ後ヨコケンマを施す。88～92は甕の底部。88は径6.8㎝を測り外底は上底。厚3.5㎝と厚く、外面は上位3㎝程で強くくびれ端部がやや張り出す。器面はナデ調整。89は径6㎝。外底は径1.5㎝程が上底。厚は2㎝と88よりは薄く、外面はくびれ端部がやや張り出す。調整はナデ。90は径8㎝。薄く広めの底部で外面は内湾する。調整はナデ。91も同様に薄い底部であるが径7.3㎝と一回り小さく、外底は5㎜程のやや強い上底になる。外面はゆるく内湾する。調整はナデ。92は径6㎝を測り、厚3.7㎝と厚い。外面は上位2㎝程ほぼ垂直に立ち上がって内湾し胴部が開く。



Ph.17　SU 227出土土製品

Fig.16は土製品と石器である。93・94は土製の紡錘車で、93は径47厚18㎜で中央が若干膨らむ。側面は面取りがなされ平坦に仕上げられている。中央に径7㎜の軸穴が焼成前に穿たれているが若干傾いている。穴が直線的で径に変化がなく、軸に粘土を巻いて成形したものと思われる。胎土は石英粒を多量に含む。重量40.8g。94は径4.4厚1.8

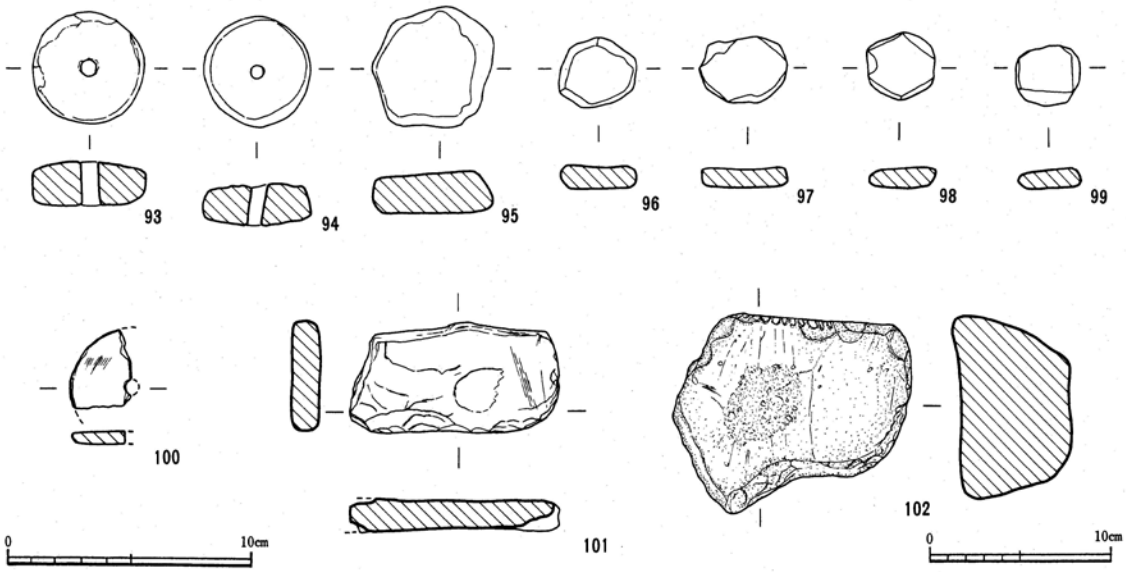


Fig. 16　SU 227出土石器・土製品実測図（1/3・1/4）

cmで形態・成形ともに同様で、径6mmの軸穴も傾いている。95～99は土器片を打ち欠いて円形に整形した土器片円盤で、径25～56mm重量8.8～45.6gを測る。5点が集中する。土器片円盤は他に検出面で43点検出している。弥生土器片が主体で土師器・須恵器片を用いたものが10点ある。SD127が未点検であるが大半は弥生後期が占めると思われる。100は片岩製の紡錘車の残欠で径25厚5mmを測る。軸穴は6mmで、全面を研磨で仕上げる。101は偏平打製石斧の頭部片で現状で84×45×14mmを測る。片岩製か。102は砂岩製の凹石で128×111×63mm。前期末。

Fig.17は東部の貯蔵穴群で、丘陵縁部近くでⅢ類を2基検出した。

SU066（Fig.17　Ph.18）　M15グリッドの調査区際で検出した。半分は調査区外であるが現況で長223幅80深25cmを測る。長方形のⅢ類の貯蔵穴で上面の削平が著しい。遺物は床上から5～20cm程浮いて検出される。

出土遺物（Fig.18　Ph.19）　103～107は暗灰褐色の上層からの出土。103～105は壷で、103は口縁の小片で径11cm。大きく張る胴から頸部が強くすぼまり、口縁が若干肥厚して如意状に外反し、下部が低い段を呈する。調整不明。104は壷の底部で径9.7cmを測る。広めの底部で外面は内湾し外方に開く。指頭と板により面取り状となる。内面は黒色を呈する。105は偏球状に大きく膨らむ壷の胴部で、胴径28.5底径8.5cmを測る。底部は1cm程上位で強く内湾する。外面は丹塗で底部に指頭圧痕とタテハケが一部残る。内面はナナメ板ナデ後ヨコナデを施す。106は粗いつくりの鉢の口縁片で全面に指頭圧痕、板ナデ痕が著しく残る。口縁は弱く直線的にゆるい稜をなして外反する。107は甕の口縁部で胴上位が肥厚して段をなし、口縁が如意状に外反する。口径34.6cmを測る。口唇下端に浅い刻目を施す。調整は不明瞭。胎土は2～4mm大の石英粒を多く含み粗い。

Ph.18　SU 066（北から）

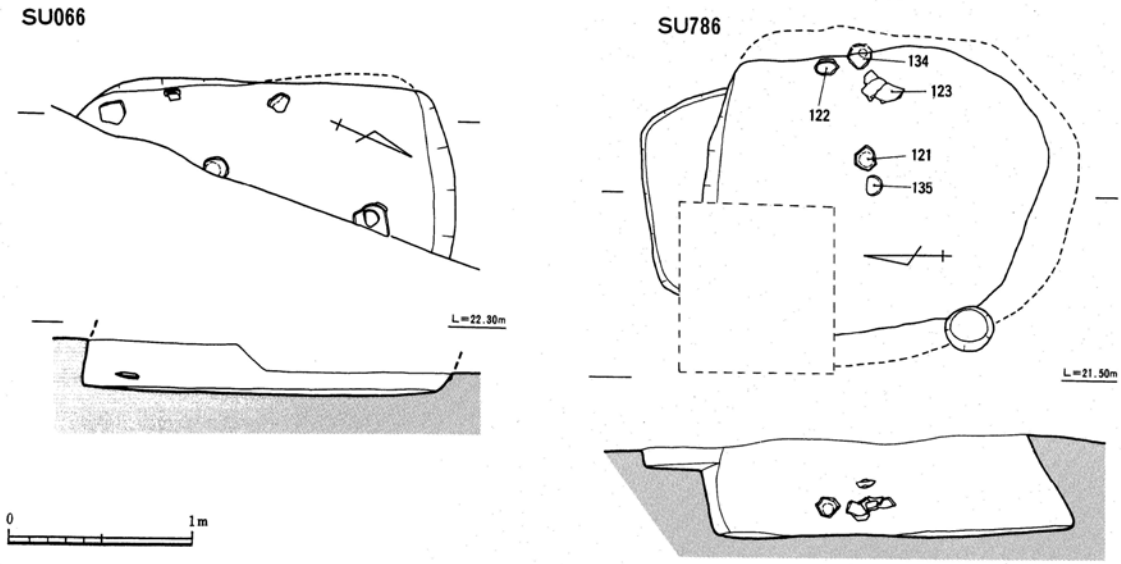
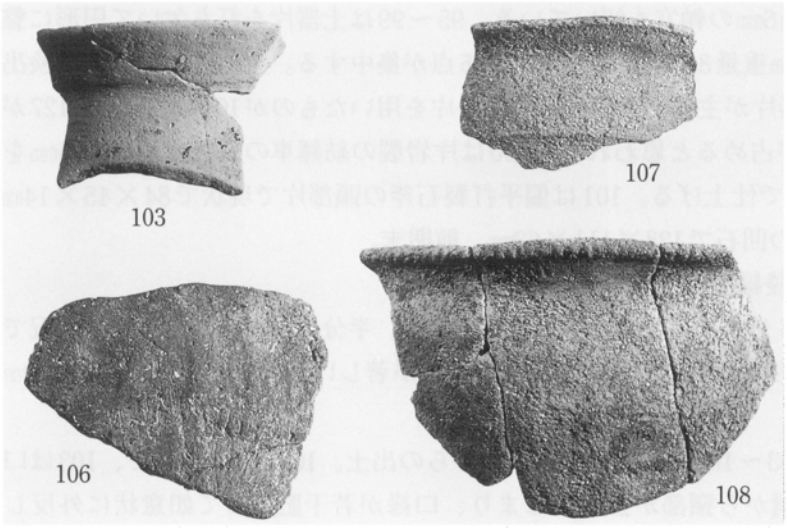


Fig. 17 東部貯蔵穴実測図（1/40）



Ph.19　SU 066出土土器

108～115は暗黄灰色土の下層からの出土。108～111は甕で108は口径27.2cmを測り、上位でゆるく張った胴から口縁がゆるく如意状に外反する。口唇下端に浅い刻目を施す。調整は不明瞭。109は口径25cmを測り、上位で張った胴から口縁がゆるく外反し、内面は稜をなす。口唇は丸く収め下面に浅い刻目を施す。110は口縁部の小片で、直線的に延びた胴から口縁がゆるく外反し、口唇下端は小さく面取りして沈線状を呈している。外面は黒色を呈しケンマを施す。111は甕の底部で径7.5cmを測る。外底は若干上底で外面はほぼ直線的に延びる。調整は不明。112～114は壷の底部で、112は底径6.6cmで外底は2mm程の浅い上底を呈する。外面は若干くびれるがほぼ直線的に延び、面取り

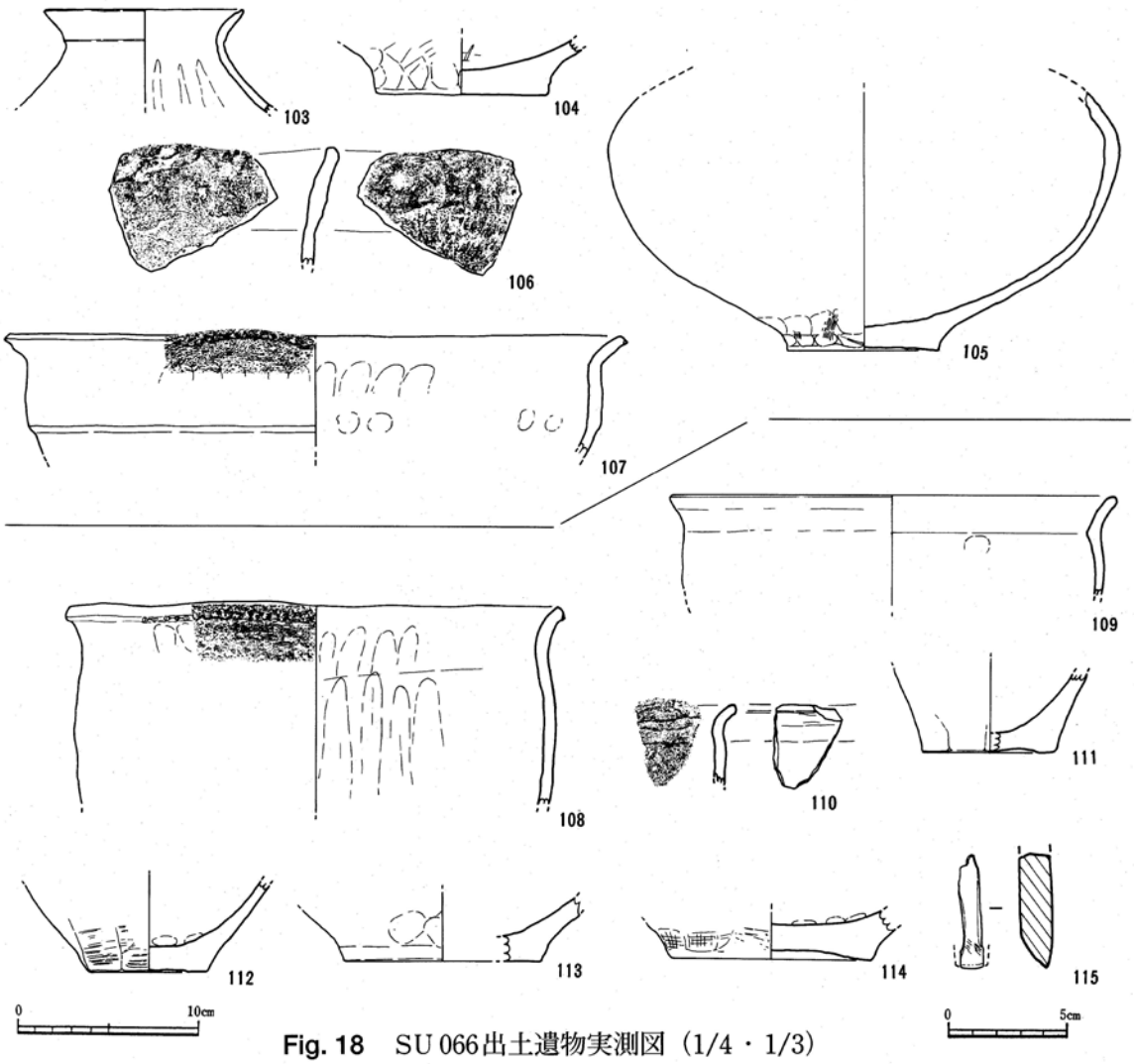
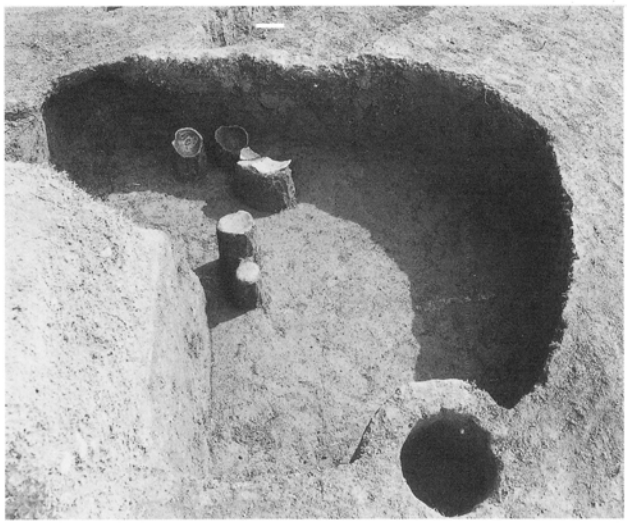


Fig. 18　SU 066出土遺物実測図（1/4・1/3）

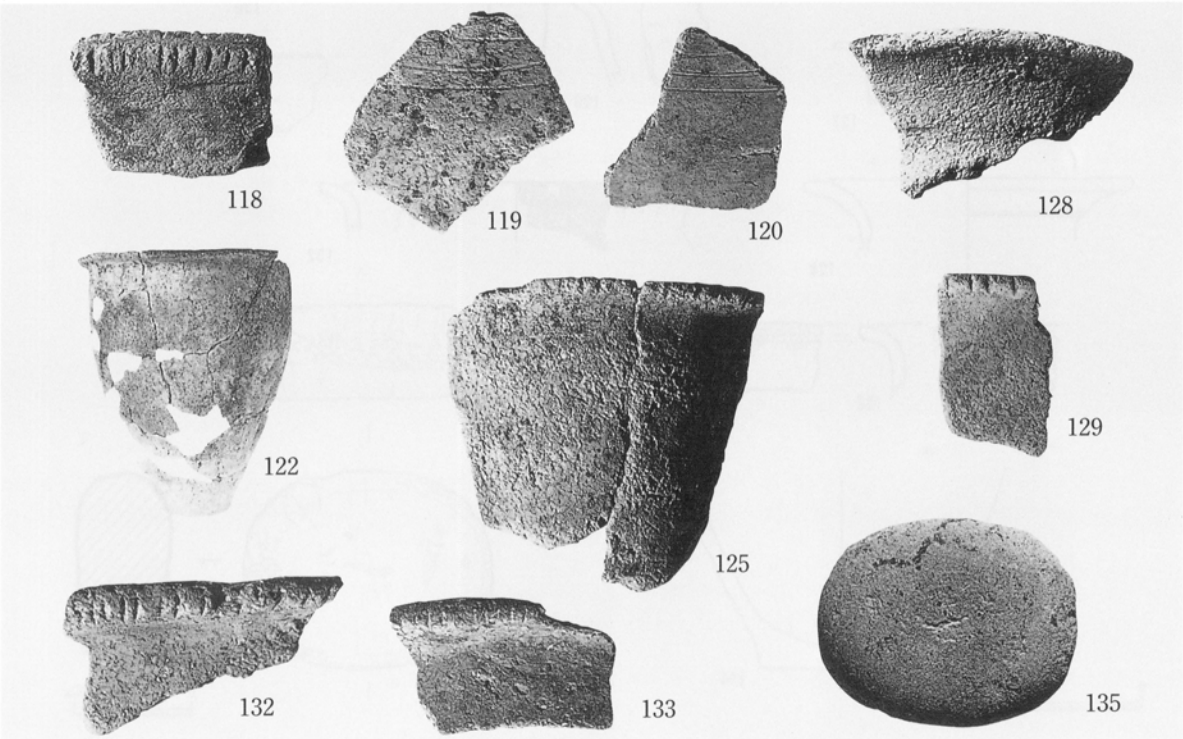
状のヨコ板ナデを施す。113は底径10.8cmで外面上位1cm程でゆるく内湾し、胴部が外方に開く。114は底径11.2cmと広めで、外底は5mm程のやや深めの上底となる。外面は1cm程上で外傾してくびれ外方に開く。くびれ部には面取り状のタテハケ後ヨコナデを施す。115は頁岩質細粒砂岩製の柱状片刃石斧で、上半を折損し、両側面が節理に沿って剥離している。現状で長4.7厚1.3cmを測る。前期後半。

SU786（Fig.17　Ph.20）　N10グリッドに所在し、長191幅153深52cmを測る。北側以外の3面は壁面が20cm程オーバーハングする。北側は外傾して35cm立ち上がり115×40cmの方形の段をつくっている。境界杭のため北西部は未掘である。遺物は中央部で床から10～30cm浮いて検出される。

出土遺物（Fig.19　Ph.21）　116～121・128は壷で、116は口縁が肥厚する大形の壷の口縁で湾曲が強く下端は段を成す。指頭圧痕が多く残り調整は粗い。117もやや大形の壷の口縁で、肥厚し下端の段は不明瞭になっている。118は大形の壷の口縁小片で、口唇に浅い沈線を一条施し上下両端に刻目を施す。119・120は肩部の小片でヨコケンマ後浅いヘラ描沈線を3条施す。胎土は1～3mm大の石英粒を多く含む。121はやや広めの底部で径9.2cmを測る。外傾して延び1cm程上位でゆるくくびれて外方に開く。128は径18.4cmの口縁部で、肥厚し比較的大きく外反する。下端の段は不明瞭である。122～134は甕である。122は口径22.0底径7.3器高25.6cmの甕に径2cm程の穴を、焼成後底部の中央に穿って甑としたものである。底部は若干内湾して直線的に延び、上位でやや張った胴部に連って口線が如意状に外反する。口唇全面に刻目を施す。　外面の下



Ph.20　ＳＵ786（西から）



Ph.21　ＳＵ786出土土器

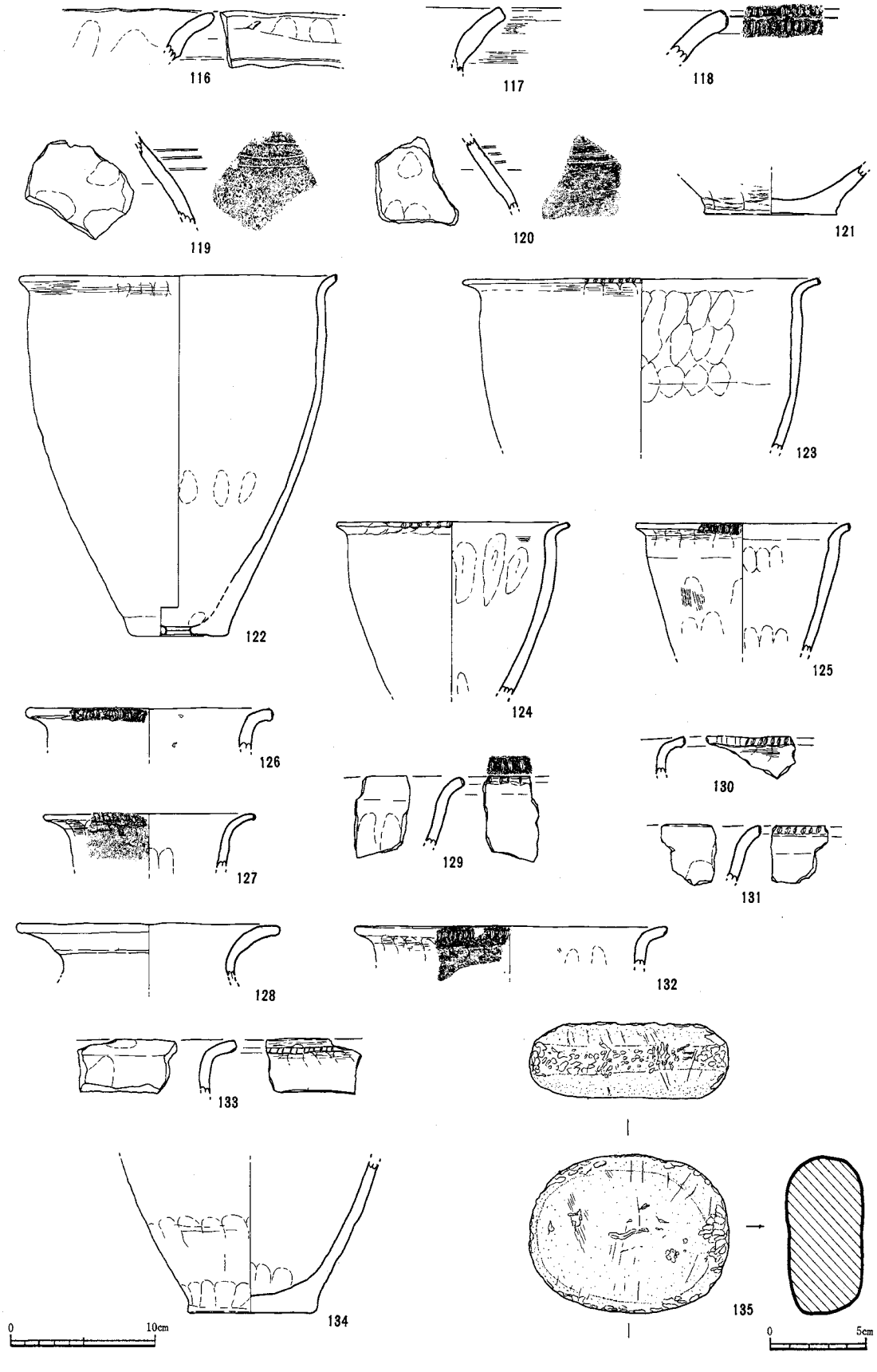


Fig19　SU 786出土遺物実測図（1/4・1/3）

10cm程は黄橙色、以下は灰褐色、内面は底から6cm程は灰黄褐色、口縁から12cm下までは浅黄橙色で中央の7cm程が帯状に灰褐色で暗色を呈しており、使用法を暗示させる。調整は不明瞭。123は同型の甕で、口径24.8cmを測り、薄い口唇の全面に刻目を施す。内面の上位には指頭圧痕が明瞭に残るが、他の調整は不明瞭。124は小形の甕で、口径16.2cmを測る。器壁が比較的に厚く、外反する口縁部は薄く仕上げる。口唇全面に刻目を施す。他の調整は不明。125も小形の甕で口径15cmを測る。器壁は厚目で胴は直線的に外傾し口縁は如意状に外反して口唇全面に深い刻目を施す。調整は指頭圧痕とタテハケが残る。126は口径17cmで口縁の屈曲が強く、口唇全面に刻目を施す。調整は不明瞭。127は小形の甕で、胴が直線的に開いて口縁はゆるく内湾する。口唇全面に浅い刻目を施す。129は口縁の小片で、開く胴にゆるく外反する口縁が連なる。口唇下端に深い刻目を施す。130も口縁の小片で如意状に屈曲する口縁にヨコナデを施し口唇全面に刻目を施す。整形が粗くゆがみが目立つ。131は129同様直線的に開く胴で口縁がゆるく内湾する。口唇全面に刻目を施す。132は口径21.8cmを測り、如意状に強く屈曲する口縁の口唇下端に刻目を施す。133は口縁の小片で如意状に屈曲する口縁の内外に指頭圧とヨコナデを施し、口唇下端に細長い刻目を施す。134は甕の底部で、径8.7cmと広めである。上位1.5cm程で指頭圧によってゆるくくびれさせ、ゆるく張る胴が外に開く。胎土は1～2mm大の石英粒を多く、雲母を少量含む。

135は磨石で、長10.3幅8.2厚4cmを測る円盤状の形態を呈する。側面は敲打により幅2cm程の平坦面を形づくっている。表裏両面は主に磨石として用いられているが、敲打によって中央が1mm程浅く窪む。灰白色の玄武岩製で、側面上位と表面が赤い。SU230の62がベンガラの貯蔵甕であった事からも、ベンガラ粉粋用の石杵の可能性が考えられる。前期中頃。

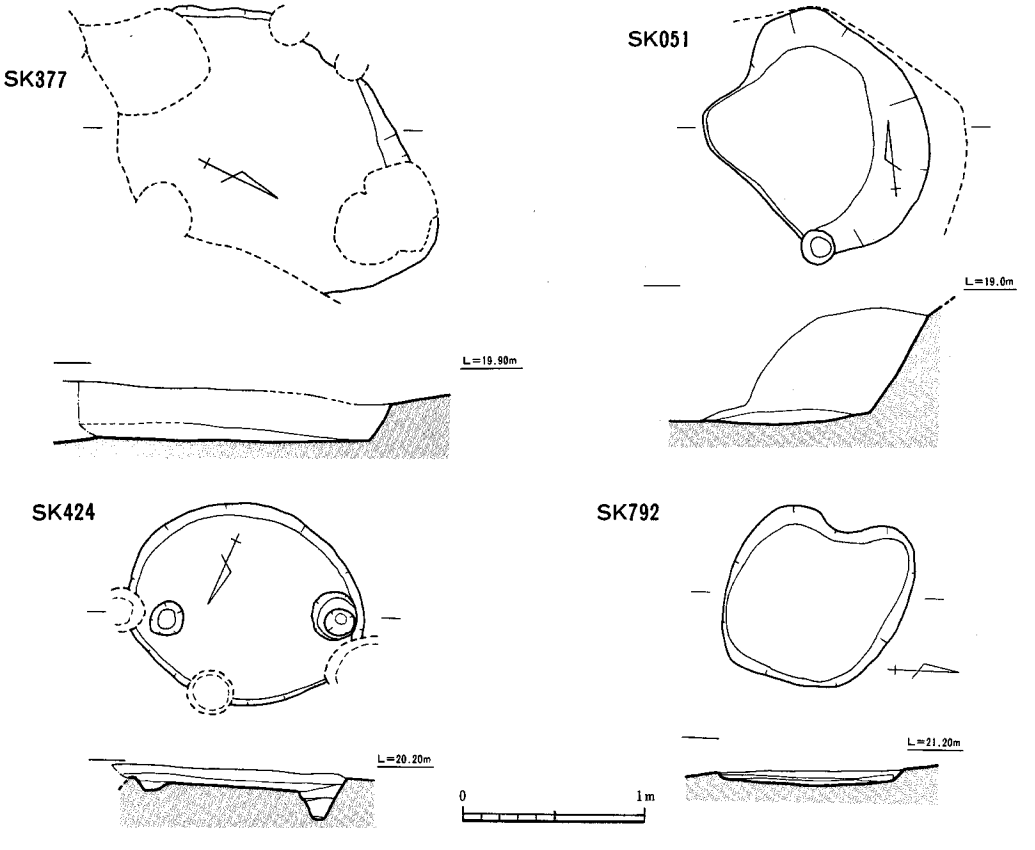


Fig.20　弥生時代前期土壙実測図（1/40）

② 土壙

北西部で4基、南西部で3基、東部で1基検出した。分布域は貯蔵穴とほぼ重なり、散漫に分布している。377が2mを越える以外は1m前後の小形の穴である。

SK377（Fig.20）　北西部のC5グリッドに位置する。SC369とSD127とに切られ、全容が明かでないが、現況で幅158長150深47cmを測る方形の土壙と思われる。

出土遺物（Fig.22）　136～137は壷である。136は径40cm程の大形の壷の肩部の小片で、頸部が若干盛り上がり、ここにヘラ描沈線を1条施す。胎土は1～2mm大の石英粒を多く、金雲母、角閃石を若干含む。器壁の内外はヨコケンマを施す。137は壷の底部で径は8.2cmと小さい。外底はゆるい上底で、外面は上位1cm程で若干くびれ外方に直線的に開く。調整は器壁の剥落が著しく不明である。胎土は2mm大の石英粒をやや多く含む。138～140は甕で、138は口径28cmを測る。砲弾形の胴部から口縁が如意状に外反する。口縁端部が欠落するため刻目の有無は不明。器壁の剥落が著しいが、内面にはケンマを施す。139は小形の鉢で口径12cmを測る。口縁下が若干くびれ、口縁内面が内傾して稜を成している。器壁が厚く、内外面はナデ様の粗いケンマを施すが凹凸が著しい。全体的に粗い造作である。胎土は1～3mm大の石英粒を多く、金雲母・角閃石を若干含む。半島系か。140は径7.6cmの甕の底部で、外底は若干上底。外面は直線的に開く。前期後半。

SK424（Fig.20）　北西部のE6グリッドに位置する。径133×112深13cmの円形の土壙である。削平が著しく、殆ど底面しか残っていない。長軸の壁際に径15～23cm程の柱穴が2本検出されている。

出土遺物（Fig.22）　141は鉢の口縁部小片で、器壁が6mmと薄い。口唇は面取りで平坦になる。剥落が著しく外面の調整は不明。内面はヨコハケ後ヨコナデ、ゆるいケンマを施す。142は甕の底部で、径7.3cmを測る。140と同様で、外底は若干上底。外面はほとんど直線的にゆるく外傾して開く。前期中頃。

SK051（Fig.20）　南西部のB17グリッドに位置し、SC012に切られる。斜面下側を欠失しているが、円形の土壙と思われる。現況で135×123深61cmを測る。床面は平坦で壁は外傾する。

出土遺物（Fig.22）　143は甕の口縁部で、口径16.6cmを測る。断面三角の口縁で3～4mm大の石英粒を多量に含む。前期末～中期初。

SK792（Fig.20）　東部のN13グリッドに位置する。不整形の土壙で120×102×12cmを測る。

出土遺物（Fig.22）　144は甕の口縁で、直線的に開いた胴から口縁が如意状に外反し、口唇全面にハケメ板木口で大きく刻目を施す。以下はタテ・ナナメハケを施す。前期前半か。

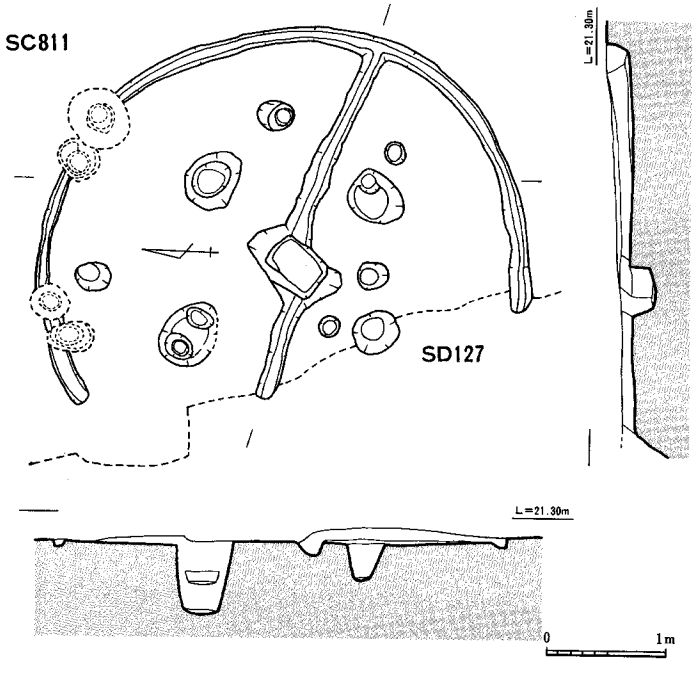


Fig.21　SC 811実測図（1/60）

③竪穴住居

貯蔵穴・土壙の数からすると4～5軒は存在したと思われるが、明確に検出できたのはSC811のみである。これも壁溝が残るのみで著しい削平が行われている。

SC811（Fig.21　Ph.22）　中央西側のE11グリッドに位置する。西側1/3程を後期の溝SD127に切られるが、径3.96mを測る円形住居である。主柱穴は中央の4本と思われ、柱間は1.25～1.6mを測る。柱痕跡は径15～20cmである。中央に75×42深20cmの方形の土壙を設け、幅15cm程の周壁溝とこれを東西方向の溝で連結し、溜桝状になっており、溝底は西の斜面側に下がって排水する様になっている。

Ph.22　S C811（南から）

出土遺物（Fig.22）　145は豊前系の跳ね上げ口縁の甕の小片で、口縁は面取りされ幅2cmの平坦面をつくっている。胎土は1～1.5mm大の石英粒をやや多く含む。146は口径33cmを測る甕で、砲弾形の胴部に如意形にゆるく外反する口縁が連なる。口唇は面取りされるが刻目はない。内外面にナデ後ゆるいケンマを施す。前期末～中期初頭。

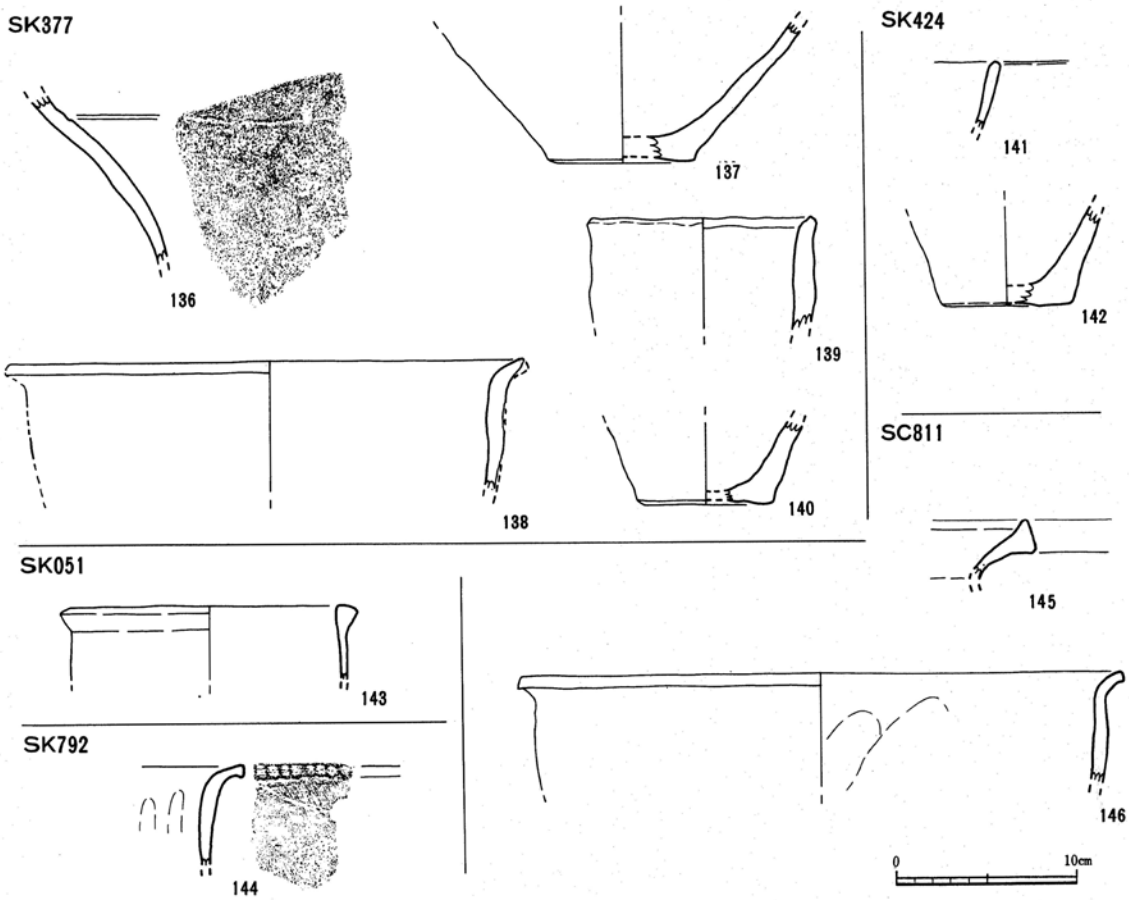


Fig.22　SK 377・424・051・792・SC811出土土器実測図（1/4）

2）．弥生後期の遺構・遺物

今回の調査において、中世とともに中心を成す時期で、丘陵西側から北側にかけて幅2.5mの溝がとりまく環溝集落である。溝内からは廃棄された土器がコンテナにして約300箱、総重量2t弱の膨大な量で出土している。溝内側には後期全期を通じて数十軒の住居が存在したと思われるが、中世以降の削平のため、検出できたのは環溝SD127を含めて溝2条・土壙4基のみで、住居は多数の柱穴が残るのみである。

①溝

溝は環溝であるSD127と、南端部でこれに沿うSD231の2条を検出した。

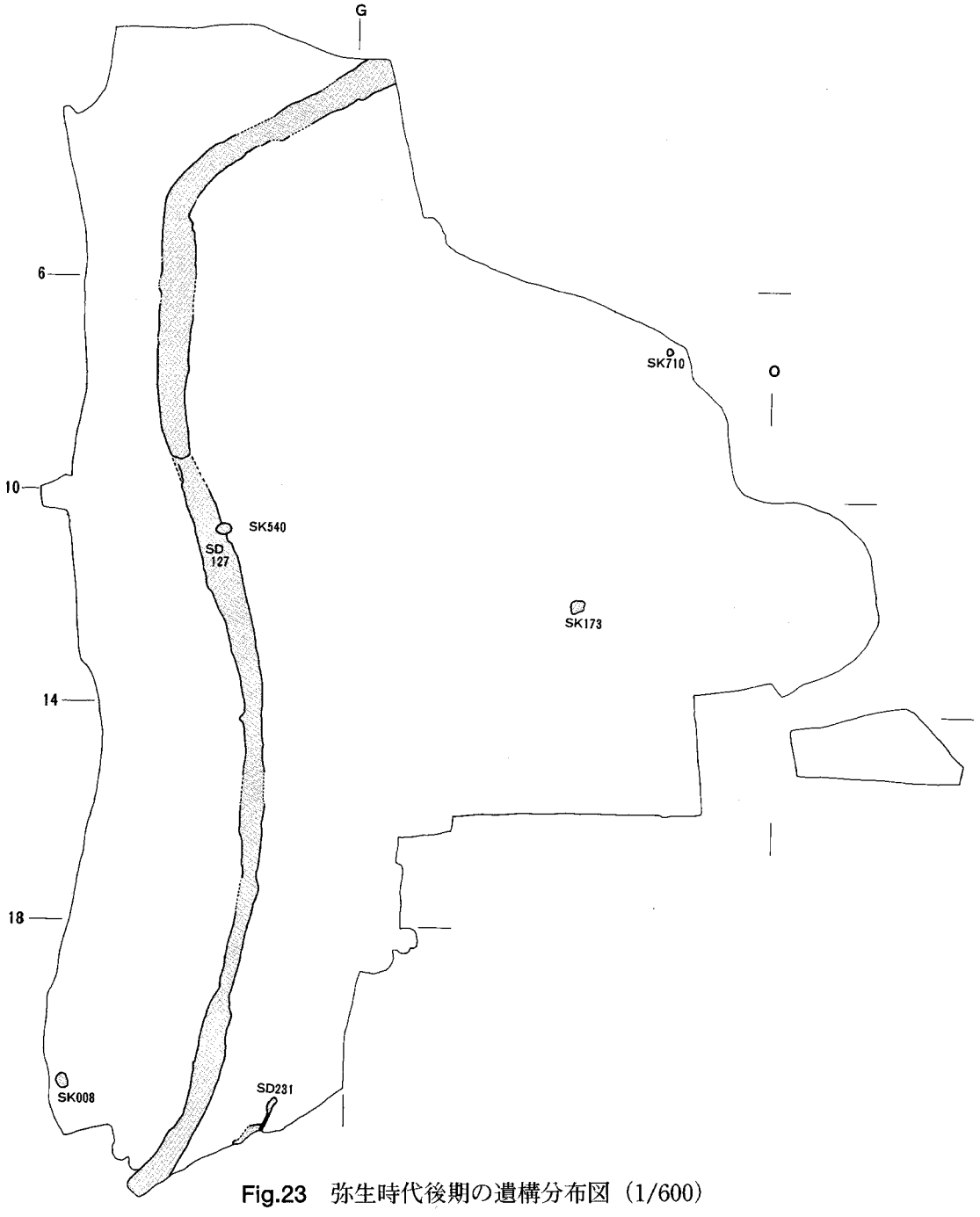
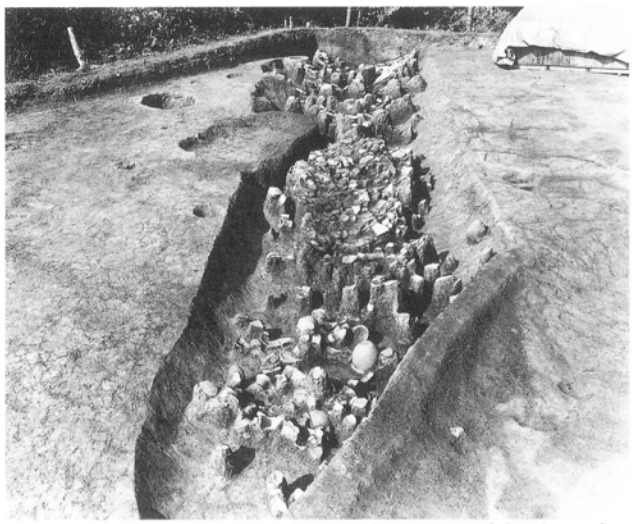


Fig.23　弥生時代後期の遺構分布図（1/600）

Ph.23　ＳＤ127 A-A’ 土層断面（西から）

Ph.24　SD 127 B-B’ 土層断面（南西から）

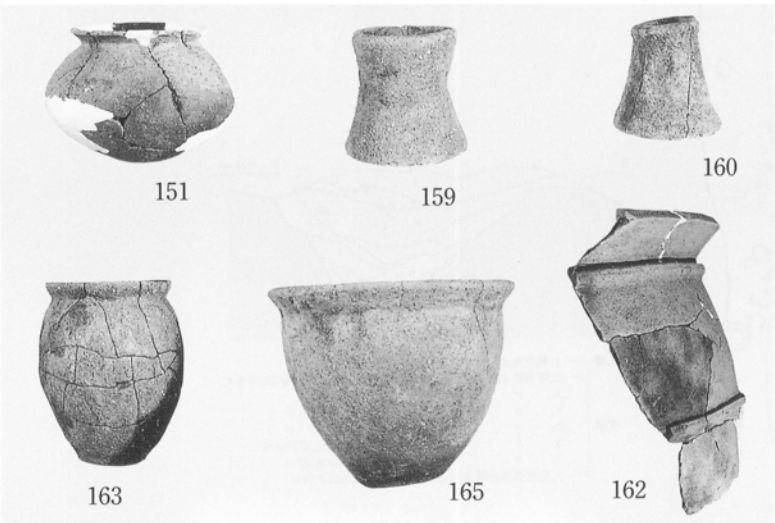
SD127（Fig.24・25　巻頭図版2）　丘陵の西斜面から北側にかけて21～22mの等高線に沿って掘削された環溝で、最大幅3.2m深1.5mを測る。調査区の東側では検出されなかったため、東側の自然崖をそのまま取り込んだ環溝と思われる。調査区内での総延長は114mに及ぶ。丘陵全体は調査区の南50m程で東西幅が20m程くびれており、この地形に沿えば南北170m。さらに200m南で東西幅が半減し、3m程高くなる地形変換地点まで延びるとすると南北約300mの範囲を囲う事になる。



Ph.25　SD 127　1群土器出土状況（南西から）

溝の断面及び埋没状況は10ラインを境にして南北で異なり、北半部は断面舟底形で、半分程埋没後幅を狭めて再度掘削している。南半部は断面逆台形で底面が狭くなっており、明瞭な改削は認められない（Fig.24）。

遺物は上層の黒灰～暗灰褐色土を中心に多量に検出されるが、改削のため後期前半～古墳時代初頭までの資料が混在している。各グリッド毎の出土量はFig.25の通りで、G～Fと6～7、10～12に集中部が有り、生活遺構の粗密を間接的に示している。土器は集中部によって8群に分けて取り扱っている。1グリッドでの最大量は224.7kg・最低量は4kg、総量では1,984.5kgと2tに近い。器高40cm程の甕で735個分に相当する量である。



Ph.26　SD 127　1群出土土器

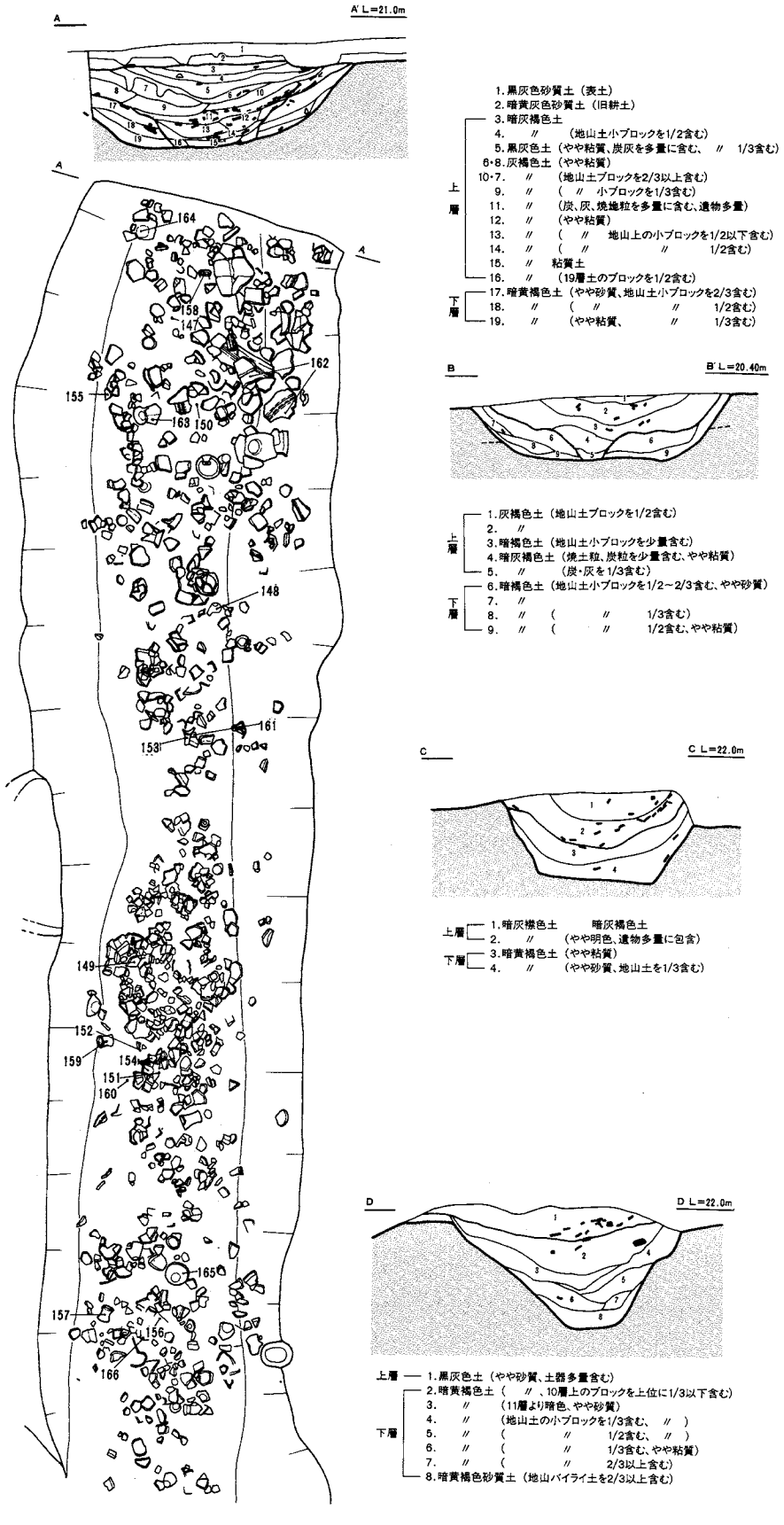


Fig. 24 SD 127 1群土器出土状況・土層断面図（1/60）

第1群出土土器（Fig.26・27　Ph.25・26）　147～166は上層出土。147～152は壷で、147は頸部の延びた逆「く」字に内傾する二重口縁壷で屈折上部は外湾する。口径15.3㎝。148は口縁が鍔をつくって逆「く」字に内傾し、上が内湾する壷で、口径17㎝。149は口縁が屈折して垂直に立ち上がる二重口縁壷で口径27.2㎝。上部は若干内湾する。150は長頸壷の口縁で口径8.6長11㎝を測る。151は短頸壷で口径12.2器高12.4㎝を測る。外底は平底に近い丸底。152も短頸壷で胴径25.6器高24.4㎝で球形の胴で外底は広いレンズ底を呈する。脇のくびれはなく、直線的に延びる。153は口径32.8器高23㎝を測る高坏で坏部が上位で屈折しほぼ真直に延びて以上がゆるく湾曲する。端部は薄く仕上げる。154

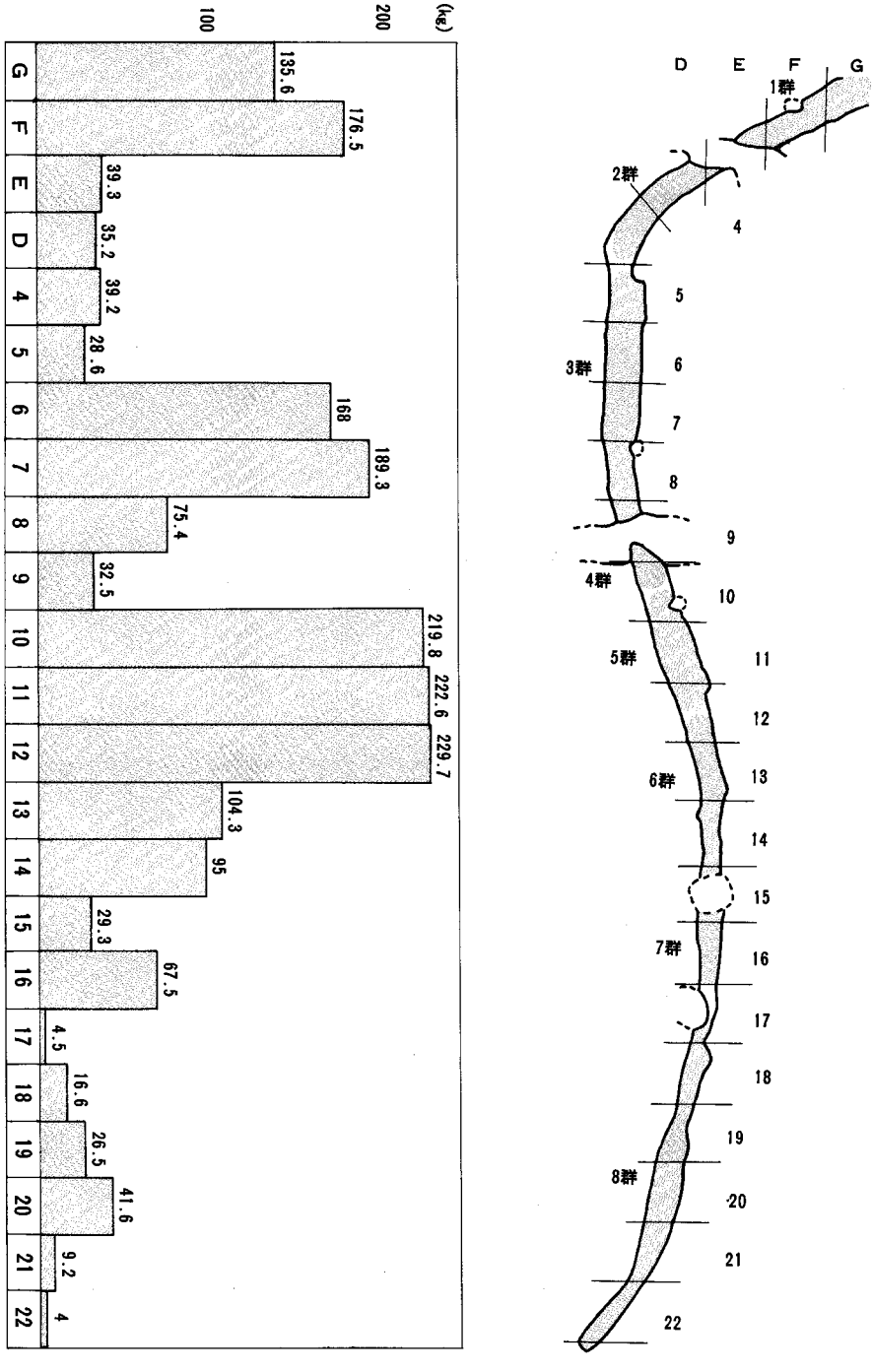
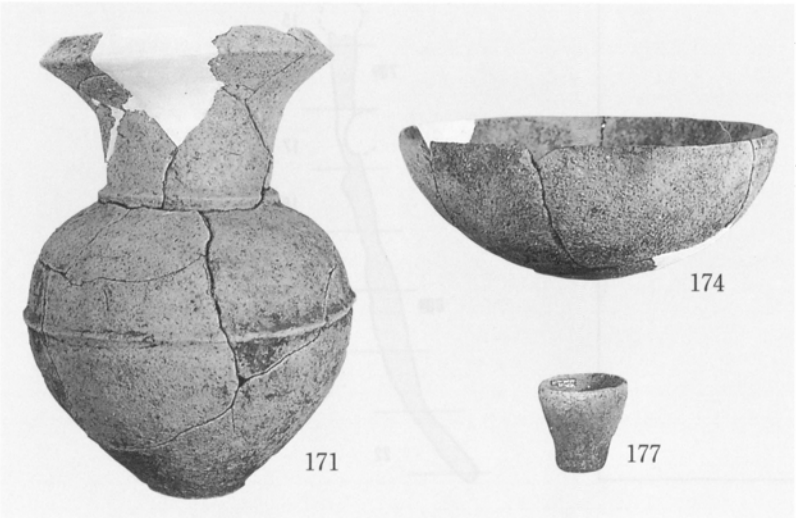


Fig.25　SD127　グリッド別土器出土量

は中期の系統の高坏で「鋤先」部が縮小する。155は浅鉢で口径15.4器高3.6㎝を測る。薄い器壁で指頭圧痕が多く残る。156～160 は器台で、156は口径12.5器高18.6㎝の筒形器台で、くびれは上位にある。157・159は小形の筒形器台で、157は口径9.9器高10.7㎝を測る。口縁下2㎝でくびれ、器壁が厚い。159は口径9.3器高11.2㎝を測る。中位でくびれ口縁は大きく開かない。158・160は沓形の支脚で、158は脚径12.8器高11.7㎝を測る。上面に径2.2㎝の孔が有り、支点部を欠く。外面に平行叩痕が残る。160は脚径10器高9.8㎝を測る。外面はタテハケで、支点の突出は5㎜程で短い。161～165は甕で、161は大形の甕で口径49㎝を測る。口唇内側が跳ね上がる跳ね上げ口縁で口唇が幅広く1.3㎝を測る。豊前系。162は西新式の大型の甕で口径92.2㎝を測る。頸部と胴部に「コ」字突帯を貼付し、口唇と頸部突帯にはハケメ原体で刻目を施す。外面上位にはタテハケ、下位には平行叩が残る。163は口径14.5器高21.2㎝を測る甕で、胴が張り重心は上位にある。外底はゆるいレンズ底で5㎝程の間隔で平行する線状の圧痕がある。164は162同様西新式の大甕の底部で、片側の底面を広げるため粘土帯を張り足している。外面には叩痕が残る。径13.7㎝。165は焼成前穿孔の甑で、口径21.5器高18.3㎝。外底はゆるいレンズ底で中央に径10㎜の孔を穿つ。166は口径25器高15.3㎝の短頸の鉢で、外底は上底で、脇はくびれず外湾する。167～170は下層出土。167は接合部が鍔状に突出して以上が垂直に立ち上がって内湾する二重口縁壷で口径16.6㎝。168は稜を成して「く」字に外反する甕で、外面に斜位の叩が明瞭に残る。169は方柱状の支脚で幅4.8㎝を測る。底面に沈線が1条ある。170は支脚で径6.5㎝を測る。上面が傘状となり、支点の突出部を欠失する。

第2群出土土器（Fig.28　Ph.27）　171・172は口縁が逆「く」字に屈折して内反する二重口縁壷で、171は口径18.7胴径25.9底径8.9器高34.8㎝を測る。屈折の上位は直線的になり、やや広い外底はゆるいレンズ底となる。胴内面にはナナメハケが残る。172は口縁の屈折部が若干突出し、以上はゆるく外反する。口径15㎝を測る。内外面にはハケメ調整が施される。173は高坏の坏部で径19.3深5㎝を測る。脚は接合部で剥がれている。径3.4㎝。中位に低い段を有し、口縁端部が薄く外反する畿内系である。174は大形の浅鉢で、丸底から大きく外湾して口縁が直口する。径26.7器高11.6㎝を測る。内面にはナナメハケが残る。175は小形の甕で、口径11.9器高20.6㎝を測る。「く」字に屈折して口縁が直線的に延び、胴は中位で張る。外底は径7㎝で強く張るレンズ底を成す。176は脚付鉢の鉢部で、口縁が短く外反する。径17㎝を測る。177は小形の支脚で脚径6.4器高6.7㎝を測り、上面に孔はない。指頭圧後ハケメ後ナデを施す。

第3群出土土器（Fig.29～32　Ph.28・29）　178～184は壷で、178は中期の系統を残す鋤先口縁の壷で、口径24.8胴径35㎝で、重心は中位よりやや上にある。口縁上面は内傾し、端部に浅い沈線を1条施す。179は頸部が短く、口縁が逆「く」字に屈折し内反する二重口縁のやや大形の壷で、口径22.8㎝を測る。口縁の稜から上は内湾し内傾する。180も大形の壷で口径24.2㎝を測る。逆「く」字に屈折した稜にナナメの浅い刻目を施し、以上は肥厚して外湾し、口唇は面取りをして外端が若干張り



Ph.27　ＳＤ127　2群出土土器

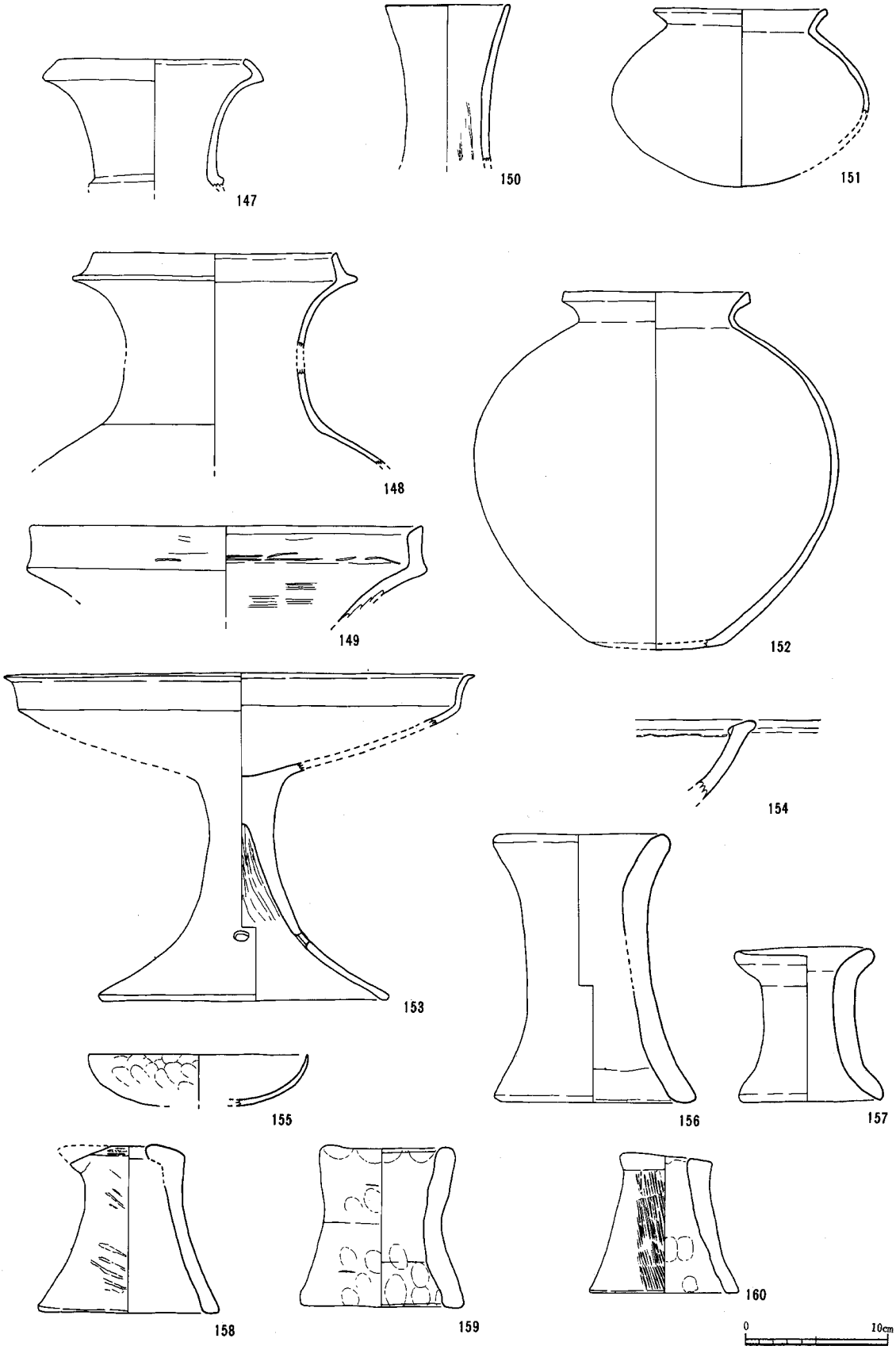


Fig. 26 SD127　1群出土土器実測図.1（1/4）

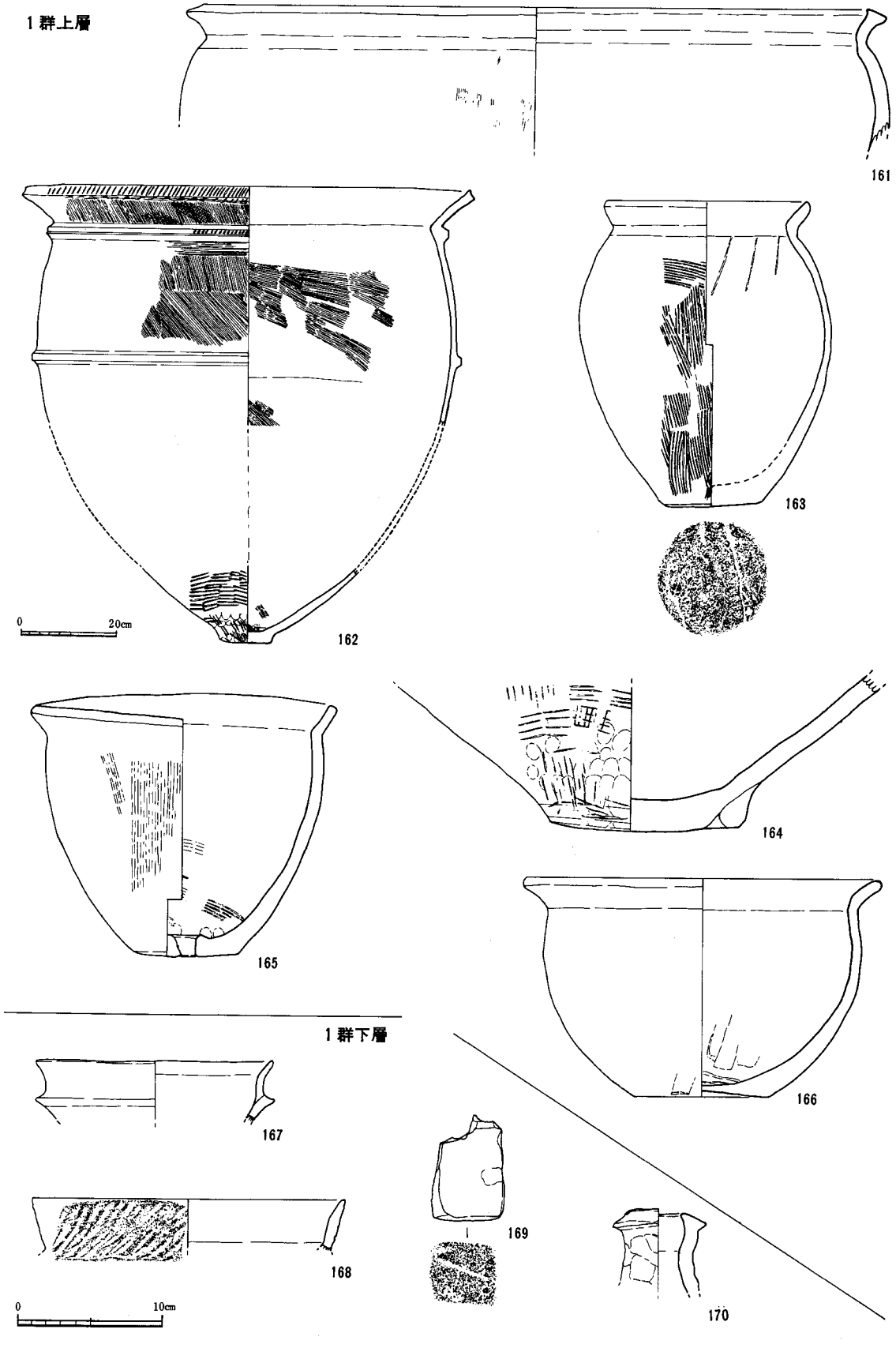


Fig. 27 SD127　1群出土土器実測図.2（1/4・1/12）

出す。181は口径17.5cmを測る。短い頸部で胴張りも弱い。「く」字の二重口縁で、屈折の接合部が鍔状に若干突出し、以上がゆるく外湾してやや内傾し、187より強く端部が外反する。182はゆるく長く外反する口縁の壷で、口径18.5胴径27cmを測る。胴はやや扁球状で重心は若干下位にある。183は坩で口径8.4cmで3.5cm程直線的に開き、頸部は内外で稜を成す。184は短頸の壷で口径15.5胴径23.1器高21.9cmの球形の胴で、外底はレンズ底気味で脇は若干くびれが残る。底径7cm。185は小形の直口の高坏で、口径15.7器高10.5脚径11cmを測る。脚端は薄く仕上げ外面に指頭圧痕が残る。186は坏部が屈折する高坏で、口径26.2cmを測る。屈折部は脚に近い下位にあり、口縁は内湾して外に開き端部内面が若干肥厚する。187は「く」字口縁の甕で、口径30.6胴径29.8cmを測る。重心は中位にある。188～193は鉢で、188は径7.2cmの広い底部がくびれずゆるく外湾して直口口縁に連なる鉢で、口径19.6器高10.9cmを測る。189は縦長の鉢で、径4.6cmの底部から脇が若干くびれて胴が直線的に開き口縁が若干外湾する。口径12.3器高16.8cmを測る。190は丸底小形の浅鉢で、口径9.4器高3.6cmを測り、指頭圧痕が多く残り口縁もひずむ。191は手捏ねの小形鉢で口径6.6器高5.1cmで若干の平底が残り、調整は同様に粗い。192は広めの底部から外湾して胴が張り口縁がやや内傾する小形の

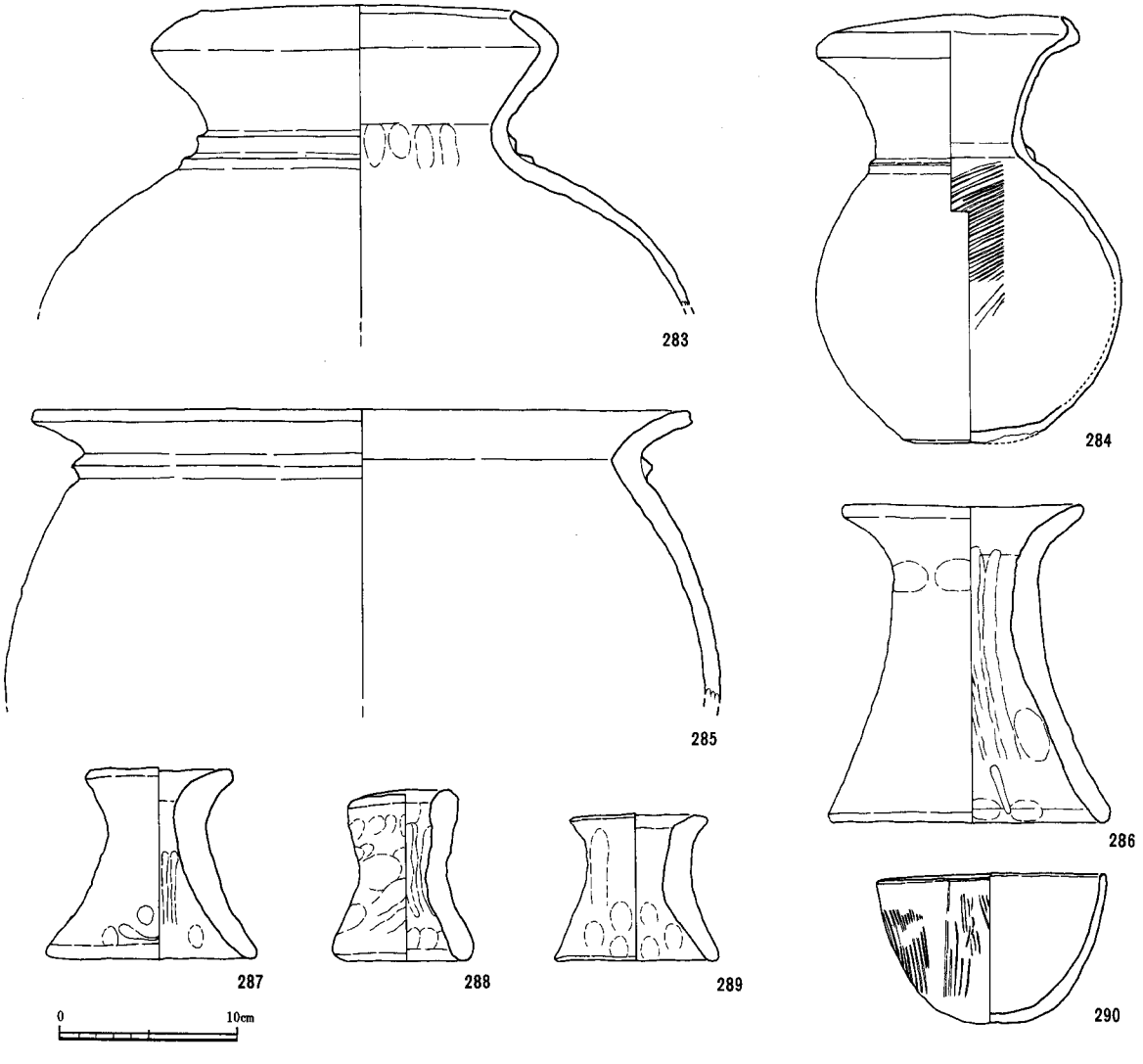
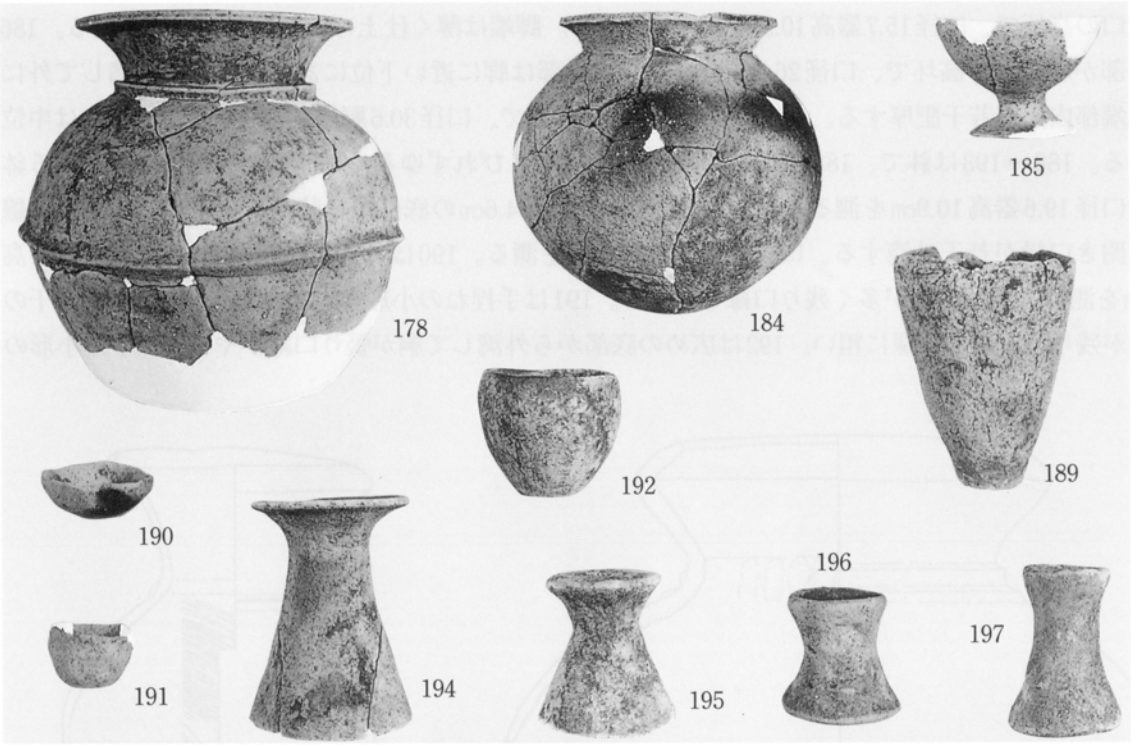
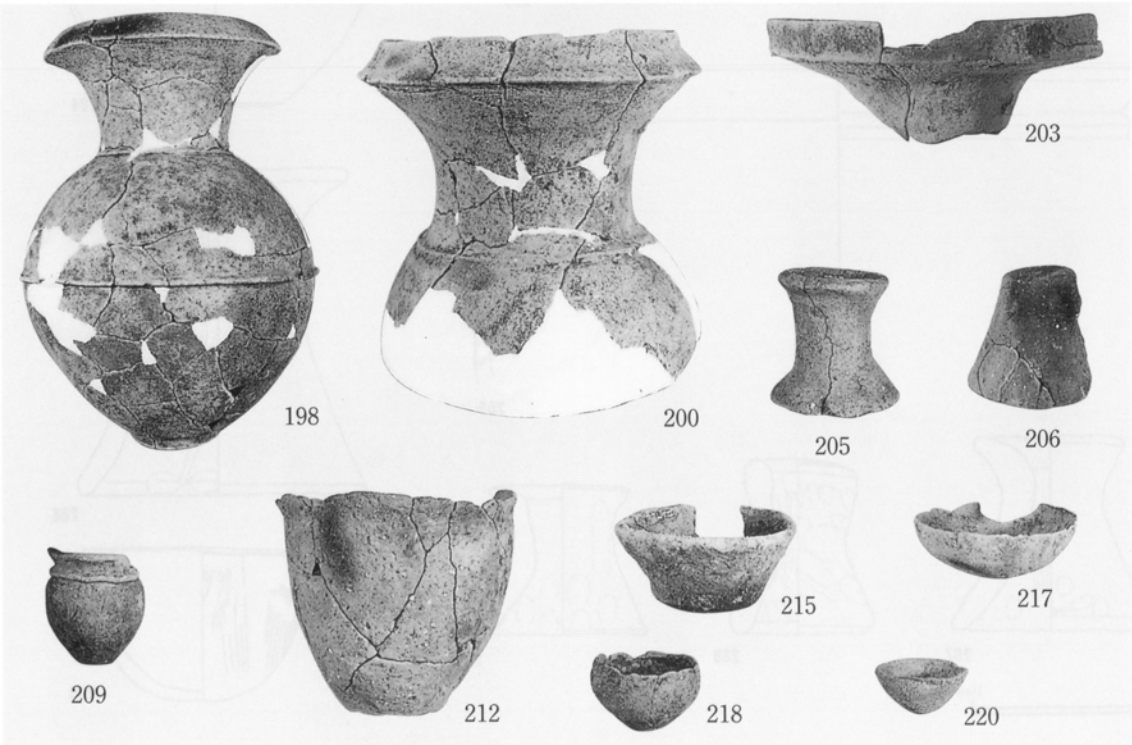


Fig. 28 S D127 2群出土土器実測図（1/4）

鉢で口径11器高10.4cmを測る。193は丸底の浅鉢で口径13.2器高5.9cmを測る。194～197は器台で194は脚径13.8器高18.5cmの大形品で口縁下2.5cmで強くくびれる。195は脚径11.3口径9.4器高12cmを測る。くびれはやや上位にあり、上端が厚3cmと極めて厚く肥厚する。196は口径7.9器高9.5脚径10.1cmの小形品でくびれはやや上位にある。整形は粗い。197は筒形の支脚で口径7.2器高13.6cmを測る。器壁が厚く1.8cmを測る。整形が粗く外面に指頭圧痕が多数残る。



Ph.28　SD127　3群上層出土土器



Ph.29　S D127　3群下層出土土器

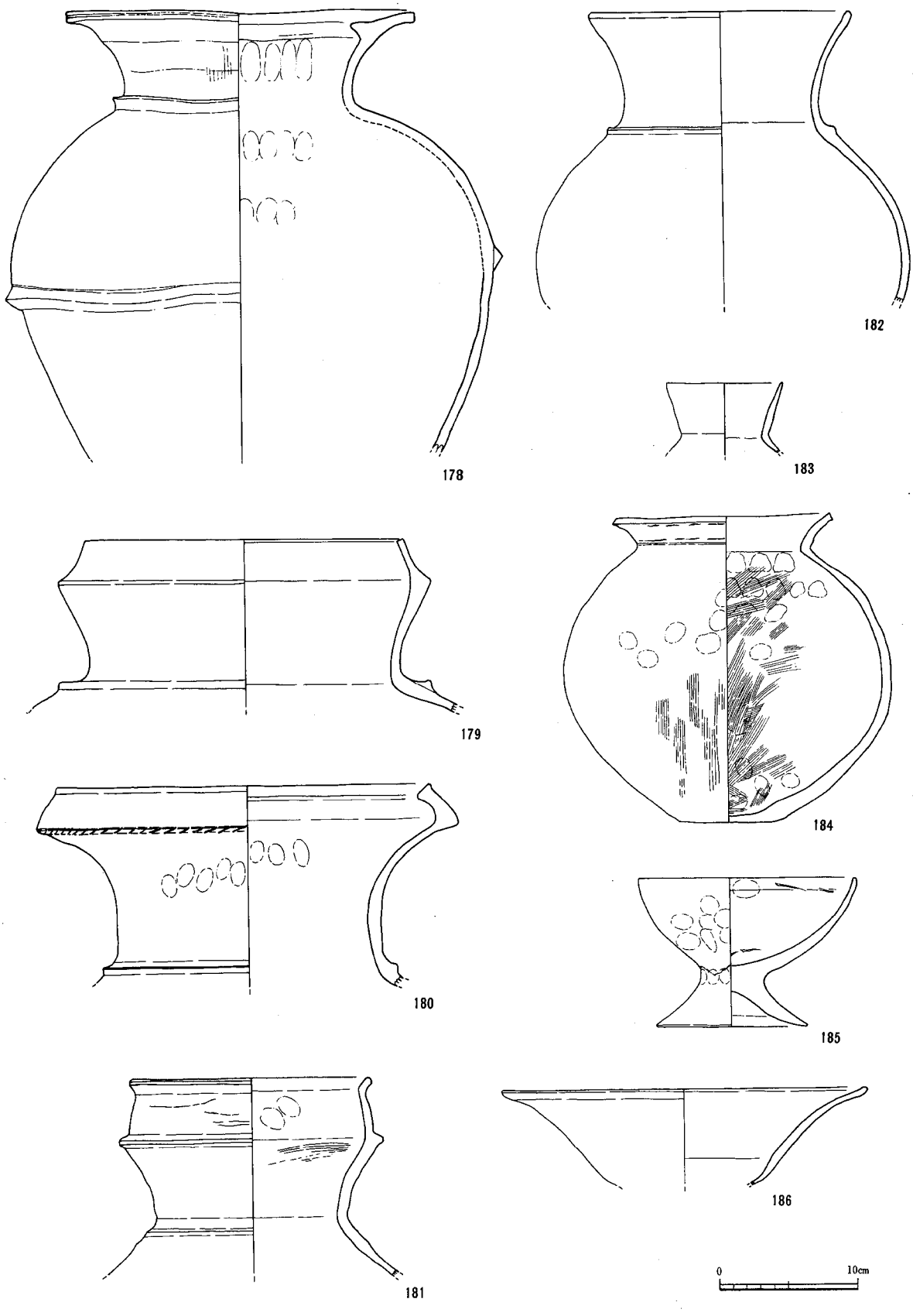


Fig. 29 SD 127 3群上層出土土器実測図.1 (1/4)

198～204は下層出土で、198～202は壷。198は口径19器高41.4cmのやや大形の壷で、頸部が長く、口縁が逆「く」字に屈折して内傾する二重口縁で屈折以上がゆるく外湾する。外底は平底で脇がゆるくくびれる。199は口径21.1cmで口縁屈折部がやや垂下し、以上はゆるく外湾して強く内傾する。口唇は平坦に仕上げ両端部が少々張り出す。内外面には指頭圧痕とハケメが残る。200は口頸部が肥大化した二重口縁壷で口径21.8胴径26cmで胴張りはゆるい。口縁は逆「く」字に屈折した上部が直線的に内傾して端部が細く垂直に立ち上がる。頸部外面には1cm弱の間隔でタテに暗文を施す。201は壷の胴部で径26.8cmの球形の胴に「コ」字突帯を1条貼付しナナメの刻目を施す。外底はレンズ底で脇はゆるくくびれる。底径8.1cm。202は直口気味の短頸の壷で、口径12器高21cm。球形の胴で外底は径7cmのレンズ底。203は外来系の壷の口縁部と思われ、大きく内湾した頸部から逆「く」字に屈折して口縁がほぼ垂直に立ち上がり若干内湾する。口径10cm。204は坏部が屈折する高坏の坏部で口径31.5cm。中位で屈折し口縁がゆるく外反する。205は筒形器台で口径8.2器高9.7cmを測る小形品でくびれは中位にある。206は沓形の支脚で器高10.7脚径10.7cmで支点の突出が4.2×2cmの板状につまみ出されている。207～212は甕で202は胴の張りが中位よりやや上にある倒卵形の短頸の甕で、口

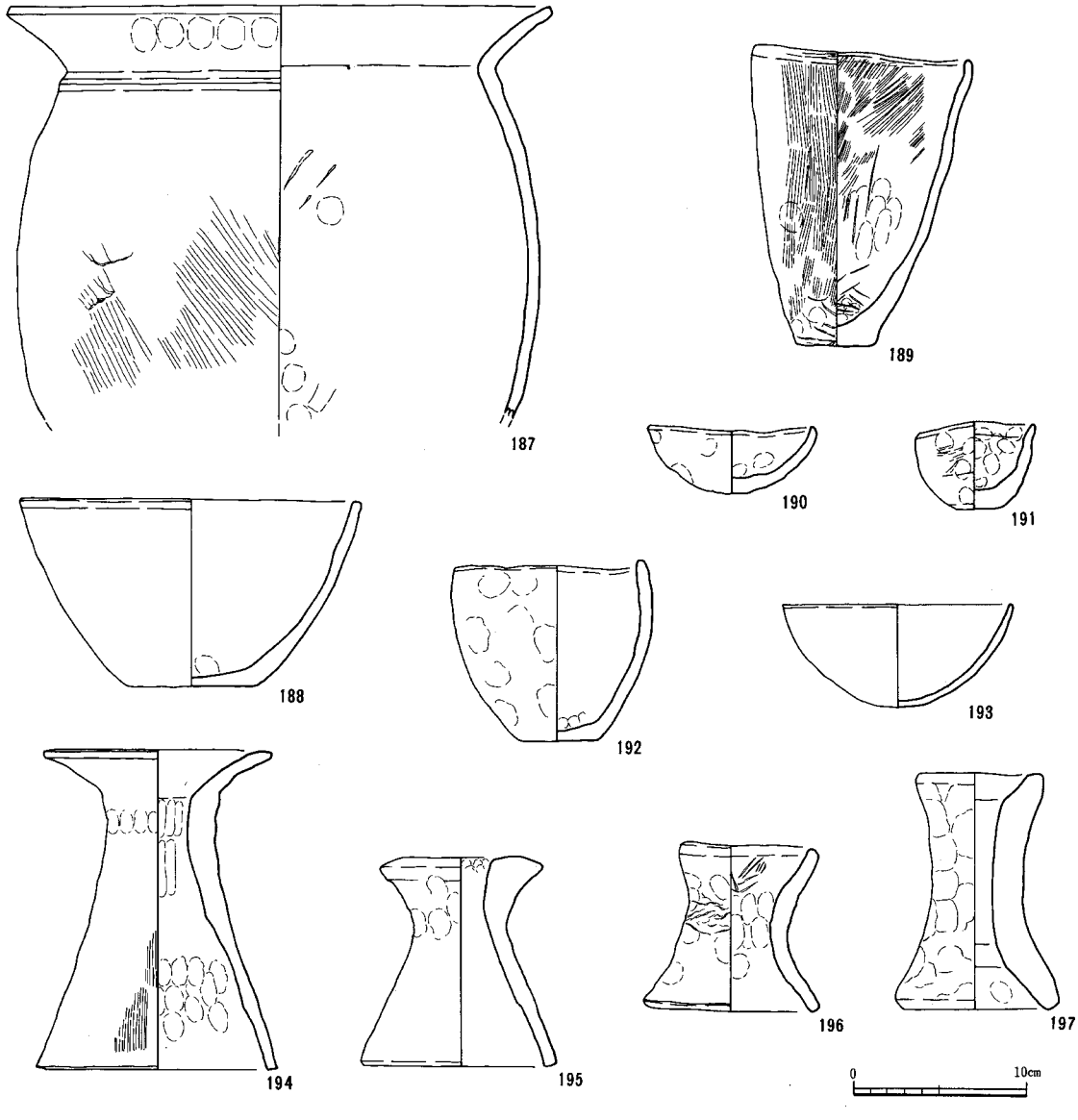


Fig. 30 SD 127 3群上層出土土器実測図.2 (1/4)

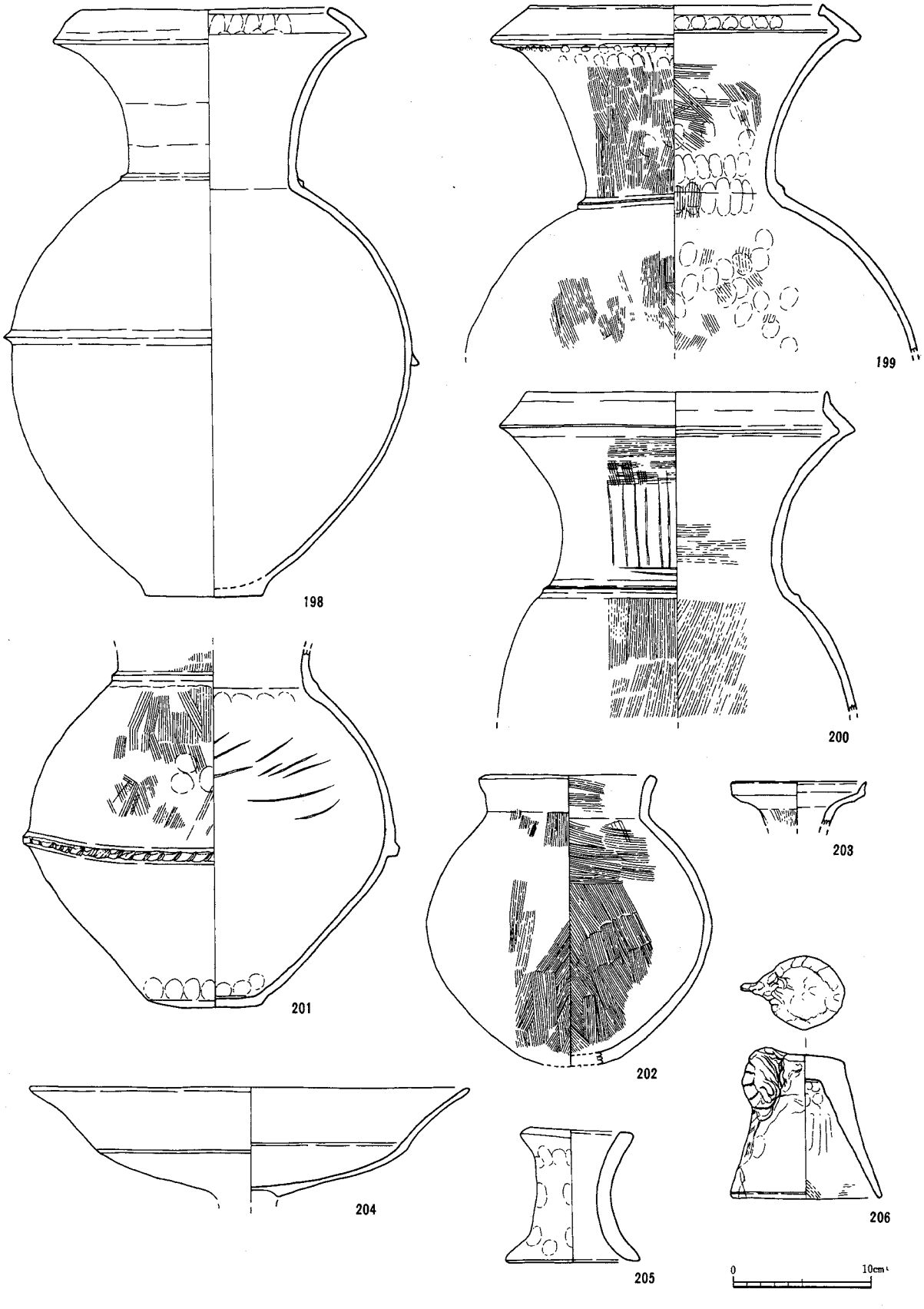


Fig. 31 ＳＤ127 3群下層出土土器実測図.1（1/4）

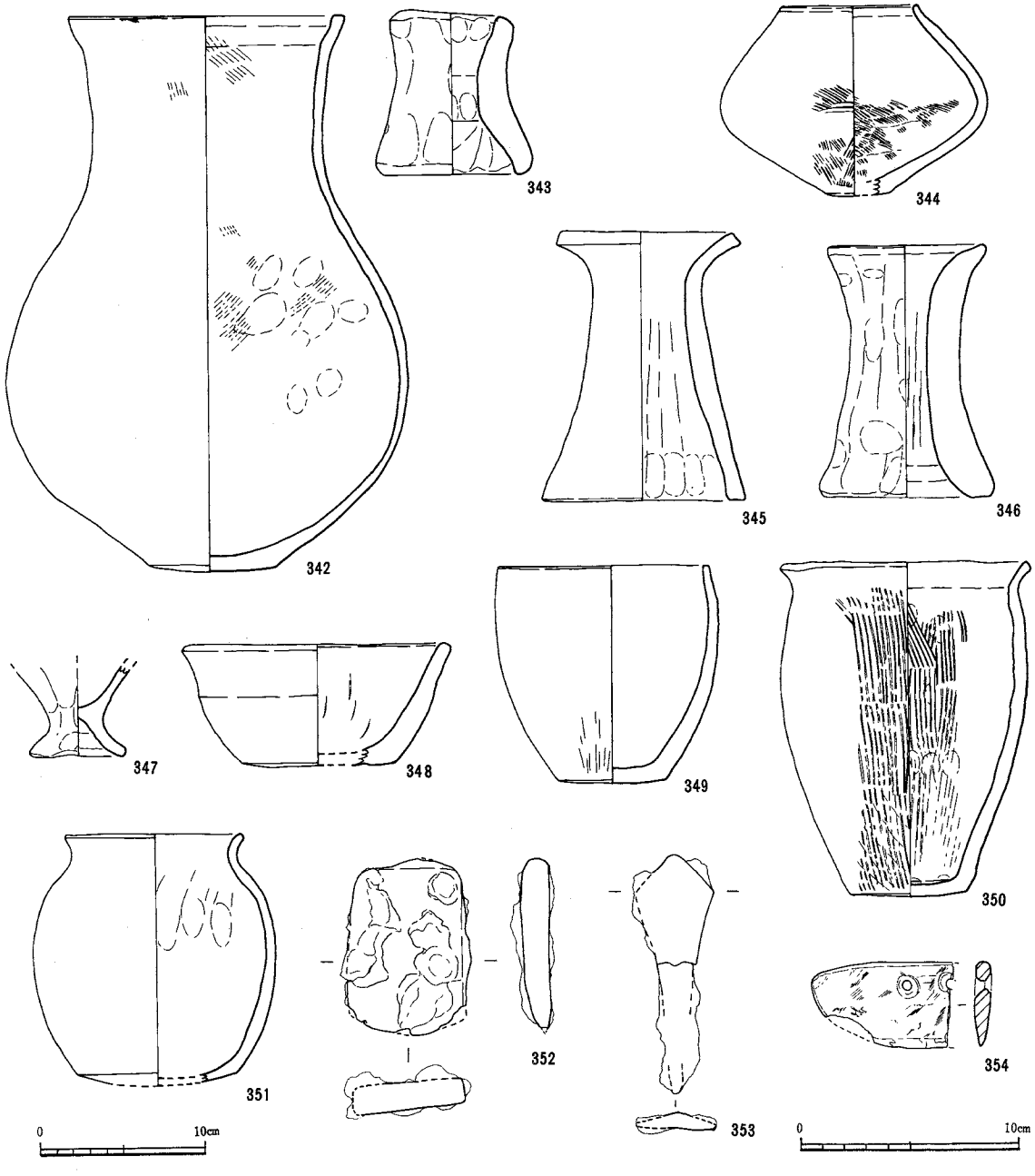


Fig. 32 ＳＤ127 3群下層出土土器実測図.2（1/4）

径17.2胴径26cmを測る。208は口径21.6cmの「く」字口縁の甕で中位で胴が張り径25cmを測る。209は口径7.7器高9.5cmの小形の「く」字口縁甕で、頸部下に「コ」字突帯を1条施す。外底はゆるいレンズ底で脇のくびれはない。210は径2cm程の平坦部が残るほぼ丸底の甕で口径9.9胴径14.8器高19.9cmを測る。211は頸部の短い甕で口径13.2器高15.7cmを測る。径10cmの広くゆるいレンズ底の外底から脇がくびれずやや上位で張る胴部に連なる。胴部径17.2cm。212は「く」字口縁の低い甕で口径18.2器高16.3cmを測る。径7.2cmの広めの平底から脇がくびれずゆるく張る胴が開き、口縁に連なる。頸部はゆるい稜をなす。213～220は鉢で、213は口縁が「く」字に外反する鉢で口径20.8

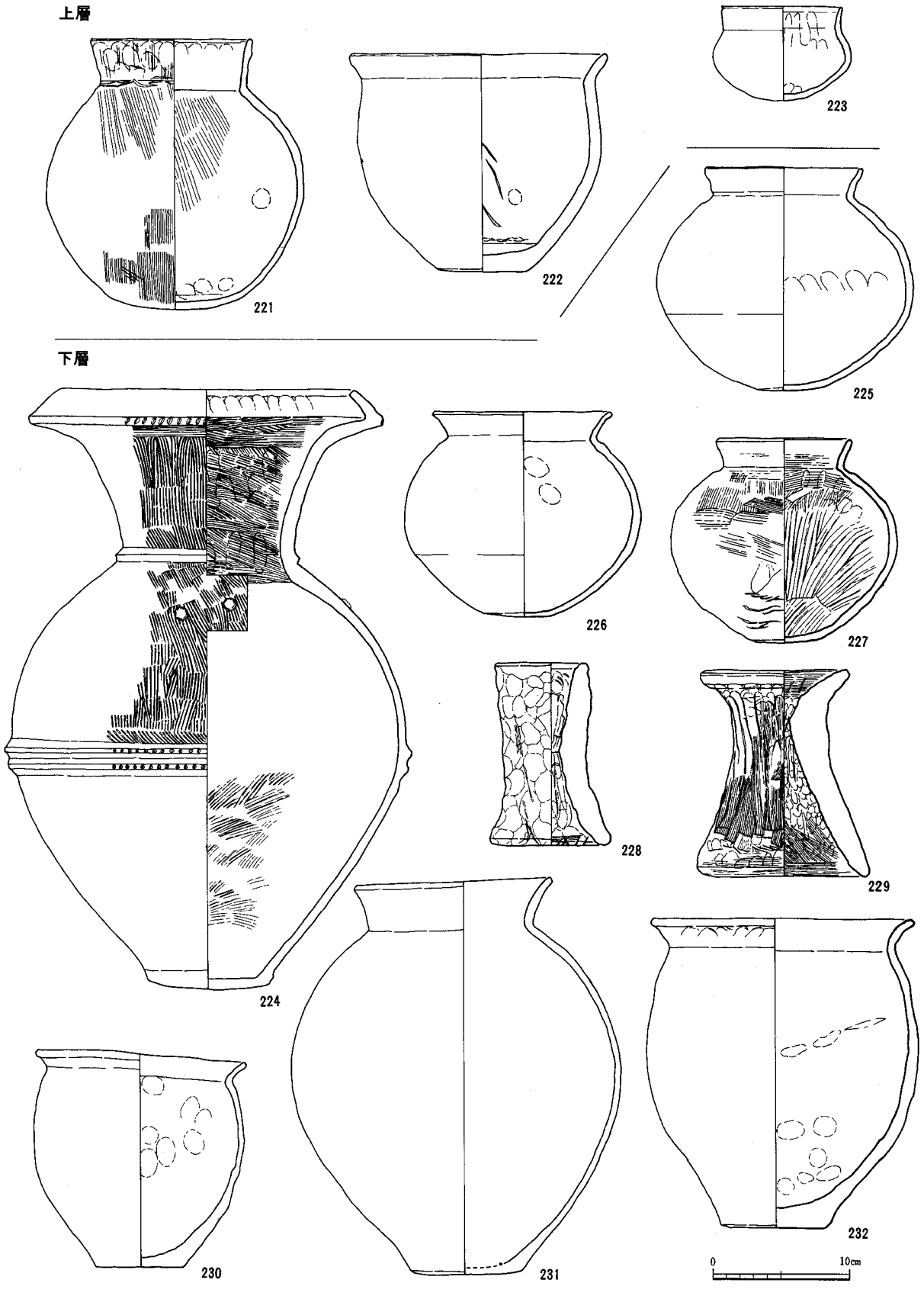
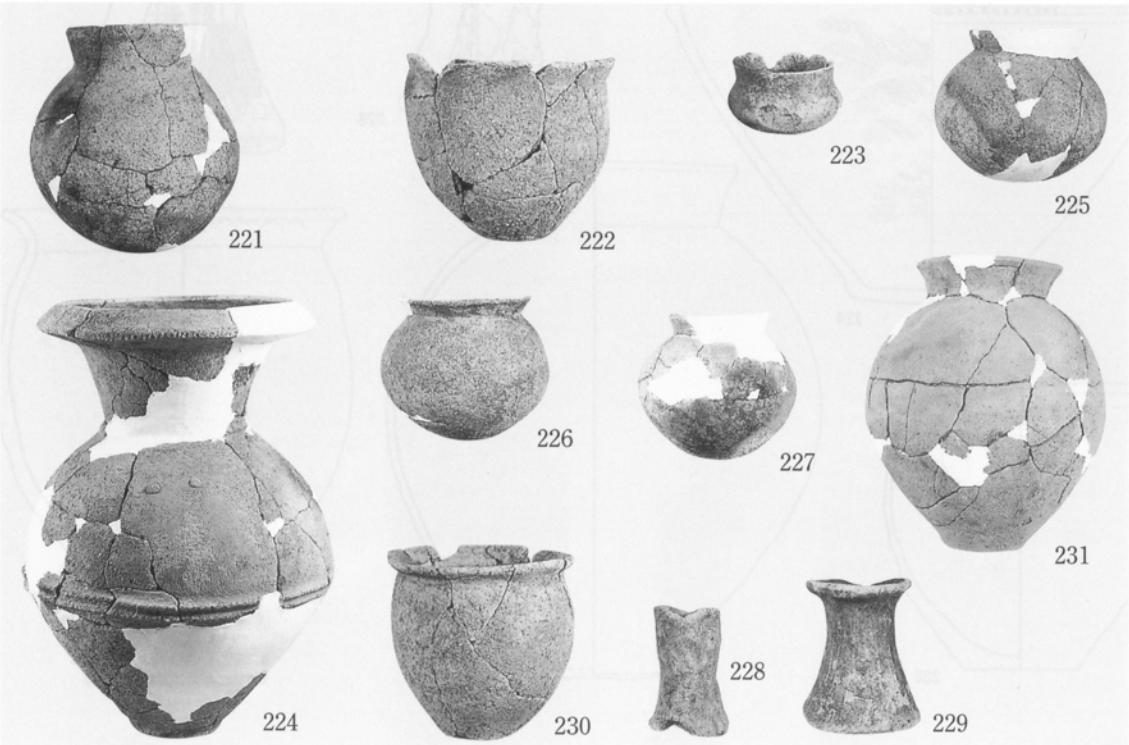


Fig. 33 SD 127 4群出土土器実測図（1/4）

高11.2㎝。外底はレンズ底で脇は若干くびれる。214～220は直口の鉢。214は口径14.9器高8.3㎝。外底はゆるいレンズ底で脇と口縁下が若干くびれる。外面の調整は不明。215は平底に近いレンズ底で脇は強くくびれる。口径13.6器高6.1㎝。216は口径10.4器高8.5㎝。外底は平底に近いレンズ底で脇が1.5～2㎝上位でゆるくくびれる。217は浅鉢で口径12.6器高4.3㎝。調整は不明瞭。218はミニチュアで口径8.5器高6.1㎝。外底は径の小さなレンズ底で脇は1.5㎝程上位でくびれ尖底状を成す。219・220は浅鉢で、それぞれ口径器高8.4×3.2・7.4×3.5㎝を測る。

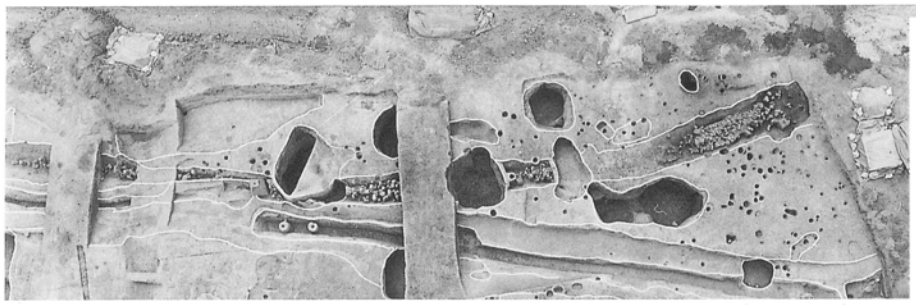
第4群出土土器（Fig.33　Ph.30）　221～223は上層出土。221は直口の壷で口径11.1器高19.5㎝を測る。胴は中位で強く張る球形で外底は丸底に近いレンズ底。内外にハケメを施す。222は「く」字口縁の甕で、口径18.3器高15.7㎝を測る。外底はゆるいレンズ底で径6.1㎝。脇は2㎝程上位で若干くびれる。調整は不明。223は短頸の壷で口縁が直口する。口径8.7器高6.7㎝を測る。外底は丸底で器壁は薄い。調整は不明。224～232は下層出土。224は二重口縁壷で口径22.3器高43胴径30㎝のやや大形の壷。外底はレンズ底で脇はくびれる。口縁は逆「く」字に屈折して強く内反し上はゆるく外湾する。屈折した稜と胴中位の三角突帯2条に刻目を施す。全面にハケメを施し頸部下に径1㎝程の円形浮文を4㎝間隔で並置し、対面に2ヶ所施す。225～227は短頸で頸部のしまる壷で、225は口径11.2器高16.2㎝。中位に最大径がある球形の胴で径18.5㎝。外底は径2.6㎝の小さなレンズ底。調整は不明。226は口径12.8㎝でゆるく内湾する。器高14.8胴径17.3㎝の球形の胴で外底は径8㎝程のレンズ底で脇のくびれは無い。227は口径9.6器高14.9㎝で、胴は中位よりやや上に最大径を持ち径16.5㎝を測る。外底は径5㎝程の小さなレンズ底で脇は1.5㎝程上位でゆるく内湾する。228は支脚で口径5.3器高13.2㎝で器壁は厚く2㎝を測る。指頭圧後粗くナデる。229は器台で口径10.8器高15㎝を測る。口縁下2.5㎝程で強くくびれ外反する。器壁は厚く最大2.8㎝を測る。230は「く」字口縁の甕で口径15.1器高15.5㎝を測る。外底は平底で径6.4㎝。脇は1.5㎝程上位でゆるく内湾する。胴部の最大径は中位よりやや上にある。器壁の調整は不明。231は「く」字口縁の壷で、口径14.4器高29.2㎝を測る。外底はゆるいレンズ底で径8.2㎝を測る。脇は1.5㎝程上位でゆるく内湾する。胴



Ph.30　SD 127　4群出土土器

部の最大径は中位よりやや上にあり径24.2cmで倒卵形を呈する。調整は不明。232は「く」字口縁の甕で口径18.6器高22.5cmを測る。外底は平底で脇は2～3cm上位で大きく内湾する。胴部の最大径は中位よりやや上位にある。口縁はゆるく内湾して外反する。調整は不明瞭。

第5群出土土器（Fig.34～36　Ph.34・35）　233～245は上層出土。233～237は壷で、233は口縁が逆「く」字状に屈折する二重口縁。口径22.8器高35.7cmで口縁が大きく、底部は径10.4cmの広いレンズ底で脇は若干くびれる。胴の最大径は中位より若干下に有り「コ」字突帯を1条貼して刻目を施す。口縁は強く屈折して内傾し、上が若干内湾する。234は胴部で最大径は中位にあり、径29.5cmを測る。外底は径4cm程の小さなレンズ底でくびれはない。内外面にハケメが残る。235は短頸の小壷で口径12.8器高13.8cm。外底は径5.5cm程のレンズ底で脇が若干くびれる。調整は不明。236は長頸の壷で口径6.9器高10.4cm。外底は径4cmのゆるいレンズ底で脇はゆるくくびれる。胴は中位に最大径があり、扁球状を成す。径12cm。外面は上半はタテハケ後ケンマ、下半はタテケズリ後ケンマ。内面上半はヨコハケ下半は不定方向のナナメハケ。237は直口の小壷で口径6.7cm。外底は径5.6cmの広めの平底で脇のくびれはない。胴は中位で張り径10cm。口縁は直線的に若干外傾する。外面にはハケが残る。238・239は大形の筒形器台で、238は口径13器高18.3cm。脚は直線的に延び口線下4cm程で強くくびれて外方に直線的に開く。内外面に指頭圧痕・ハケメが施され外面脚部には平行叩が残る。239は口径16cmで、口縁下2.5cm程でさらに強く屈曲して開く。外面にはタテハケが残る。240・241は支脚。240は口径9.2器高10.8cmの筒形で、口縁下3cm程でゆるくくびれる。器壁が厚く2.5cmあり、内面中央は被熱で爆ぜている。内外面に指頭圧痕が多く残る。241は沓形の支脚で、脚径12.5器高8.6cm。上面には径2.3cmの孔がある。支点の突出部は3cm程の觜状につくる。外面全面にナナメタタキが残る。242・243は高坏で、242は口径22.5深7cmと深い坏部で、径3.3cmの脚上1.5cm程の位置でゆるい段状に屈折し、口縁が長く内湾して外方に開く。内外ともにハケ調整後ケンマする。243は口径32.7器高25.7cmの大形の高坏で、径17.6cmの脚は外湾気味にすぼまり、　径1cm程の

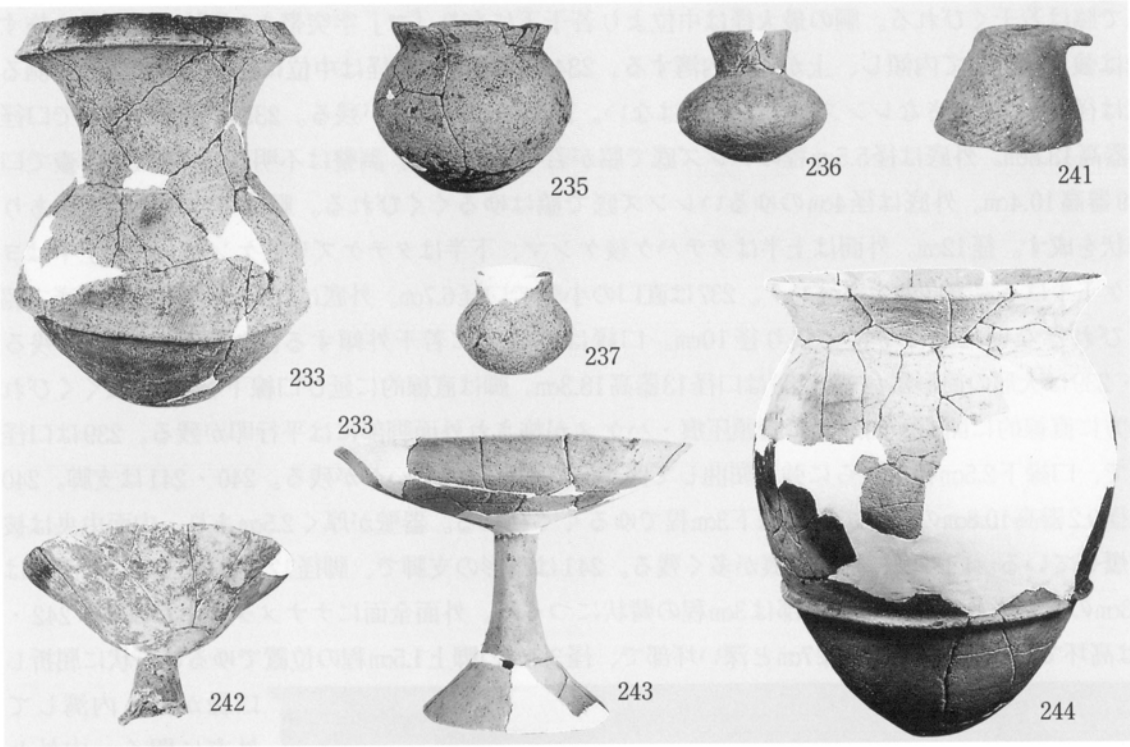


Ph.31　SD 127　5～7群土器出土状況（東から）

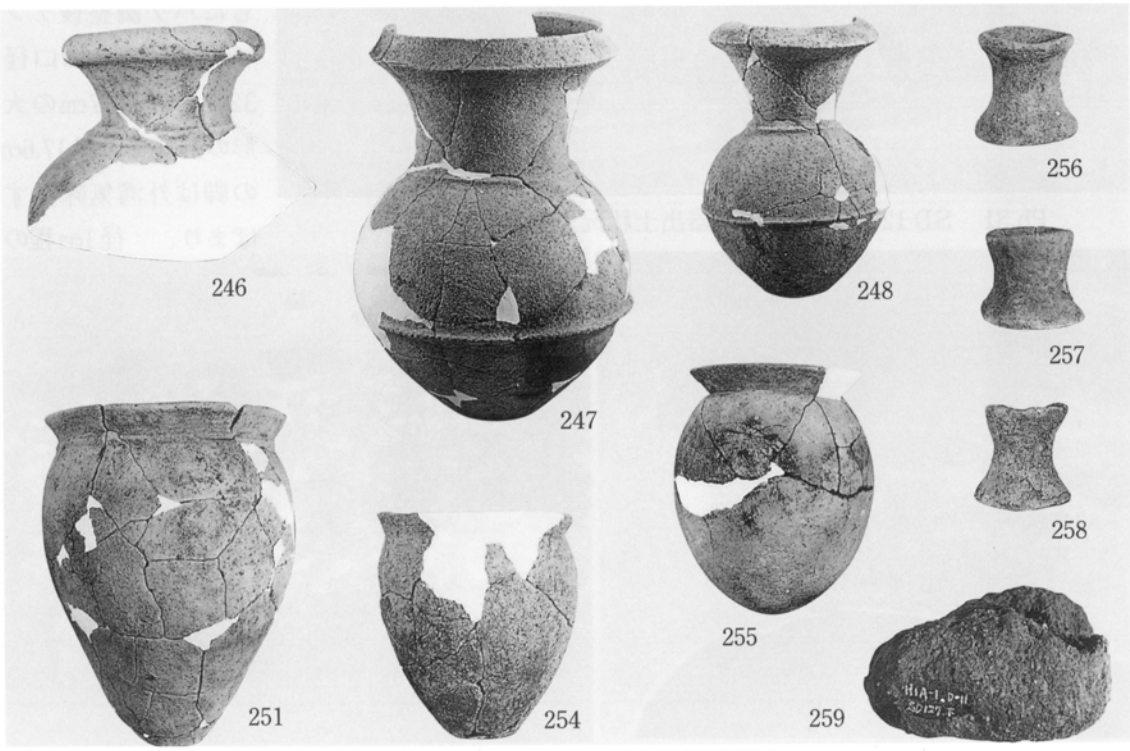
Ph.32　SD 127　5群土器出土状況（南から）

Ph.33　SD 127　5群土器出土状況（西から）

円形の飾穴を3ヶ所穿ける。坏部は全体の2/3程でゆるく屈折し、口縁は内湾して外方に開き端部は薄く仕上げる。調整は不明。244は西新式の大甕で、口径49.6器高70㎝を測る。底部は丸底と思われ、最大径は上位にあって径55㎝を測る。倒卵形の胴部で下位に台形の突帯を1条貼付しナナメ刻目を施す。頸部には低い三角突帯を1条施し、口縁は「く」字にゆるく内湾しながら外反する。口唇端面は凹線状に仕上げ下端が張り出す。245は畿内系の甕で、口径15㎝を測る。胴最大径は上位と思われ、径



Ph.34　SD 127　5群上層出土土器



Ph35　SD 127　5群下層出土土器

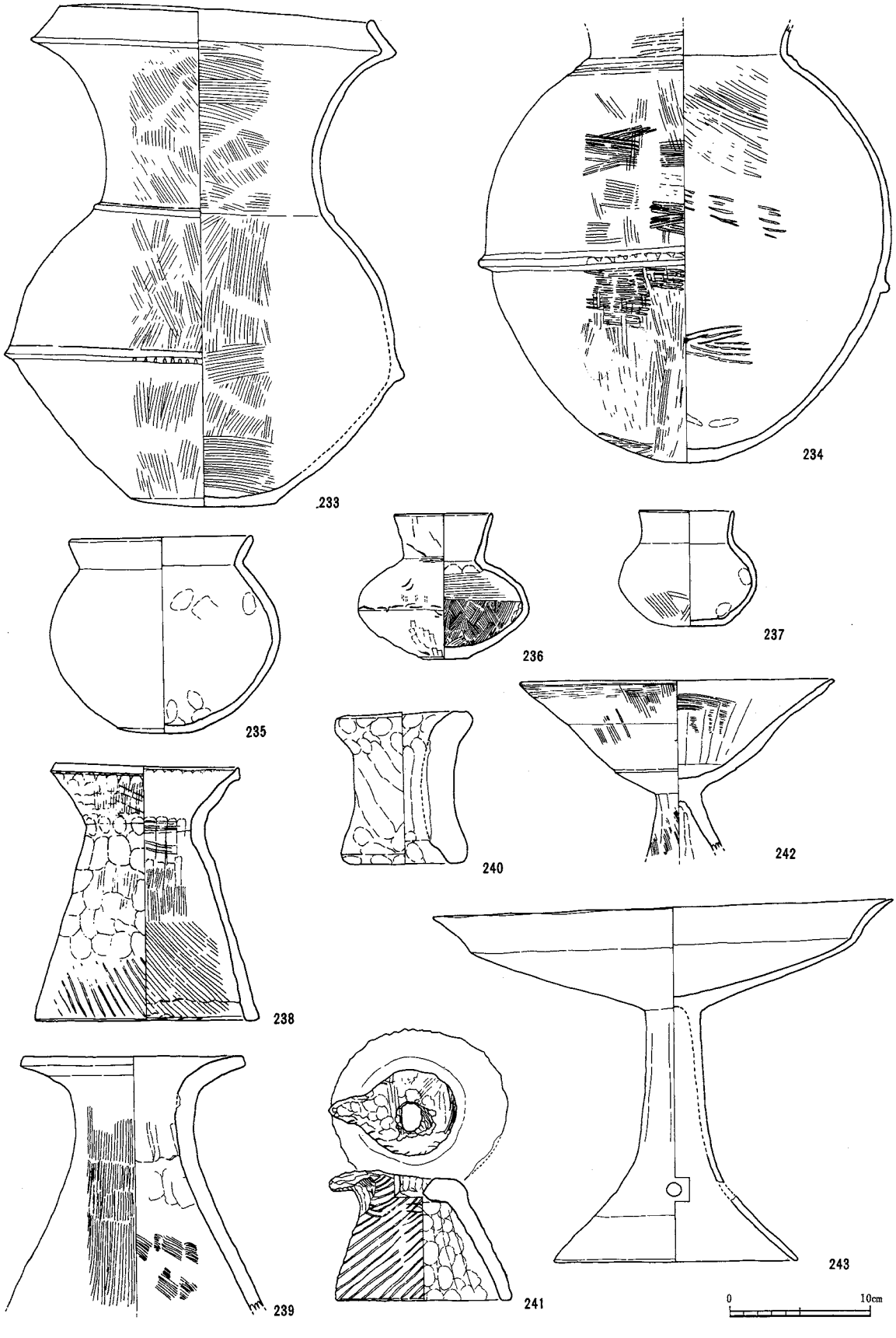


Fig. 34 SD 127 5群上層出土土器実測図.1（1/4）

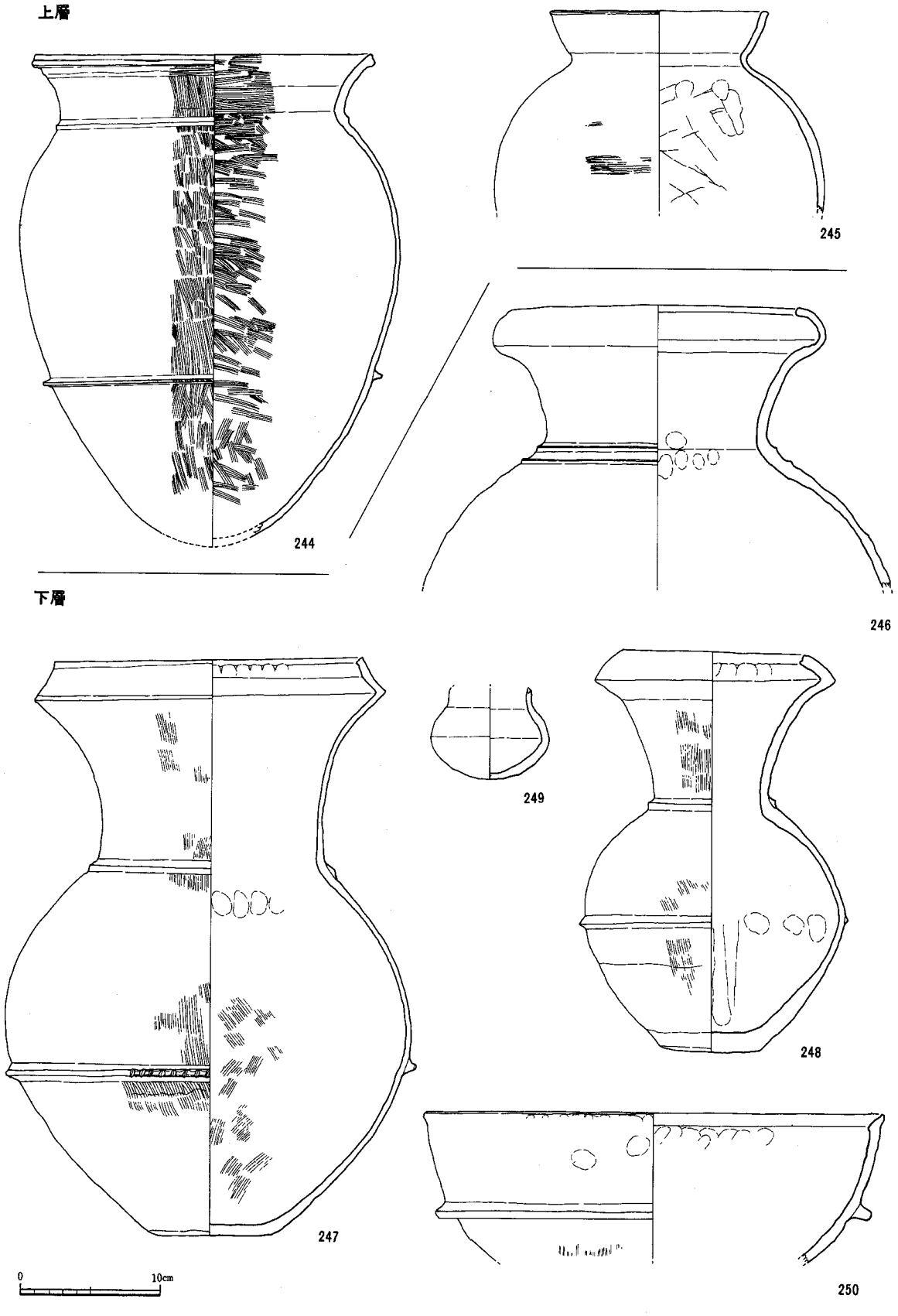


Fig. 35 SD 127 5群出土土器実測図（1／4）

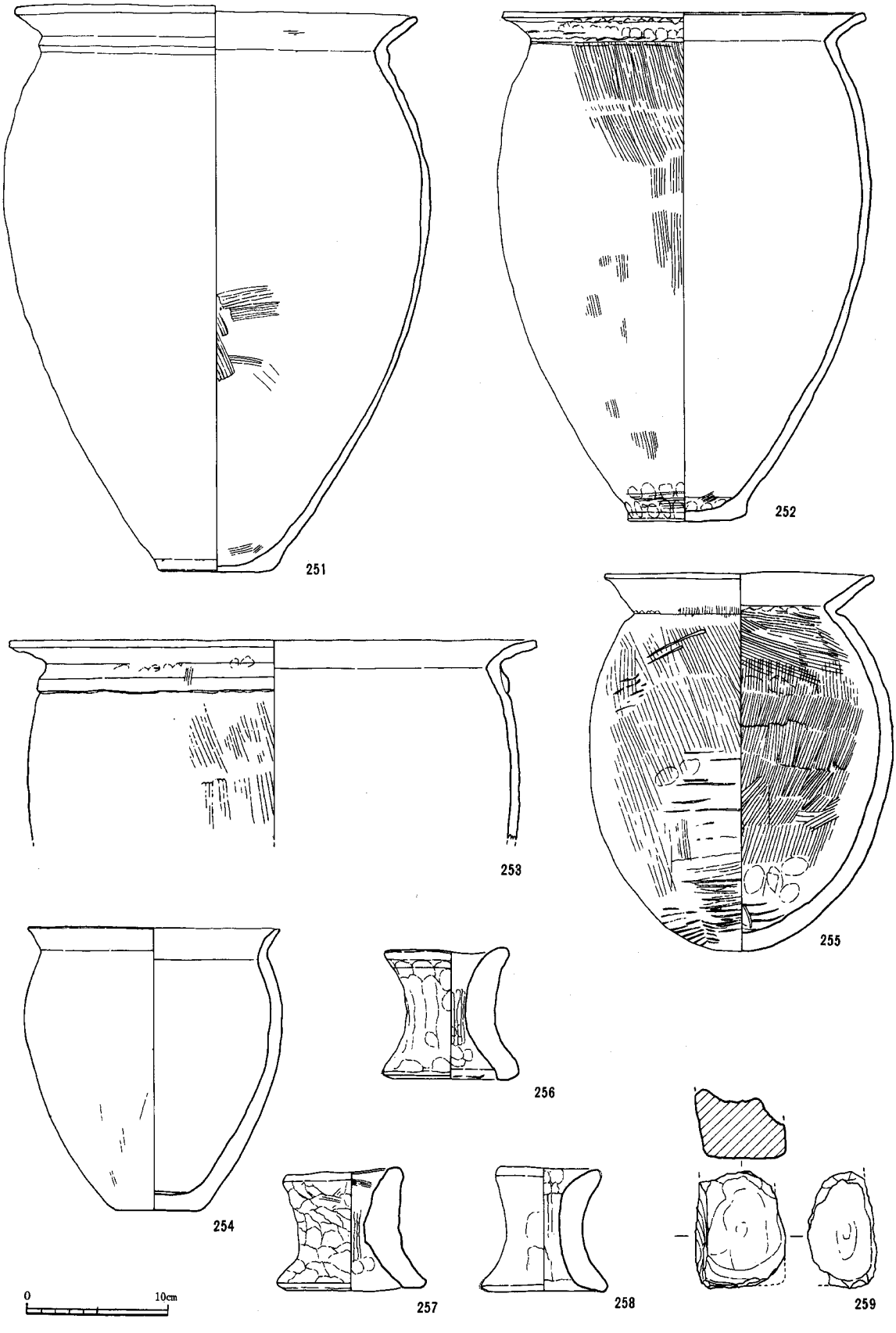
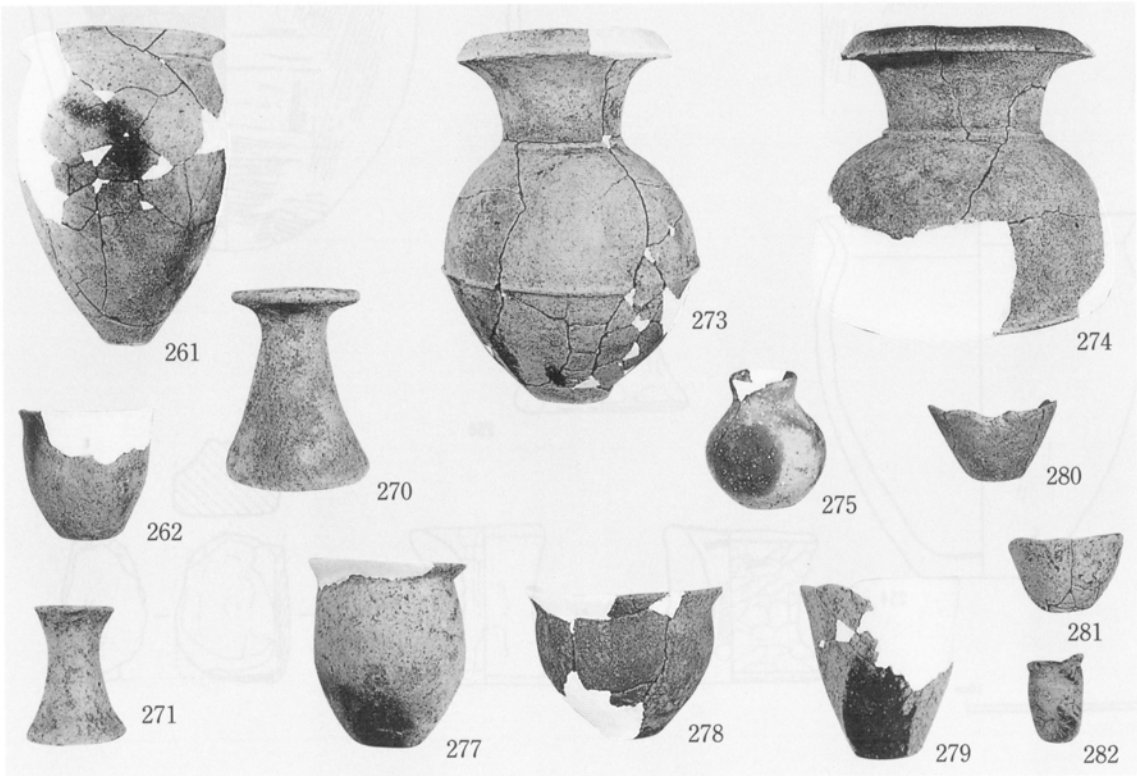


Fig. 36 SD 127 5群下層出土土器実測図.2（1／4）

23.7㎝を測る。口縁は「く」字にゆるく屈曲して外湾気味に外方に開く。外面はヨコハケ後ヨコナデ内面は頸部の屈曲1㎝程下からケズリを施す。246～259は下層出土。246～248は壷で、246は袋状口縁で口径20.4㎝。頸部は短く袋部の屈曲は高さ4㎝程と短い。頸部に低い三角突帯を2条施す。調整は不明。247は口縁が逆「く」字に屈折する二重口縁壷で、口径22.2器高41.7㎝を測る。口頸部が長く、外底は径8.8㎝の平底で脇は2.5㎝程上位で若干くびれる。胴部は最大径が中位にある。下位に台形突帯を1条貼付し刻目を施す。口縁は屈折した上部がゆるく内湾して内傾し端部外面が短く直立する。248も同様に口頸部が長い二重口縁壷で、口径13.3器高28.7㎝を測る。外底は径7.2㎝の広いレンズ底で、脇は1㎝程上位でゆるくくびれる。胴の最大径が中位にある球形で三角突帯を1条施す。口縁は屈折した上部がゆるく外湾して強く内傾する。249は直口の小形壷で胴径8.5㎝を測る。底部は径2㎝程の平底で丸底に近い。250は大形の直口の浅鉢で口径30.3㎝。丸底と思われ、下位に高い台形突帯を1条施す。口縁直下が若干くびれ内面は斜めに面取りされ稜を成す。調整は不明瞭。251～255は甕で、251は口径28.3器高39.5㎝を測る「く」字口縁の甕。外底は径8.1㎝のレンズ底に近い平底で脇は1～2㎝上位でゆるくくびれる。胴の最大径は上位にある。252も同様で、口径25.6器高36㎝。外底はレンズ底に近い平底で脇がくびれ胴の中位やや上に最大径がある。253は大形の「く」字口縁甕で口径29.8㎝。頸部に幅広の低い三角突帯を1条施す。254は口径17.8器高19.9㎝の小形で、外底は平底。くびれはなく、胴最大径は上位にある。255は丸底の「く」字口縁甕で口径19器高26.5㎝。胴最大径は中位にあり口縁は直線的に外反する。下位はタタキが残る。256～258は筒形の支脚でそれぞれ口径器高8.6×9.2・8.3×8.7・7.5×8.9㎝を測る。器壁が厚く内外に指頭圧痕が多く残る。259は方柱状の支脚で一辺が幅6㎝を測る。

第6群出土土器（Fig.37・38　Ph.36）　260～272は上層出土。260は長胴の壷の胴部で残存高45最大径は中位のやや上にあり径33㎝。外底は径10㎝のレンズ底で脇は若干くびれる。調整不明。261～263は甕で、261は「く」字口縁で口径33.2器高52㎝を測る長胴の甕。外底は径9㎝の平底で脇はゆるくくびれる。262は口径12.1器高12.9㎝の小形の甕。底部は径5.3㎝の広い平底で脇のくびれはほと



Ph.36　SD127　6群出土土器

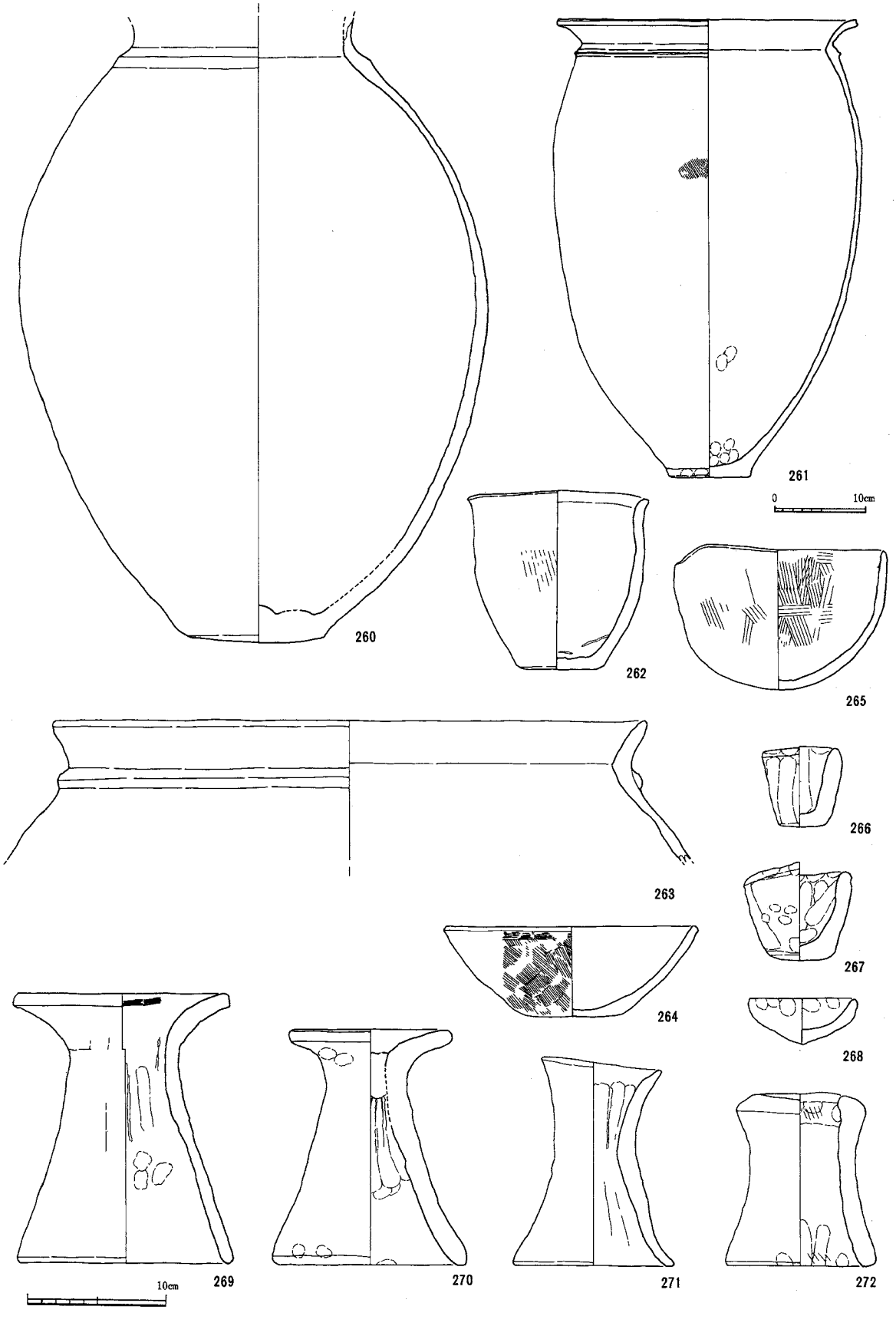


Fig. 37 SD 127 6群上層出土土器実測図（1／4・1/6）

んどない。口縁はゆるく如意状に外反する。263は大形の「く」字口縁甕で胴の張りが強く口縁は短い。口径42.5cm。頸部に低い台形突帯を施す。264は直口の浅鉢で口径18器高6.4cm。外底は径7.4cmのゆるいレンズ底で脇は1.5cm程上位でゆるく内湾する。内面はヨコナデか。265は半球形の鉢で口径15器高10.4cm。外底は丸底。口縁は垂直に立ち丸く収める。266～268はミニチュアの鉢で、266は口径5.1器高6.7cm。手捏ねで器壁が厚い。外底はゆるいレンズ底。267は口径6.9器高7.2cm。同じく手捏ねで器壁が厚い。外底もゆるいレンズ底。268は口径7.8器高3.3cmの浅鉢で器壁は薄め。269～271は器台で、269は口径15.6器高19.4cm。上位で強くくびれる。調整は不明瞭。270は口径10.2器高17cmを測る。上位で強くくびれ、器壁が1.8cmと厚い。調整は不明瞭。271は口径8.7器高

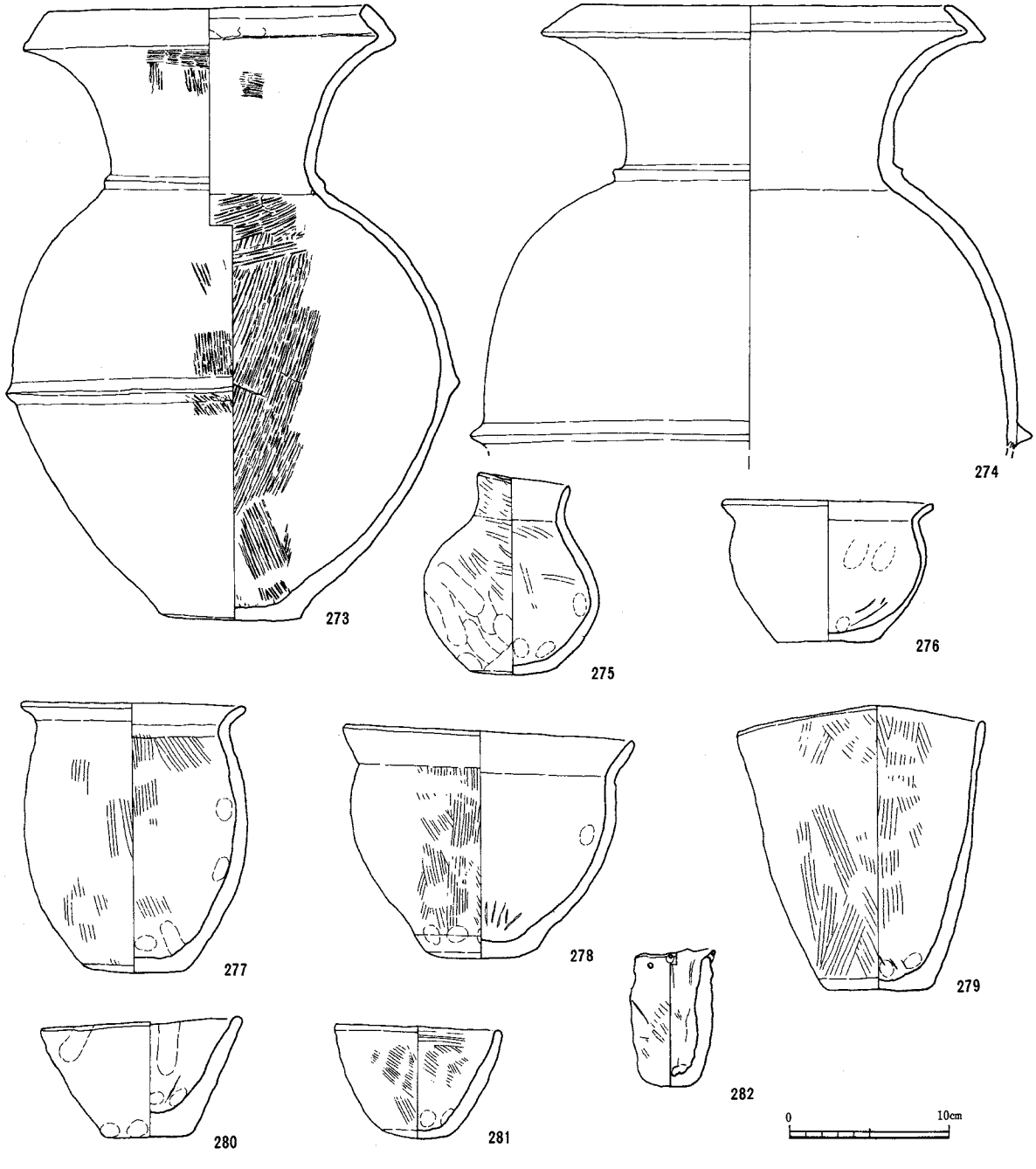


Fig. 38 SD 127　6群下層出土土器実測図（1/4）

15cm。中位のやや上でくびれる。272は筒形の支脚で口径6.7器高12.5cmを測る。上位でゆるくくびれ口唇が18mmと肥厚する。調整は不明。273～282は下層出土。273～275は壷で、273は口縁が逆「く」字の二重口縁で頸部は短め。口径20器高39cmを測る。外底は平底に近いレンズ底で径9cm。脇はゆるくくびれる。胴の最大径が中位にある。口縁の屈折から上はゆるく外湾して内傾する。274も同様で口径23胴径35.6cmを測る。口縁は屈折から上はほぼ直線的により強く内傾する。275は直口の小壷で口径5.3器高12.7cm。外底は径5.5cmのレンズ底で、胴は径11cmの球形。276はゆるい「く」字口縁の鉢で口径13器高9.1cm。外底は6cmの平底で脇のくびれは殆どない。調整不明。277は口径13.7器高17.3cm。胴は中位で張り、外底は径6.7cmのレンズ底で脇のくびれはない。278も「く」字口縁の鉢で口径18.2器高14.7cm。外底は径7.2cmのレンズ底で脇は2cm程上位でゆるくくびれる。279は直口の深鉢で口径15.6器高18cm。7.1cmの平底で脇は殆どくびれず、胴上位が若干内湾する。280・281は小鉢でそれぞれ口径器高12.2×7.7cm・10.2×7.1cmを測る。280は平底で、281はレンズ底。282は口径5器高8.6cmの小形品で外底はレンズ底。口縁に径5mm程の小孔があり蛸壷に似る。

第7群出土土器（Fig.39　Ph.37）　283は径17.7cmの短頸の袋状口縁壷。外面がゆるい稜を成す。284は小形の逆「く」字二重口縁の壷で口径12.8器高24.2cm。外底は径7.1cmのゆるいレンズ底。口縁の屈折上部は強く外湾し内傾する。285は「く」字口縁の甕で口径36.5cm。調整不明。286

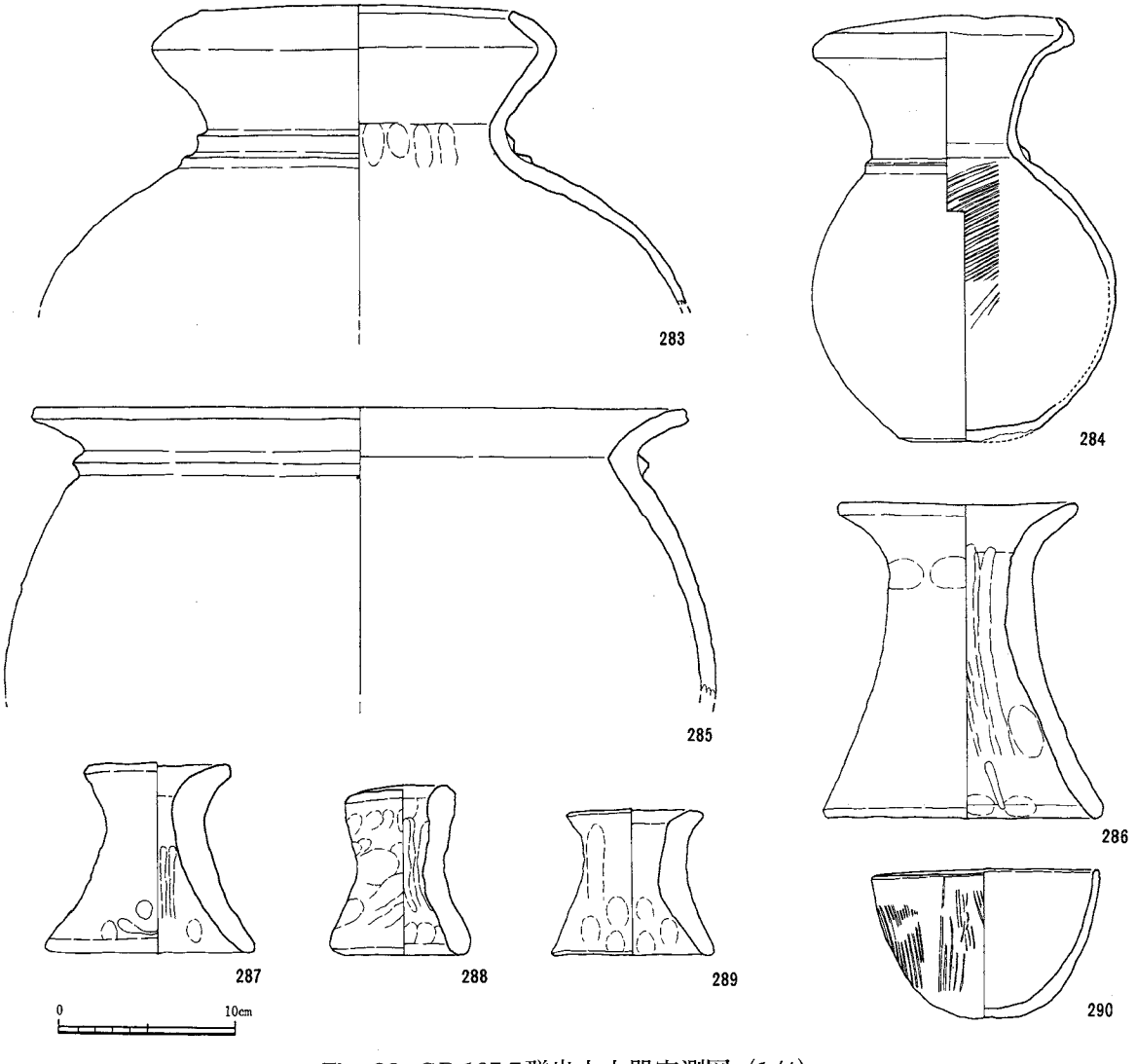


Fig. 39　SD 127 7群出土土器実測図（1/4）

は器台で口径13.5器高17.8cm。上位でくびれ調整不明。287～289は小形の支脚で、287は口径4.9器高10.9cmで上位でくびれ器壁が2cmと厚い。288は口径4.3器高9.6で上端が肥厚。289は口径4器高8.4cmで上位でくびれる。290は半球形の鉢で口径13器高8.4cm。内面の調整は不明。

第8群出土土器（Fig.40　Ph.37）　291は瀬戸内系の二重口縁壺で、口径25.4cmを測る。屈折部の外面に1.5cm程の高い突帯を貼付しナナメの刻目を施す。上部は直線的に立ち上がって若干外傾し端

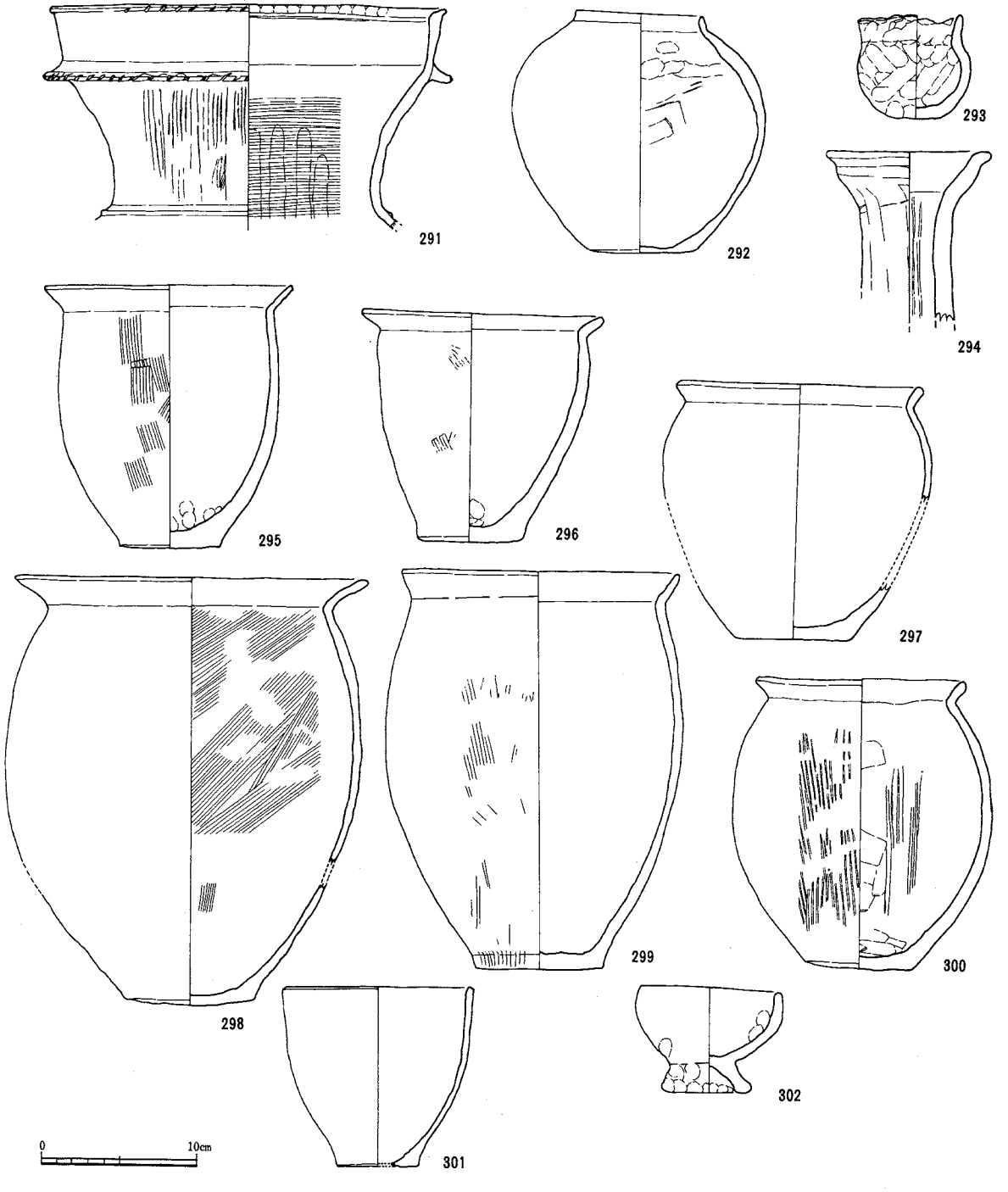
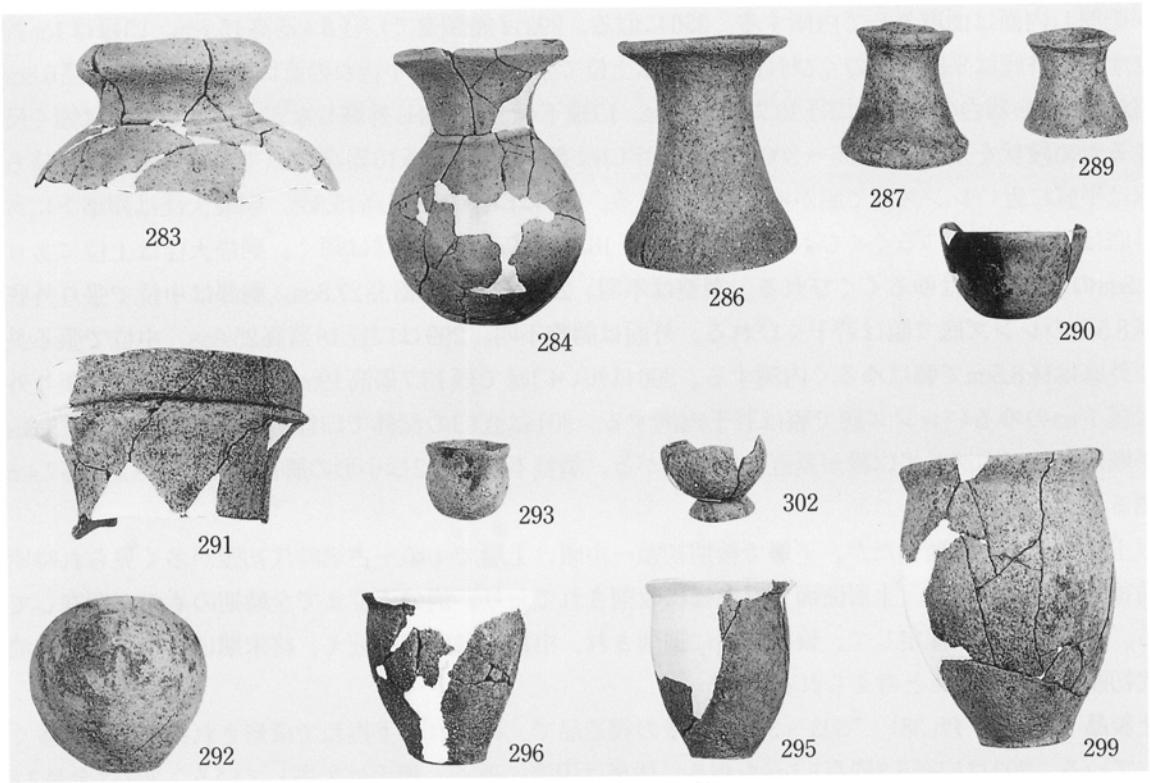


Fig. 40　SD 127 8群出土土器実測図（1/4）



Ph.37　SD 127 7群・8群出土土器

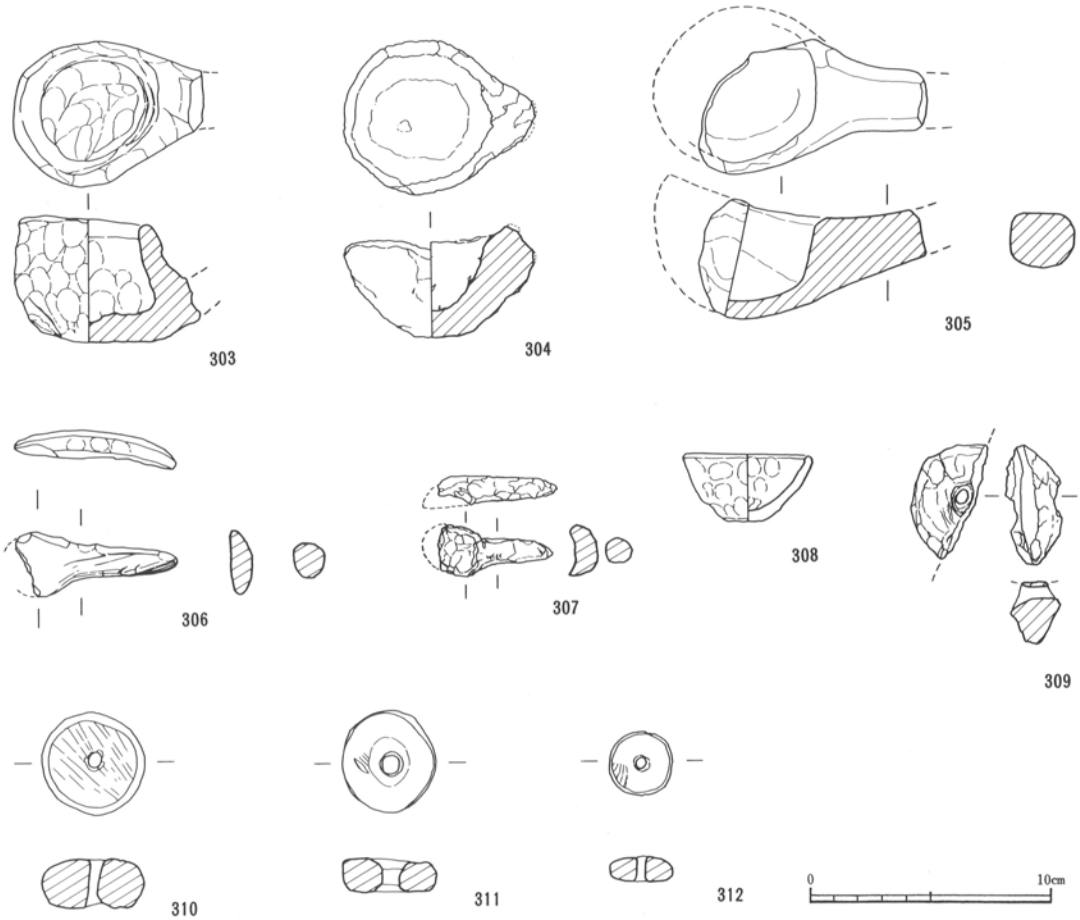


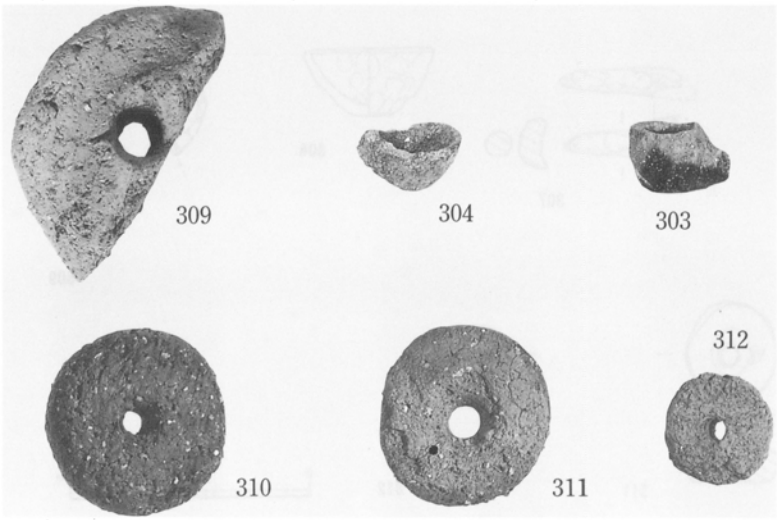
Fig. 41　SD 127 出土土製品実測図（1/3）

部が肥厚し内面は面取りして内傾する。250に似る。292は無頸壷で口径8.4器高15.7㎝。口縁は1㎝程直立する。外底は平底で脇のくびれは無く胴は上位で張る。293は手捏ねの直口壷で口径5.8器高6.8㎝。294は大形筒形器台の受部で口径10.7脚径5.6㎝。口縁下4㎝で屈曲し外湾しながら外反し端部は短く反転するため段状を呈する。295～300は「く」字口縁甕。295は口径16器高17㎝で中位に最大径を持ち外底は平底に近いレンズ底で脇がゆるくくびれる。296は口径15.8器高15.3㎝。胴最大径は頸部下にあり外底は平底で脇はゆるくくびれる。297は口径16器高17㎝程で口縁は短く、胴最大径は上位にあり径7.5㎝の平底の脇はゆるくくびれる。調整は不明。298は口径23器高27.8㎝。胴部は中位で張り外底は径8.5㎝のレンズ底で脇は若干くびれる。外面は調整不明。299は口径18器高25.8㎝。中位で張る長胴で外底は径8.5㎝で脇はゆるく内湾する。300は短い口縁で径13.7器高19㎝。胴は中位で強く張り外底は径 7 ㎝のゆるいレンズ底で脇は若干内湾する。301は直口の深鉢で口径12.4器高11.7㎝。径5.3㎝の平底から脇が内湾して口縁が垂直に立ち上がる。調整不明。302は小形の脚付鉢で口径9.2器高7.4㎝を測る。

以上出土土器を概観したが、下層で後期初頭～中頃、上層で中頃～古墳時代初頭が多く見られ時期の前後の傾向はあるが、土層断面で見た様に改削されており、溝の下位まで全時期のものが混在している。遺物の量から推定して、後期前葉に掘削され、中葉に最盛期を迎え、終末期に改削され、古墳時代初頭には埋没したと考えられる。

土製品（Fig.41　Ph.38）　303～307は杓子の模造品で、いずれも手捏ねで成形され指頭圧痕を多く残している。303は口径5.2器高5.1㎝を測る。体部は円筒に近く、把手は欠失している。304は全長7.8幅6.4器高4.6㎝。体部は半球状で外底は2㎝程平坦である。把手は2㎝弱で短い。305は両端が破損するが全長は14㎝程幅は7㎝程と思われる大形のもので、体部は半球状。306は匙状で、先端部を欠くが全長7.5㎝程幅3㎝で体部は皿状を呈する。307はさらに小形の匙状で先端を欠くが全長5.5㎝程幅2㎝を測る。308はミニチュアの鉢で口径4.9器高2.7㎝で小さな平底をもつ。器壁は薄い。309は半島系の双耳壷の耳で、径5㎝程の半円形で中央に径4㎜程の穿孔があり、断面は菱形に近い。310～312は紡錘車で、径4.2厚2㎝と厚く軸穴は径6㎜でやや傾く。311は径4.2厚1.4㎝を測り、軸穴は径16と6㎜の2段の笠状になって両面から穿たれる。312は径2.6厚1㎝で、中央がやや厚くなる。軸穴は径5㎜で若干傾く。

石製品（Fig.42　Ph.39）　313～322は石包丁で、313は両端部が幅1.5～2㎝の隅丸長方形の体部に外湾刃が付く形態で長14幅5.5㎝厚7㎜を測る。他の石包丁も基本的な形態は同様で、外湾刃の幅の違いだけである。石材は角閃石の結晶を多く含む特徴的な淡灰色の凝灰質砂岩である。紐穴間は1.6㎝を測る。314は青灰色の凝灰質安山岩ホルンフェルス製で幅4.4厚0.7紐穴間2.1㎝を測る。315は同種の石材で幅3.9厚0.6㎝。316は赤紫色凝灰質砂岩で幅4.4厚0.5㎝を測る。317は凝灰質安山岩ホルンフェルスで幅3.5厚0.7㎝紐穴間は1.6㎝を測る。318は褐色の凝灰質頁岩で幅3.4厚0.7紐穴間



Ph.38　SD 127出土土製品

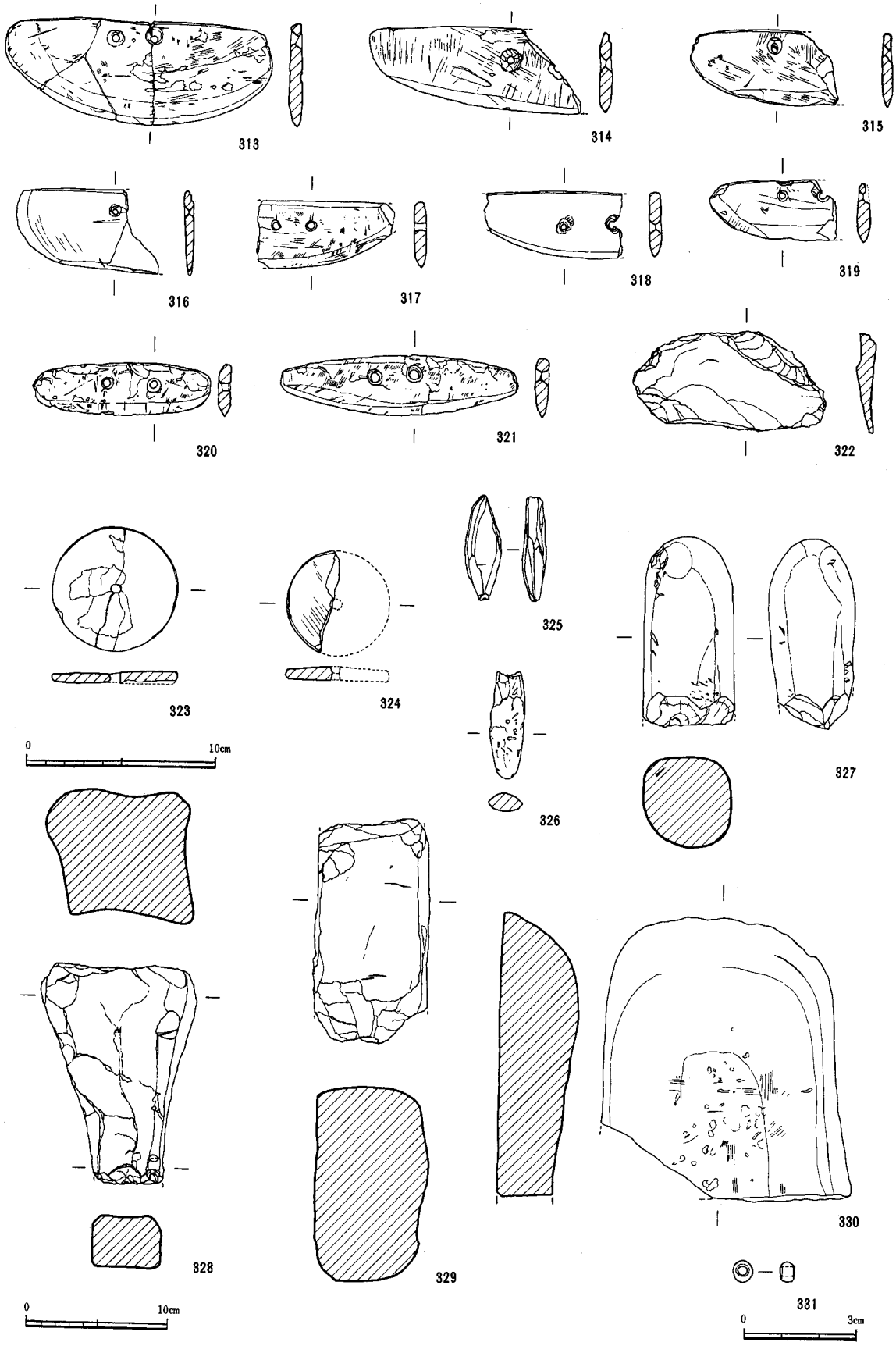
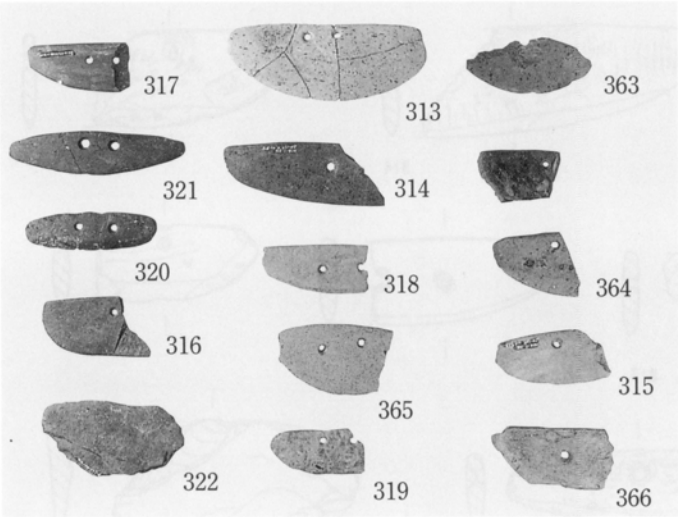


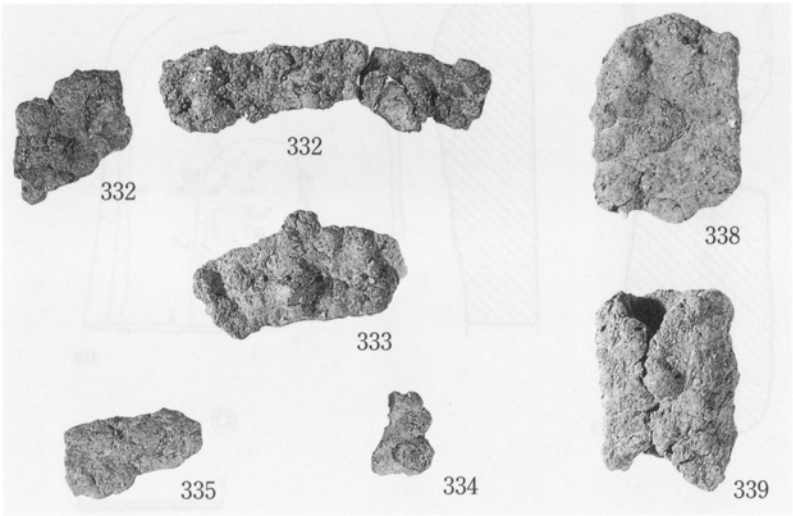
Fig. 42 SD 127 出土石器他実測図（1/3・1/4・2/3）



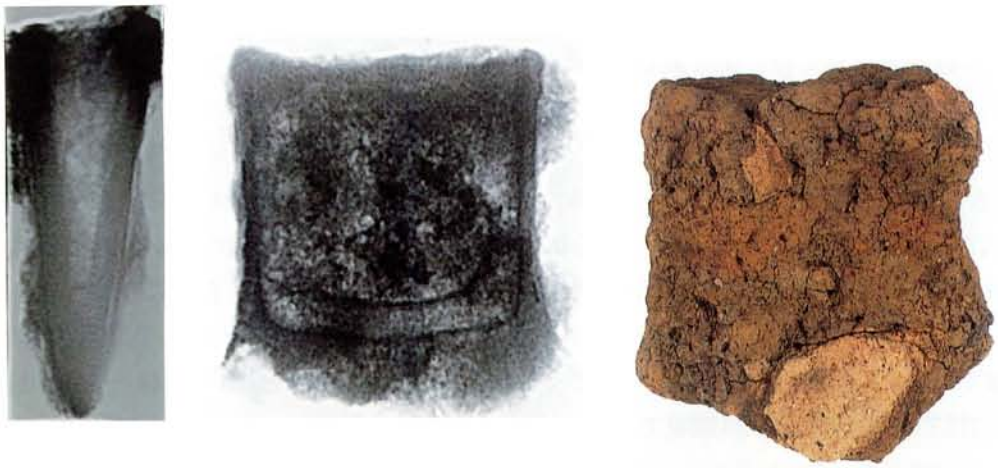
Ph.39　SD 127 出土石器

2.4㎝を測る。319は凝灰質安山岩ホルンフェルス製で幅3.2厚0.7紐穴間1.6㎝を測る。320は赤紫色凝灰質砂岩製で刃背ともにゆるく外湾する。長9.4幅3.6厚0.7紐穴間2.1㎝を測る。321は同種の石材で長12.5幅3.1厚0.7紐穴間1.6㎝を測る。322は赤灰色の凝灰質砂岩の石包丁未製品で、横長剥片の周縁に二次調整剥離を両面から行っている。323・324は緑色片岩製の紡錘車で、323は径6.6厚0.6㎝重量42.9gを測る。両面が剥離しているため調整は不明。軸穴径5㎜。324は径5.5厚0.8㎝で中央部を厚くつくる。軸穴は両面から穿孔し径6㎜を測る。325・326は手持ち砥石で、325は長5.6幅1.8厚1.3㎝の平面柳葉形の多面体となっており縦方向に砥ぐ。黒色泥岩製。326は長5.6幅1.9厚0.5㎝の断面紡錘形の棒状で凝灰質砂岩製。328～330は黄橙色の粗粒砂岩製の砥石。328は正角柱状に整形された砥石の半折品で、現状で長11.5幅6.4～3.7㎝を測る。4面全てを砥面に用い、著しい使用で中央の幅が半減する程使用している。329は長12幅6厚10.5㎝の長方形に敲打で整形されたもので幅の狭い上面のみを砥面に用いている。330は現状で長20幅17厚5.7㎝を測る円礫を使用したもので、上面のみを用い、平滑になっている。331は明青色のガラス小玉で径5厚3.5㎜重量0.11gである。

鉄製品（Fig.43　Ph.40・41）　332～336は鎌で、全て折損し完形品はない。北半部での検出が目立つ。332は先端と基部を欠くが全長30㎝を越える大形品と思われる。幅は先方で3根方で4.7㎝厚5㎜。長5.5～11㎝程の3片に折れ、最低でも5片に折れている。333は端部を1.2㎝程折り曲げた基部で、現状で長11.5幅5㎝厚4㎜と比較的薄い造りである。334は長3.6幅4.4㎝厚3㎜と薄い小片である。335は先端に近い小片で長7.5幅4～2.8㎝厚6㎜を測る。336は長10幅4.2㎝厚5.5㎜で片刃になると思われる。337～339は斧である。337はX線写真より実測図を起こしたもので柄の挿入部に2条の節帯をもつ鋳造鉄斧と思われる。刃は幅10厚2㎝程の左に片寄る外湾刃の両刃。体部は幅8.8厚4㎝で12～17㎜幅の二条の節帯が取り巻く。内法は幅7.3厚1.5深7.7㎝で、刃部近くに中子の傷か、並行する節が見られる。全長10.5㎝。338はこれの側面の破片を再加工した扁平片刃斧で、長5.9基部幅4.6刃部幅5.1㎝厚9～10㎜で表面両側に幅7高4㎜程表裏面の体部が面取りされて残っている。339は袋状鉄斧の袋部で長6.5幅4.8厚3㎝を測る。内法は幅3厚1.8㎝の隅丸方形を呈する。340は2.3㎜角程の箸状の製品で先端が鋭がる。長8.8㎝。341は鉋の体部と思われ長4.1幅1.2



Ph.40　S D 127 出土鉄器



Ph.41 SD 127 出土鉄斧337透過写真

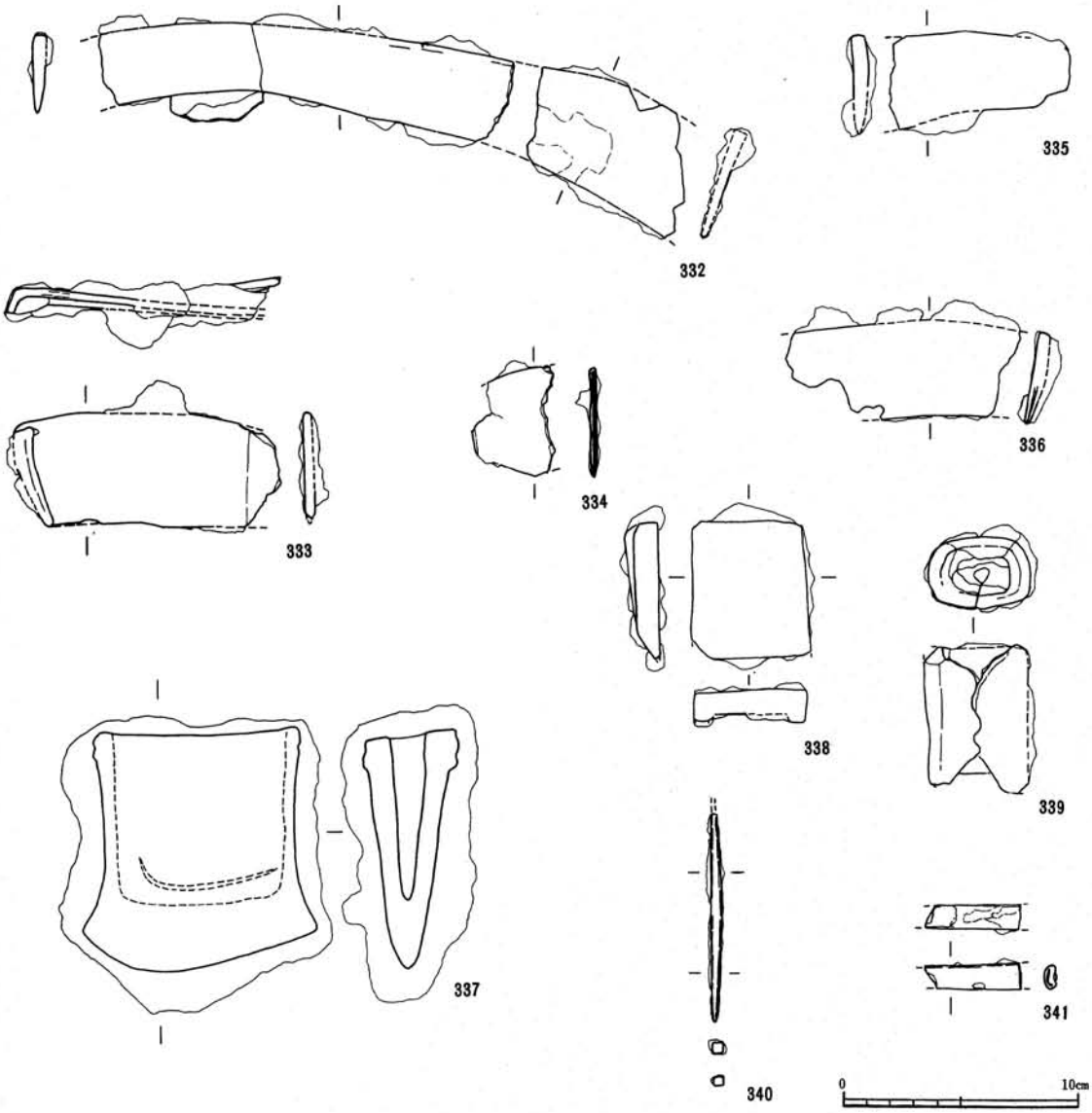


Fig. 43 SD 127 出土鉄器実測図（1/3）

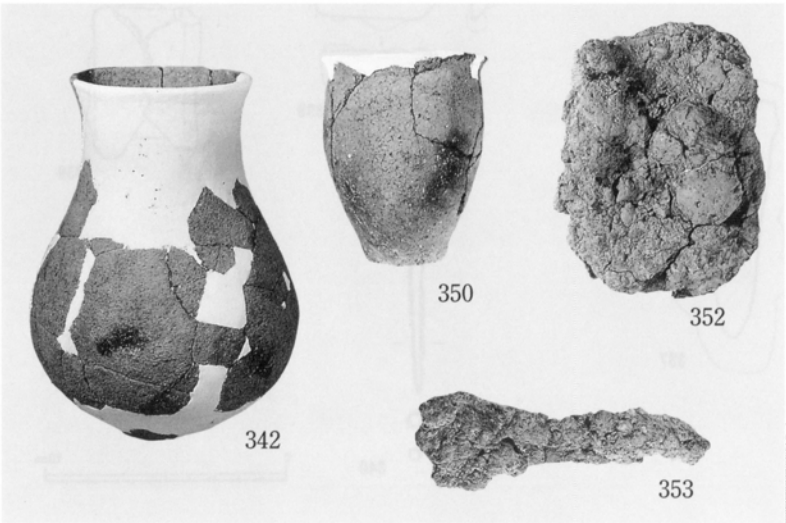
cm厚6mmで楕円形の断面の裏面が窪む。

以上、多くの鉄器を検出した。全て鉄器で銅製鋤先などの銅製品は一点も検出されず、鉄の時代となっている。内容は農具と木工具で武器の検出はほとんどない。

他の遺構への混入遺物（Fig.44　Ph.42）　主に中世の溝と地下式土壙の天井の落盤によって混入し、Fig.25でもこの部分の出土量が減少している。342・343はSX226出土。342は口径の広い長頸壷で口径17器高34cm。胴は下位で張る球形で重心は下位にある。外底は径8cmのレンズ底で脇は若干くびれる。胴から口縁へはなだらかに移行し、端部が2cm程反転して内湾し、内面にゆるい稜をつくる。剥落のため調整は明瞭でないがタテハケ・ナデ後ケンマを施したと思われる。半島系。343は小形の筒形支脚で口径7.5器高10.3cmで中央上位でくびれる。器壁は1.8cmと厚い。344～351はSX136出土。344は口径7.4器高11.5cmの無頸壷で、胴が中位で強く張る算盤形を呈し外底は径3.8cmの小さなレンズ底。瀬戸内系か。345は器台で、口径10.4器高15.3cm。脚は内湾気味に延び上位でくびれる。346は筒形支脚で口径9.4器高15.4cmを測る。中央上でくびれ、器壁は最大2.5cmと厚い。指頭圧後ナデを施す。347は径5.8cmの小さな脚付の鉢。脚は強くくびれて尖底気味の胴に連なる。形態は製塩土器に似るがタタキは認められない。348は口径16.4器高7.4cmの浅鉢で、外底は径9cmの広い平底。脇はくびれずゆるく外湾して開き中位上でゆるい稜を成して口縁が反転しゆるく内湾する。器壁が比較的厚い。外面ヨコナデ内面タテ板ナデ後ヨコナデを施す。半島系。349は直口の深鉢で口径13.5器高13.3cm。外底はゆるいレンズ底で径6.7cm。外面は粗いタテハケ後ゆるいケンマ、内面ケンマを施す。350は「く」字口縁の甕で口径15.2器高20.4cmの長胴。上位で張る。外底はゆるいレンズ底で脇は3cm程上位でゆるく内湾する。351は短頸の壷で、口径10.8器高15.2cm。外底が異様に広く径9.7cmのレンズ底を呈する。脇のくびれはなく胴が中位でやや強く張る。調整は不明。352は板状片刃鉄斧で長8幅5.2厚1.2cm重量219.7gを測る。C～D7グリッドの検出面出土。353は圭頭形の鉄鏃で長11幅3.6cm厚7mmを測る片鎬造りと思われる。F14グリッド検出面出土。354は石包丁でSX136出土。凝灰質安山岩ホルンフェルス製で現状で長6.5幅3.9紐穴間1.9cm厚7mmを測る。

3）．その他の出土遺物

Fig45・46は後世の遺構に混入したその他の弥生時代遺物である。355は前期後半の壷の肩部で沈線上に貝殻文状のヘラ描の羽状文を施す。356は如意状に屈曲した口唇の上端が跳ね上げ状に肥厚する小形の甕で内面はヨコケンマ後上半に黒色顔料を塗布する。縄文晩期前半の精製浅鉢の可能性もある。357は前期末の三角口縁の甕で外面と口縁下の突帯に同時に刻目を施す。358は小形の器台の受部で径7.8cm。294に似る。全面に丹塗が施されていた痕跡がある。359は伯玄式の甕棺の口縁部で径59.6cmを測る。ゆるく外反した口縁の内外両面が肥厚して段を成す。360は土製の紡錘車で径6.9



Ph.42　他へのＳＤ127混入遺物

厚1.9cmで断面は紡錘形を呈する。軸穴は径8㎜。361・362は土製の投弾。361は長3.2径2.1cm重量11g。362は長3.6径2㎝重量10.8gを測る。363～367は石包丁。363は凝灰質安山岩ホルンフェルス製の半月刃の石包丁で幅4.8厚0.7cmを測る。364も同石材の半月刃の石包丁で幅4.6厚8㎜。365は凝灰質砂岩製で背部もゆるく外湾する。幅5厚0.8紐穴間2.5cmを測る。366は凝灰質頁岩製の半月刃形で長幅ともに欠落する。厚0.8紐穴間3cmを測る。367は後期の隅丸長方形の頁岩製で長11幅3厚0.8cmと厚く紐穴間1.2cmを測る。368は石鎌の破片で幅6.7厚6㎜と薄手で黒色の粘板岩製。刃は両刃である。369～374は石剣。369は切先で長6.9幅3.2厚0.9cmの両鎬造。片岩製。370は幅4.2厚0.5cmの薄手で平造。371も平造の大形の石剣の茎部で現状で長11.2幅7.5厚0.6cmの薄手。中央に径6㎜の目釘穴を穿ける。粘板岩製。372は折損した石剣の再利用品で、現状で長7.1

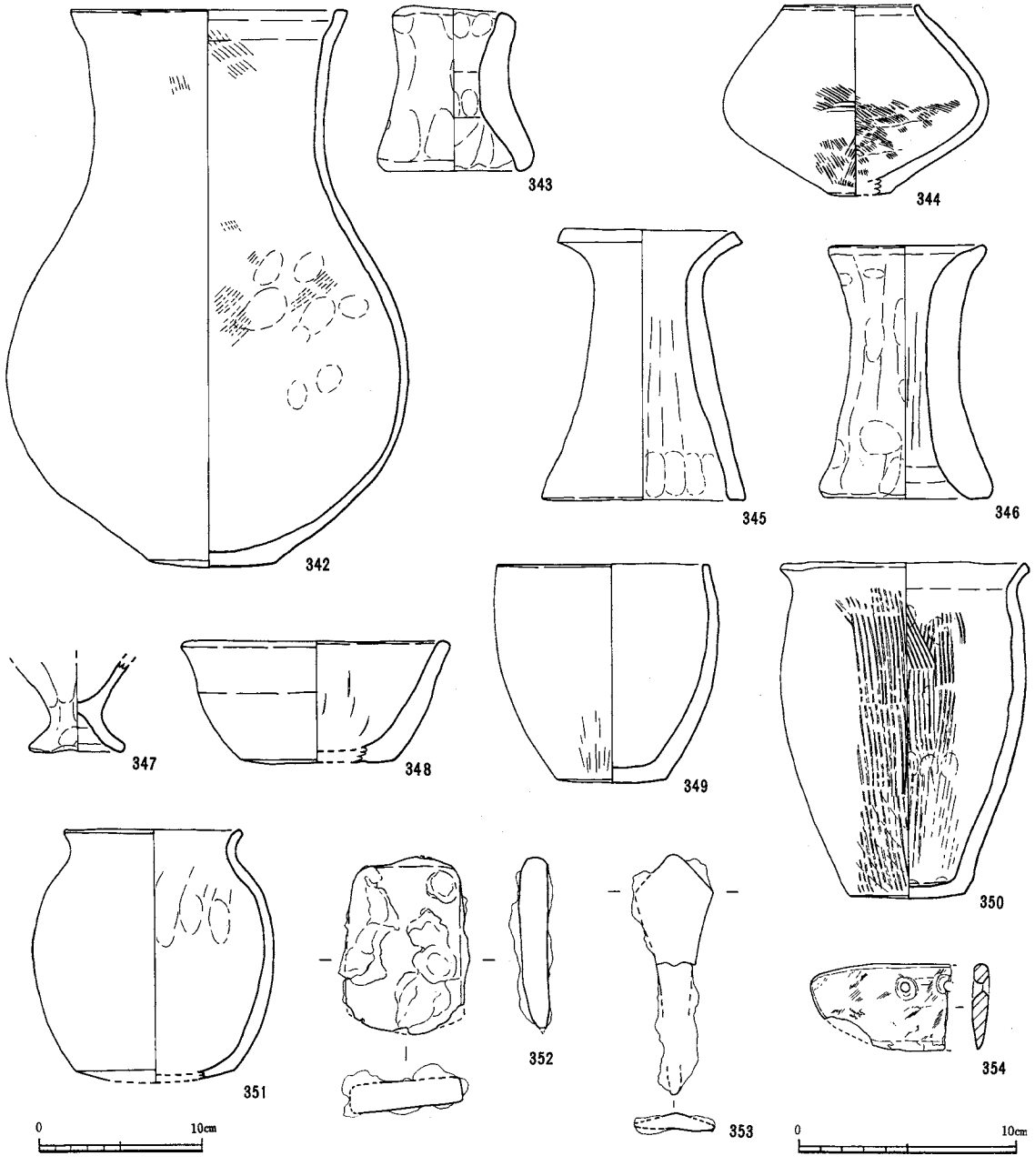


Fig. 44 他遺構へのＳＤ127混入出土遺物実測図（1/4・1/3）

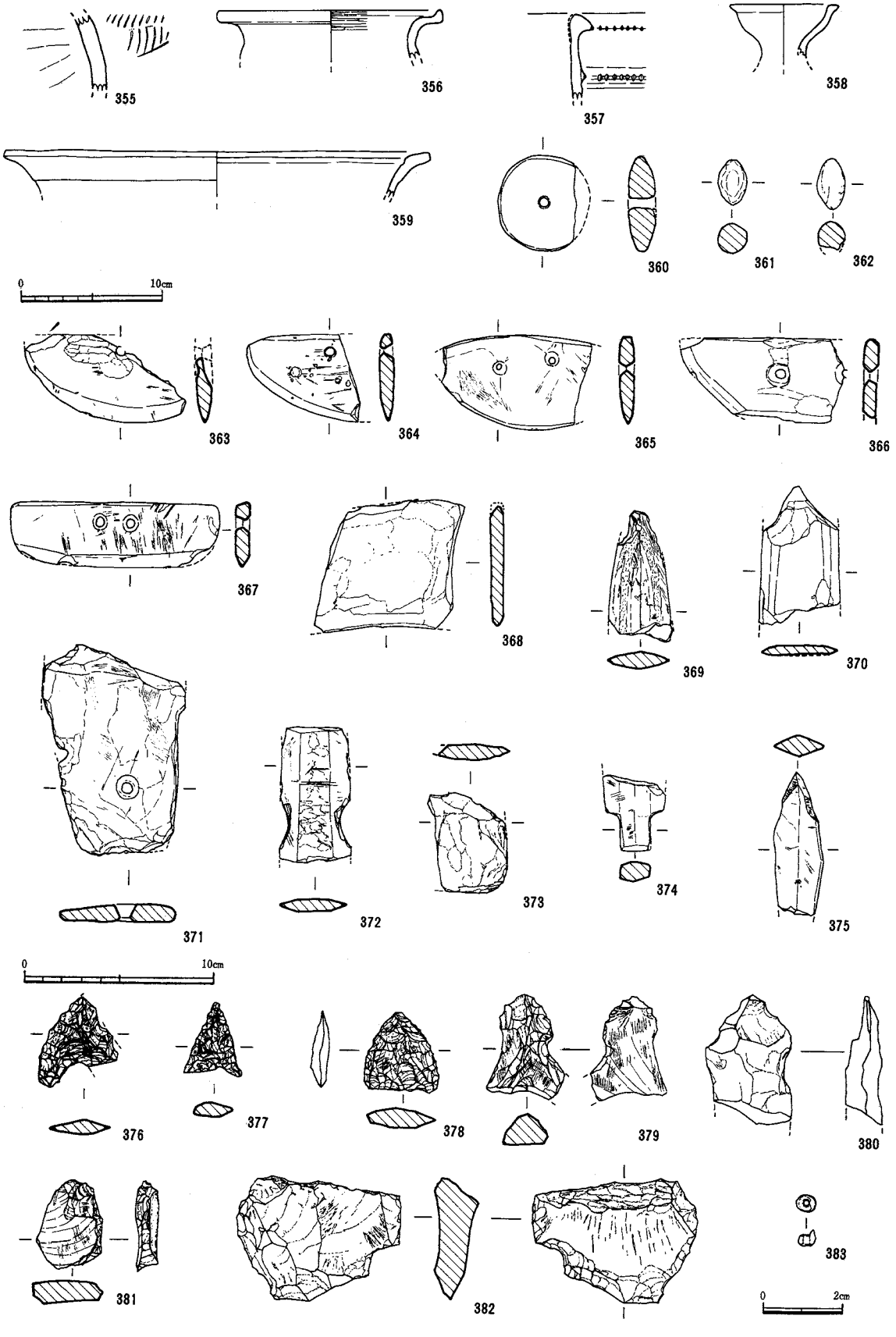


Fig. 45 その他の弥生時代出土遺物実測図.1（1/4・1/3・2/3）

幅3.8厚0.7cmで基部側の折断部から2cm程上位の両側に抉りを入れ刃潰しを行っている。平造の粘板岩製。373は同石材の剣の茎部分で、長5.3幅4厚0.9cmで、幅4mm程の浅い斜関が残っている。374は茎部で茎まで研磨で鎬が入り断面6角形を呈する。刃幅3.1・茎の長2幅1.6厚1.1cmを測る。片岩製の両鎬造で369と同個体の可能性がある。375は柳葉形磨製石鏃で現況で3.8幅1.2厚0.6cmを測る。両鎬造で欠損した先端部を粗く砥ぎ再生している。頁岩製。376～379は黒耀石製の打製石鏃。376は長2.4幅2cm厚4mmの鍬形鏃で逆刺の一方を欠く。377は凹基の三角形鏃で長2幅1.2cm厚3.5mm重量0.56gを測る。378は平基の三角形鏃で長2.1幅2cm厚4mmを測る。379は石核の打面調整剥片を用いた石鏃未製品で長2.7幅2.1cm厚8mmと分厚い。380は硅岩を用いた削器で横長剥片の右側縁に両面から二次調整を行う。長3.4幅2.3厚1cmを測る。381は掻器で黒耀石の自然面を残した横長剥片の主

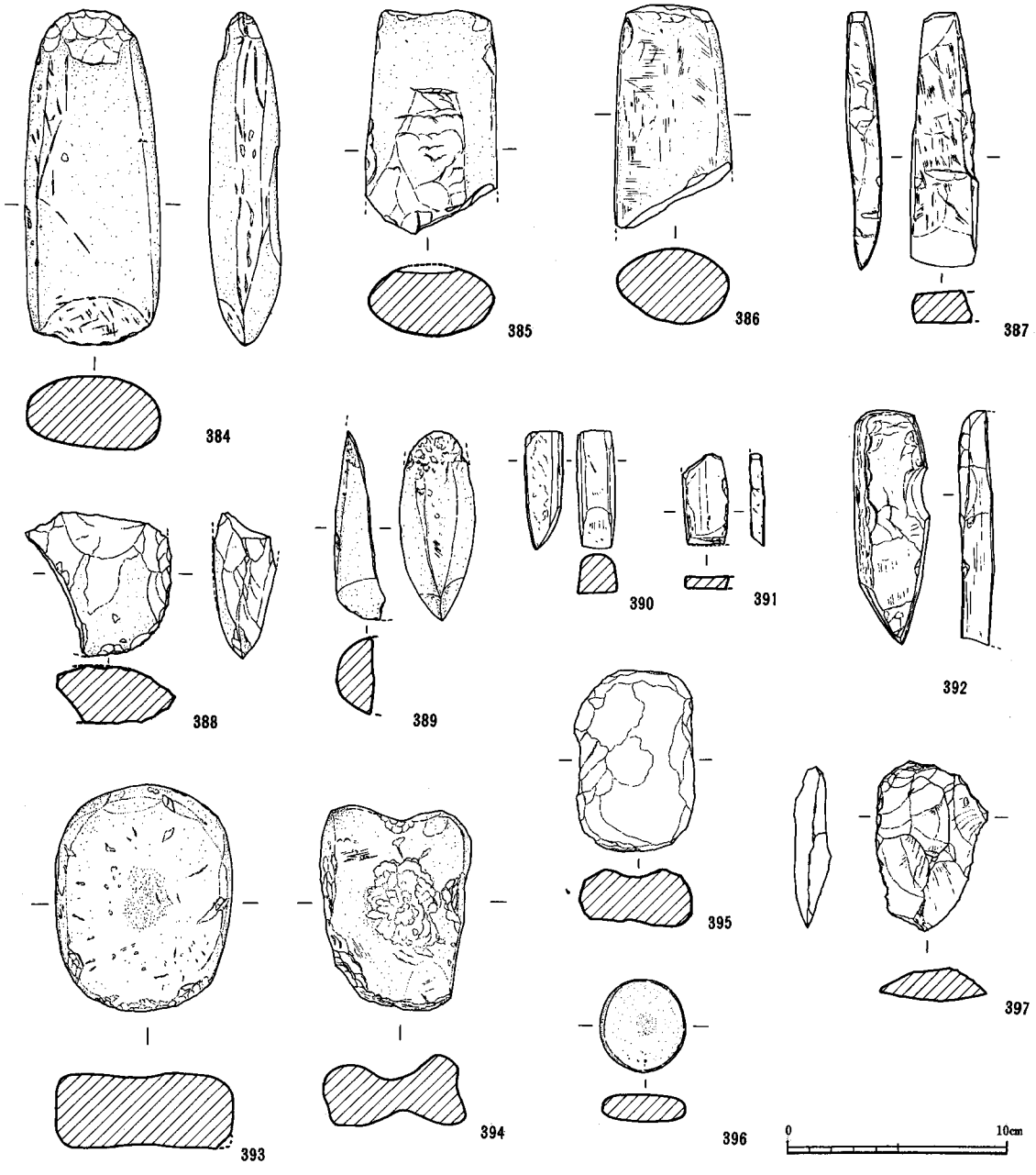
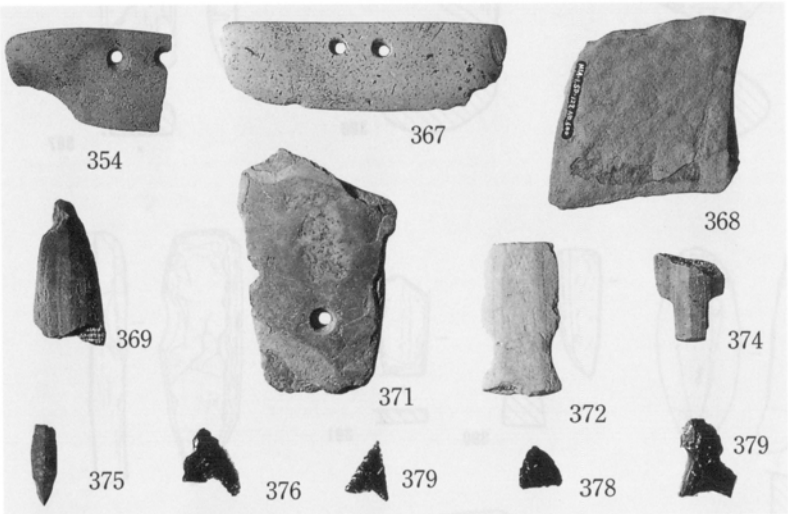
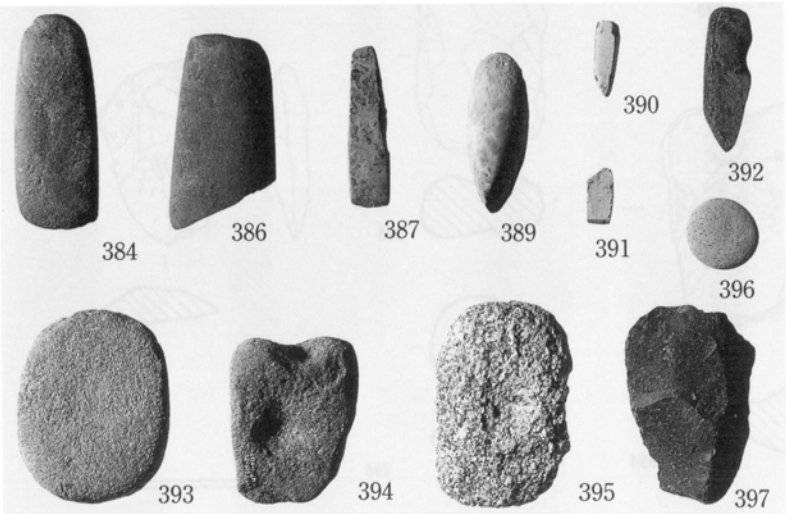


Fig. 46 その他の弥生時代出土遺物実測図.2（1/3）

剥離面右側縁に自然面側から二次剥離を行って刃部を形成する。長2.4幅1.7厚0.6㎝。382は古銅輝石安山岩製の掻器で、打面に自然面を残す横長剥片の端部に両面から二次剥離を行い刃部を形成する。383は明青色のガラス小玉で径5厚4㎜を測る。端面に巻きの折断痕が残る。384～392は磨製石斧。384は縄文系の蛤刃石斧の完形品で長15刃幅6刃厚3.1㎝と薄い。玄武岩製。385も同様の石斧の頭部片で幅8厚4.1㎝を測る。玄武岩製。386は太形蛤刃石斧の頭部片で幅7厚5.1㎝と厚く、断面は楕円形を呈する。387は凝灰質安山岩ホルンフェルス製の大形の扁平片刃石斧。長11.5厚1.5㎝で縦半分程を欠く。388は片岩製の蛤刃石斧の刃部片の最加工中の剥片で刃部と側面に剥離を施している。389は凝灰質安山岩ホルンフェルス製の蛤刃石斧の縦割れの刃部片で厚3.5㎝を測る。390は同石材製の柱状片刃石斧の完形品で長5.2幅1.8厚1.7㎝。節理面と直交方向に刃部を取っている。391は小形の扁平片刃石斧で、縦割れで一部を欠失する。長4.1厚0.5㎝を測る。頁岩製。392は柱状抉入片刃石斧で凝灰質安山岩ホルンフェルス製。縦割れで大部分を欠失する。長9.4厚3.4㎝を測る。393～395は磨石兼用の叩石。393は隅丸方形の中粒砂岩礫を用いたもので長10.2幅8厚3.3㎝。側面の全周と両平面中央を叩打に用い、両平面の中央がやや窪む。平面は磨にも用いられる。394は方形の中粒砂岩礫を用いたもので各面の中央部を叩きに用い、殊に両平面は著しい使用のため1㎝程も深く窪んでいる。叩打と同様に全面を磨にも用い、平滑になっている。長8.6幅6.8厚3.5㎝を測る。395は花崗岩の方形の礫を用いたもので長10.9幅7.2厚2.6㎝重量465.2gを測る。側面全周と両平面中央を叩打に用い、両平面の中央は5㎜程窪む。磨は両平面でなされる。396は円盤状の磨石で径3.8～4.1幅1.3㎝を測る。玄武岩の円礫を用いており全面が磨かれ、上面中央が細かな叩打で若干窪む。397は玄武岩の打面再生剥片を用いた使用痕を有する横剥ぎの剥片で、端部に細かな使用による剥離が残る。長5.5幅5厚1.7㎝を測る。



Ph.43　その他の弥生石器.1



Ph.44　その他の弥生石器.2

4. 古墳時代の調査

1）前期の遺構・遺物

古墳前期の遺構は主に西側斜面の住居群の中で検出され、大部分が削平されるか後期の住居に切られている。壁溝の残りを含めても竪穴住居4軒・土壙3基、SD127上面の埋没時の資料を含めても8基にしかのぼらない。東側では全く検出されていない。北西部のⅢ区に半数の4基が集中している。

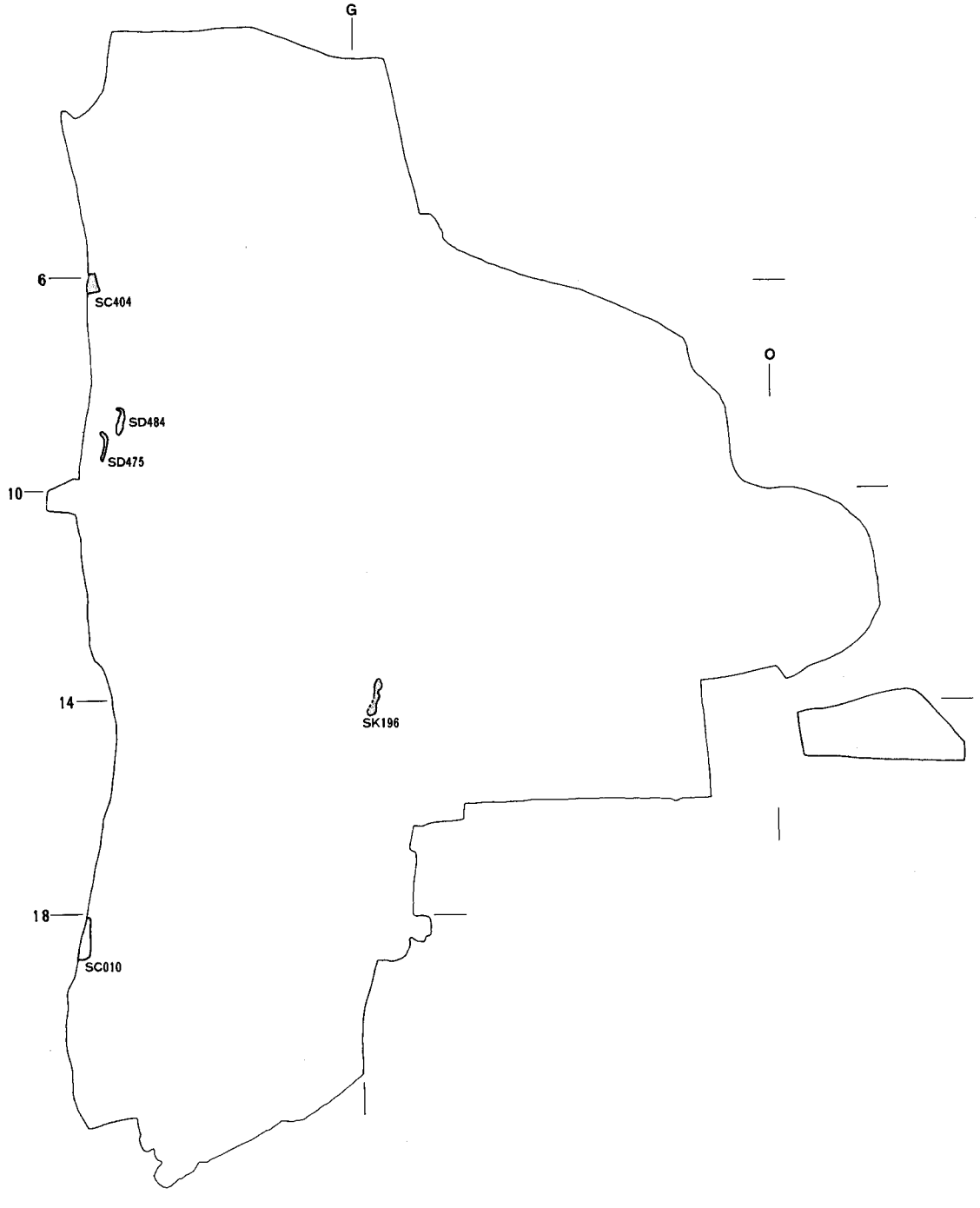


Fig. 47　古墳時代前期の遺構分布図（1/600）

①竪穴住居

竪穴住居は全て西側の斜面部の住居群の中で検出される。北西部のⅢ区でSC404・475・484の3軒、南西部でSC010の1軒の4軒のみで、包含層が残る斜面部でさえも、SC475・484は壁溝のみの残存であり、他の未検出域は著しい後世の削平で消滅しきっているか柱穴のみの残存状態と考えられる。

SC010（Fig.48）　A18グリッドの調査区際で検出された。後期の住居SC011に切られ、大半が調査区外となっているが、これでも残存状況は良好の方である。北と西側を欠くが現状で4.25×1.20m深40cmを測る。土層断面では1度15cm程の貼床を12幅15cm程の壁溝を掘削した様で、床面を流失後白色砂混じりの黒褐色土で埋没している。主柱穴は壁から50cm程離れた2本と思われ、径25cm程で柱間は2.1mを測る。

出土土器（Fig.49）　398は布留式の新段階の甕の口縁で口径13.4cm。「く」字にゆるく屈曲しゆるく外湾して外に開き端部内側が若干肥厚する。

SC404（Fig.48）　B6グリッドに位置する。010同様調査区際で全容は不明。北側は中世の溝375に切られる。現状で1.9×1.05m深59cmを測る。SC010同様四柱式と思われるが検出できたのは1本のみで、径26深20cmを測る。

出土土器（Fig.49）　399は高坏の脚部で径13.8cm。3cm程内面で屈折して稜を成す。400は弥生後期の甕の混入品。4世紀後半～末。

②土壙

土壙はⅢ区の斜面で1基・Ⅱ区の中央で2基検出した。

SK481（Fig.48）　西斜面のA8グリッドに位置する。大半が調査区外で全容が明らかでないが径1.2m程の円形土壙の様で深25cmを測る。

出土土器（Fig.49）　401・402は土師器の甕で、401は口径18.2cmで口縁が稜を成して屈折し、内面稜線下はケズリを施す。胴は中位で張る様である。402も同様で、頸部がよりしまり、口縁はゆるく内湾する。403・404は土師器高坏で、404は深い坏部で口径17.6深4.8cm。下位で強く屈折し口縁が深く立ち上がる。404は脚で径15.8cm。端部は外湾して屈折する。4世紀後半～末。

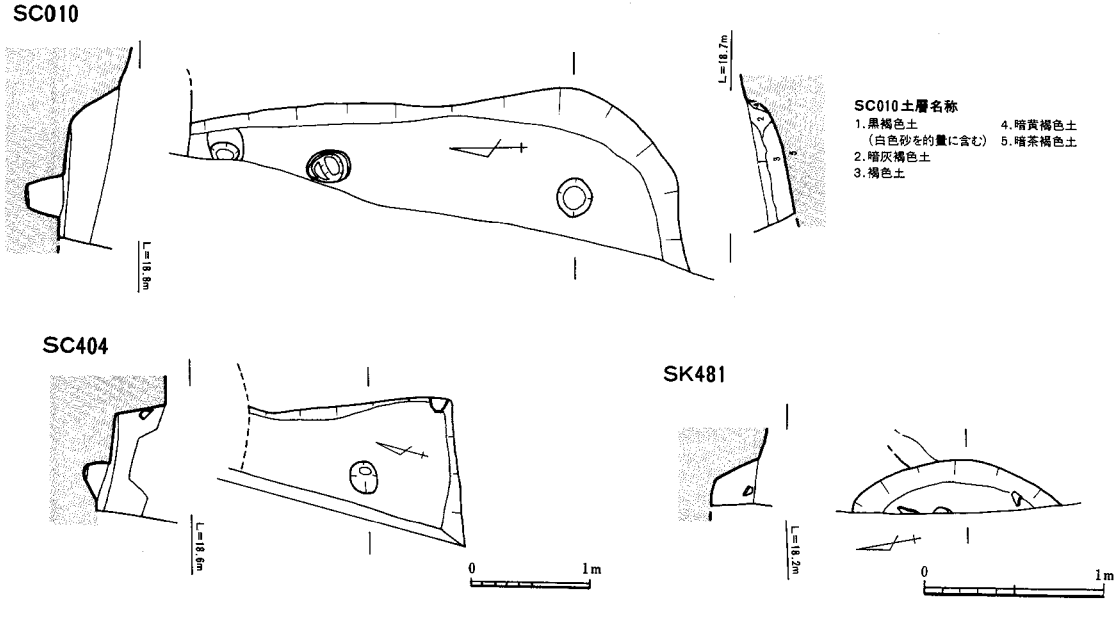


Fig. 48 SC010・404・SK481実測図（1/60・1/40）

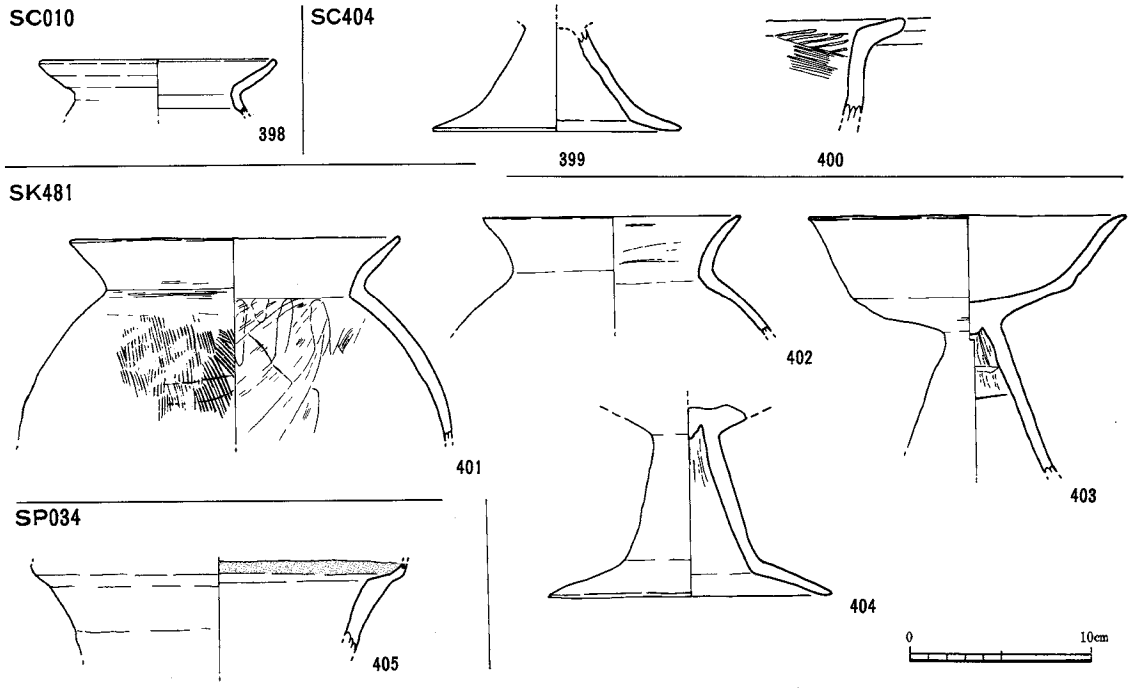


Fig. 49 古墳時代前期出土土器実測図（1/4）

2）後期の遺構・遺物

後期の遺構は前期の分布に重なって西部に集中し、Ⅰ区・Ⅲ区の斜面部分に28基が、Ⅱ・Ⅲ区の最高所の中央・東部に3基が分布する。前期同様高所では削平のため残存率が著しく低いものと考えられるが、前期と比べ明らかに集落は拡大しており、西側の斜面部では遺構の数が6倍弱と急激に増加している。

検出した遺構は西部を中心に竪穴住居18軒・土壙7基・小幅な溝6条である。

①竪穴住居

竪穴住居はⅠ・Ⅱ区の西側斜面部で16軒・中央の高所で1軒・東部で1軒検出した。

前述した様に高所部での分布の低さは中・近世の大規模な地業による削平のため残存しないためであり、実際中央部のSC081は殆ど周壁溝のみ、東部のSC772は丘陵の際に近い低い地点にもかかわらず壁が20cm弱残るのみとなっている。

西側の斜面部ではⅠ区とⅢ区で19mの等高線に沿って南北方向に直線的に分布し、南北の2ヶ所に集中する傾向がある。Ⅲ区ではさらに20mの等高線付近に、これらと並行して6軒が南北方向に直線的に分布する。これはⅠ区の傾斜が強いため造成をせず、Ⅲ区の緩斜面を造成して階段状に集落を形成したためと考えられる。

住居は全て方形で、2.6～7.8mの大形まであるが、4～5m前後の中規模のものが主体を占める。方位は全て等高線に沿って南北方向にとっている。大部分が削平と調査区境界にあるため全体が明らかなものが少いが、明確に竈を持つ住居は4軒である。

SC012（Fig.51）　Ⅰ区西側斜面のB17グリッドに位置し、SC11・15を切っている。西側1/3程度が調査区外にかかるが、現状で3.95×2.75m深74cmを測る。北側の幅1.3m程が高く低いベッド状となっている。主柱穴が明確でないがこの段の中央に径35cm程の浅い柱穴が1本ある。覆土は床上20cm程貼床を成して住居廃棄後10cm程流土が堆積後、谷側は床面まで流失。後に上端まで地山土混じりの客土で埋め戻されている。

出土土器（Fig.53）　406は須恵器の坏蓋。口径13.4器高3cmと大きい。外面の中位から上は回転ケズリ。他は回転ナデ。内面は天井部はケズリ時の当具痕のタテナデ消し。他は回転ナデ。407は口径14.2cmの大形の坏で受部の立ち上がりは低め。焼成は良好。ⅢA期。

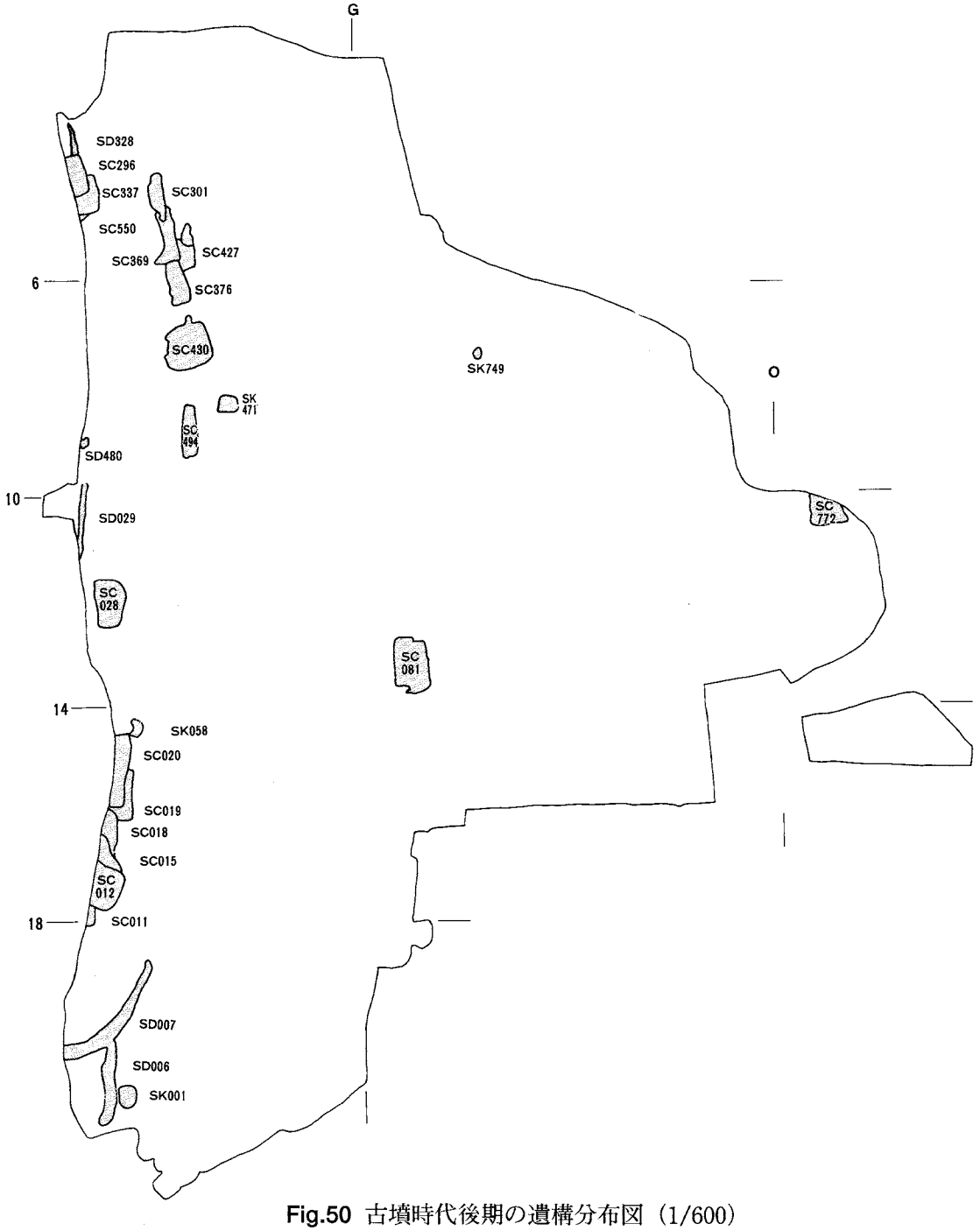


Fig.50 古墳時代後期の遺構分布図（1/600）

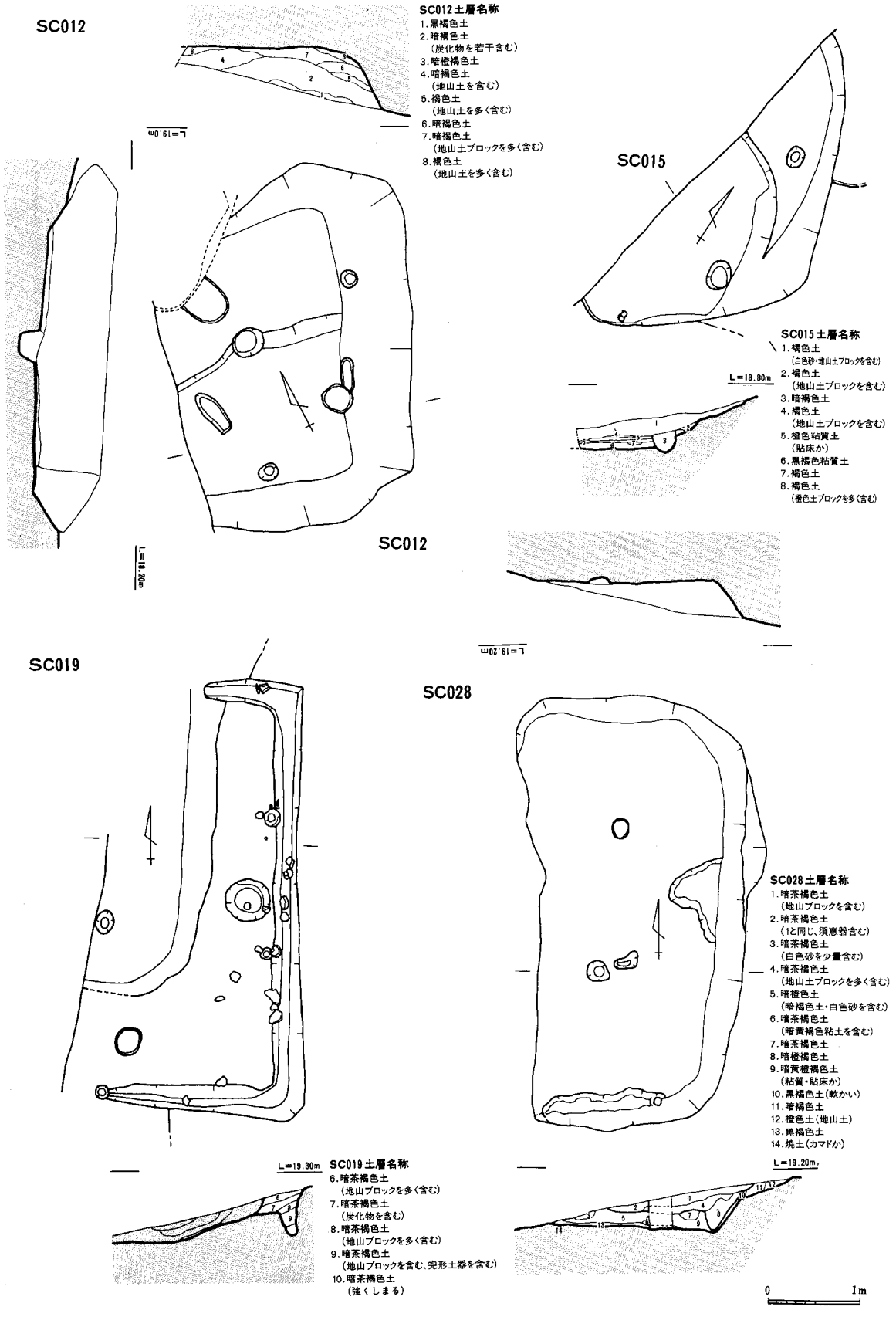


Fig. 51 ＳＣ012・015・019・028実測図（1/60）

SC015（Fig.51）　Ⅰ区西側斜面のB16グリッドに位置する。SC18を切りSC12に切られる。現状で3.95×2.75m程深60cmを測る。一部の検出であるため主柱穴は明らかでない。012と同様に北側に幅1.2m高5cm程の低いベッド状遺構がある。覆土は床上20cm程貼床をなし、壁の上部と谷側の床面が流失後、地山土混じりの客土で埋戻している。

出土遺物（Fig.53）　408は矩形に曲がった棒状の鉄器で長3.1幅2.3cm厚8mmで断面は円形。用途は不明。他に須恵器・土師器・鉄滓の小片が出土している。6世紀前半か。

SC019（Fig.51）　Ⅰ区西側斜面のB15グリッドに位置し、SC018・020に切られる。現状で4.6×2.43m深64cmを測る。谷側の半分以上の床面は流失している。幅20深25cm程の深めの周壁溝が巡っているが、これも谷側は流れている。主柱穴は不明。覆土は7層の暗茶褐色土が堆積後地山土ブロック混じりの客土で埋め戻し、これをSC020が切っている。

出土土器（Fig.53）　409～413は土師器で、409は口径7.7器高7.6cmの坩で頸部は短い。410は高坏で脚部は径15.1cm。下端が3cm程屈曲して内面が平坦面をつくっている。坏部は口径20cmを測り下位で強く屈折し、外面に低い段をつくる。底面は平底になる。411～413は坏で、411は口縁が外方に開き径13.7器高4.5cmを測る。調整は不明。412・413は口縁が垂直に立ち上がるもので、412は口径11.6器高4.7cmで外底は若干上底になり、脇が屈曲する。413は口径13器高5.6cmを測る。体部は半球状で調整は不明。414は吹子羽口の小片で径6cm内径3cm程と思われる。1～5mm大の石英粒を多量に含み橙色を呈する。他に須恵器と鉄滓の小片を検出している。

SC028（Fig.51）　Ⅰ区北側のB11グリッドに位置する。他と同様に谷側が流失している。現況で4.6×2.5m深65cmを測る。四柱式と思われるが、1.2m程離れた2本が対応すると思われる。柱間は1.6m程。径は15～20cm程であるが深さが10cm弱と極めて浅い。覆土は一時の使用後床上に厚10cm程の貼床を行い幅25cm深さは旧床面に達しない程の壁溝を掘削している。廃棄後は壁溝が埋没した程度の早い時期に客土を行い埋め戻している。

出土遺物（Fig.53）　415は須恵器の坏で口径11.7器高4.5cmを測る。焼けひずみが著しく口縁部はうねっている。外面は回転ナデ後下半に回転ヘラ削りを、内面の受部下には不定方向のナデを施す。口唇内面には浅い沈線状の段が残る。焼成良好。416は須恵器瑤の胴部で、胴径9.6残存高7.5cmを測る。外面上位は回転ナデ。中位は幅2.2cm程のカキメを施し、下位には回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデ。胴部の中央やや上には径1.5cmの注口挿入孔をナナメ上方から穿ける。肩部には焼成時に熔着した別個体の破片が残る。胎土は1～2mm大の石英粒を多く含み、焼成良好。ⅢB期。他に土師器の小片も出土。

SC081（Fig.52　Ph.45）　Ⅱ区中央部のG13グリッドに位置する。現状で4.41×3.25m深5cm程で著しい削平を受けている。東と南側には幅15～18cmの狭い壁溝が巡り、南壁で一部切り合いが認められるため、一度は建替えを実施している。中央には長4.45幅1.5～0.6mm深10cm弱の浅い溝を設け東西両側が幅1～1.4mの低いベッド状を呈する。さらに西半部は南側壁溝の50m程手前で壁が東に折れるため、1.4×0.5m程の小さな段が想定される。主柱穴は明確でない。

出土遺物（Fig.53）　418は壷の小片と思われ、外面に黄褐色の薄い釉を施し、細かな貫入が入って部分的に剥落している。胎土も白色と黒色の微砂粒を含む精良なもので他の須恵器と全く異なり焼成も灰黄色で軟質である。半島製の緑釉の可能性が高い。419は須恵器坏の底部片で、底部脇から底部にかけて回転ヘラ削りを施し、外底は7.5cm程の平面となっている。Ⅳ期であろう。他に須恵器の甕・土師器の甕・高坏小片が出土する。

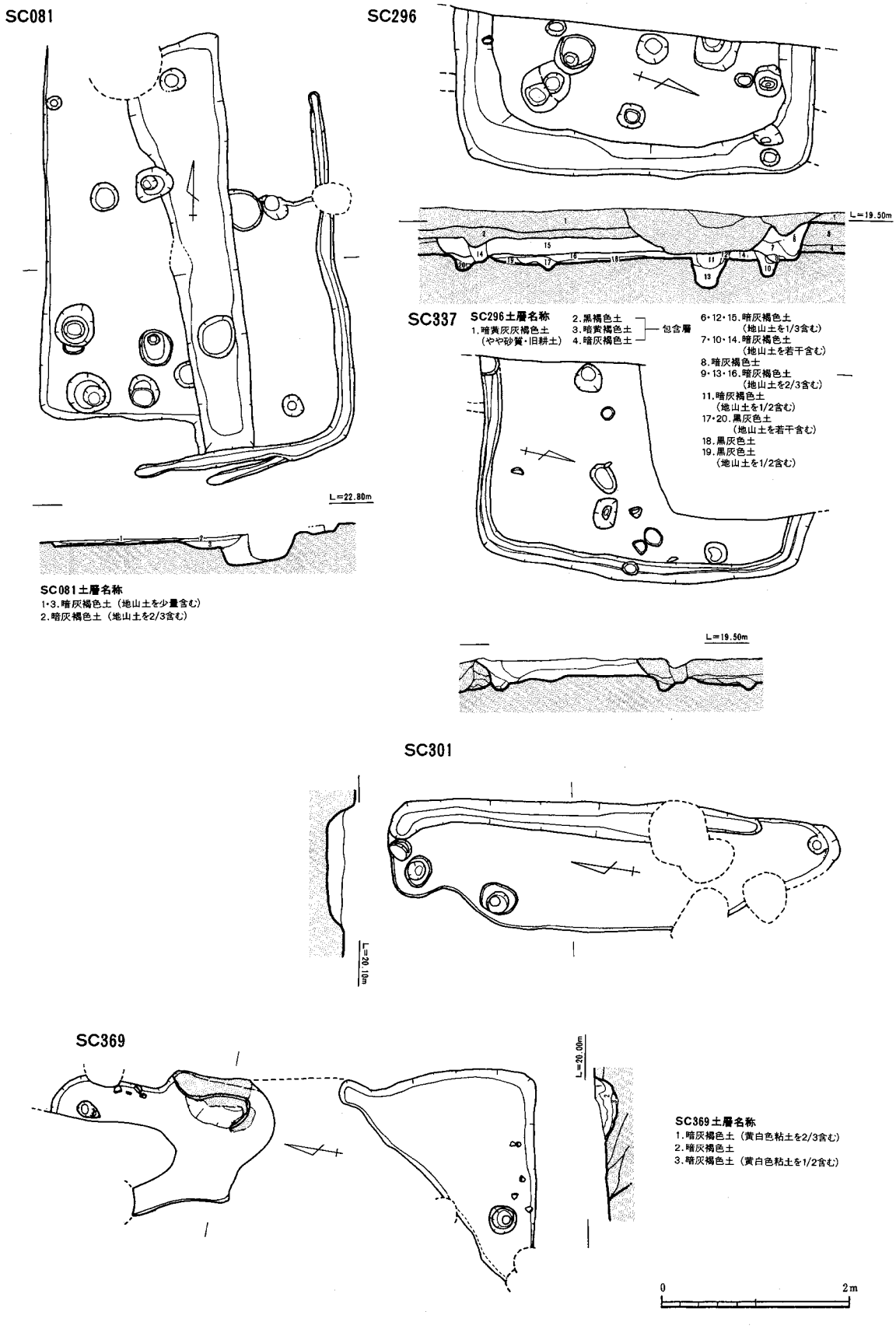
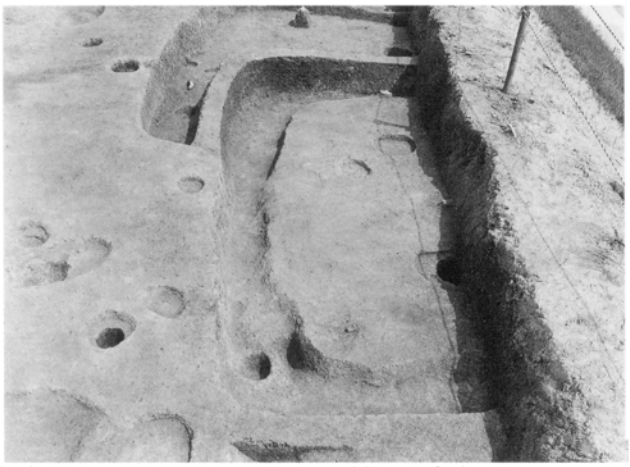
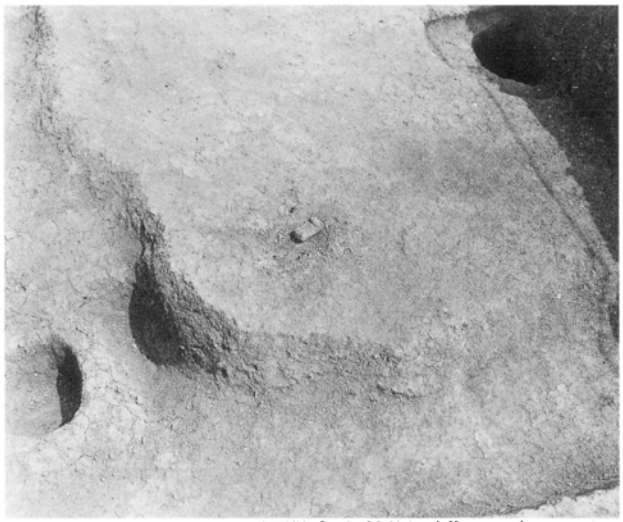


Fig. 52 SC 018・296・337・301・369実測図 (1/60)

Ph.45　SC081（北から）



Ph.46　SC296（北から）



Ph.47　SC296鉄器出土状況（北から）

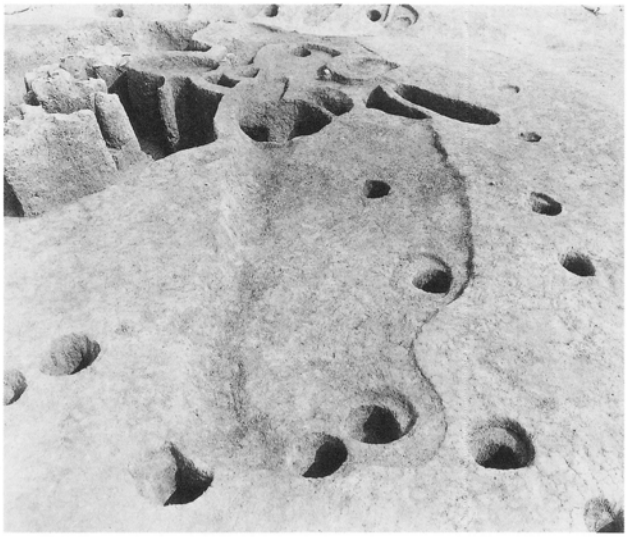
SC296（Fig.52　Ph.46）　Ⅲ区西側斜面のA3グリッドに位置する。SD328・SC337を切る。西側が調査区外で全容は明らかでないが、現状で3.76×1.65m深30cmを測る。壁に沿って幅40cm程の広い溝を巡らせる。四柱式と思われ壁から1.4m程離れた柱間1.5m程の2本が相当すると思われる。2層の黒褐色土下面から掘り込まれ、床上には10cm程の貼床がなされ廃棄後地山土混じりの客土で埋め戻す。

出土遺物（Fig.53　Ph.50）　420は須恵器坏で口径11.7器高3.5cmを測る。外面の下位1/3程には回転ヘラ削りを施す。内底は回転ケズリ時の当具痕をナデ消している。立ち上がりは低めで傾斜がやや強い。ⅢB期。421は鉄鎌の基部で端部を折り曲る。身幅が狭く2.8cmで刃厚は7mmと厚い。

SC337（Fig.52）　SC296の南側で、これに切られる。A4グリッドに位置する。現況で3.54×2.32m幅20cmを測る。SC550を切る。主柱穴は明確でない。覆土は10cm程の貼床を施して再度壁溝を掘削している。廃棄後は自然に埋没している。

出土遺物（Fig.53）　422は須恵器坏蓋で口径13.2器高4.3cmを測る。外面は中位で凹線状にくびれ体部の2/3以上には回転ヘラ削りを施す。側面には縦4本単位のヘラ記号を刻む。焼成は良好。ⅢB期。423は須恵器坏蓋の小片。口唇内面は斜に面取りされ、沈線様の窪みが施される。484は土師器手捏ねのミニチュアで、口径5器高3.8cmを測る。外底は径2cm程の平底。425は泥岩製の仕上げ砥石の小片で、厚2.2cmの方形で3面を砥面として使用し、裏面は2mm程くぼむ。

SC301（Fig.52　Ph.48）　Ⅲ区のC4グリッドに位置し、20mの等高線に直列する住居群の最北にあり、SC369を切る。谷側の西半部分は流失しており、現状で4.75×1.38m深31cmを測る。東壁の中央に径1.5m深15cm程の竈を設けるための円形の土壙を掘削しているが、そのまま設置せず埋め戻している。



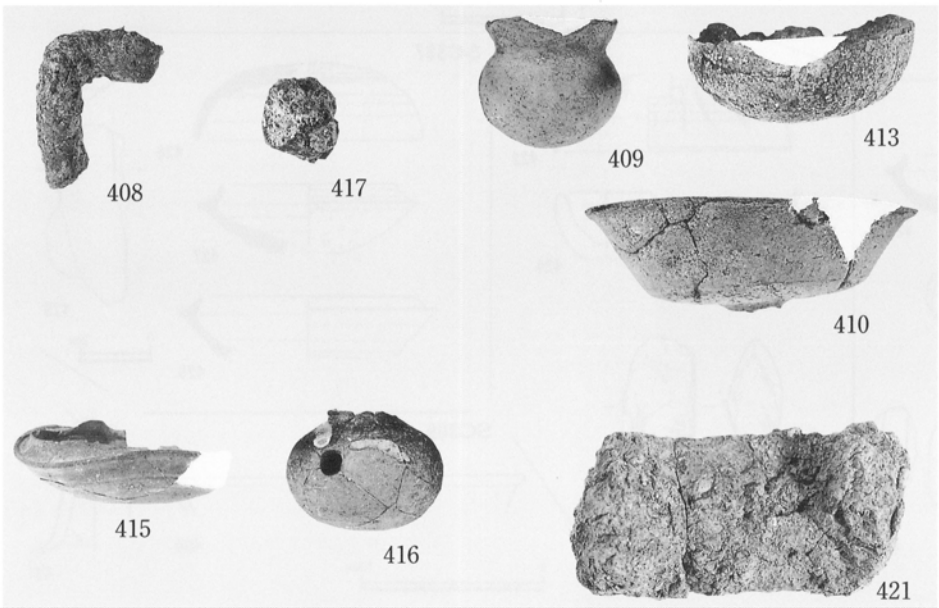
Ph48　SC301（北から）

Ph49　SC369竈部分（西から）

出土遺物（Fig.53）　426は須恵器の蓋坏で口径12.4器高4.3cmを測る。外面体部の2/3以上には回転ケズリを内面天井には当具痕のナデ消しを施す。外面には縦方向の1本のヘラ記号を施す。427・428は須恵器の坏。427は受部径12.3器高4cmを測る。体部に比べ立ち上がりが大きい。外面は灰被りで調整は不明。ⅢB期。428は受部径14.4cmを測る。立ち上がりは低めで傾斜は強い。外面の2/3以下に回転ケズリを施す。ⅢA期か。429は刀子状の鉄器片で現状で長7.4幅2.3厚1.1cmと分厚い。右側が幅8mm程の両刃状になっている。

SC369（Fig.52　Ph.49）　Ⅲ区C4グリッドに位置しSC376・377・427を切り、SC301に切られる。現代溝のため中央部を欠失し西半部を流失するが、現状で5.14×2.32m深10cmを測る大形の部類に入る。東壁沿いの北側に径65深30cm程の円形の土壙を掘り、ここに黄白色粘土を積み上げて竈を構築している。

出土土器（Fig.53）　430は土師器の高坏の口縁部と思われ口径20cmを測る。竈内からの出土。器壁が摩滅するため調整は不明。胎土は赤色粒を含み橙色を呈する。431は高坏の脚部で、上部で径2.4cmを測る。7cm程下位で脚端に向け屈折し内面は稜を成す。弥生終末期の混入と思われる。



Ph50　SC015・019・028・296出土遺物

SC376（Fig.54　Ph.51・52）　Ⅲ区C5グリッドに位置しSC369に切られSC427を切る。北端が切られ、西半が流失しているが、現状で4.25×2.02m深15cmを測る。他と同様に東壁の中央付近に1.6×1.3m深5cm程の円形の浅い土壙を掘削し、この上に淡赤灰色の粘土で竈を構築し、床から10cm程上面が径30cm程の円形に赤く焼ける。主柱穴は壁から2m離れ柱間3.8mの2本が相当する。

出土土器（Fig.57　Ph.57）　432は須恵器の坏で受部径13.2器高4.4cmを測る。立ち上がりは低めで傾斜も強い。外面体部の1/3以下は回転ケズリを施す。433は土師器甑の筒形の底部で径8.6cmを測る。内面は2cm程上がって稜をつくって屈折し以上にタテケズリを施す。竈内出土。434は砂岩製の方柱状の砥石で4面を用いており中央側が著しく砥ぎ減りしている。ⅢB期古段階。

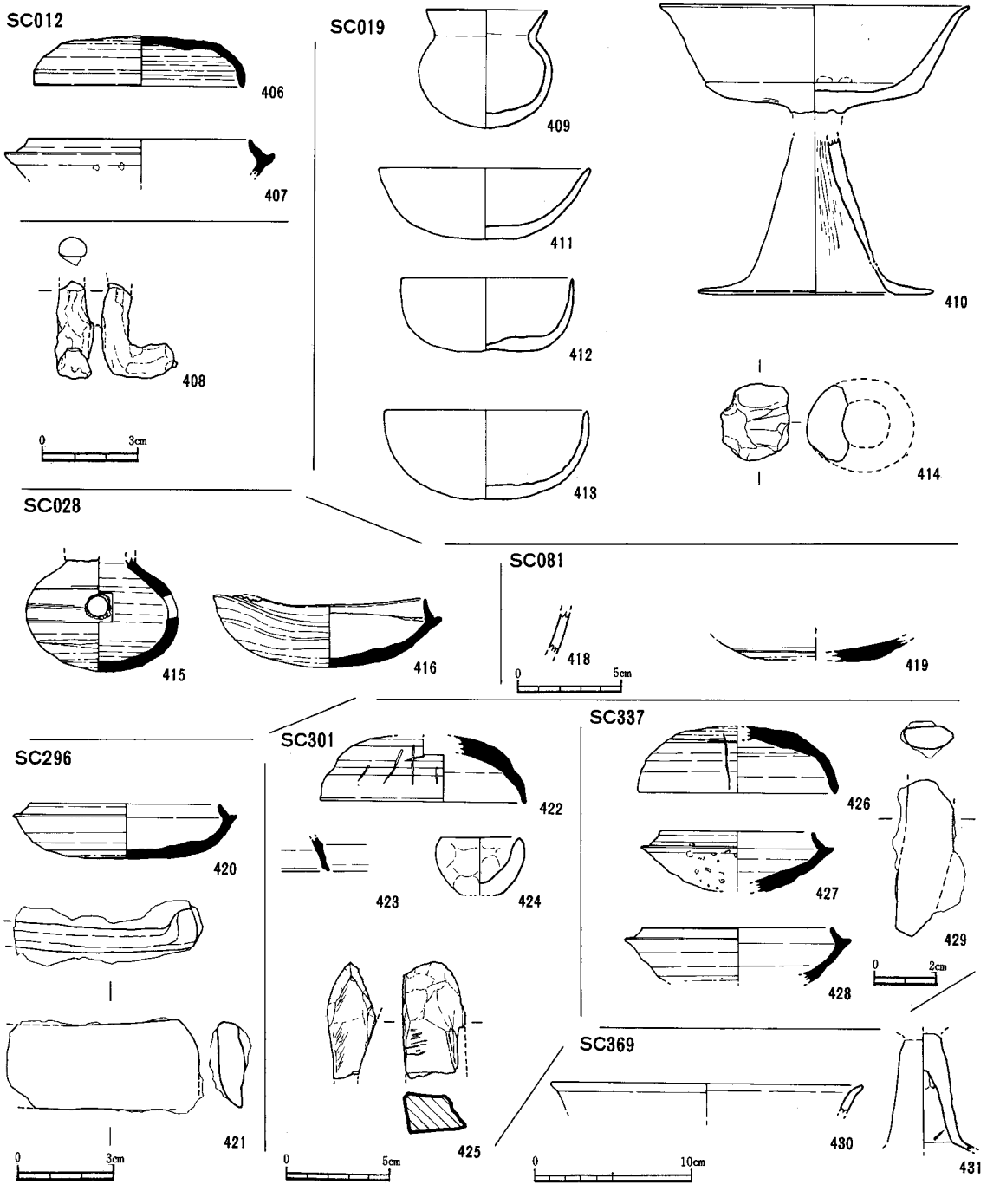
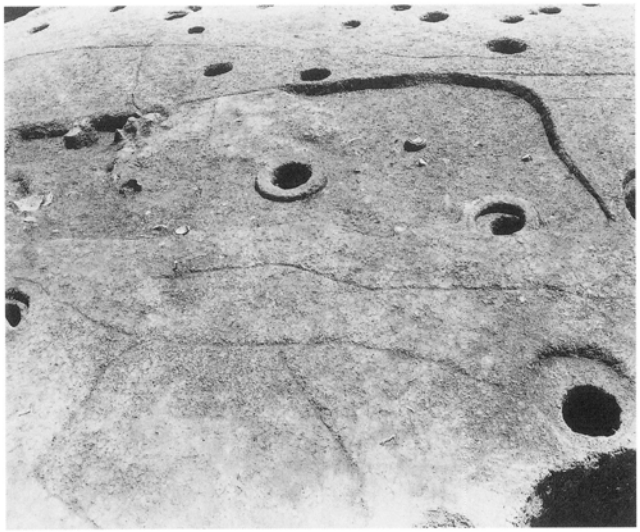
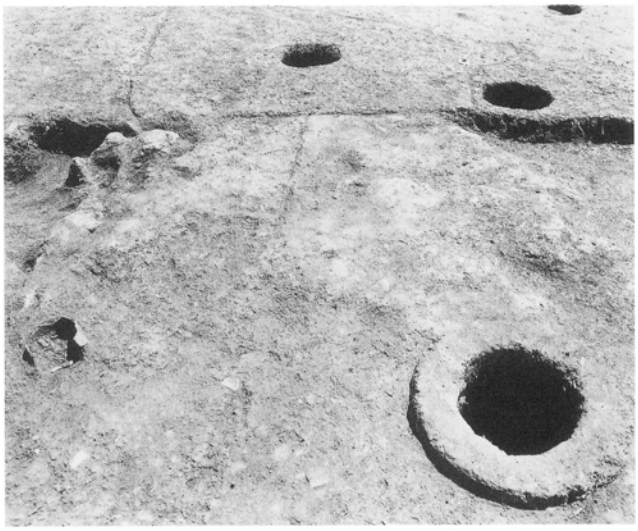


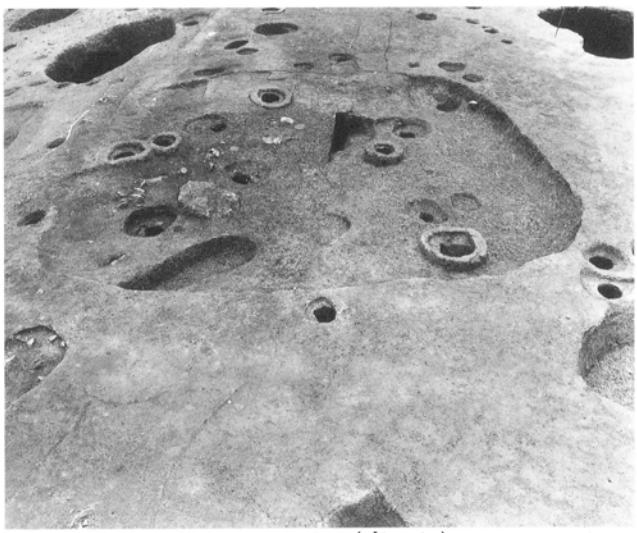
Fig.53　古墳時代後期出土遺物.1　（1/4・1/2・1/3）



Ph51　SC376（西から）



Ph52　SC376竈（西から）



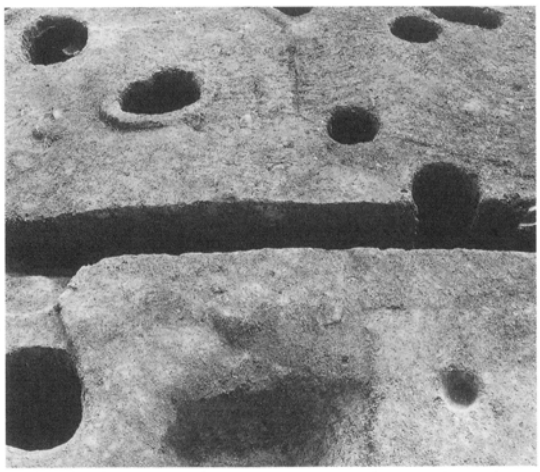
Ph53　SC430（南から）

SC427（Fig.54）　Ⅲ区C5グリッドに位置し、SC369・376に切られる。現状で4.1×1.74m深15cmを測る。東壁に竈は設けていない。四柱式で径15～25cmの柱穴が2.7～3mの柱間をとって配置される。

出土遺物（Fig.57）　435は須恵器の甕の口縁部で口径16.6cmを測る。口唇外面が肥厚して幅8mmの玉縁状を成している。436は滑石製の臼玉で、径6厚3mmを測る。全面を砥いで仕上げる。ⅢA～ⅢB古段階。

SC430（Fig.54　Ph.53・54）　Ⅲ区のC7グリッドに位置し、該期で最も残りが良い住居である。南北5.1東西4.45m深20cmを測る。他の住居と異なり北壁の中央部に竈を設ける。2.7×1.1m深15cm程の長狭な土壙を掘削し、この上に黄白粘土で2.2×1.1mの長方形に積み上げて竈を構築する。床面から15cm程上の壁際の粘土が径25cm程赤く焼け、ここから北の住居外に85cm程煙道が延びている。周壁溝は東と南壁の1.2m程まで巡り、東壁では幅80深5cmと幅広で浅い。主柱穴は4本で径15～20cm程の柱が柱間1.6～2.4mをとって配置されている。

出土土器（Fig.57）　437は須恵器の小形の甕の口縁部で径17.6cmを測る。口唇外面が「M」字状に肥厚し、段を成している。438は須恵器坏蓋で口径13.5cmを測る。439は高坏の接合部の破片で弥生終末期の混入品と思われる。ⅢB期の古段階。



Ph54　SC430竈断面（東から）

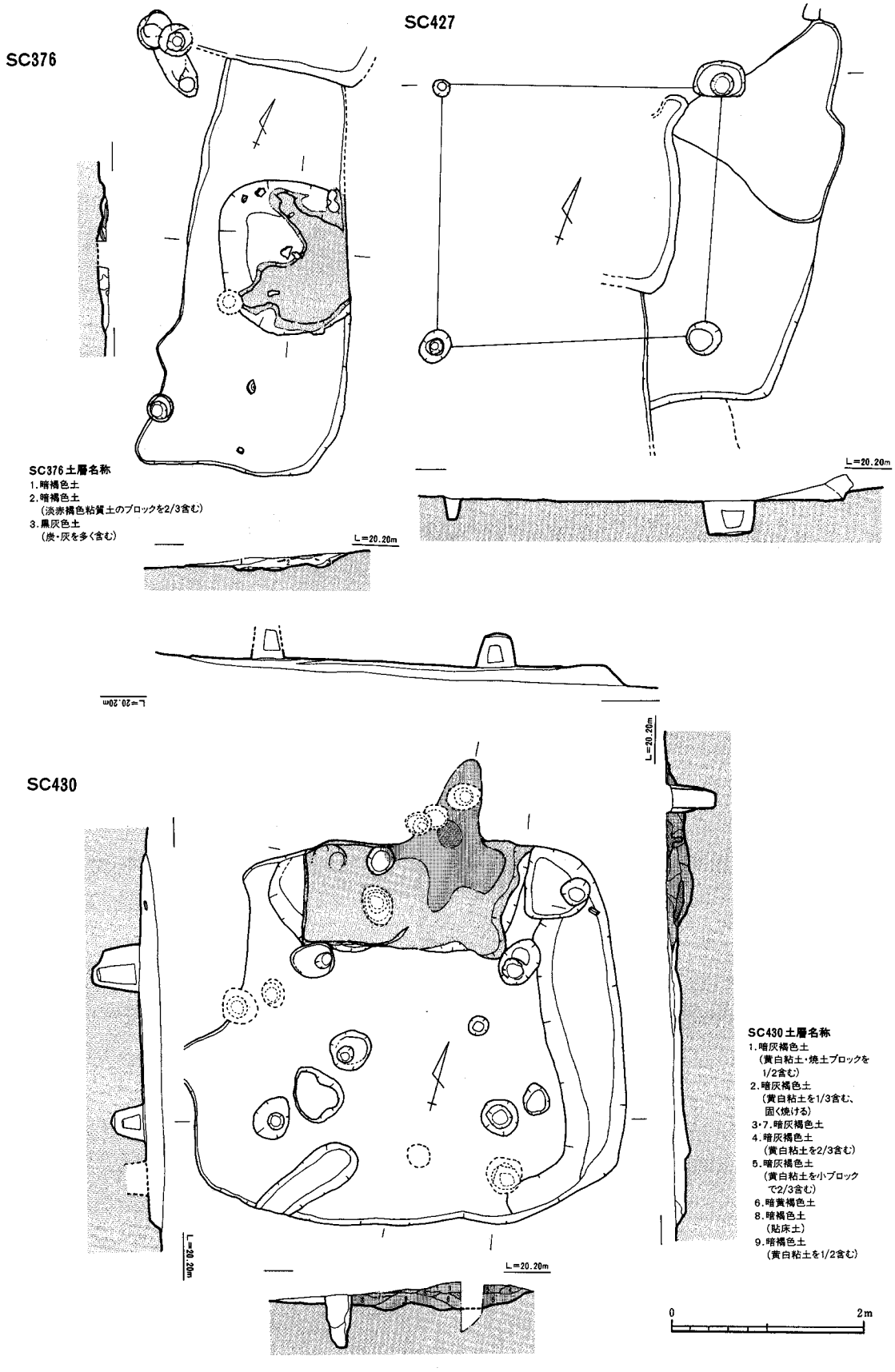


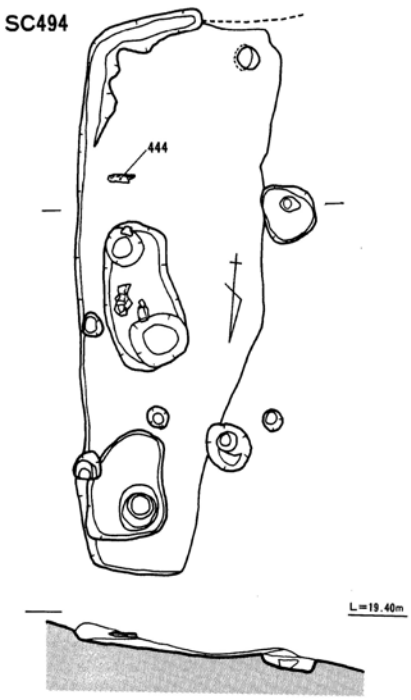
Fig.54 ＳＣ376・427・430実測図 (1/60)

SC494（Fig.55　Ph.55）　Ⅲ区20m等高線ラインに直列する住居群の南端でC8グリッドに位置する。西半が流失するが、4.65×1.62m深25cmを測る。竈の痕跡は認められない。柱は四柱式と思われ、住居西に接する柱間2.1mの2本がこれに相当する。

出土遺物（Fig.57　Ph.57）　440は須恵器坏蓋の小片で口唇内側に浅い段が残る。441は土師器甕の口縁部で直線的に外反する。442は土師器坏で口径10.4器高4.7cmを測り、体部は半球形で口縁直下が若干内湾して端部は細く仕上げる。443は土師器甕の底部で平底に近い丸底を呈する。器壁が剥落し調整は不明。胎土は1～2mm大の石英粒と赤色粒を含む。444は泥岩製の仕上げ砥石で両端部を欠くが長22.4幅7.5厚3.1cmを測る長方形のもので表裏と両側全面を砥面として用い殊に両側は砥ぎ減りで中央が窪んでいる。ⅢA期。

Ph55　SC494（北から）

Ph56　SC772（西から）



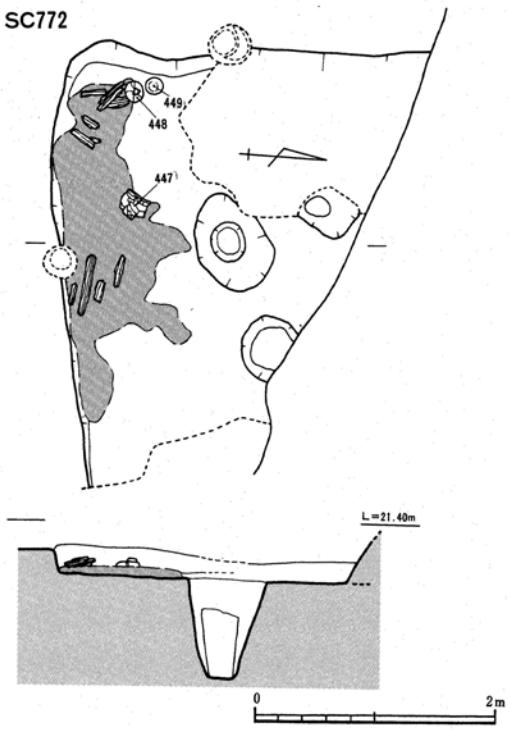
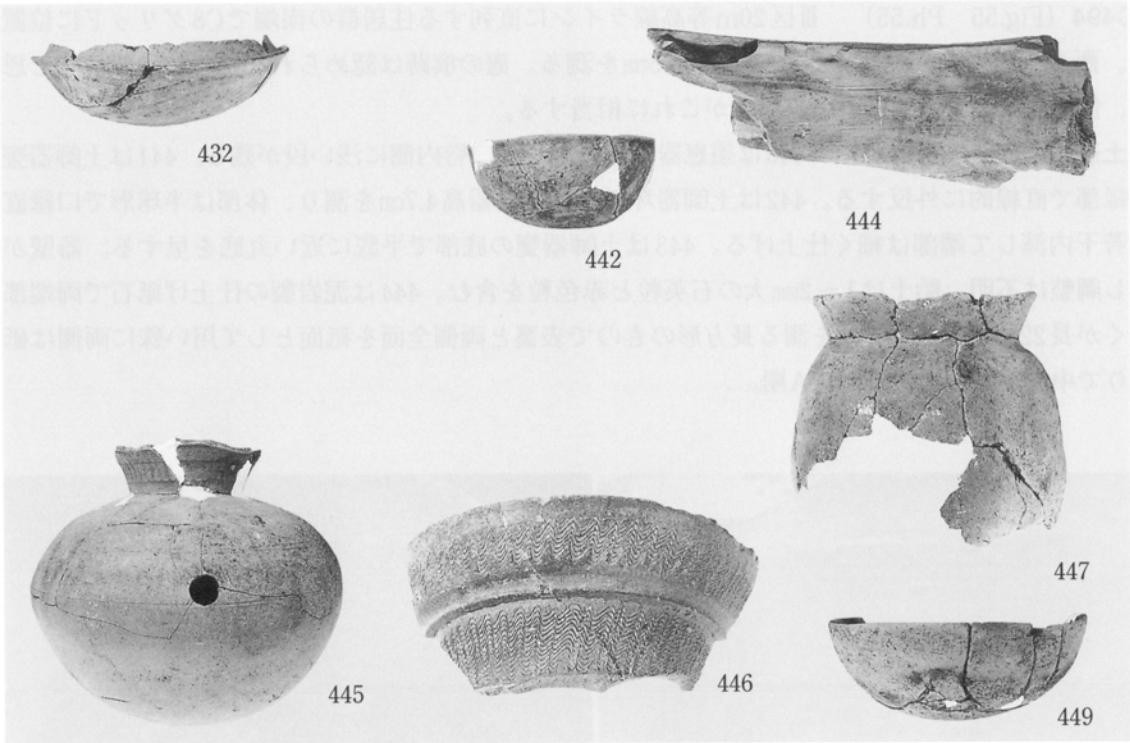


Fig. 55　SC 494・772実測図（1/60）



Ph57　SC376・494・772出土遺物

SC772（Fig.55　Ph.56）　調査区東部のP10グリッドに位置する。北側が調査区外東側が地すべりで全容が明らかでないが、現状で3.65×2.5m深20cm程で、南側に炭化材や焼土が多く残り焼失家屋と考えられる。柱穴は他の側から四柱式と思われ、南・西壁から1.4～1.7mの位置の径28cm深85cmの1本がこれに相当すると思われる。遺物は南西部の焼土中から多く検出される。滑石製の完形の紡錘車も検出されていたが、夜間から早朝にかけ盗難に会っている。調査期間中他にも資料の盗難と遺構の破壊が度々有り、一人よがりのさもしい行為に心寒い想いをさせられた。

出土土器（Fig.57　Ph.57）　445は須恵器の瑳の胴部で胴径17.6cm胴部高13.1cmを測る大形品。中位上に2条の沈線を施し、この間に櫛描波状文を施文する。注口孔は径1.4cmを測る。外底まで回転ナデを施す。446も須恵器瑳で口径9.6胴径11.2cmを測る。口縁下と頸部に櫛描波状文を、肩部の沈線上に櫛描簾状文を施す。447は土師器甕で、口径14.5胴径18.6cmを測る。448は口径30cmの甕の口縁で、内外面にハケメが残り弥生後期の混入品と思われる。449は口径14.4器高5.9cmで半球状の体部の土師器坏である。器壁の調整は不明瞭。Ⅱ～ⅢA期を示す。

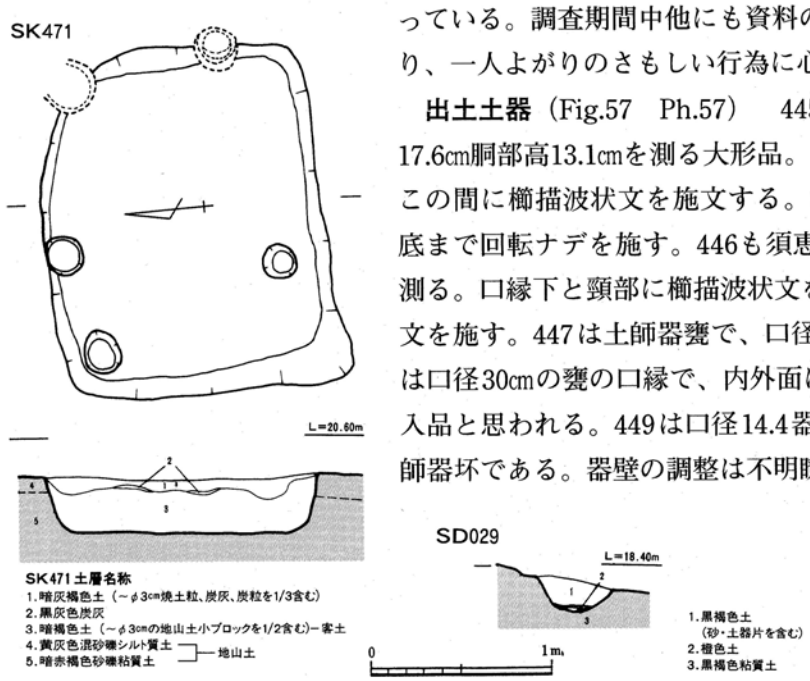


Fig.56　S K471・S D029実測図　(1/40)

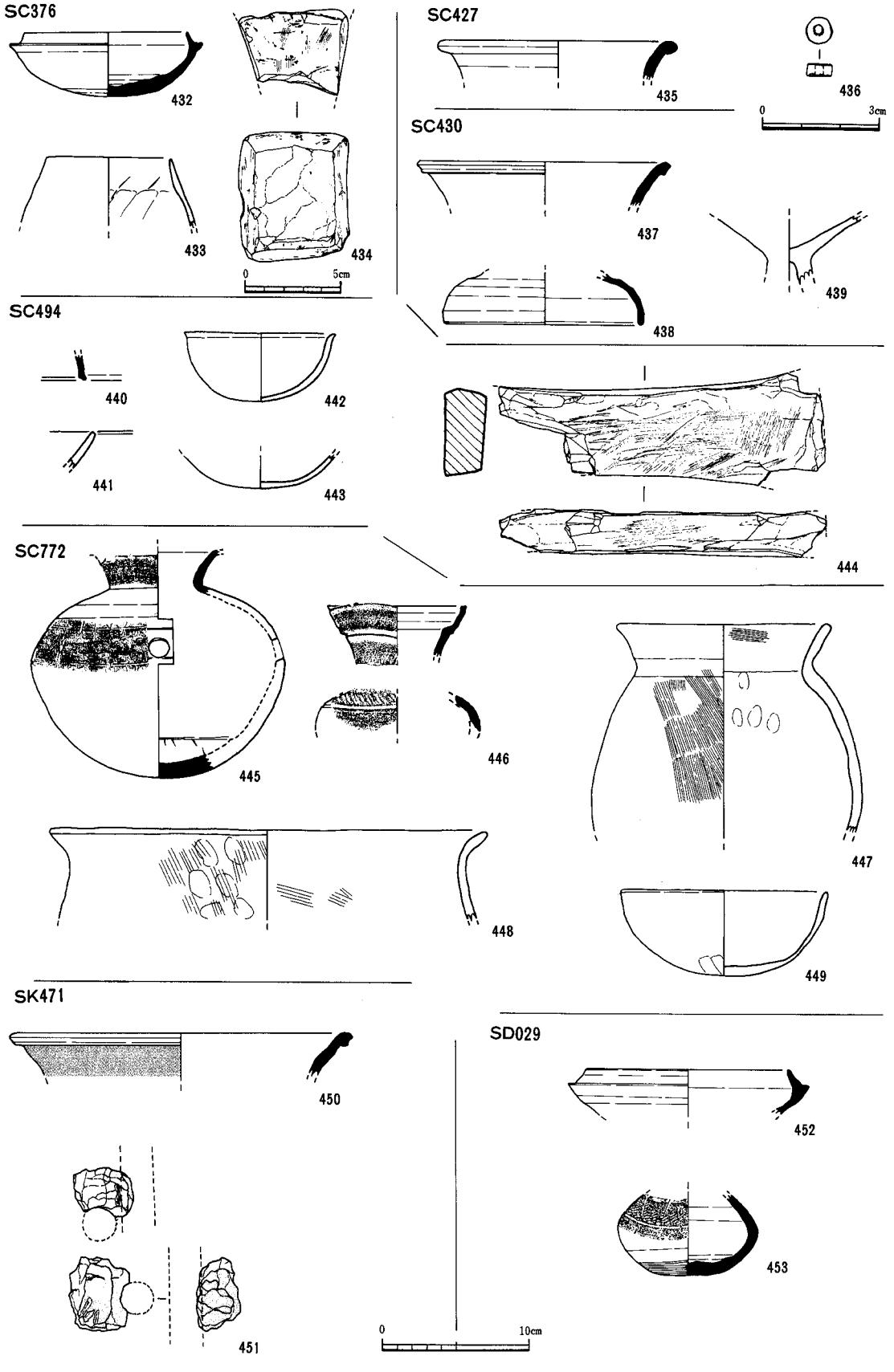


Fig.57　古墳時代後期出土遺物実測図.2　(1/4・1/3・2/3)

② 土壙

土壙は西側斜面部で6基・中央部で1基検出したが総体的に数が少い。

SK471（Fig.56　Ph.58）　Ⅲ区西側のD8グリッドに位置する。1.9×1.55mの方形で深32cmを測る。覆土は床から25cm程を地山土ブロック混じりの暗褐色土で埋め戻し、この上面に炭灰層と多量の焼土粒・塊と炭灰混じりの土が堆積する。焼土塊は48点検出されており製鉄を連想させる。

出土遺物（Fig.57）　450は小形の須恵器の甕口縁部で口唇外面が肥厚して「M」字状を成し段をつくる。この段の下2.5cm幅に還元焼成で黒色を呈する顔料が塗布されている。451は焼土塊の一つで、胎土にワラスサを多量に含み径2.2～2.4cmの木舞痕が直交して残っており、炉壁か土壁の一部と思われる。

③ 溝

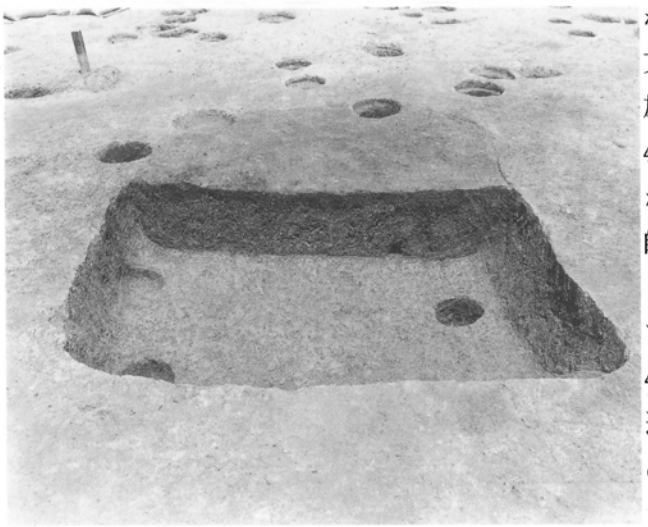
溝はⅠ、Ⅲ区の西側斜面で等高線に沿って小溝を6条検出した。Ⅰ区のSD006・007は地形変換線に沿っており、Ⅰ区の地業は古墳時代後期に既に行われていた事を示す。

SD029（Fig.56）　Ⅰ区北西部のA9～11グリッドで等高線に沿って南北方向に延びる小溝で、幅40深20cmを測る。覆土は全て自然堆積層で、最上層は砂混じりである。

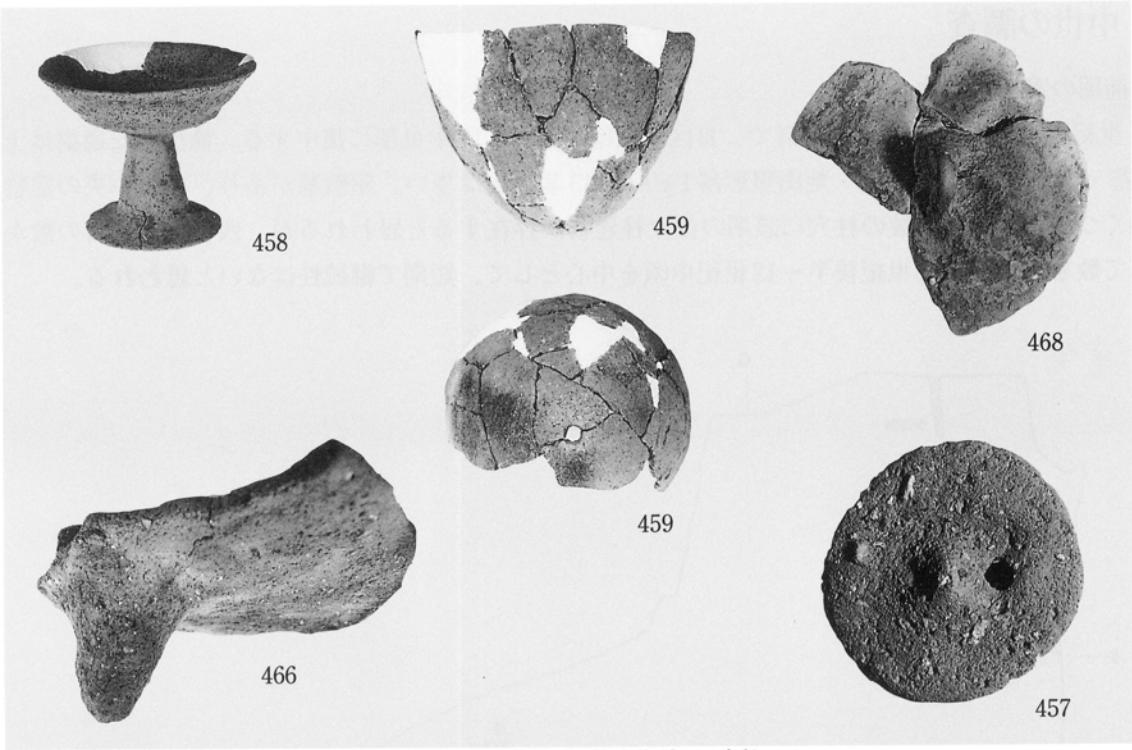
出土土器（Fig.57）　452は須恵器の坏で受部径14.1cmを測る。453は須恵器瓹の胴部で径9.8cm。肩部の沈線上に櫛描簾状文を施し外底付近にはカキメを施す。ⅢB期の古段階にあたる。

3）．その他の古墳時代遺物

Fig.58は後世の遺構に混入した資料で、454は瀬戸内系の土師器二重口縁壷で口径15.6cmを測る。455は土師器坩で口径9.8cm。456は東海系の「S」字甕の小片でにぶい黄色を呈する。457は土師器甕で口径15cm。内面頸部稜線下2cm以下にケズリを施す。458は土師器高坏で、口径15.7器高13cmを測る。坏部は下位で屈折して段を成す。器壁がやや厚い。459は底部に焼成前の径8mmの円孔を穿つ砲弾形の鉢で口径16.1器高12.3cmを測る。460は小形の坩で口径7.7器高7cmで頸部のくびれがゆるいが内面は稜を成す。461は須恵器大形器台の口縁部で、口唇外面が「コ」字状に肥厚して段を成す。口縁下の沈線間に櫛描波状文を施す。462は須恵器壷の口縁片で頸部三角突帯の上下に波状文を施す。463は瓹の頸部で櫛描の波状の簾状文を施す。464は須恵器高坏蓋で櫛描簾状文を施す。465は須恵器坏蓋で、口径15.2器高4.3cmを測る径は大きいが中位と口唇内面の段がなく、ⅢB期の古相と思われる。466は土師器でつまみ付の蓋か半島系の三足土器の脚と思われる。周縁は打ち欠きで円形に整形している。467・468は土製鏡模造品で467は径4.5cm鈕を含めた厚1.3cmを測る。鈕の穴は貫通しない。468は一回り大きく径6.3cm鈕を含めた厚1.8cmを測る。同じく鈕の穴は貫通しない。端部は細く仕上げる。



Ph58　SK471土層断面（西から）



Ph59　その他の古墳時代出土遺物

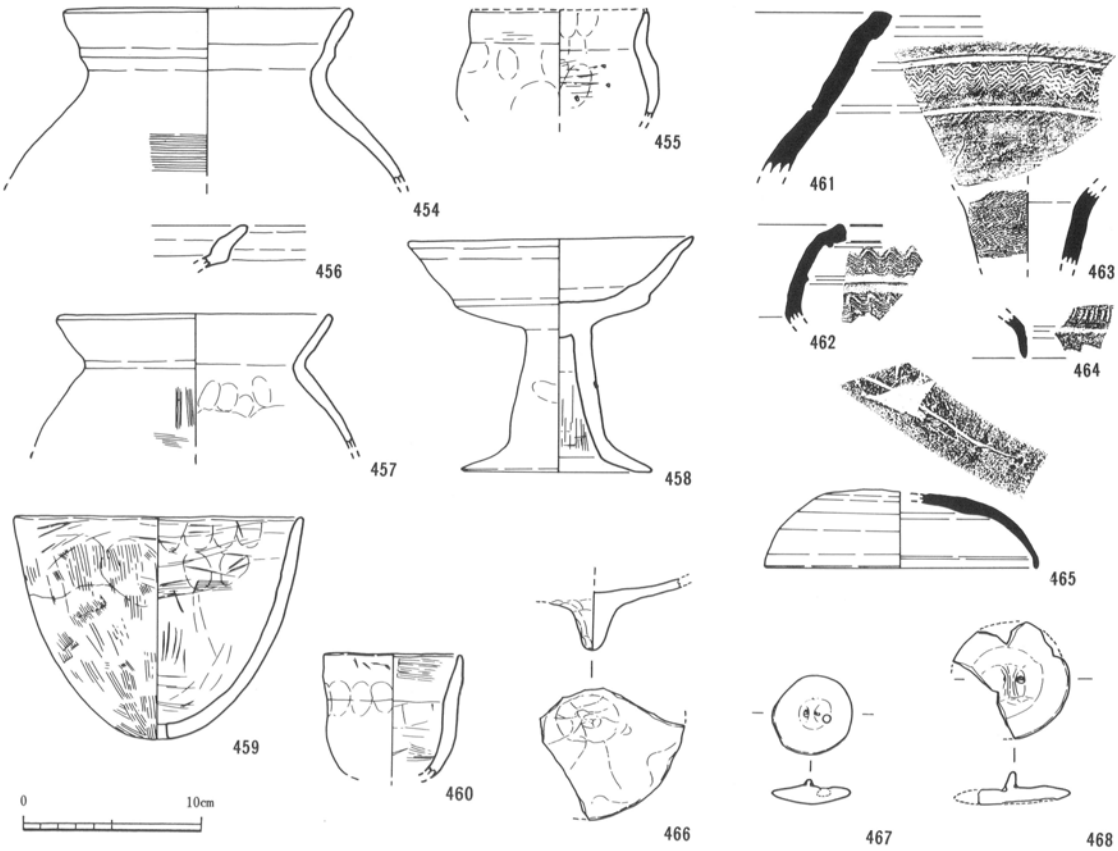


Fig.58　その他の古墳時代出土遺物実測図（1/4）

4. 中世の調査

1) 前期の遺構・遺物

11世紀後半～14世紀代の遺構群で、Ⅲ区北西部・Ⅰ～Ⅱ区中央部に集中する。検出した遺構は土壙6基・土壙墓1基・溝5条・地山整形部1ヶ所の13基と数は少い。屋敷墓があり、Ⅱ区中央の建物のいくつかと周囲の多数の柱穴に該期の掘立柱建物が存在すると思われるが、残存する遺跡の数からして数も少数で、11世紀後半～12世紀中頃を中心として、短期で継続性はないと思われる。

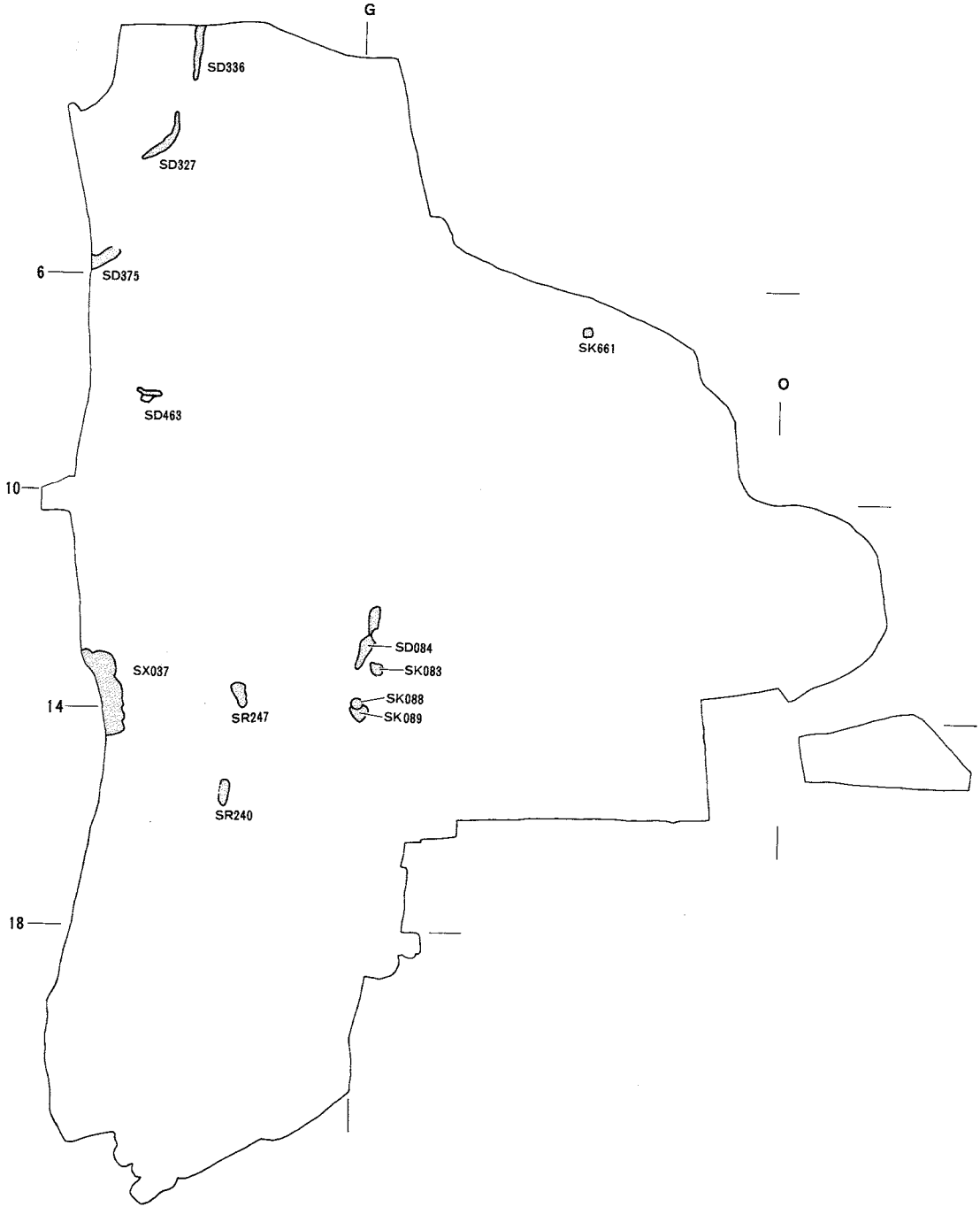


Fig.59 中世前期の遺構分布図（1/600）

① **地山整形部**　SX037（Fig.60）

Ⅰ区西側の古墳時代住居群の切り合いの中で検出された。当初は竪穴住居として処理していたが、白磁や陶器等一定量の検出があり混入と判断するには量が多く、該期の方形の地山整形部とした。大半が調査区外にあるが、8×2.2m深60cmを測る。2.7～8m幅の三段の階段状に掘削がなされている。突出した部分のSK038は出土遺物から同一の遺構と判断した。

出土遺物（Fig.60）　469は白磁の玉縁口縁の碗で口径18cmを測る。胎土は灰白色で緻密。釉は灰白色で薄く、全面に貫入が入る。内面中位に浅い沈線を1条施す。470・471は紡錘形の管状土錘で、470はほぼ完形。長5幅2cmで右寄りに径5mmの紐穴が穿く。整形時の具合か、下面が平坦になっている。12g。471は長3.4幅1.6cm。中央に径8mmの紐穴が通る。胎土は砂粒を含まず精良。重量6g。他に陶器甕の小片・瓦器埦などがある。11世紀後半～12世紀中頃。

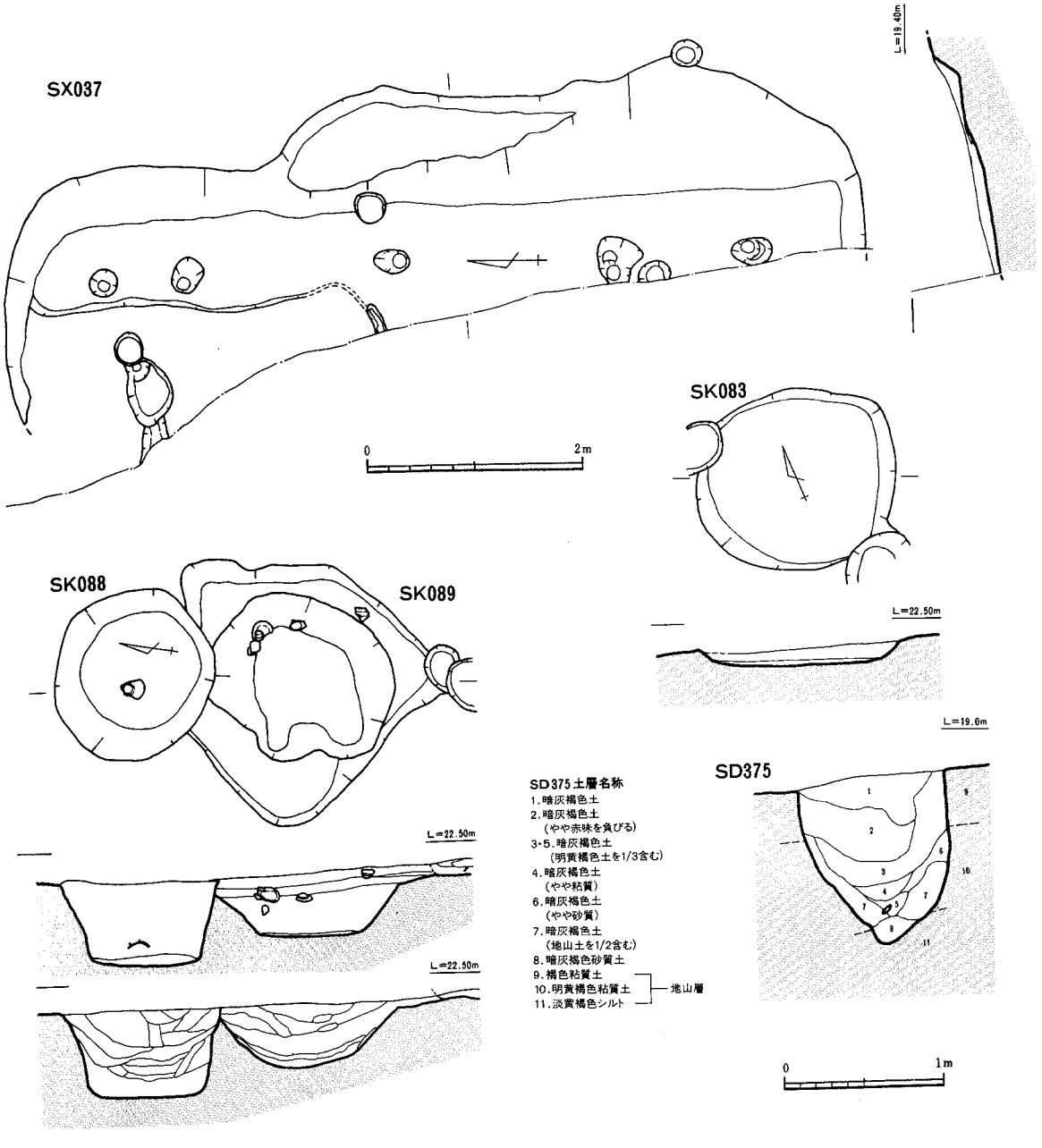


Fig.60　SX 057・SK 083・089・SD 375実測図（1/60・1/40）

② 土壙

6基を検出し、このうち3基がⅡ区中央の建物群の西側に隣接し、他はこれを囲む様に散漫に分布する。

SK083（Fig.60　Ph.83）　建物群に隣接するG13グリッドに位置する。1.32×1.14m深12㎝の円形の浅い土壙で床面は平坦になっている。

出土遺物（Fig.61）　473は口径15.2器高6.1底径6.7㎝を測る。白磁碗。玉縁が幅2㎝と目立って大きく、釉が厚く垂下している。分厚く低い削り出し高台から体部が直線的に開く。内面は見込み近くに浅い沈線を1条施す。胎土は灰白色で黒色微粒子を多く含む。釉は灰白色で内面から外面中位まで施釉する。474は白磁のⅢで口径11㎝。体部中位でゆるく屈折してここに段状の浅い沈線を1条施す。内面も段状に稜を成す。口縁まではゆるく外反して端部を細く仕上げる。胎土は碗と同様で釉は淡黄～灰白色を呈する。外面にはピンホールが見受けられる。475は滑石石鍋口縁の破片を再加工したもので11.3×8.7×2㎝を測る。底面の破片を用いており補修時の径1.1㎝の鉄鎹が2本残っている。周囲は粗く削る。温石に転用。11世紀後半～12世紀前半。

SK088（Fig.60　Ph.61）　同じく建物群西側のG13グリッドに位置し、SK089を切っている。径0.9～1.1m深53㎝の小形の円形土壙。土層は灰褐色の砂質土が薄いレンズ状に幾層も重なり、内部を三度浚えた状況が土層から見て取れる。北の延長線上にSD084があり、これと連結して雨水を溜めた溜井と考えられ、埋土も北側から流入している。

Ph60　SK 083（東から）

出土遺物（Fig.61）　472は白磁の碗で口径16.8底径6.2器高6.2㎝を測る。高台は細く高く、体部ゆるく湾曲して開く。全面に回転ケズリがなされ口唇は若干外反して上面が平坦になる。見込と口縁下に沈線を施し内面から外面高台際まで灰白色の釉を掛ける。ピンホールが目立つ。

SK089（Fig.60　Ph.62）　SK088に切られる径1.2～1mの円形部と上部の1.28×1.46mの方形の二重土壙で深41㎝を測る。088と同様に砂質土と粘質土の水成層が薄く堆積し、2度の底浚えがなされている。SK088以前のSD084の雨水を受ける溜井であったと思われる。

Ph61　SK 088（西から）

Ph62　SK 089（西から）

出土遺物（Fig.61）　476～478は白磁。476は口径14.6cmの皿で体部は直線的に延びて端部が垂直に立ち肥厚する。釉は灰オリーブ。477は高台がやや細高い碗で底径6.1cm。釉は灰白色で見込を蛇ノ目にカキ取る。478は底径6.1cmの碗で、見込に櫛描文を施し黄灰白色の釉を高台際まで施す。479は底径6.2cmの高台が細高い碗で見込に櫛描文を施し灰白色の釉を高台脇まで掛ける。480は土師器皿で口径13.4器高2.5cm。外底は糸切りに板圧痕。白磁は12世紀中頃～後半、土師器は13世紀。

③　溝

溝はⅢ区北西部で4条、Ⅱ区中央部で1条検出した。SD336と327は一連の溝と思われ、西側に矩形に屈折する。SD375・463は西側斜面で等高線と直交方向に、中央部の084は前述の様に土壙と連なって等高線と並行する。いずれも小溝で、地形を改変する様な大規模なものはない。

SD084　Ⅱ区建物群の西に隣接し、南北方向に延び幅1.2m深20cmを測る。北は近世溝に切られ不明。南は途切れるが、SK088・089に連結すると思われる。

出土遺物（Fig.62　Ph.63）　481は口径13.5cmの玉縁口縁の白磁小碗。内側口縁下に沈線を1条施す。胎土は灰白色で黒色微粒を若干含む。釉は灰白色で内外から外面中位まで掛け口縁は厚く施釉す

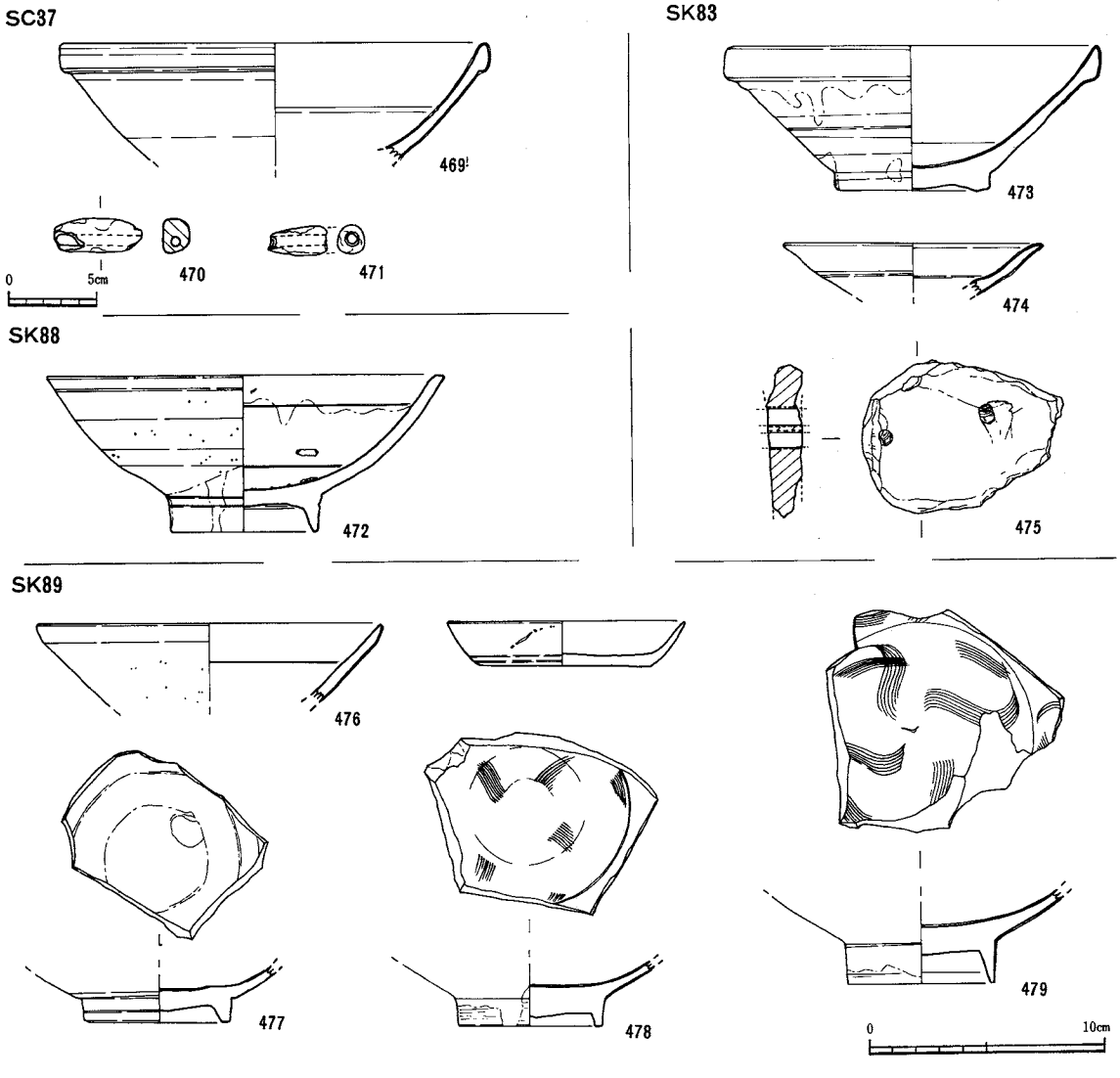
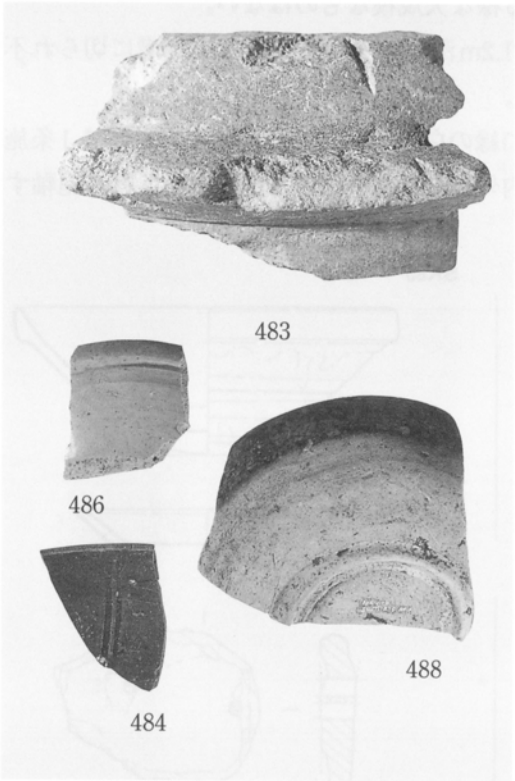


Fig.61　中世前期土壙出土遺物実測図（1/3・1/4）

る。482は白磁平底皿の口縁部で径11.3㎝を測る。外部は直線的に開き口唇外端が若干外反し上面が平坦となる。胎土は灰白色で釉は灰白色で口縁部に殊に厚く掛ける。ピンホールが多い。483は鍔付の滑石石鍋で口径27.8㎝を測る。胴上半から口縁が外湾して内傾し、口縁下2㎝程に高さ2㎝程の鋭角的な三角突帯を削り出している。11世紀後半～12世紀前半。

SD336・327　Ⅲ区北西端近くに位置し、SD336は北に、327は3.2m間隔をとってこの延長線上で2.5m南に延びて西に屈曲する。幅は60～80深30㎝程で、SD336は北に、327は西に底面が下がっており、両溝間は矩形に囲まれた敷地の開口部となっている。

出土遺物（Fig.62）　489は鎬蓮弁文の龍泉窯系青磁碗で口径16.6㎝を測る。胎土は灰色で釉は青緑色で全面に施釉する。490は龍泉窯系青磁碗の高台で、径6.5高1㎝と低い。胎土は淡灰色で釉はオリーブ灰色で高台内側まで施釉しトチンの熔着痕がある。14世紀前半か。



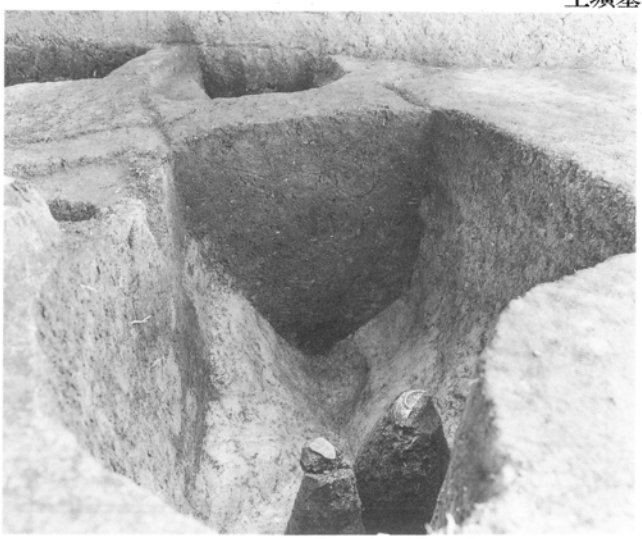
Ph.63　SD084・375出土遺物

SD375（Fig.60　Ph.64）　Ⅲ区のB5グリッドに位置し、東西方向に延び底面は西に下がる。幅90深138㎝と深い薬研掘で、SC404を切っている。覆土は最下層に粗砂を多く含む砂質土が、以上に粘質土や地山土の小ブロック混じりの暗灰褐色土が堆積する。

出土遺物（Fig.62　Ph.63）　484は越州窯系か高麗青磁の碗で内面に2条単位の片彫風の縦線を施す。胎土は明灰色で黒色粒・1～2㎜の白色砂を若干含む。器壁が薄く、釉はオリーブ色。485は口縁が外反する白磁碗。胎土・釉は灰白色で口縁部に厚く掛ける。486は玉縁口縁の白磁碗。口径16.5㎝。487は瓦器埦で口径16.5㎝。重ね焼きのため口縁内外が0.5～1.5㎝黒色を呈する。488も瓦器埦で口径17.2器高8㎝で高台は低い。重ね焼きで内面から口縁外面2㎝まで黒色を呈する。12世紀後半～13世紀初。

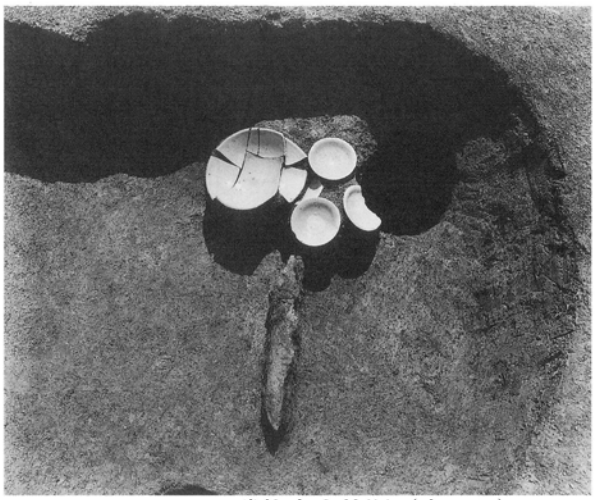
④　土壙墓

土壙墓はⅡ区西側でSR247の1基を検出した。中世後期の様に墓域を形成しない。南側10m程の位置に同規模の長方形土壙SK240があるが、同規模同形の土壙と大部分が重なっての切り合いとなっており墓としては不合理であるため土壙と判断している。

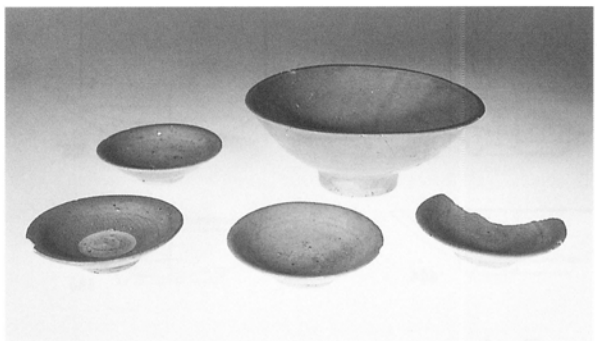

Ph.64　SD375土層断面（北東から）

SR247（Fig.63　Ph.65・66）　Ⅱ区のD13グリッドに位置し、建物群から西16mの距離にある。頭位をN－14°－Wにとる。2.43×1.06m深41㎝の隅丸長方形の墓壙である。幅は北側が1.06南側が0.84mと頭位を広くとっている。副葬品は頭位に集中し、頭部下に小刀1振・右側に白磁碗1個白磁皿4個、この下に鉄鏃2本刀子

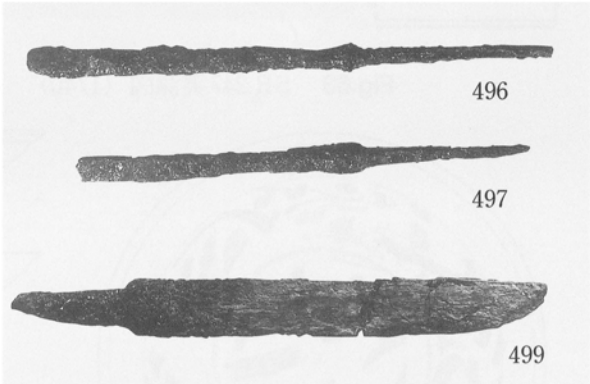
Ph.65　SR247（北から）



Ph.66　SR247遺物出土状況（東から）



Ph.67　SR247出土食器



Ph.68　SR247出土鉄器

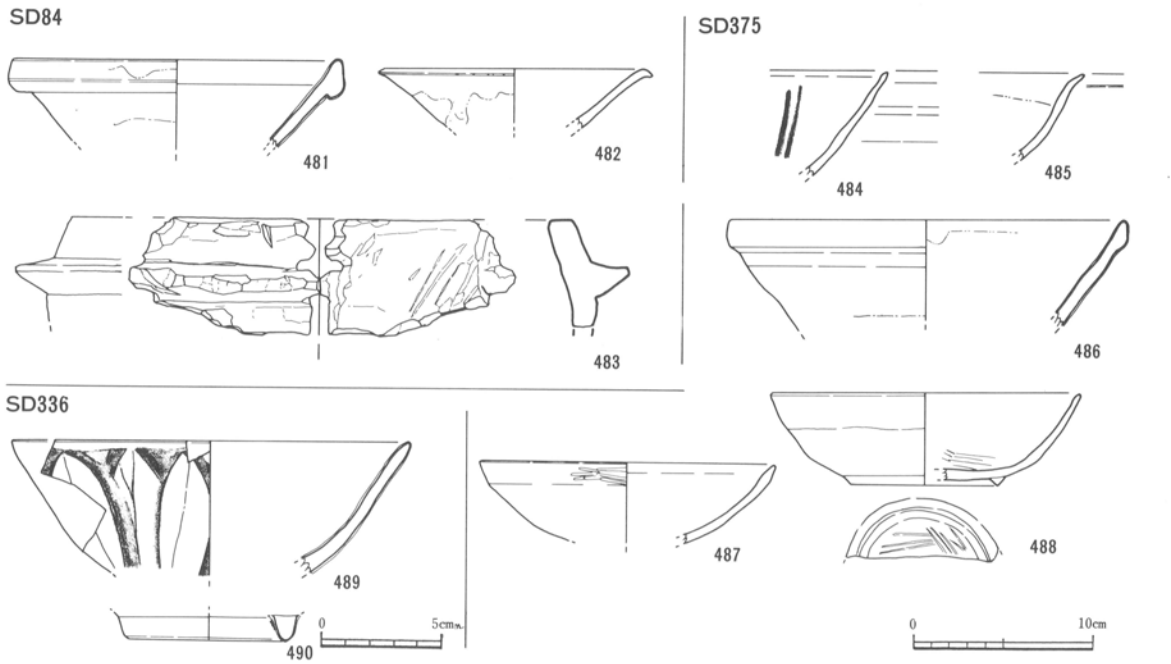


Fig.62　中世前期溝出土遺物実測図（1/3・1/4）

1本を束にして副葬している。鏃の片面に木質痕があり、木箱に入れた可能性がある。

出土遺物（Fig.64　Ph.67・68）　491は白磁の碗で口径18.8底径9器高7.7cm。胎土は灰白色、釉は灰オリーブで高台際まで掛ける。492～495は高台付白磁皿で口径器高は10.6×2.8・12.4×2.6・10.3×2.7・10.5×2.7cm。明オリーブ灰色の釉を外面中位～高台際まで施す。492・493は口縁が外反する。496・497は直剪の鉄鏃で、鏃身長10.5幅1cm厚3mm関は8mm角の台形関。残存長17.6cm。497も同形で茎長5.8残存長14.7cm。498は全長14.6cmの両刃の刀子で幅8厚4mm。関の有無は不明。499は小刀で全長33.5刀身長26幅3.5厚0.9cmの片刃造。茎・身とも木質痕があり着装して副葬している。12世紀中頃。

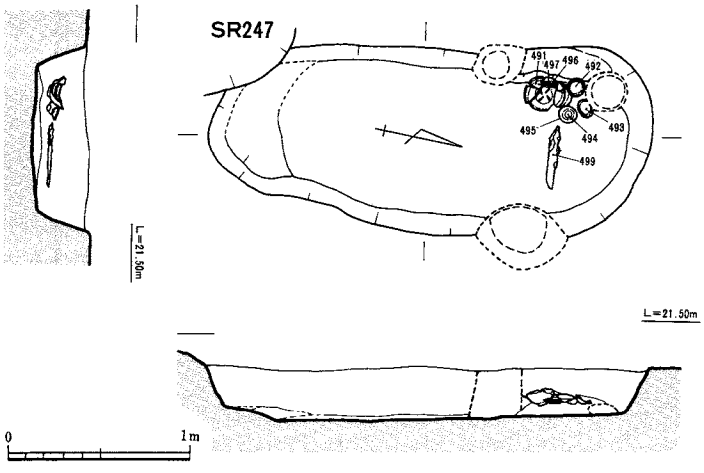


Fig.63　SR 247実測図（1/40）

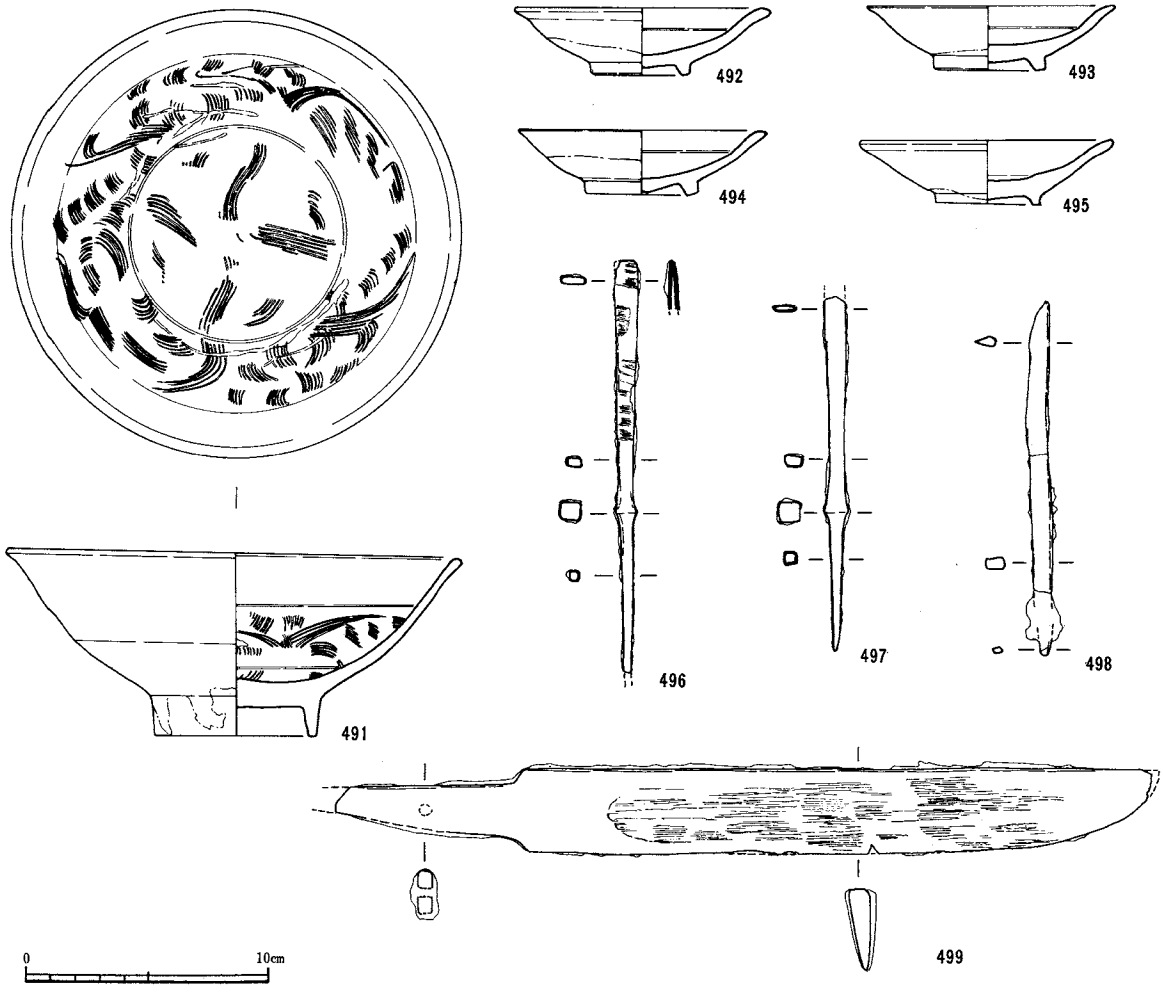


Fig.64　SR247出土遺物実測図（1/3）

2) 中世後期の遺構・遺物

弥生時代後期に次ぐ盛期となる時期で、殆どが16世紀代に集中する。戦国期の名主層の居館跡の中心地と考えられ、遺構は調査区全面に展開する。中心となるのは調査区を十字に区画する幅3m前後の4本の溝で、16世紀後半代の開削である。居館の空堀となるもので、これらによる区画を北東を縄張1、南東を縄張2、北西を縄張3、南西を縄張4と仮称する。上下3段にわたる地業も基本的には該期に実施されている。

検出した遺構は溝12条・土壙18基・墓7基・堀立柱建物1棟以上・地下式土壙27基の計65基で、全体の3割を占める。殊に27基の地下式土壙の集中は異例で市域内で最高の検出数であった。

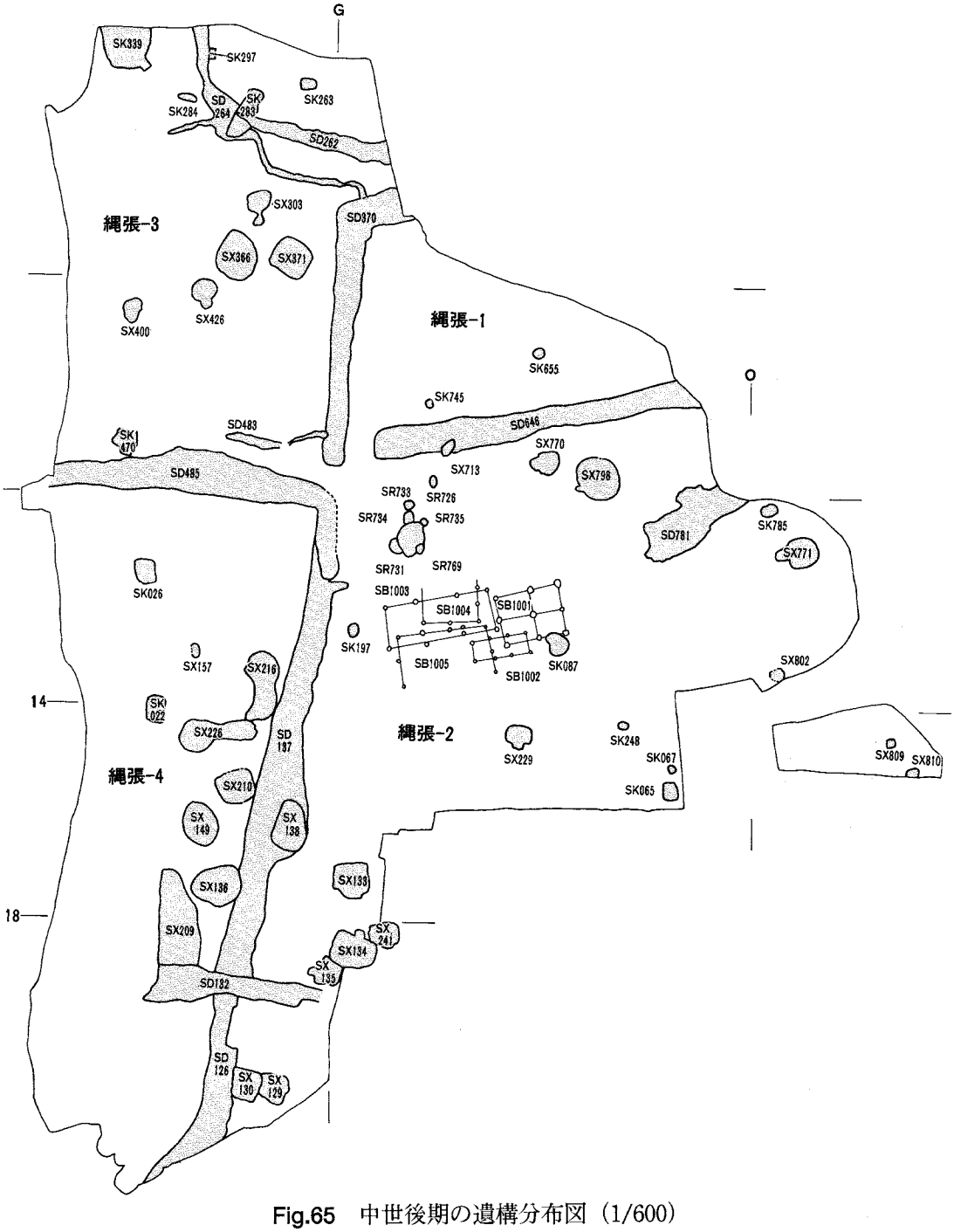


Fig.65　中世後期の遺構分布図（1/600）

① 溝

調査区を十字に四分割する大溝4条を中心とする。縄張.1を区画するSD370とSD646、縄張.2を区画する646とSD137・126、縄張.3を区画する370とSD485、縄張.4を区画する485と137・126である。さらに縄張.1の北側を区画する小溝SD264・262がある。溝は全体で12条検出しており、他の小溝はこの4本の主溝を基幹として直交もしくは並行させている。

SD370（Fig.66　Ph.69）　縄張.1と3とを区切る溝で南北方向に延び、北端は矩形に東側に屈折し、縄張.1を囲い込む。SD646との内法は南北で約18m・10間を測る。南端はSD485と2.2m、SD646と2.5mの間隔を取って陸橋部をつくっている。幅2.6～1.8m・深65～80㎝の薬研掘で北辺の外側には幅40～50mの犬走を設ける。覆土は底を二度浚えて15㎝程暗灰褐色の砂質土が堆積後、地山の掘削土で埋戻している。

出土遺物（Fig.67　Ph.70）　500は鉄釉の陶器の広口小壷で、客土出土。口径6.4器高7.2㎝を測る。胎土は暗灰色の細砂混じりで、不透明釉を底部際まで施す。外底は回転糸切り。高取系。501は土師質の湯釜で口径15.5㎝を測る。体部は上位で肩が張り、以下が深い器形となる。内外ともにハケ調整。破片のため耳の形・位置は不明。502・503は防長系の瓦質の足鍋。502は口縁部で「く」字に外反した口縁の内側端部が大きく張り出す。503は脚部の小片。15世紀後半～16世紀。

SD485（Fig.67）　縄張.3と縄張.4とを区切る東西方向の溝で底面は西に下がる。東側は南に7m直角に屈折して南北方向の区画溝の一部を成している。この南北部分の北端は2.2m、南端はSD126と40㎝の狭い陸橋部をつくっている。上半部を近世溝と地業で切られているが幅3.6～2.2m深65～140㎝の箱掘である。

出土遺物（Fig.67　Ph.70）　504は土師器皿で口径8.2底径5器高1.9㎝を測る。505は土師質の鍋で口径46㎝。口縁は若干「く」字に外反し肥厚する。口唇は平坦に仕上げ、頸部内面は低い稜を成す。外面はナデ調整で煤が付着する。内面は細かなヨコハケを施す。506は浅い体部の土師質の鍋で口径32㎝。直線的に外方に開き、端部は丸く仕上げる。外面は粗い指頭圧後ナデ調整。煤が付着する。内面は細かなヨコハケで口縁下2㎝まで炭化物が付着する。507は玄武岩製の石球の半欠品で、表面を粗い剥離で球形に整形している。16世紀代。

SD646（Fig.66）　縄張.1と縄張.2とを区切る東西方向の溝で底面は西に下がる。幅は1.8～2.6m深85㎝～100㎝を測る箱掘。西端はSD370と2.5mの間隔をとって陸橋部を設ける。土層は底に15～20㎝の灰褐～褐色粘質土が堆積後一度20～50㎝の客土がなされて深さと幅を減じ、粘質土が自然堆積した後再度客土をし、最終的に埋め戻す。

Ph.69　SD370土層断面（西から）

出土遺物（Fig.67　Ph.70）　509～522は客土出土。509は朝鮮素文青磁碗で口径11.2底径4.8器高4.3㎝を測る。腰が折れ高台は低くバチ形に開く。胎土は灰色で1～2㎜大の石英粒を多く含み粗い。釉は暗灰緑色で全面に薄く掛け、見込に5ヶ所畳付に4ヶ所胎土目が残る。510は白磁高台付皿の口縁部で胎土は白色、釉は黄白色で細かな貫入が入る。511～513は土師質の鍋で、511は口縁が玉縁となる肥前系で、外面は指頭圧痕後ナデ下位は細かなヨコハケ、内面は

調整不明。外面には煤が付着する。胎土は1～3㎜大の石英粒を多く赤色粒を少量含む。512は口径36㎝を測る。深い体部で直線的に延びて口縁が若干「く」字に外反しゆるく外湾する。端部は丸く仕上げる。内面は低い稜を成す。外面は粗い指頭圧後ナデ、内面は細かなヨコハケを施す。胎土は1

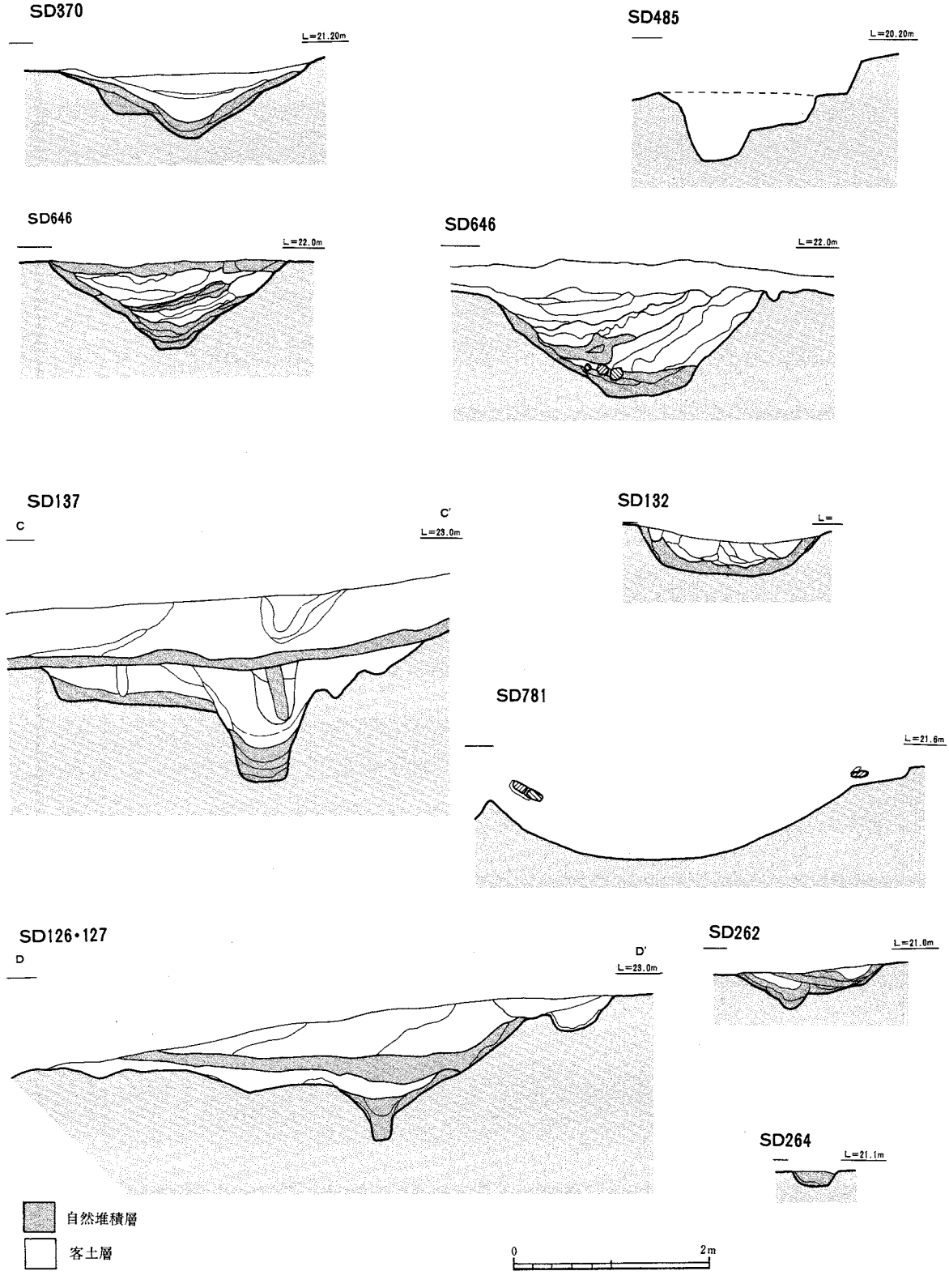


Fig.66 SD370・485・646・137・126・127・132・781・126・127・262・264土層断面図（1/60）

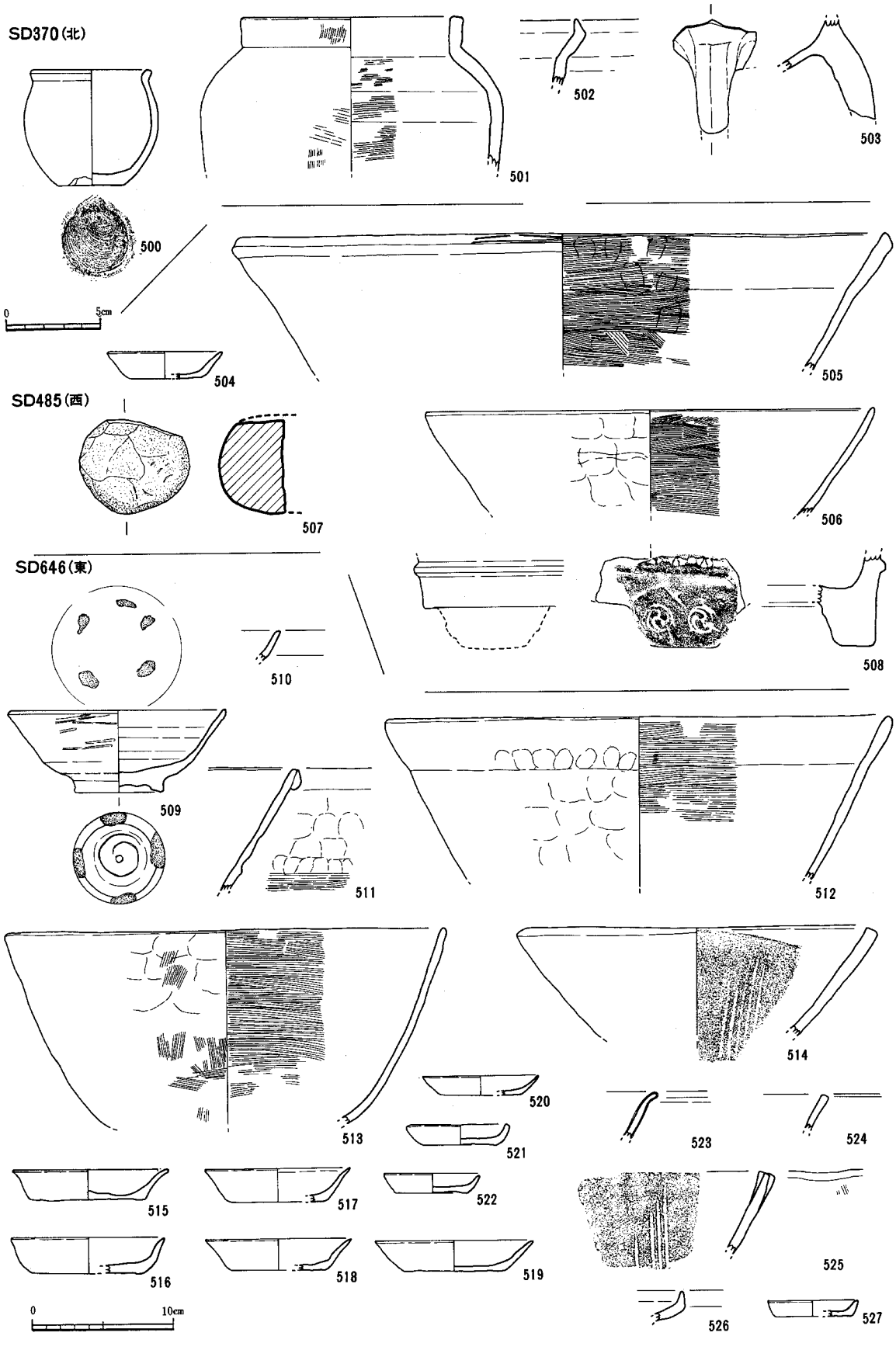
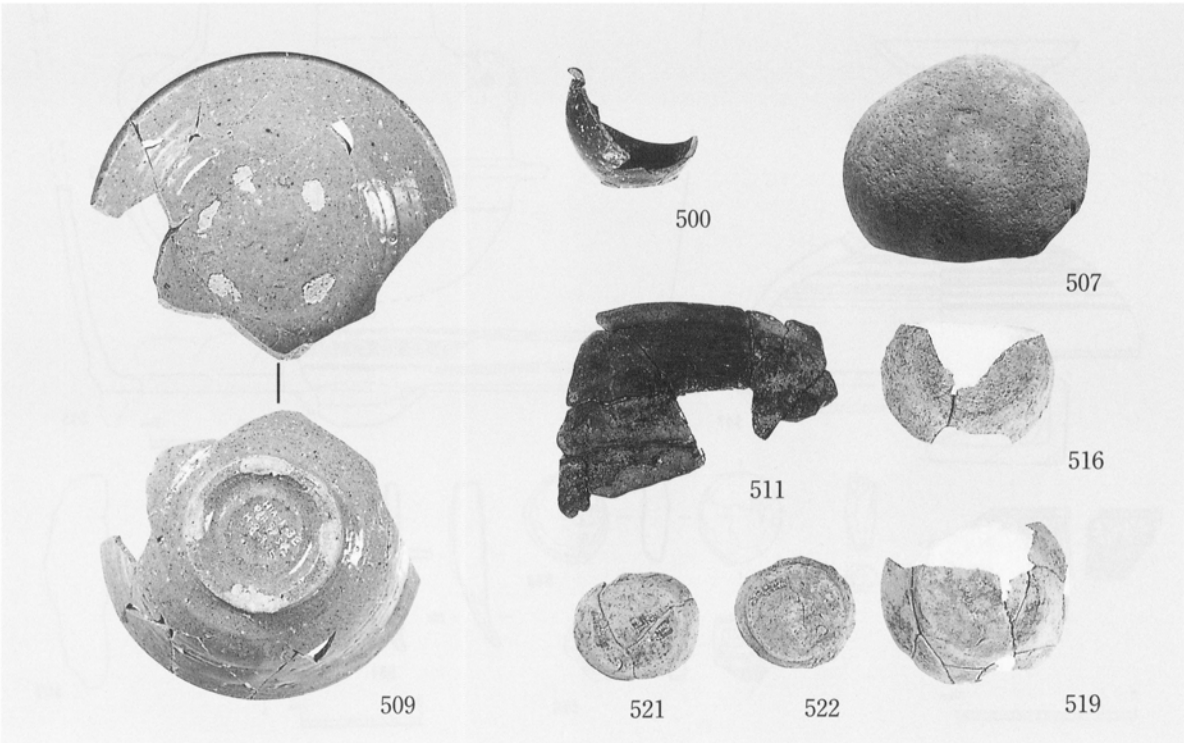


Fig.67　SD 370・485・646出土遺物実測図（1/4・1/3）

～3㎜大の石英粒を多量に含む。513はより深い直口の鍋で、口径31.2残存の器高で14㎝を測る。端部は丸く収める。外面は指頭圧後上位は細かなタテハケ下位はヨコハケが混じり粗くナデる。内面は細かなヨコハケを施す。胎土は1㎜大の石英粒を多量に含む。514は土師質の擂鉢で口径24.2㎝を測る。直線的に開く体部で口唇は平坦に仕上げ内側は強いヨコナデで凹線上になる。内面には5本単位の擂目を施し、磨耗で不明瞭となっている。細かな調整は不明。胎土は1～2㎜大の石英粒・雲母・赤色粒を多く含む。515～519は土師器坏。515は口径11底径8.2器高2.2㎝を測る。外底は右回転糸切り。胎土は赤色粒を含み精良。516は口径10.8底径7.8器高2.6㎝を測る。他と異なり体部が外湾する。胎土は1㎜前後の石英粒・赤色粒を多く含み粗い。517は口径10.4底径7.2器高2.4㎝を測る。摩滅が著しく調整は不明。518は口径10.4底径6.6器高2.2㎝を測り、体部は内湾して外反し端部を細く仕上げる。胎土は赤色粒を含み精良。外底は回転糸切り。519は口径11.3底径7.2器高2.2㎝を測る。外底は回転糸切りで胎土は精良。520～522は土師器皿。520は口径8.3底径5.8器高1.4㎝を測る。胎土は赤色粒を含み精良。調整は摩滅が著しく不明。521は口径7.3底径5.2器高1.5㎝を測る。胎土は1～3㎜大の石英粒と赤色粒を含み粗い。調整は不明。522は口径6.9底径5.3器高1.4㎝を測る。胎土は1㎜大の石英粒と赤色粒を含む。外底は右回転糸切り。

523～527は下層の自然堆積層出土。523は龍泉窯系青磁碗の口縁小片。胎土は灰白色で緻密。釉は明オリーブ色で内外に厚く掛かり細かな貫入が入る。524は朝鮮青磁の碗口縁小片で、口縁は若干内湾気味に延び器壁は薄い。胎土は淡灰色で黒色砂・石英粒を含み粗い。釉はオリーブ灰色で部分的に霧降状に白く発色し、全面に薄くかかる。525は土師質擂鉢の片口付近の口縁片。口唇端部は平坦に仕上げ内面には細かなナナメハケ後5本単位の擂目を施す。胎土は1㎜前後の石英粒赤色粒を含む。526は防長系足鍋の口縁小片で、ゆるく湾曲した口縁端部内面が1㎝弱張り出し口縁は平坦に仕上げられる。胎土は1㎜前後の石英粒を多く含む。527は土師器皿で口径6.6底径5.4器高1.2㎝を測る。胎土は1～2㎜大の石英粒・赤色粒を含む。調整は摩滅のため不明。16世紀代。



Ph.70　SD370・485・646出土遺物

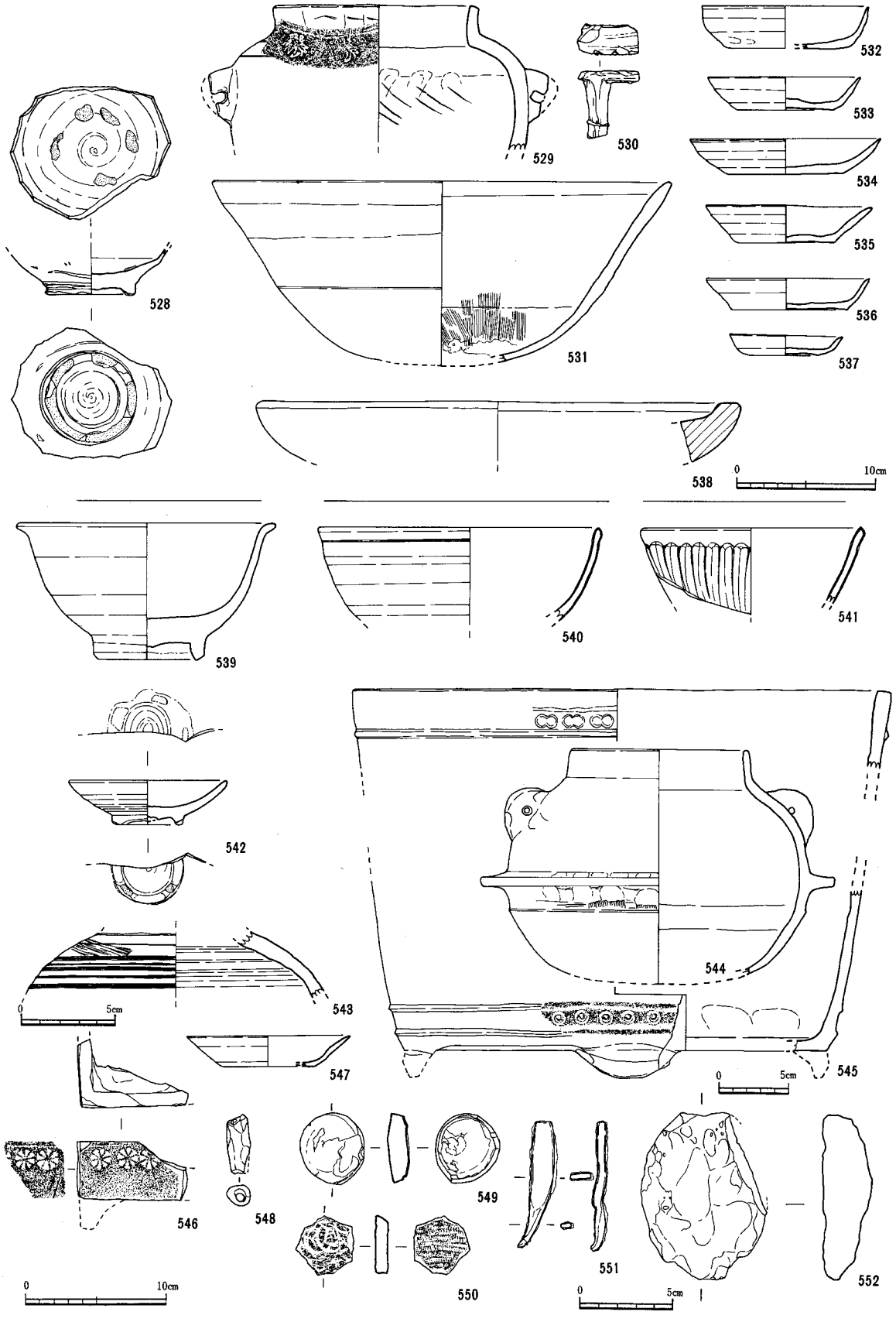


Fig.68　SD 137出土遺物実測図（1/3・1/4）

SD126・137（Fig66　Ph.71～73）　縄張.2と縄張.4とを区分する南北方向の溝で北端部は40㎝程の間隔を取ってSD485に連なっている。さらに1m程東に屈曲している。近世～現代の溝SD063に重複しており、さらに東へ延びていた可能性がある。南北方向はSD370の北辺と同じ様に1.8m程の犬走りを外側である西側に設けて深さ40㎝と80㎝の二段掘となっている。下段の溝がF18グリッド以南は幅1m深50㎝程で浅く、これを切る様にして以北により深い溝を掘削している。このためF18グリッド以北をSD137、以南をSD126と分けたが、犬走りも共有し、埋設状況も同様であるため同じ溝と判断している。またこの溝の西側に沿って幅50㎝深10㎝弱の小溝SD239を検出しており、この溝をさらに大規模に改削する格好でSD126・137が設けられている。幅は2.4～3.5m、東の法肩からの深さは2.2mを測り、今回検出した最大規模の溝である。土層は下段の溝と犬走りに10～20㎝程砂質土・粘質土が堆積後、一度底浚いを行い、後に地山土混じりの客土で埋め立てられ、平坦に地業されて耕地として転用され、砂質の強い暗黄灰色の耕作土が堆積し、役目を終えている。

出土遺物（Fig.68　Ph.74）　528～553は上層の客土からの出土。528は朝鮮素文青磁碗の下半で底径4.7㎝。竹節状の低い撥高台で体部は腰が折れる。胎土は黒色粒を多く含む灰色で釉は灰オリーブ色で厚く全面に掛け、見込に5ヶ所、畳付に長大な砂目が5ヶ所残る。529は瓦質の湯釜で口径14㎝を測る。肩部に沈線を3条施し沈線間に笹龍胆文をスタンプする。以下には細かなナナメハケを施す。530は円形の多脚の盤と思われ、灰白色で胎土は緻密。脚は型起こしで瓦質と思われる。532は土師質の鍋で口径32.8器高13.5㎝を測る。体部の2/3程で口縁がゆるく外反する。外面は煤が厚く付着し調整不明。内面は細かなタテハケで底部に炭化物が付着する。532～536は土師器坏。532は口径12器高3底径8㎝。533は口径11器高2.4底径6.8㎝。外底は回転糸切り。534は口径13.6器高2.5底径8.2㎝を測る。535は口径12器高2.8底径6.8㎝で外底は回転糸切り。536は口径11.7器高2.3底径8.3㎝。537は土師器皿で口径8器高1.5底径5㎝で外底は回転糸切り。538は粉引白下白の皿部で口径42㎝。熔結凝灰岩製。

539～552は下層の堆積土中から出土。539は龍泉窯系青磁碗で口径14器高7.3底径5.2㎝。口縁が短く外反し底部は分厚い。胎土は灰色でオリーブ

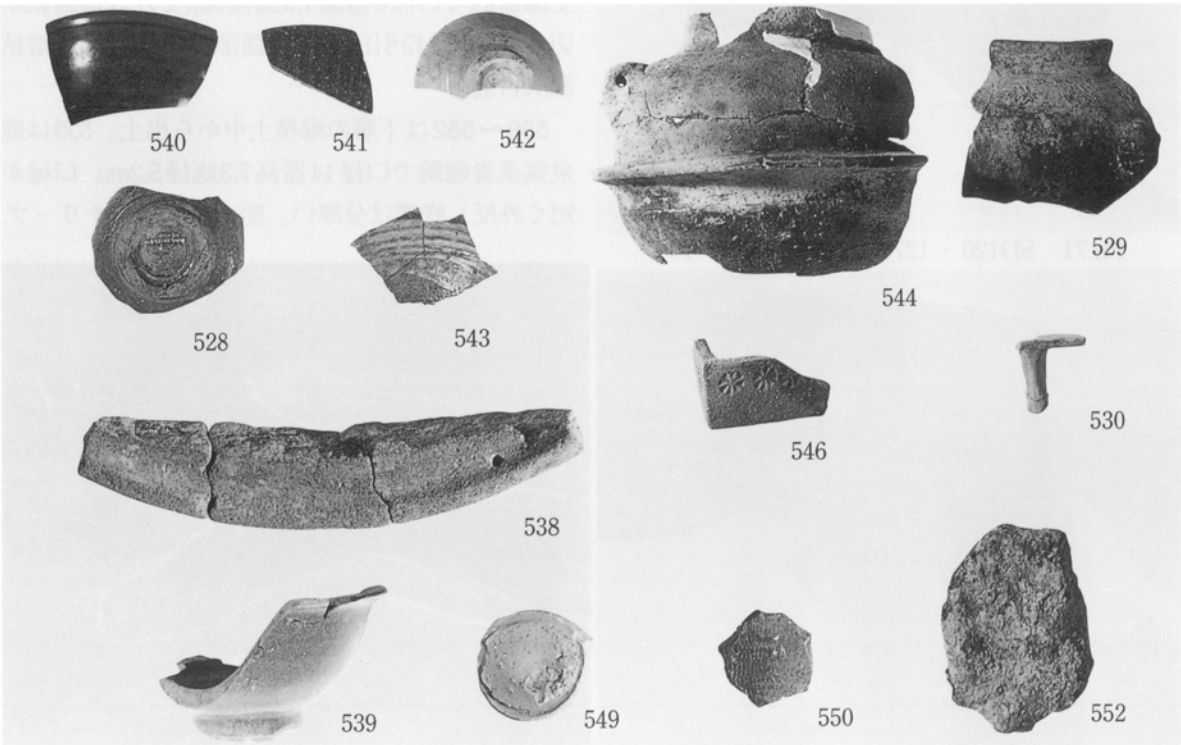
Ph.71　SD126・127土層断面（南から）

Ph.72　SD137土層断面（南から）

Ph.73　SD137陸橋部（南東から）

灰色で高台内側まで厚く掛け氷裂が入る。露胎部は赤茶色に発色する。540は景徳鎮窯系の青磁碗で口径15㎝を測る。口縁外面下を片切状に削り玉縁状に若干張る。外面には口縁下まで回転ケズリ痕が明瞭に残る。胎土は灰白色を呈し釉は厚く灰オリーブ色を呈して透明である。541は龍泉窯系青磁の小碗で口径12㎝を測る。外面には片切彫で細かな鎬蓮弁を施文する。胎土は灰白色で緻密。釉は白く半濁した灰オリーブ色で厚く掛ける。542は高台付の白磁皿で口径8.7器高2.3底径3.8㎝を測る。高台は4ヶ所弧状に抉り4脚となっており、見込にはこの重焼痕が残っている。胎土は白色で黒色微粒子を多く含み、釉は黄味を帯びた白色で全面に施釉し細かな貫入が入る。543は朝鮮粉青の壷の肩部で2条の沈線と5条の白土象嵌の圏線を施し一部に刷毛目が重なる。胎土は黒色粒・白色粒を多く含む灰白色で、釉は外面にのみ灰オリーブの半濁した釉を薄く掛ける。頸部で径11㎝を測る。544は瓦質の湯釜で、口径12.7器高17㎝を測る。胎土は1～2㎜大の石英粒を多量に金雲母も多く含む。545は瓦質の火舎で口径37.6復原器高40㎝程か。口縁下と底部脇に2条単位の低い三角突帯を貼付し、それぞれ突帯間に双円文・巴文を印文する。脚は4脚と思われる。546は角形の浅鉢で隅角の脚を欠失するが高さ4㎝を測る。土師質で口縁下に沈線を1条、直下に径15㎜の菊花を連続して印花する。547は土師器坏で口径11.6器高2.2底径5.4㎝を測る。器壁は摩滅で調整不明。548は土錘で両端を欠くが長4.2幅1.7㎝孔径6㎜を測る。胎土は金雲母を若干含み緻密。549は白磁碗の高台を打ち欠いて作った瓦玉で径4.6～5㎝厚1.4㎝を測る。高台部分を丁寧に打ち欠いて小さく仕上げている。550は古墳時代須恵器甕の胴部片を用いて作られた瓦玉で周縁を細かく打ち欠いて円形に近づけている。径4.2～4.1㎝厚9㎜を測る。ともに遊具と考えている。551は鉄器で全長7㎝、上部で幅12厚2㎜の方形で下半が片側で弧を描いて2㎜角まで尖がり、複雑に捻じれている。先端が勾状に曲がっており、鉄等の吊手の可能性も考えられる。552は椀形の鍛冶滓で、径8.8～6.8厚2.6㎝を測る。下面がゆるい弧を描き炉底の酸化土砂が熔着する。

全体的に下層は15世紀代の資料が多いが16世紀代資料を混じ、上層の客土は16世紀後半代までを含んでいる。



Ph.74　SD137出土遺物

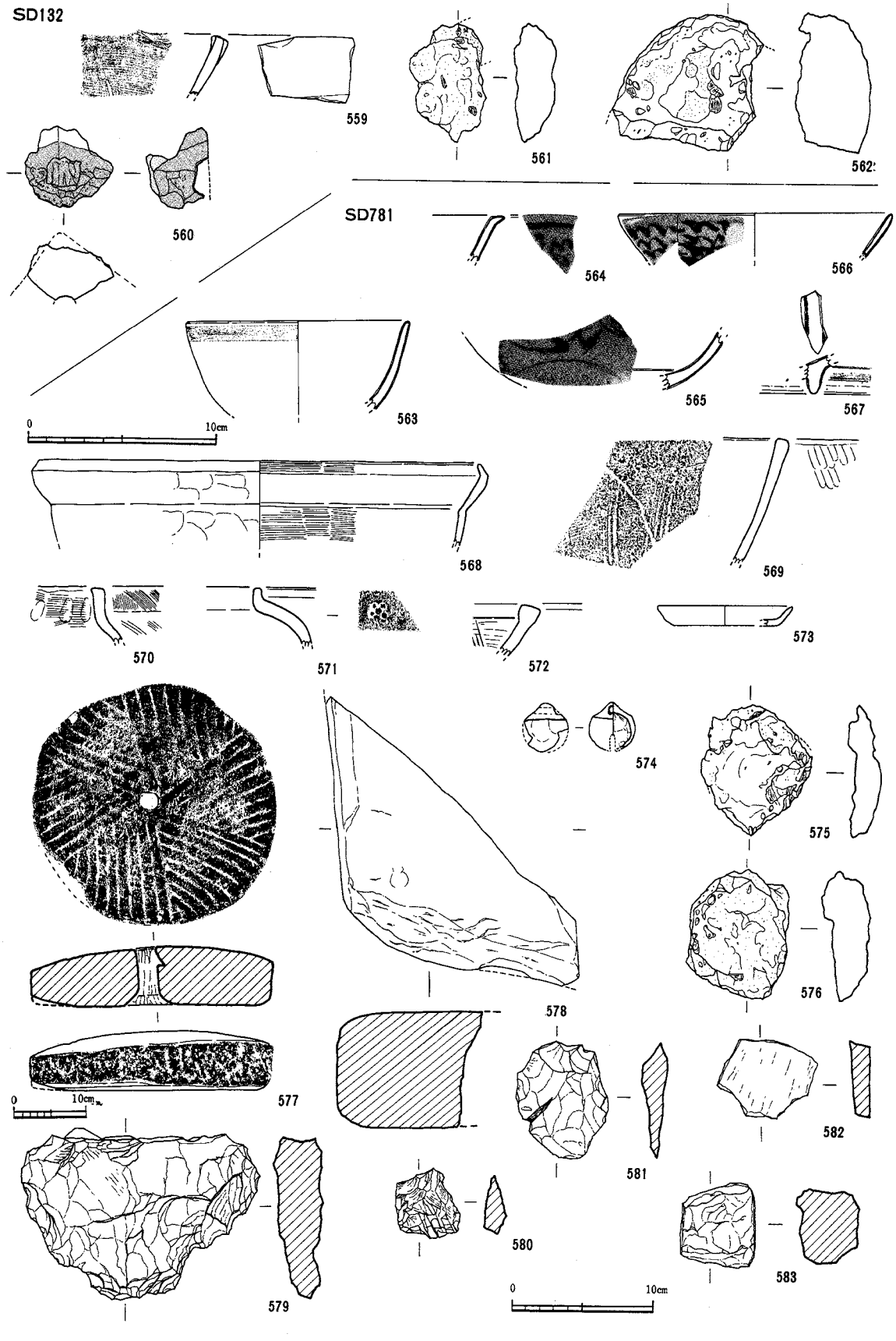


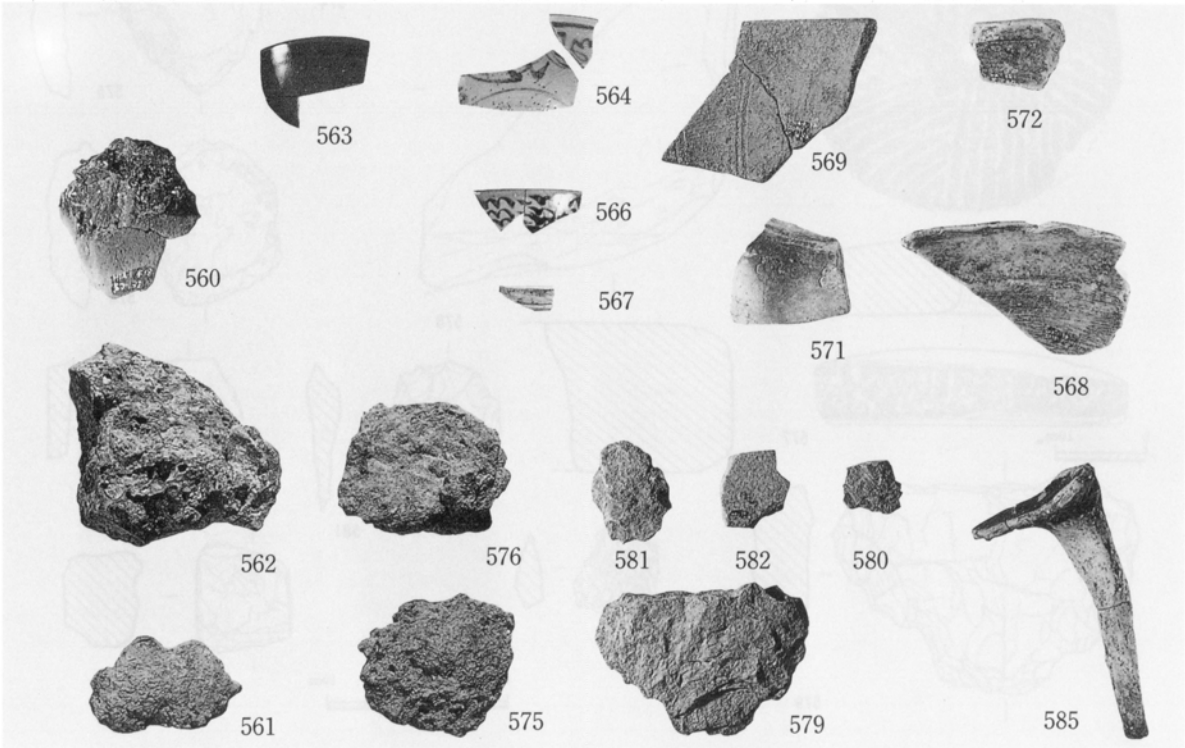
Fig. 69 SD 132・781出土遺物実測図（1/3・1/4・1/8）

SD132（Fig.66）　Ⅱ区南側でSD126埋立後に東西方向に掘削された溝でD～F19グリッドに位置する。幅1.8～3.4m、深35～60㎝と浅い。覆土は底に暗橙色土が10㎝程堆積後地山土混じりの客土で埋め戻されている。

出土遺物（Fig.69　Ph.75）　559は土師質の擂鉢の片口付近の小片で、内面には細かなヨコハケ後擂目を刻んでいる。胎土は2㎜以下の石英粒を多く含む。560は吹子羽口の小片で、稜が通り、断面8㎝程の方形を呈しそうで送風孔は小さく径1.5㎝である。561・562は鉄滓で、561は含鉄椀形鍛冶滓で径8.4～5厚2.7㎝重量128.6g。破面には多数の気泡・木炭痕がある。562は精錬鍛冶滓で10×9.5×5㎝と厚い。炉底粘土が熔着する。鍛冶滓が多く14点と多く出土している。

SD781（Fig.66）　縄張.2の北東部に位置し、北東側に流れる自然の小谷で幅4.4深55㎝を測り、底面は船底形を呈する。上部には石臼が埋設する。

出土遺物（Fig.69　Ph.75）　563は龍泉窯系の青磁碗で口径12㎝を測る。口縁下は凹線状に削られ口唇が玉縁状を呈する。胎土は灰白色で釉は灰オリーブ色を呈する。564・565は青花碗で、564は端反りの口縁部。口縁下に圏線を1条、以下に草花文を呉須で描く。胎土は白色で釉はやや青味を帯びた透明釉で呉須はぼやけた淡い藍色を呈する。565は同個体と思われる碗の下位の小片で、高台脇の圏線上に草花文を描く。呉須・釉調は同様で外面にピンホールが目立つ。566は青花の皿で口径14.4㎝を測る。外面には呉須で水波文を描く。胎土は白色。釉は青味を帯びた透明釉で呉須は濃い藍色を呈する。567は赤絵の皿の高台部で、上絵付で見込に圏線2条、高台脇にも2条施すが、殆ど剥落している。赤茶色を呈する。胎土は灰白色で黒色微粒を含み釉は半濁した乳白色で全面に施釉後、畳付の内外をカキ取る。568は瓦質の防長系の足鍋の口縁部で径31㎝を測る。「く」字にゆるく外反してゆるく外湾し端部が内面に高く張り出す。胎土は1㎜前後の石英粒を多く含み灰白色。外面は煤が多量に付着し、口唇の反りと体部に細かなヨコハケを施す。569は土師質の擂鉢で器壁が薄く口唇は平坦に仕上げる。内面はヨコハケ後4本単位の擂目を刻む。570・571は瓦質の湯釜の口縁小片で、570は口縁外面に細かなタテハケ、以下と内面に粗いナナメハケとヨコハケを施す。胎土は1㎜大の



Ph.75　SD132・781・262出土遺物

石英粒と赤色粒を多く含む。571は短頸で端部は丸く収める。外面はヨコナデ後肩部に梅花文のスタンプを施す。572は瓦質の防長系の擂鉢で、口唇内面が肥厚して段を成している。口縁は広い平坦面をつくる。外面はヨコナデ、内面の段以下にヨコハケ後擂目を3条以上刻んでいる。胎土は灰白色で1～3㎜大の石英粒を含む。573は土師器の皿で、口径9.6器高1.4㎝を測る。器面が摩滅し調整は不明。12世紀末～13世紀前半の産。574は土鈴で高3.5径3.3㎝を測る。上位に浅い沈線を1条巡らし、以上をつまみ上げて尖がらせ横から紐穴を穿孔している。胎土は精良で淡黄色を呈する。575・576は椀形鍛冶滓で、径9.2～7.8厚1.7㎝重量170.7gを測る。上面中央が窪み下面はレンズ状となり炉底の土砂が熔着する。周縁には大きな木炭痕が多く残る。576は含鉄椀形鍛冶滓で径9.1～7.0厚3.3㎝と厚い。底面はレンズ状で炉底の土砂が焼き付いている。上面・左側面には木炭痕が多数残る。577は粉引臼の下臼で径34.7厚5.5～8.2㎝で上面が使用によって凸面状に減っている。芯棒穴は径2.4㎝。溝は6分割主溝で、それぞれに8本の副溝を刻む。側面と底面には刃付鉄鎚のタタキ整形痕が残る。熔結凝灰岩製。578は砂岩製の方形に整形された石で厚8.2㎝で各面は磨かれており石塔の一部と思われる。579～583は戦闘時の「礫」と思われ、周縁に交互剥離を施し縁を鋭利にしたり剥離で隅角を増やし殺傷力を上げている。石材は583が花崗岩の他は砂岩製でいずれも石塔類を転用した可能性が高い。整理中19個集中して出土したため「礫」と気付いたが、大多数は剥離のある石片として処分してしまっている。重量は810・34・89・74・216gを測る。16世紀代。

Ph.76　SD262土層断面（西から）

SD262（Fig.66　Ph.76）　縄張.3の北東側でSD264を切ってSK339と連結すると思われる溝で幅1.15m深35㎝の小溝で西に底面が下がる。断面では2度の改削が確認できる。

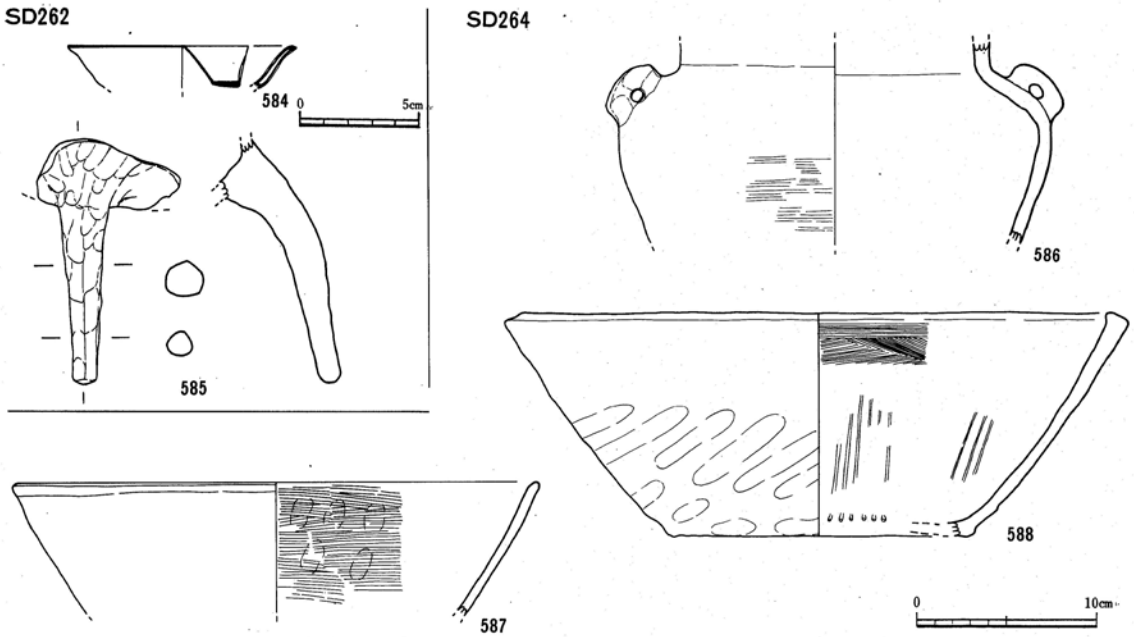


Fig. 70　SD 262・264出土遺物実測図（1/3・1/4）

出土遺物（Fig.70　Ph.75）　584は明青花の皿で口縁は端反り。径9.6㎝。見込に圏線を1条施す。585は防長系足鍋の脚で瓦質。脚長11.5㎝。16世紀代。

SD264（Fig.66）　縄張.3でSD370から分岐し北西に15m程延びて屈曲し北に延びて囲い、一部は西側に延びている。幅60～45深15㎝程の小溝で砂質の暗黄褐～暗灰褐色土が堆積する。

出土遺物（Fig.70）　586は瓦質の湯釜で肩の位置が高く把手は頸部に付く。胴径で24.4㎝を測る。587は土師質の直口鍋で口径29㎝。口縁下が若干くびれ端部は丸く仕上げる。外面は指頭圧後ヨコナデ、内面は細かなヨコハケを施す。588は土師質の擂鉢で口径32器高12.4底径16.3㎝を測る。底部脇はくびれ口縁内側が若干張り出す。内面はヨコハケ後6本の擂目を施す。16世紀代。

②　地下式土壙

該期を特徴づける遺構で古墳時代南九州の墳墓である「地下式横穴」との混同を避け、「地下式土壙」とした。調査域で26基検出し、数量では県下随一である。地元の人の言では北に隣接する民家が池を掘削した際、底が大きく陥没したと言い、実際調査区の2基は天井の空間が残っていた。よって屋敷に伴ってさらに南北に広がる可能性がある。構造は基本的に竪坑とこれに接して掘られた主室とからなり、横方向のトンネル状の羨道はつくらない。主室は平面長方形と円形があり、前者をA類・後者をB類とした。竪坑は主室と同一平面の床を成す1類と1～3m高い2類がある。床面積は2～13㎡と幅広い。分布は縄張.2建物群の東側から北にかけて7基・南側で1基・南西側で14基・縄張.3で5基がまとまっている。16世紀代の区画溝に切られるものがSX130・138・713の3基あり一部は明かに溝に先行する。殆ど天井は落盤し遺物も流れ込みと客土中が殆どである。

SX303（Fig.71　Ph.77・78）　縄張.3に位置し、SX366・371と対面する。竪坑は1.05m四方で深0.9m、主室の床まではこれを更に1.3m掘り下げ、間に4段の足掛かりを掘っている。主室は3.58×2.18mの方円形で高さ2.1m程のドーム天井と思われる。天井は2度に渡って崩落しており、上部1.5mは客土で埋め戻している。B2類。

出土遺物（Fig.73）　589は土師質の鍋の小片で、口縁は直線的に外傾し端部は細く仕上げる。外面は指頭圧後ヨコナデ、内面はヨコハケを施す。

SX371（Fig.71）　縄張.3で303と対面する。A1類で、上部の崩落が著しく、上半部は近世のゴミ穴に転用されたため竪坑は残りが悪く床上1.7m程の位置に90×60㎝程の方形に残る。床面までには2ヶ所の足掛りを掘っている。主室は2.3×1.7mの方形で天井高は2m前後と思われる。床面に20㎝程流土が堆積後一気に落盤し、上50～1mは埋め戻している。

出土遺物（Fig.73　Ph.81）　591朝鮮軟質白磁の碗で底径5㎝。高台は竹節に近い。胎土は茶灰色

Ph.77　ＳＸ303（南西から）

Ph.78　ＳＸ303竪坑

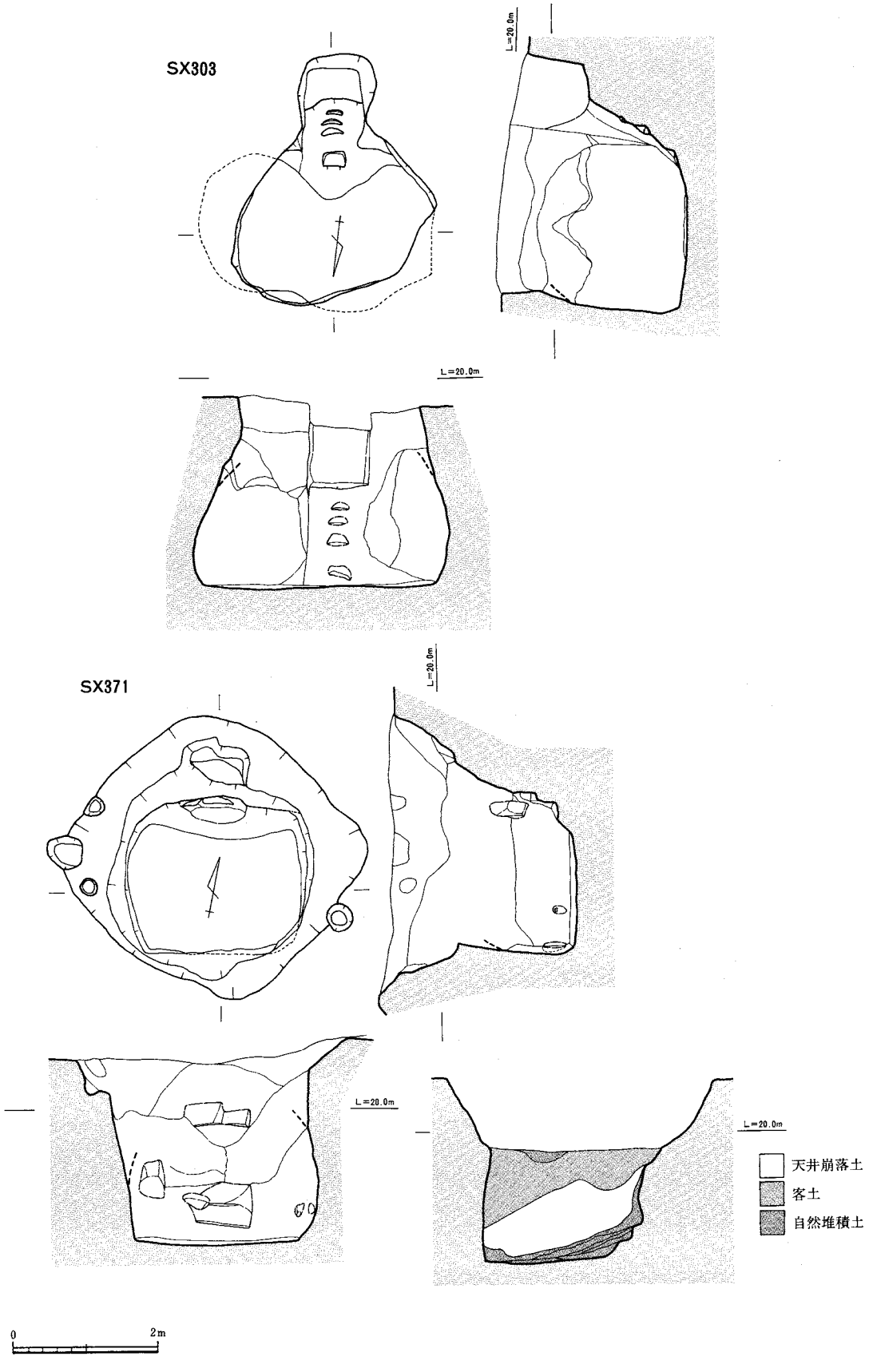


Fig. 69 SX 303・371実測図（1/4・1/8）

で粗く、釉は青味を帯びた灰白色で不透明。全面に厚く掛け見込と畳付に砂目が6ヶ所残る。591は青磁の壷で底径6.1㎝。胎土は黒色微粒を含む灰色で磁質。釉はオリーブ灰色の透明で外面全面に掛け畳付はカキ取る。内面は右回転ナデで露胎。592は土師質の擂鉢で内面はヨコナデ後ゆるいケンマを施し6本の擂目を刻む。593は瓦質湯釜で胴径24.2㎝。594は熔結凝灰岩製の粉引臼の下臼の受鉢部で径39㎝。側面に刃付鎚のタタキ痕が残る。全て上層出土。16世紀後半～末。

SX400（Fig.72　Ph.79・80）　縄張.3の西側に位置し、東側に開口するB2類。竪坑は径1.2mの円形で床上1mの位置にある。主室は小さく、2.5×1.9の円形。天井高は2m前後と思われる。床には20㎝前後の花崗岩礫が数個有る。天井が長く残った様で床から1.5mまでは流土で埋まっており、その間2度小規模の落盤が起こり3度目に崩壊して、埋められている。

出土遺物（Fig.73　Ph.81）　595～600は客土出土。595は朝鮮青磁碗。底径4.8㎝で胎土は茶・黒色粒を多く含む灰色でオリーブ灰色の半濁釉を全面に掛け畳付はふき取る。見込と畳付に胎土目が残る。596は朝鮮軟質白磁碗で口径11.3器高4底径4.4㎝。ベタ高台で脇がゆるくくびれゆるい上底。

Ph.79　ＳＸ400土層断面（北から）

Ph.80　ＳＸ400（南から）

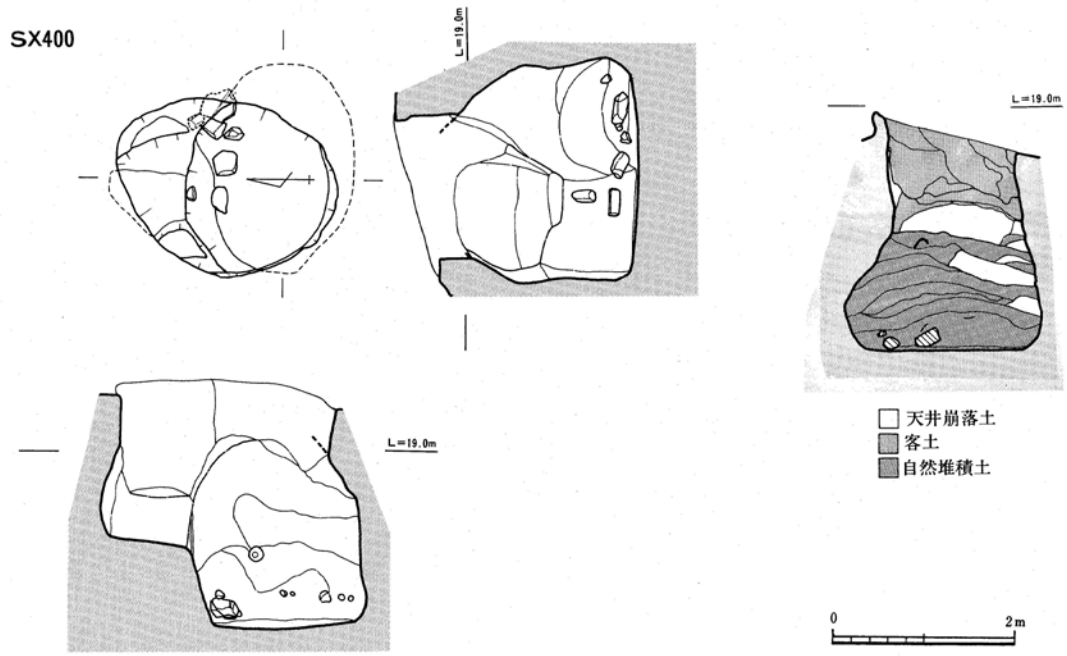


Fig.72　SX400実測図（1/80）

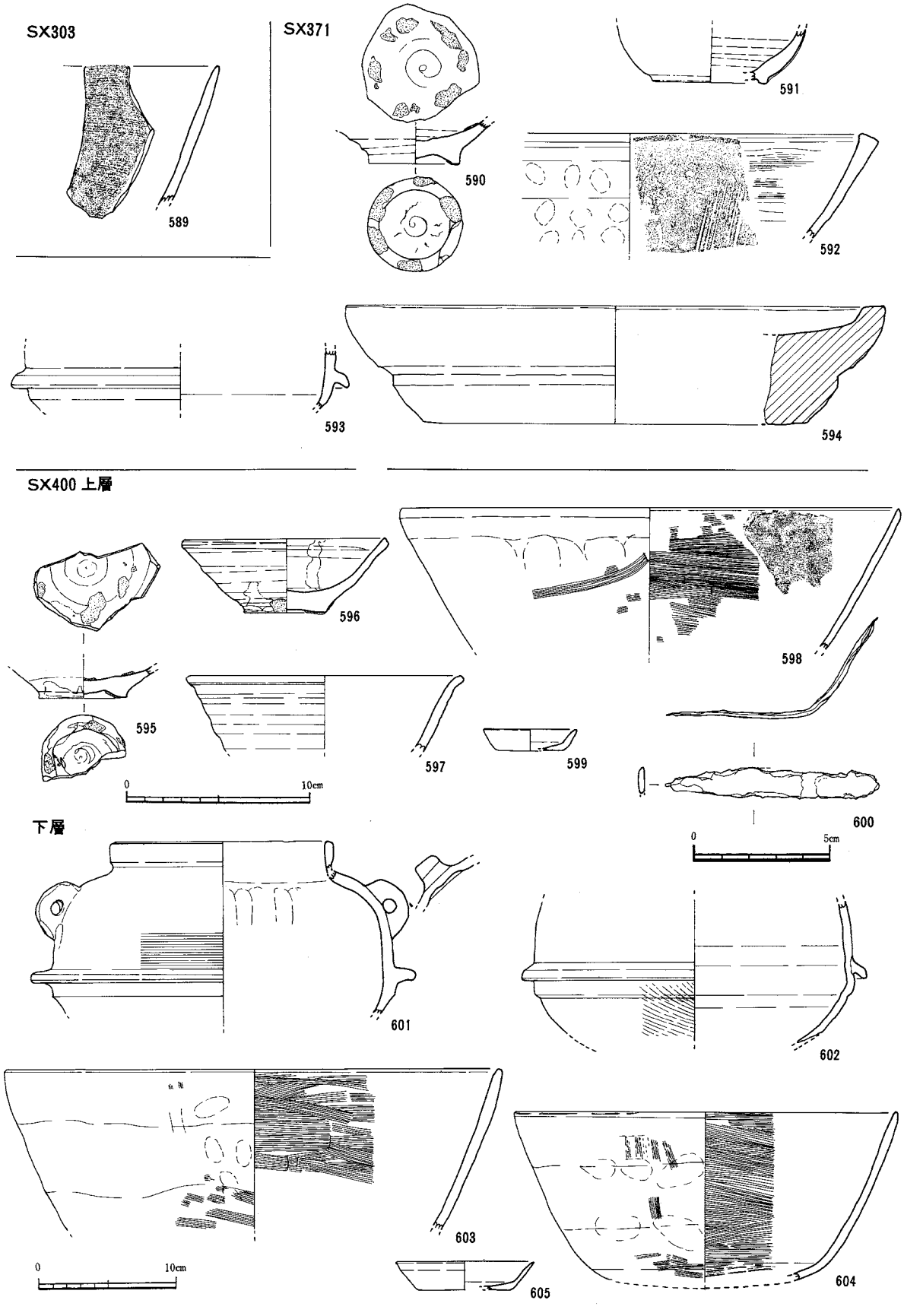
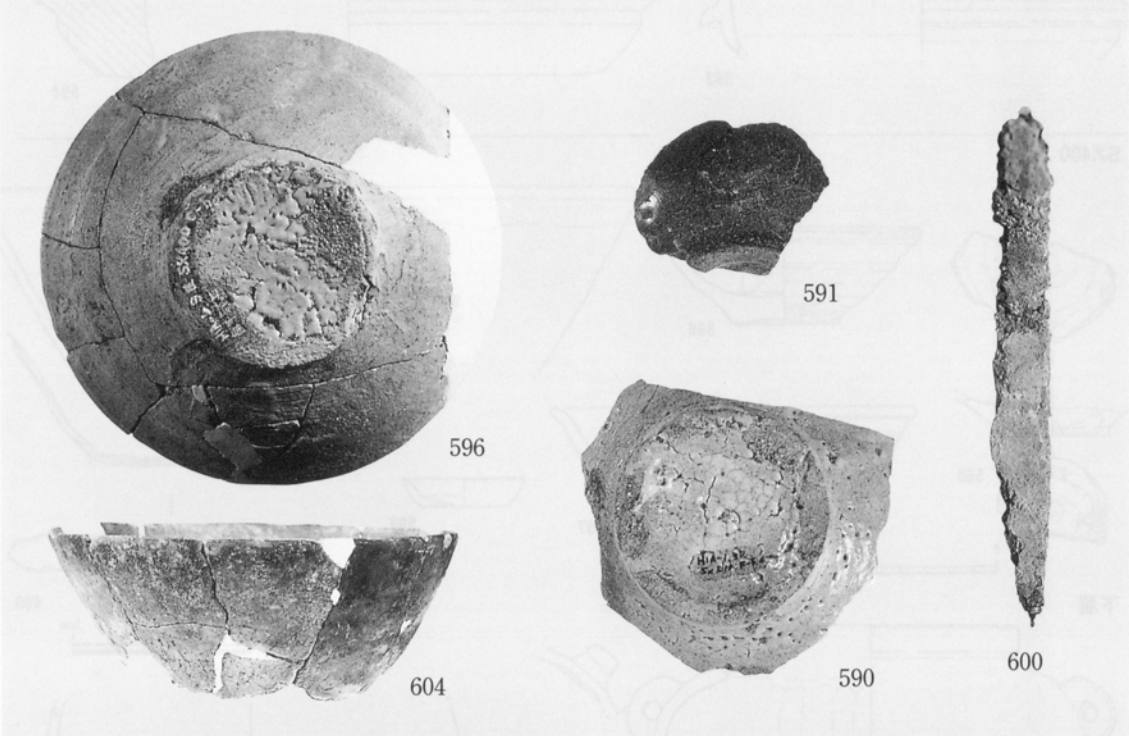


Fig.73 SX303・371・400出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

胎土は淡黄色で軟質。釉は淡黄色の不透明で全面施釉。見込畳付に砂目が3ヶ所残る。597端反りの白磁碗で口径15.2㎝。器壁がやや厚く胎土は磁質で灰白色。釉は灰白色透明で細かな貫入が入る。598は土師質の鍋で口径36.4。外面に煤が厚く付着する。599は土師器皿で口径6.8器高1.6底径4.9㎝で外底は回転糸切り。600は銅製笄で曲がっている。長7.7㎝。16世紀後半～末。

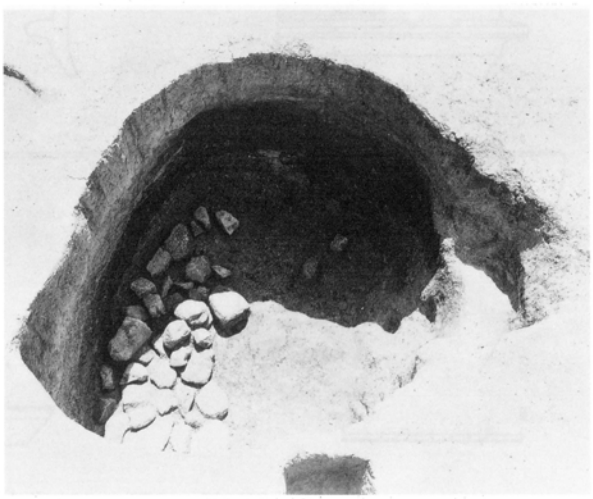
601～605は下層出土。601は瓦質の湯釜で口径18.2。内外ともヨコハケ後ヨコナデ・ケンマを施す。602も湯釜で胴径25㎝。鍔の下が浅い段を成し粗いナナメハケ後ヨコナデを施す。603・604は土師質鍋で603は口径36㎝、604は口径27.8器高12.2㎝を測る。605は土師器坏で口径10器高2.1底径6.2㎝を測る。16世紀代。

SX713（Fig.74　Ph.82）　縄張.2の北西端に位置し、区画溝SD646に切られるA2類。西に開口し、床から1.3m上に80㎝四方の方形の竪坑を掘削し床との間に2ヶ所足掛かりを掘削する。主室は2.2×1.7mの方形で天井高は1.8m程か。 床上に20㎝前後の花崗岩礫を10数個置いてあり床束と



Ph.81　SX 371・400出土遺物

Ph.82　SX 713



Ph.83　SX 770

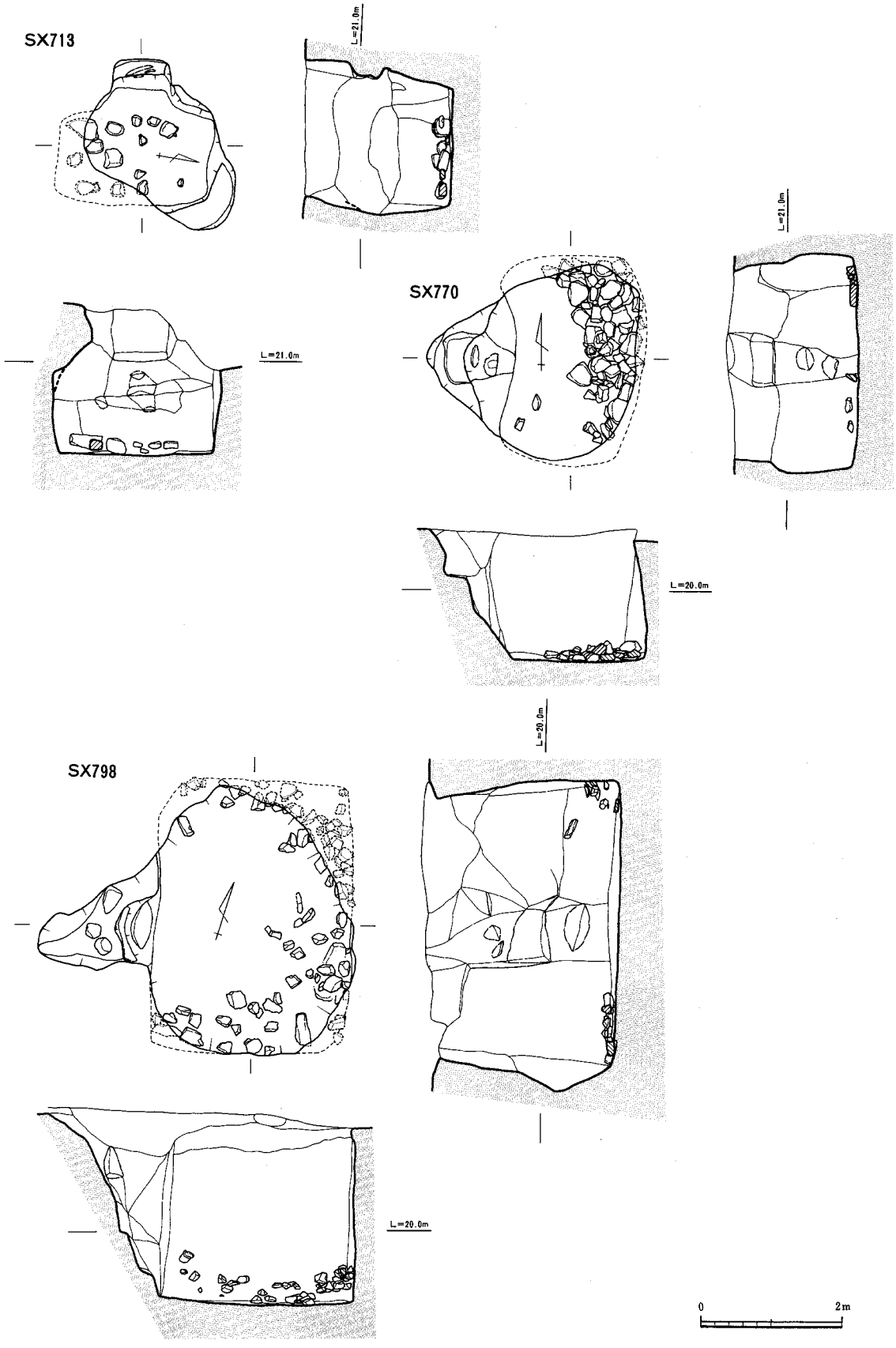


Fig. 74　SX 713・770・798実測図（1/80）

なる可能性がある。

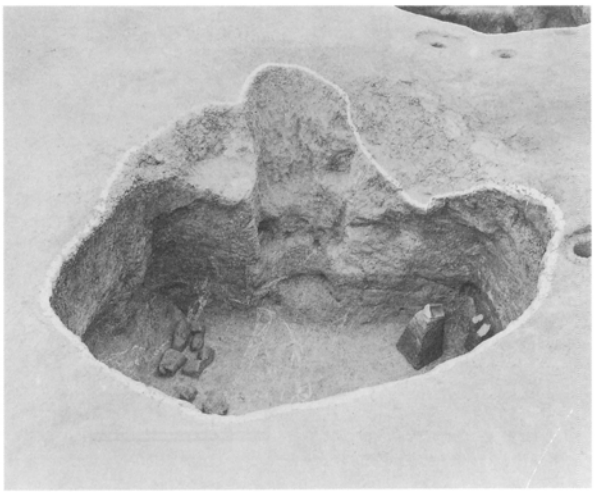
出土遺物（Fig.75　Ph.86）　606は端反りの青花皿で、外面は圏線間に牡丹唐草文を、内面は口縁に四方襷文を施す。胎土は白色、釉はやや青味がかった白色でやや厚く呉須は鮮青色を呈する。607・608は銅製の飾金具で内側が袋状となるが変形が著しい。長5.6・5㎝を測る。16世紀後半。

SX770（Fig.74　Ph.83）　SX713の東側9m程に位置する。西側に開口するA2類で、床から90㎝上に55㎝四方の竪坑を設け、床までの間に2段の足掛りを設ける。主室は2.2×1.4mの隅丸方形で、天井高は1.8m程か。主室奥の床面には20㎝大の花崗岩礫が幅1m程敷かれている。

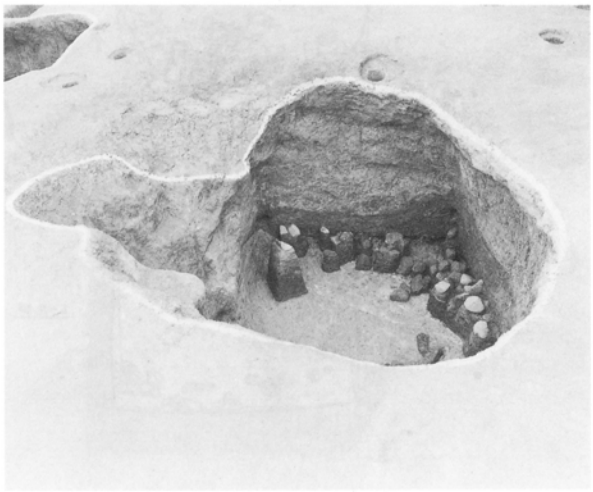
出土遺物（Fig.75　Ph.86）　609は端反りの白磁高台皿で、口径12.3器高3底径6.9㎝。胎土は白色、釉は灰白色で全面に掛け畳付はカキ取る。敷砂が焼き付く。610は端反りの青花高台皿で口径18.8器高3.8㎝。胎土は白色で釉はやや青味を帯びた白色で全面施釉後畳付をカキ取る。内面は見込に二重圏線を施し内側に文様を描く。呉須は群青色。611は瓦質の湯釜で口径16.8㎝。口縁外面にタテハケ後カキメを施す。頸部には二重沈線を刻む。612は瓦質の火舎で口径39㎝。肩が張り口縁は屈曲して垂直気味に立ち内外面が肥厚する。頸部には3本単位の刻みを施す。613・614は土師器皿でそれぞれ口径11.2器高1.6・口径6.9器高1.2㎝を測る。614は糸切り。15世紀末～16世紀。

SX798（Fig.74　Ph.84・85）　縄張.2のSX770東2m程に位置するA2類。西に開口し、径80㎝程の円形の竪抗が床上80㎝程の位置に設けられる。床面までに大きな足掛りを1ヶ所、上部に2個並設して設けている。主室は4×2.8mの長方形の大型で天井高は2.5m程であろう。床面の両側壁と奥壁付近には20㎝前後の花崗岩礫が散乱し、北側は床から50㎝程浮いている。

出土遺物（Fig.75　Ph.86）　615は肥前系の白磁小坏。口径7.2器高4.8㎝。全面施釉後畳付をカキ取り。敷砂が付着する。616は肥前系辰砂の壷（巻頭.6）の胴部で底径4.5残存高5.4㎝を測る。胎土は白色で磁質、釉は青味を帯び半濁した灰白色で外面に厚く掛け畳付はカキ取り、敷砂が付着する。辰砂は暗赤褐色を呈し頸部に2条胴部1条の圏線間に草竹文を施文する。619は肥前系染付の瓶で胴径9.7㎝。胎土は白色で釉は透明で外面のみに掛け、外面に横縞模様を施す。呉須は暗青色。618は唐津鉄絵小碗で口径11㎝。胴が張って内反する口頸部で口縁外面は玉縁状を成す。胎土は粗く鈍い橙色で、釉は内面から外面上半に灰黄色の半濁釉を薄く掛ける。露胎は赤褐色。胴部には鉄絵で丸文を施す。619は瓦質の壷で口径22.5㎝。内外にハケを施す。620は土師質の角鉢で器高6.1㎝を測る。脚は隅角に付き境に沈線を施す。口縁下外面にはスタンプで双渦文を施す。621は瓦質の大甕で口径43.6㎝。短頸の口縁下に沈線を1条施す。体部内面は粗いヨコハケ、外面はヨコハケ後ヨコナデ、強く張る肩部下はツヤ消し状にケバ立てている。622は土師器皿で口径8.3器高1.5底径6.4㎝で外底は回転糸切り



Ph.84　ＳＸ798（東から）



Ph.85　ＳＸ798（南から）

Ph.86　SX 713・798出土遺物

を施す。623・624は軒丸瓦で、623は瓦当の半分を欠くが、径15㎝程で、珠文の内側に三巴文を施す。全長27.7㎝で、18㎝程後の中央に径1.2㎝の釘穴を穿ける。玉縁は短く2㎝程。624も丸瓦の瓦当で三巴文の中心がズレている。径13㎝程。625は二段に重なった椀形鍛冶滓で、径10～8㎝厚5.6㎝を測る。上面には木炭痕が多く残り底面には炉底土砂が付着する。近世の攪乱で18世紀代までの資料を含んでいる。

SX771（Fig.76　Ph.87）　縄張.3の東端に近く、西に開口するB2類で、床上76㎝程に1.75×1mの副室を設け、さらに85㎝上に径1.2mの円形の竪坑を設けている。主室は径3.2～1.9mの円形で奥壁側に幅1m程花崗岩礫をまばらに敷いている。天井高は2m程か。

出土遺物（Fig.77）　626は明青花碗の小片で外面は圏線上に省略した唐草文を、見込に圏線を2条施す。627は高取系の陶器小鉢で口径10.1㎝。腰が屈曲し口縁は直上に延びる。胎土は白色砂を多く含む黒灰色。釉は内面から外面上半は飴釉以下に藁灰釉を施す。628は備前Ⅳ期の擂鉢の片口部、629は土師器皿で口径6.8器高1.7底径5㎝を測る。外底は回転糸切り。灯明皿で芯痕が2ヶ所残る。15世紀～17世紀初。

Ph.87　SX 771（東から）

SX229（Fig.76　Ph.88・89）　縄張.3の建物群の南にある1基でA2類。南に開口する。床上1.2m程上位に1.1m角程の竪坑を設ける。この間に足掛りはない。主室は2.9×1.9mの長方形で天井高は1.6m程と思われる。床面中央には花崗岩礫10数個と径8㎝長1.15m程の丸太を1本敷いている。この土壙は天井崩落

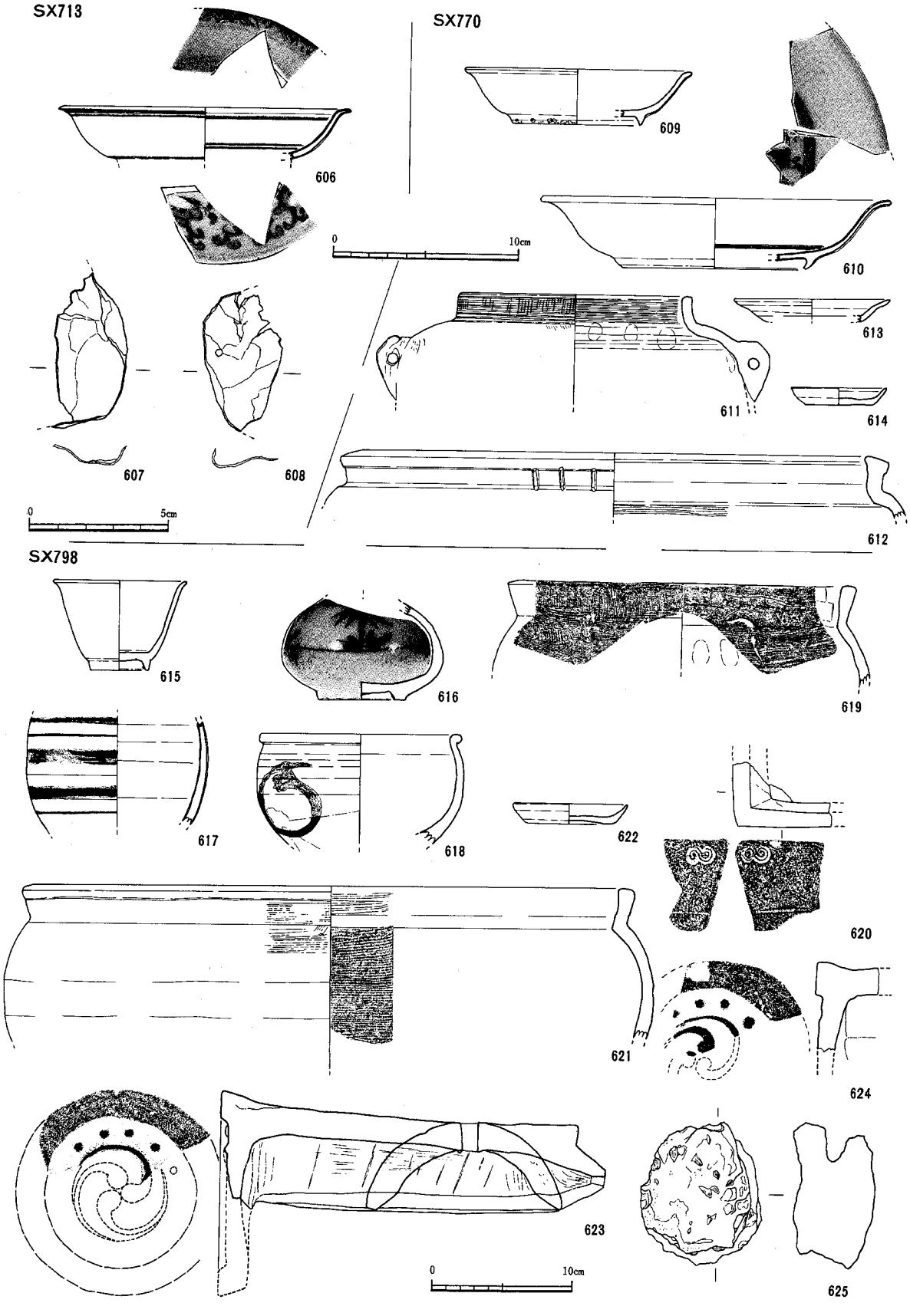


Fig.75 SX713・770・798出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

後、主室部の覆土を全て掘り上げ、近世溝SD069と連結して雨水を溜める溜井として転用されている。溝底の高さまで流土で埋設した時に一度上面まで客土し、規模を縮小して径1.1m程の土壙を掘り、瓦質の大甕破片を敷いて新たに溜井SK078を設けている。

出土遺物（Fig.77）　631は明青花碁笥底の皿で底径2.4cm。見込の圏線内に菊花文を、外面圏線間に蕉葉文を施す。632は瓦質火舎で口縁突帯上にスタンプで梅花文を施す。633は椀形鍛冶滓で径7.18～6.7厚4cmを測る。15世紀末～16世紀代。

SX809（Fig.76　Ph.90）　縄張.3の東端に分布する小型の3基のうちの1基でA2類。北に開口する。床上40cmに1.1×0.9mの方形の竪坑を設ける。主室は1.4×0.8mの長方形で幅は竪坑の方が広い。天井高は80cmである。

出土遺物（Fig.77）　630は明青花の皿で口径15cm。内外面の口縁に唐草文を描き内面の以下には牡丹唐草文を描く。16世紀末～17世紀初。

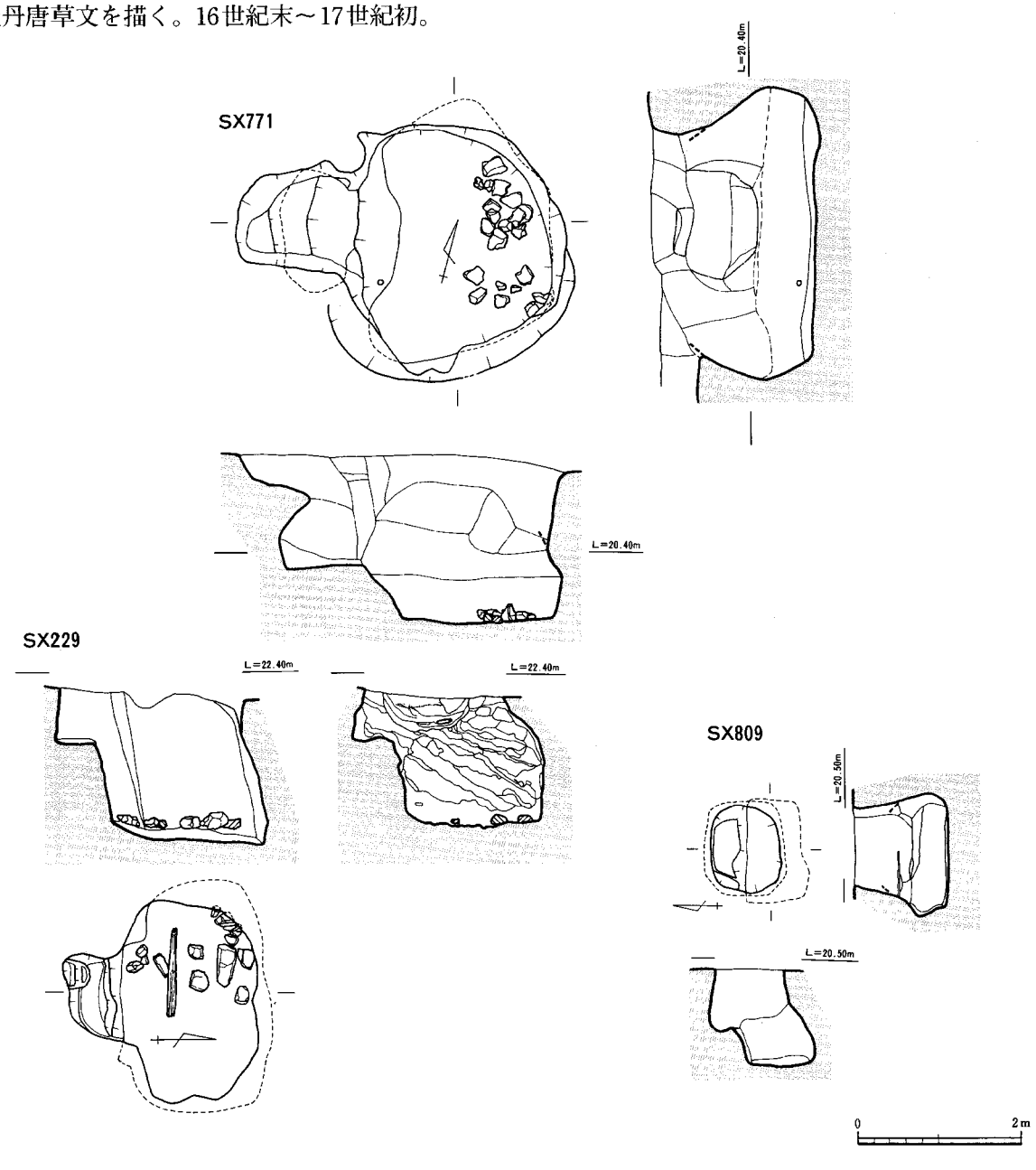
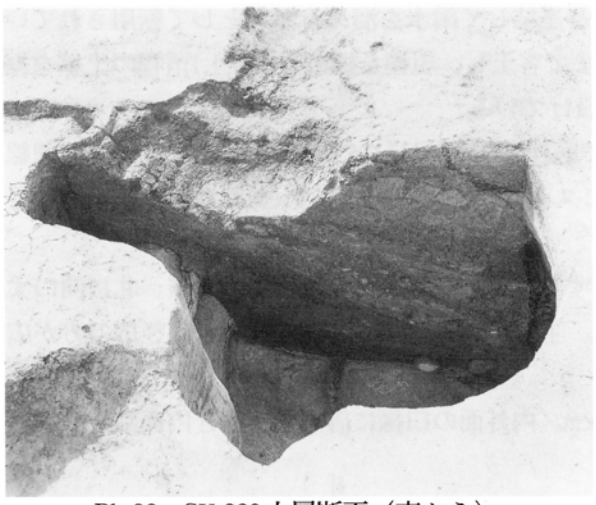


Fig.76　SX771・229・809実測図（1/80）



Ph.88　SX 229土層断面（東から）

Ph.89　SX 229（東から）

Ph.90　SX 809（南から）

SX138（Fig.78　Ph.91）　調査区南西部の最大の一群の中に位置し、SD137に切られる。西に開口するA1類で、1×0.8mの方形の竪坑が床面に達する。1mから上はSD137に切られるため足掛りの有無は不明。主室は2.3×2.8mで縦長の隅丸長方形を呈する。天井高は2.2m程と思われる。天井崩落後溝掘削時に埋められている。

出土遺物（Fig.80　Ph.93）　634は朝鮮素文青磁の碗で口径12器高4.1㎝。胎土は白色・黒色粒を若干含む灰色で釉は灰オリーブで全面施釉後高台内をフキ取る。見込と高台内に胎土目が残る。他に青花、白磁も出土。15世紀後半か。

SX134（Fig.78　巻頭.3）　Ⅱ区南西部のF18グリッドに位置し北に開口するA2類でSX135と切り合う。床面上50㎝程に1.1×0.9mの方形の竪坑を設け西側面に足掛りを掘り込んでいる。主室は3.8×2.3mの長方形の大きなもので天井高は2.4m程か。奥壁近くと東寄りの床面直上で、唯

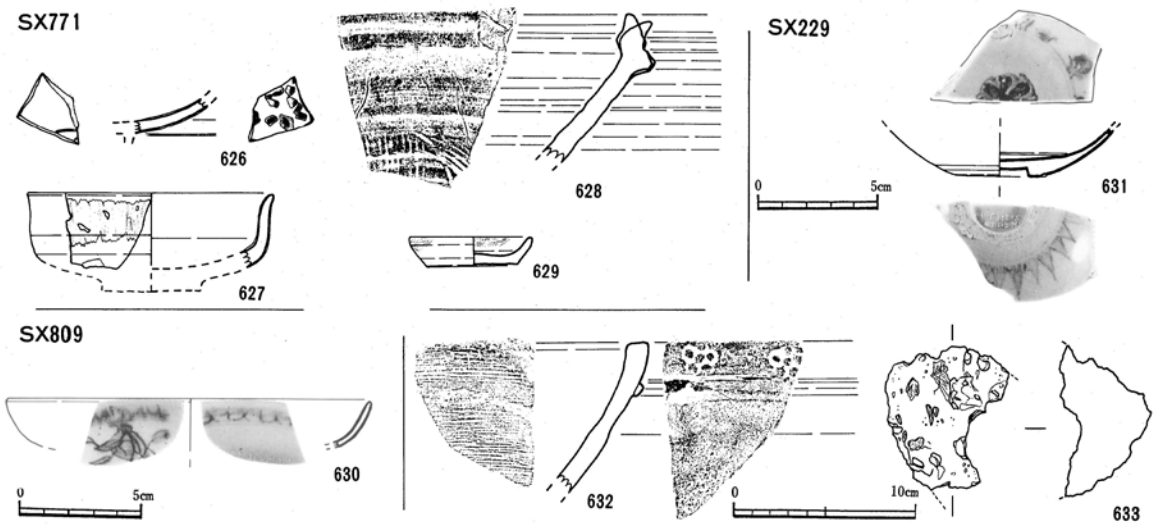


Fig.77　SX771・809・229出土遺物実測図（1/3・1/4）

一資料を検出した土壙である。4度に渡って徐々に天井が崩落し、5度目の落盤で崩壊している。1mから上は埋め戻しである。

出土遺物（Fig.80　Ph.93）　635は龍泉窯系青磁の鍔口縁盤で口径21器高5cmの完形品である。内面には48弁の丸彫陰刻の蓮弁を施し見込には十字花文を印花する。胎土は灰白色で緻密、釉はオリーブ灰色で全面施釉後高台内を蛇ノ目にカキ取っている。ここには径6.5cmのトチンの焼付きが残る。

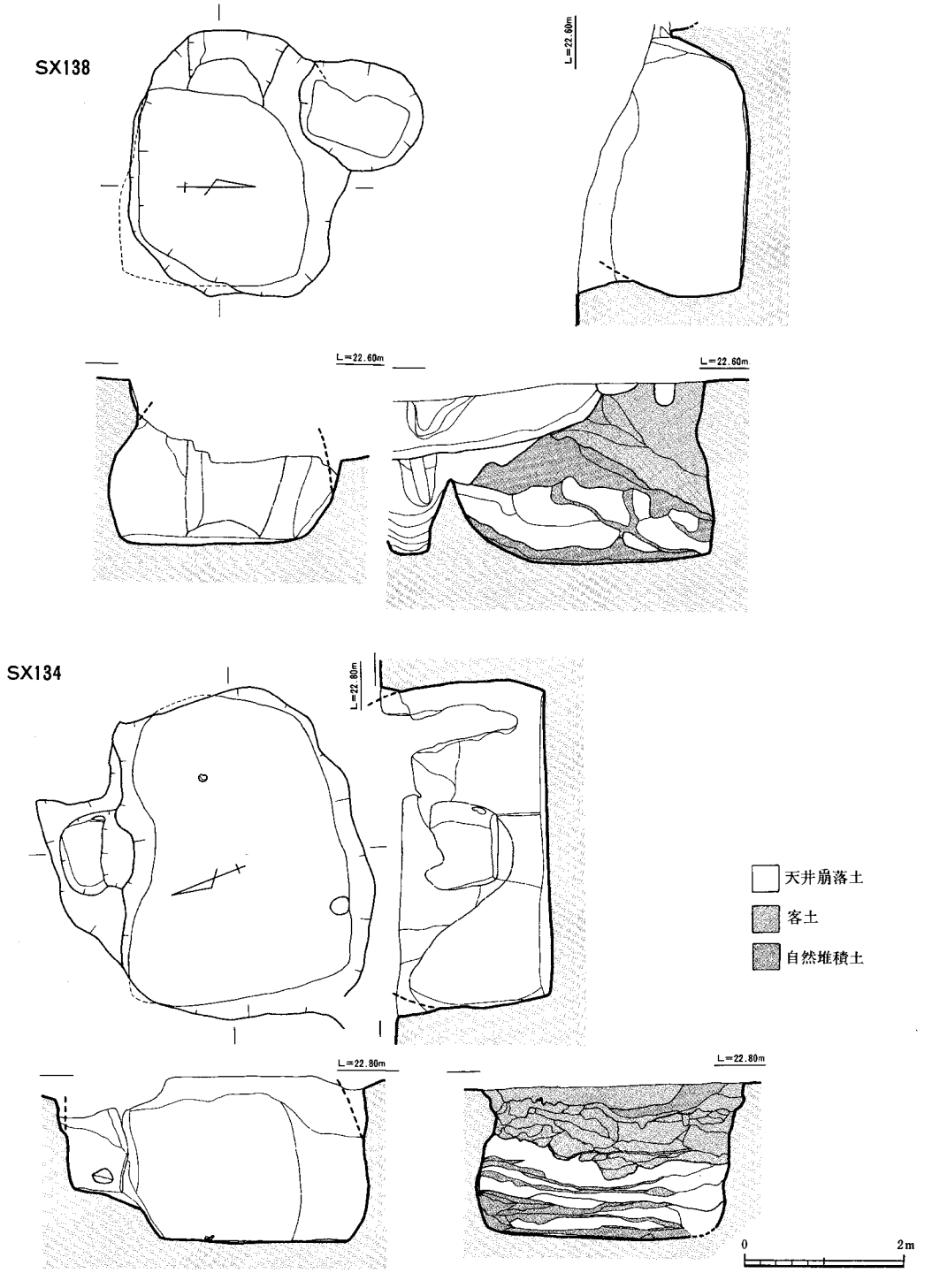
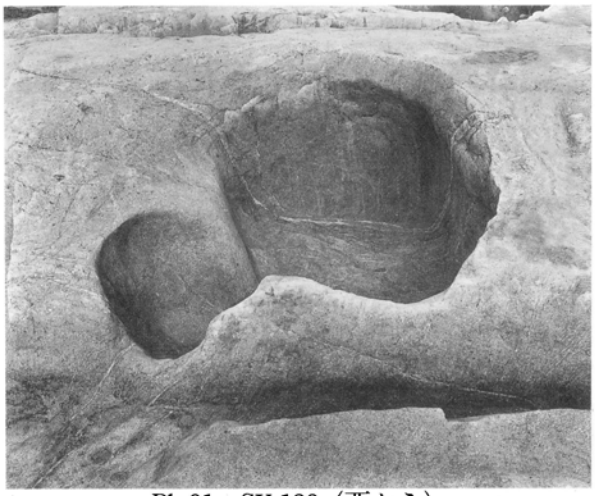


Fig.78　SX138・134実測図（1/80）

見込は長期使用の細かな傷のため文様は不鮮明。636は同じく床直上で検出した朝鮮素文青磁碗で口縁の一部を欠く。口径10.2器高2.1cm。胎土は青灰色で石英粒を多量に含み釉は緑灰色で全面に薄く掛け高台内と見込に4ヶ所胎土目が残る。637は瓦質の湯釜で口径15器高17.4cm。平底で径15cm。638は土師質の擂鉢で口径33.5器高12.7cm。内面はヘラナデ後ゆるいケンマ。3本単位の擂目を刻む。外底に十字のヘラ記号がある。639は瓦質の擂鉢で口径30.8cm。内面はヨコハケ後口縁に沈線1条以下に6本単位の擂目を施す。640は土師質の鍋で口径32.4cm。641は土師質の支脚状の土製品で現状で長8幅5.7厚3.5cm。器壁はタテケズリ後タテヘラナデ。14世紀前半～15世紀代。

SX 135（Fig. 79 Ph. 92）　SX 134の南に位置し、これを切っている可能性が高い。西に開口するＢ2類で、床上70cm程の位置に1×0.8mの方形の竪坑を設ける。主室は2.1×1.8mの不整方円形で南壁に幅1.2奥行0.4mの造出しをつくる。天井高は2.1m程か。

出土遺物（Fig.80 Ph.93）　遺物は当初2基の切合いである事が判からなかったため、SX 135は134



Ph.91　SX 138（西から）

Ph.92　SX 135（東から）

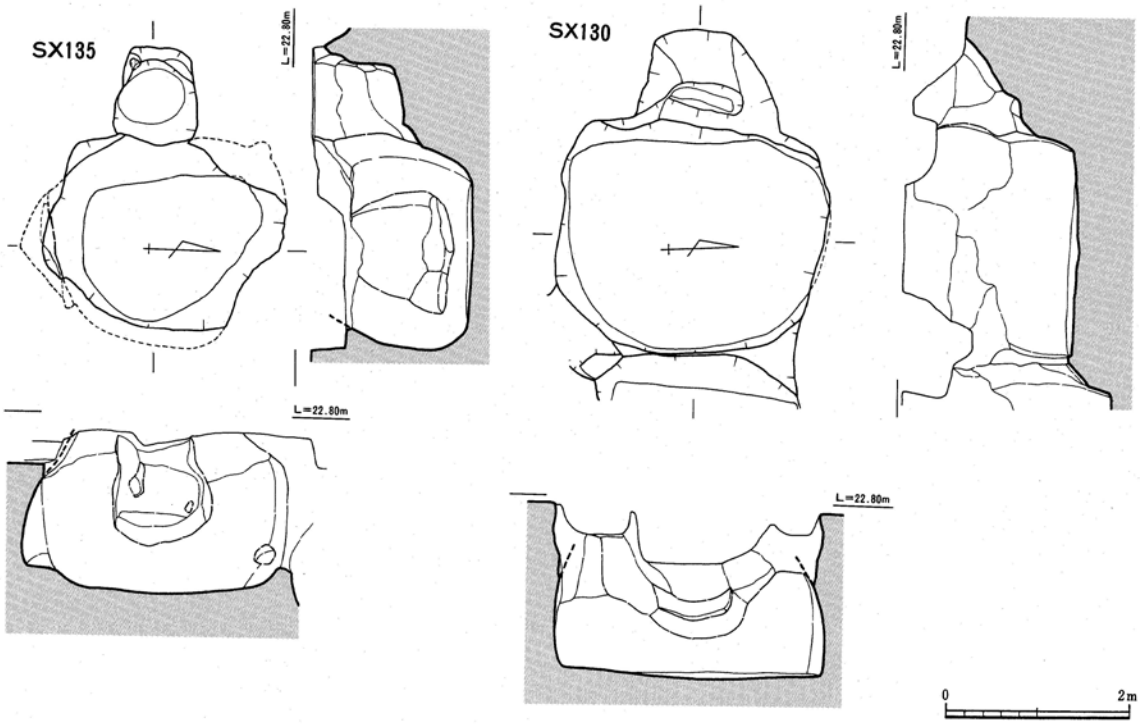


Fig.79　SX135・130実測図（1/80）

と一緒に取り上げている。642は朝鮮軟質白磁の皿で口径12.4器高3.3cm。胎土は1～2mm大の白色粒を多く含み黄橙色。釉は乳灰白色で不透明。全面に厚く施釉し口唇はフキ取る。見込と畳付に砂目が4ヶ所残る。643・644は土師器杯でそれぞれ口径10.1器高2.4・10.5×2.3cmを測り、644は外底糸切り。645は防長系の瓦質擂鉢で口径27.4cm。16世紀中頃～末。

SX 130（Fig.79）　縄張.2の南端に位置し、A1類のSX 129を切りSD126に切られる。西に開口するA2類である。床面から40cm上に1m角の方形の竪坑を設け傾斜する底面に足掛りを1ヶ所掘る。主室は2.9×2.3mの円形に近い隅丸方形。天井高は2m程か。

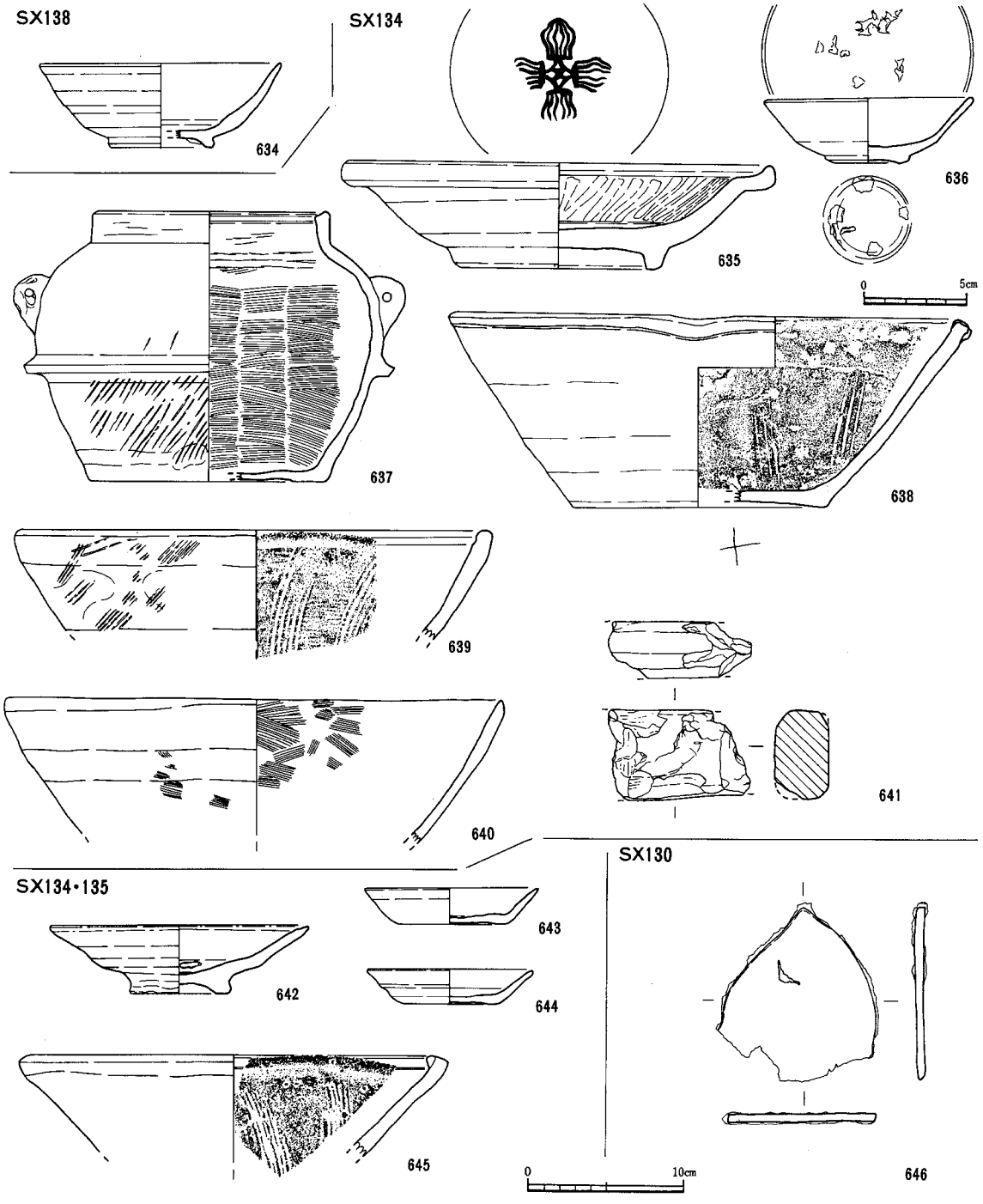
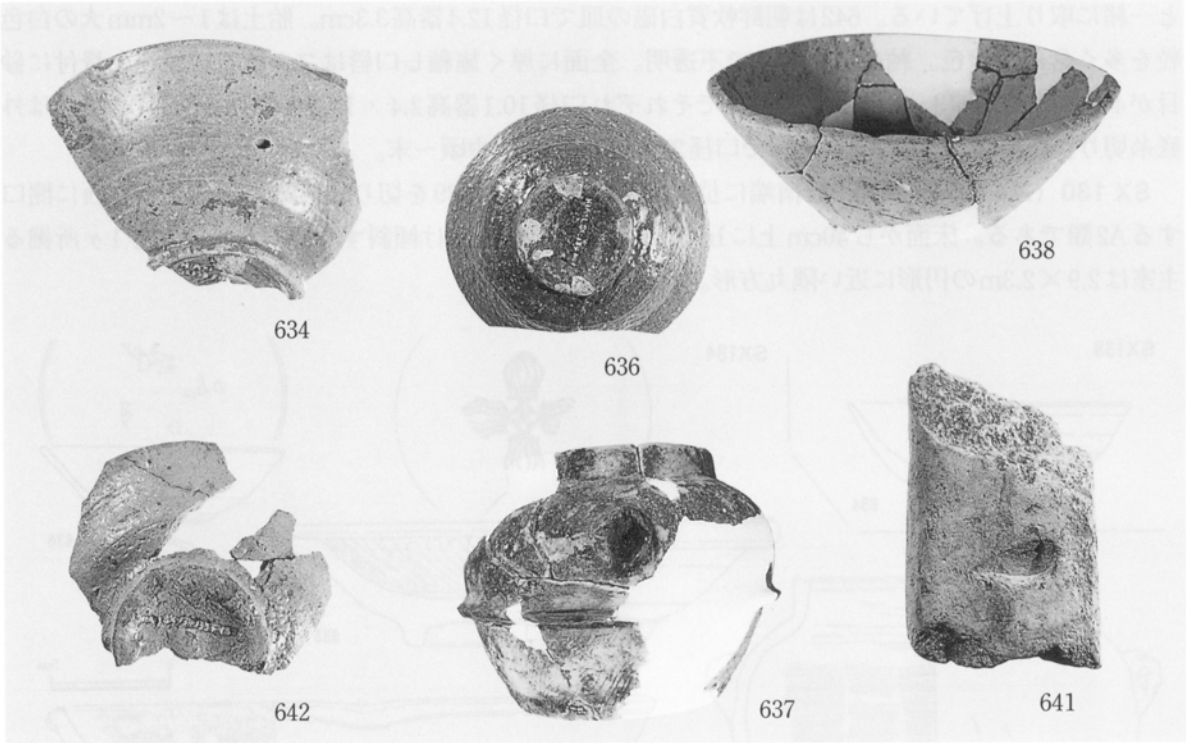


Fig.80　SX138・134・135・130出土遺物実測図（1/3・1/4）



Ph.93　SX 138・134・135出土遺物

出土遺物（Fig.80）　646は鋳鉄製の鉄片で四周が割れ現況で8.2×10cm厚5mmを測る。もう1片有る。鋤・鍬の断片か。他に白磁・青磁が出土する。15～16世紀代。

SX 136（Fig.81 Ph.94）　Ⅱ区のSD126西側E17グリッドに位置するB2類。西側に開口する。床面より1.6m上に径1.2mの円形の竪坑を設けその間に2段の足掛かりを設けている。主室は3.4×2.6mの円形で天井高は2.8～3.2m程か。

出土遺物（Fig.83 Ph.96）　647は龍泉窯系青磁の輪花皿で口径13.7cm。腰が稜を成して屈折し口縁が外反し、口唇を抉って16弁の輪花としている。内面には片切彫の文様を施す。胎土は灰白色で緻密。釉は明緑灰色で厚く掛ける。649は朝鮮素文青磁の小碗で口径9.9cm。胎土は暗灰色で1～2mm大の白色砂を多く含み器壁は薄い。釉はオリーブ灰色で薄く掛ける。648は龍泉窯系青磁碗で口径13.9器高7.6cm。外面には線彫りと片切彫で細い蓮弁を描く。内面にはヘラ描で花弁と「猪」と描く。650は土師質の擂鉢で口径30.5cm。651は椀形滓で三段に重なっている。10×8cmで厚4.3cm。上半部に木炭痕が多い。分析の結果は精錬鍛冶滓であった（付編.1）。15世紀後半～16世紀。

Ph.94　SX 136（東から）

SX 149（Fig.81Ph.95）Ⅱ区南西部のSD126の西側D16グリッドに位置する。B2類で北に開口する。床上30cmの位置に径1.4mの円形の竪坑を設ける。主室は2.4×2.1mの円形で床上40cm程の壁面に径15cm程の小穴を6ヶ所設ける。天井高1.8～2.0m程か。床に60cm程自然堆積後天井が崩壊し、中世耕土ともども崩落しており、廃棄後は耕作地となっている。

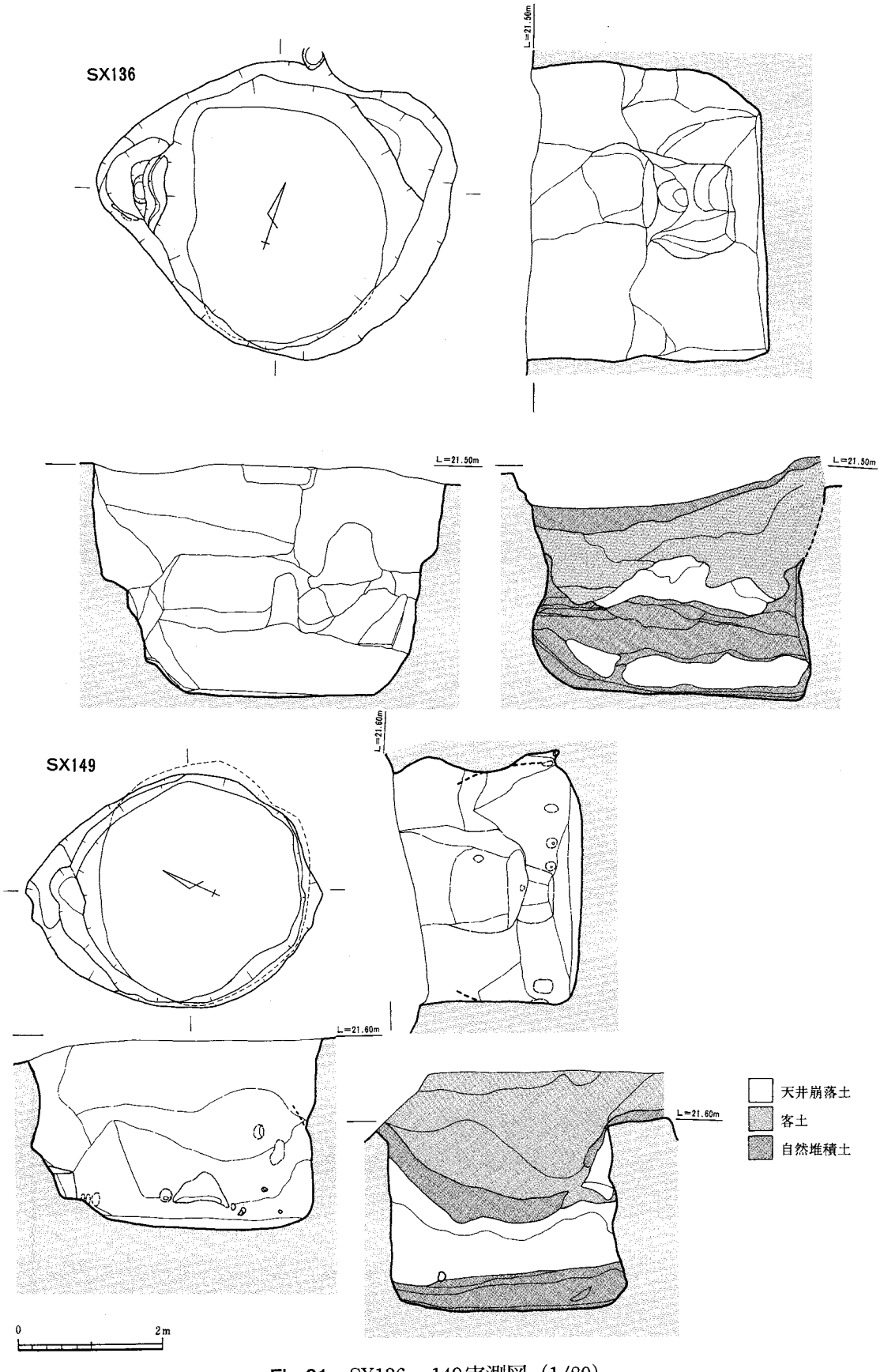
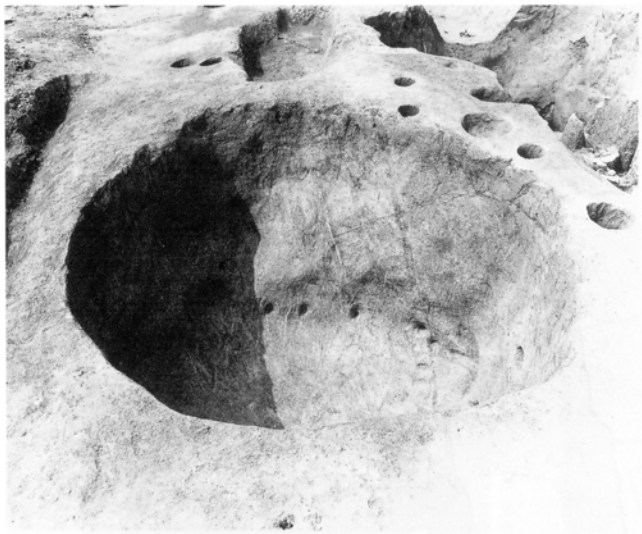


Fig.81　SX136・149実測図（1/80）

出土遺物（Fig.83 Ph.98）　652～655は上層客土出土。652は唐津皿で口径12.6。胎土は灰色で釉は灰オリーブで半濁し口縁上位まで薄く掛ける。653は瓦質の火舎で口径26.4cm。口縁沈線上にハケメ工具の木口で刻目を施す。654は大形の吹子羽口で径9孔径2.7cmを測る。炉壁との傾斜角は105°壁厚は2～3cm。655は石鍋転用の石錘で長8.8幅2.1cm。重量51.7g。上位に紐穴を穿ける。656・657は下層出土。656は土師質の擂鉢。細かなナナメハケ後5本単位の擂目を施す。657は土師器皿で口径6.4器高1.3底径4.7cmを測る。16世紀後半。

SX226（Fig.82 Ph.96・97）　Ⅱ区西端のD14グリッドに位置しSD127を切っている。前庭部と2室からなる複室構造で全長7.3幅2.7m。東に開口するB2類か。前庭部は長2.6幅1.9深0.6mで東の入口が2段の階段となっている。西側に0.9×1.1mの竪坑を掘削し深2m程の前室に連っているが崩壊の危険があったため掘削を行っていない。主室は1.8×1.7mの円形で床上70cmの位置に幅0.9高1.2mの入口がある。



Ph.95　SX 149（南から）

出土遺物（Fig.83 Ph.98）　658は龍泉窯系青磁碗で口径11.6cm。外面にヘラ描の剣頭状の細かな蓮弁を描く。胎土は白色で釉はオリーブ灰色を呈する。659も同様で、外面に片切彫で蓮弁を描く。胎土は灰白色で釉はオリーブ灰色で高台内側まで厚く掛ける。外底露胎部は黄褐

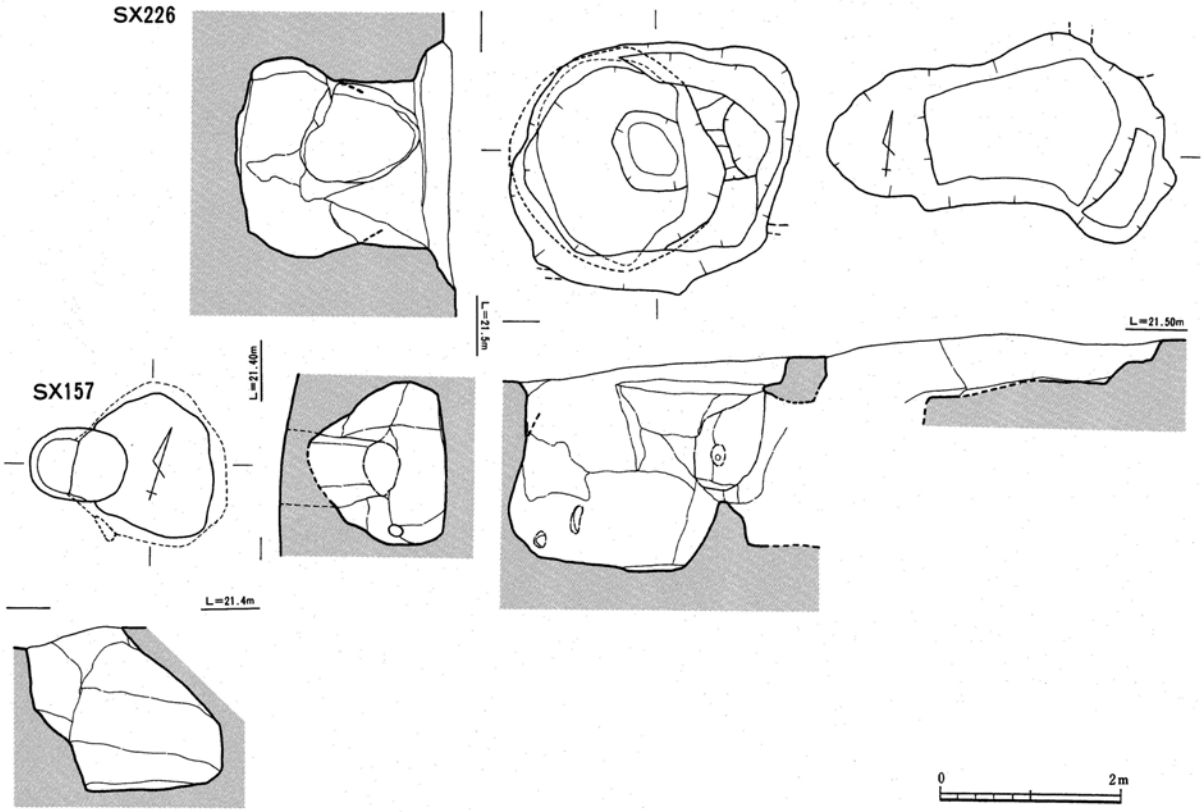


Fig.82　SX226・157実測図（1/80）

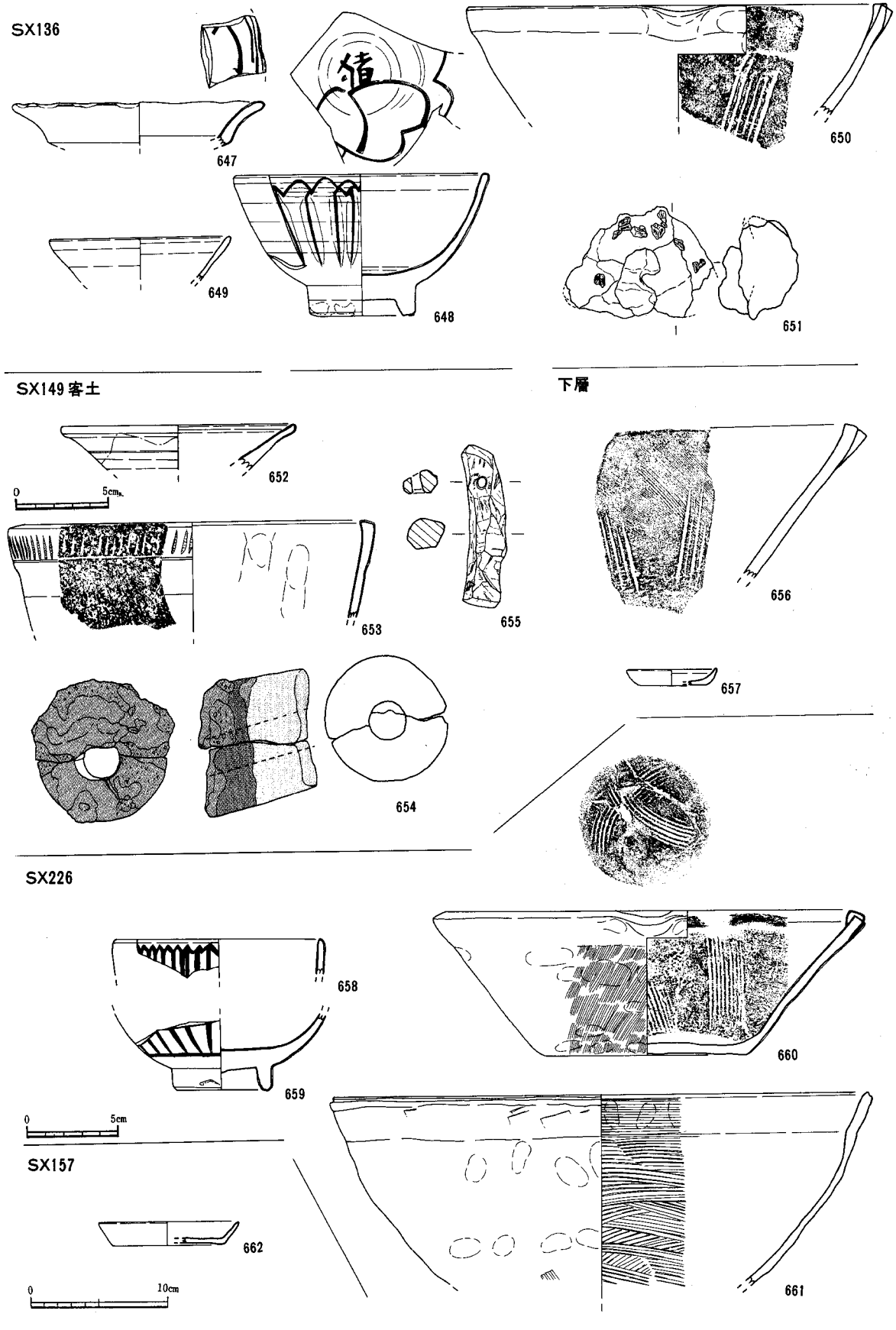


Fig.83 SX136・149・226・157出土遺物実測図（1/3・1/4）

色を呈する。660は防長系の瓦質の擂鉢で口径31器高10.5cm。内面には細かなヨコハケ後9本単位の擂目を12ヶ所刻み、見込には「×」状に入れる。661は土師質鍋で口径39.2㎝。15世紀末～16世紀。

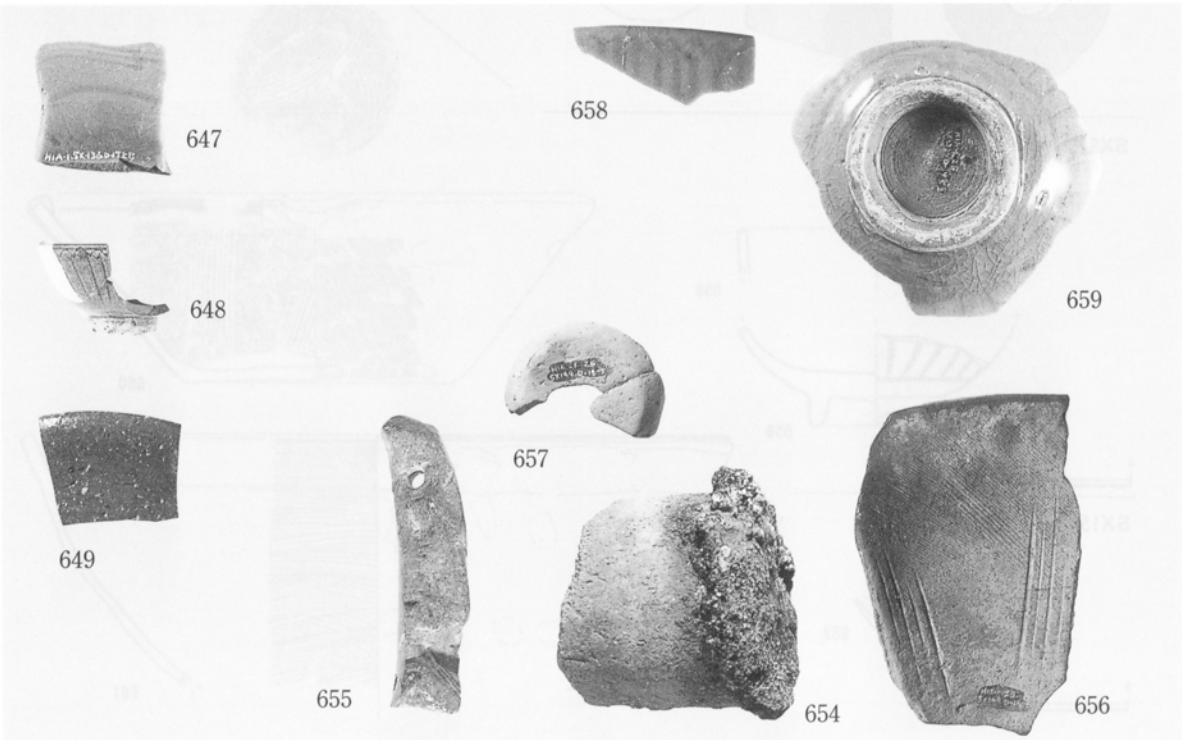
SX 157（Fig.82）　Ⅱ区北西端部のD12グリッドに位置し、西に開口するB2類。検出時に埋め残った天井部が陥没して確認された。床面上60㎝の位置に1.1～0.8mの円形の竪坑を設ける。主室は1.5×1.4mの不整円形で、天井高は1.65mを測り、1.2mから上は尖頭気味になる。竪坑からの流土でこの尖頭部分を残して埋没していた。

出土遺物（Fig.83）　662は土師器の皿で、口径10.2器高1.7底径8.1㎝を測る。見込は不定方向のナデ、外底は回転糸切りである。他に白磁碗小片・瓦質火舎小片などが出土する。16世紀代。

SX 216（Fig.84 Ph.100・101）　Ⅱ区南西群の北端部、E13グリッドに位置しSX 226に北接する。西に開口するB類の変形で、竪坑をSX 226と共有している様で、主室の南西壁に副室への進入口が見える。大雨のため壁面が大きく崩壊したため大部分の掘削を中途で断念した。覆土は床

Ph.96　SX 226進入路（北西から）

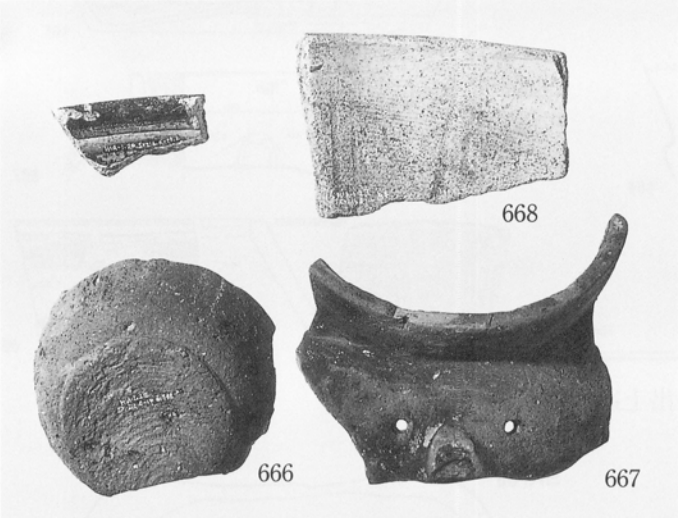
Ph.97　SX 226奥室（西から）



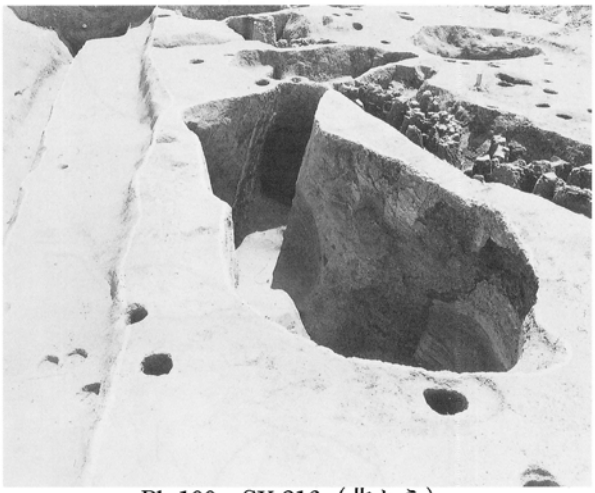
Ph.98　SX 136・149・226出土遺物

上に90cm程流土が堆積後2度天井が落盤し、2mから上は埋め戻されている。

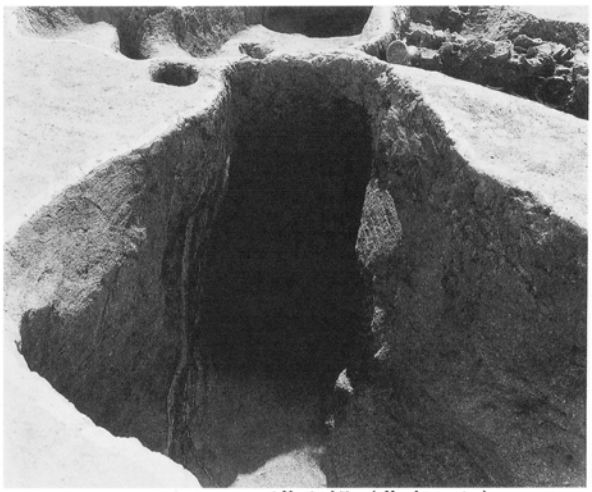
出土遺物（Fig.85 Ph.99）　全て上層の客土中から出土した。663は明末清初の青花小碗で口径8cm。外面は口縁下に圏線を1条、以下に草花文を描き下に低い突帯を施す。胎土は白色、釉は透明で呉須は鮮青色。664は龍泉窯系の大形の花文瓶の底部で径14.6cmを測る。外底は段状に肥厚し以上に細かな蓮弁文を片切彫で描く。胎土は灰白色で緻密、釉は明緑灰色で全面に厚く掛け畳付はカキ取る。665は朝鮮雑釉陶器瓶で底径13.6cm。外面下位は板ナデ、内面には当具痕が残る。胎土は褐色で釉は緑灰色で不透明。666は土師器杯で、口径11器高3cm。器壁は摩滅のため調整不明。外底は回転糸切り。667は瓦質湯釜で、欠損した把手上に鉄輪用の孔を窄ける。16～17世紀初。



Ph.99　SX 216出土遺物



Ph.100　SX 216（北から）



Ph.101　SX 216進入部（北東から）

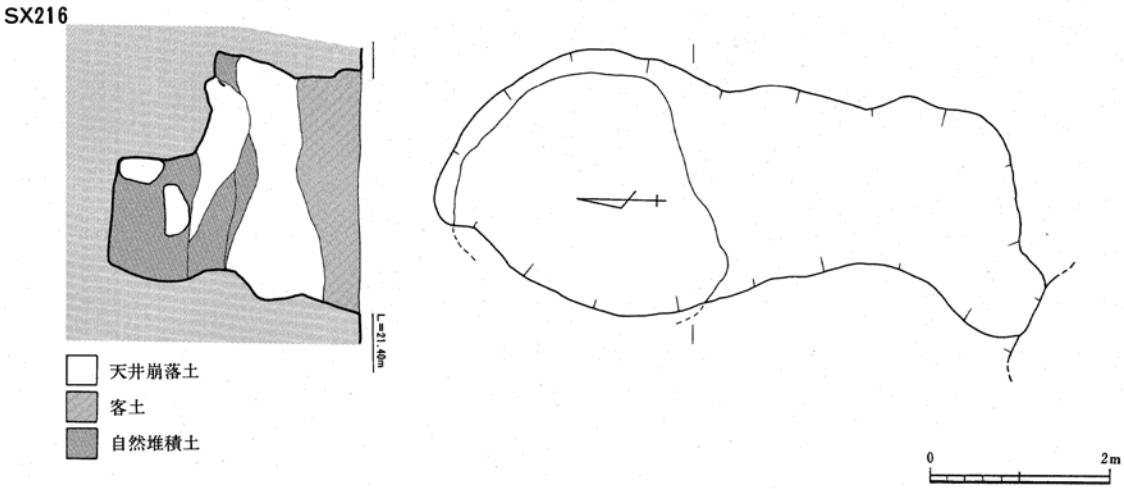


Fig.84　SX216実測図（1/80）

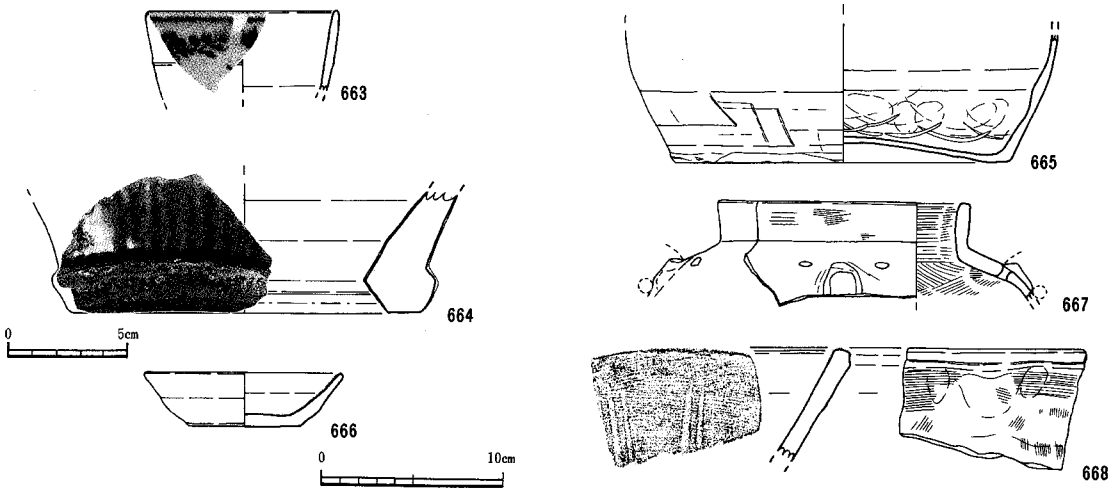


Fig.85　SX216出土遺物実測図（1/3・1/4）

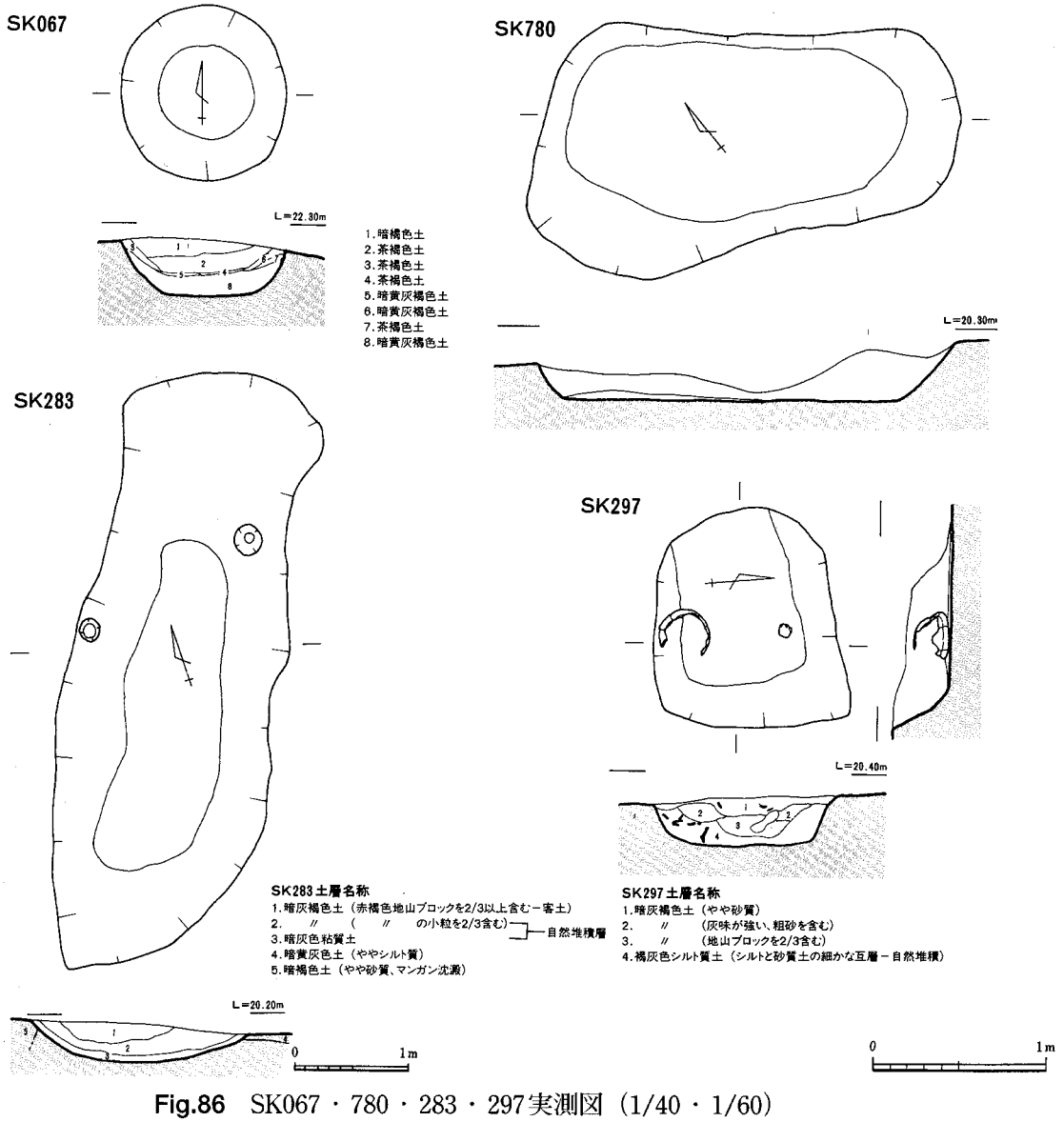


Fig.86　SK067・780・283・297実測図（1/40・1/60）

③　土壙

土壙は縄張.1で2基、縄張.2で8基、縄張.3で6基、縄張.4で2基の計18基を検出している。縄張2・3で基数が多いが、全体に散漫に分布し密集はしない。

SK067（Fig.86）　縄張.2のM15グリッドに位置する。径1.02×0.97㎝の円形で深27㎝を測る小形の土壙で床上には10㎝程の砂質土が堆積し、以上にも粘質土・砂質土が薄く堆積する。雨水を受ける溜桝と思われる。

出土遺物（Fig.88）　669は土師器皿で口径6.5器高1.1㎝。16世紀代

SK780（Fig.86）　縄張.2の北東部M10グリッドに位置しSD781を切る。長2.25幅1.5mの隅丸方形の土壙で深23㎝を測る。

出土遺物（Fig.88）　670は土師質内耳鍋の耳部で円還状の径3cm以下は鍋体部との接合部。耳の孔径は8㎜。671は瓦質湯釜の把手部分の小片で内外面に細かなハケメを施す。把手が破損しており、上部に16×7㎜の孔を穿ち鉄輪を取り付けた様である。16世紀代。

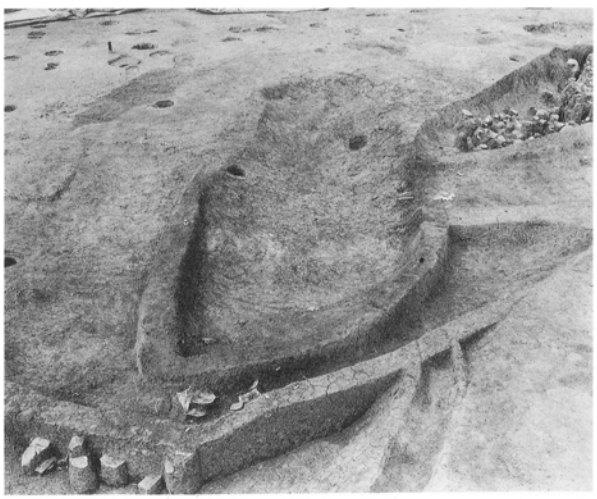
SK283（Fig.86 Ph.102）　縄張.3の北側、E2グリッドに位置しSD264を切りSD262に切られる。5.21×1.84mの長大な土壙で深46㎝を測る。覆土は最下層に粘質土が溜まり水を貯溜していた様である。

出土遺物（Fig.88）　672は端反り口縁の白磁碗で口径13.4㎝。胎土は1㎜大の褐色粒を若干含み淡黄色で軟質。釉は透明で細かな貫入が入る。

SK297（Fig.86 Ph.103）　縄張.3の北端近くD1グリッドに位置しSD264に切られる。現状で長1.28幅1.1mの方形で深32㎝を測る。覆土は床上25㎝まで細砂とシルトの互層が堆積し、流水が流れ込んでおり、溜桝と考えられる。

出土遺物（Fig.88）　673は龍泉窯系の青磁香炉で口径8.2㎝。胎土は緻密で灰白色、釉は明緑灰色で厚い。胴が張り口縁は短く「L」字に外反し、この上面と頸部下は釉が殊に厚い。674・675は土師器の皿。674は口径9.3器高1.3㎝の薄い皿で器壁は摩滅して調整は不明。675は底径8㎝で外底は回転糸切りで板圧痕が残る。中世前期の混入品の可能性がある。676は土師質の鍋で口径29㎝。口縁が「く」字にゆるく屈折して湾曲する口縁で外面には多量の煤が付着する。内面は頸部が稜を成し細かなヨコハケを施す。16世紀末～17世紀初か。

SK339（Fig.87 Ph.104）　縄張.3の北西端に位置し、北半分は調査区外である。現状で4.67×3.82深1.06mの大形の円形土壙で、床面から50㎝程上の周縁に幅50㎝程の平坦部を設け足場としている。覆土は床上から30㎝まで粘質土と砂質土が堆積し、以上は客土で埋められている。南東部に幅



Ph.102　SK 283（南から）

Ph.103　SK 297（北から）

90㎝程の流入部があり、SD262と連結して雨水を貯めた溜井と思われる。

出土遺物（Fig.88）　677はベトナム鉄絵の大碗で口径19.3㎝。端反りで口縁下の圏線間と内面の圏線上に文様を描く。胎土は黒色・白色粒を若干含み黄味を負びた灰白色でやや軟質。釉は透明で氷裂が入る。鉄絵は黒緑色を呈する。678は陶器の香炉で口径14.9㎝。肩部下に沈線2条、口縁は外反して内面が肥厚して段を成している。胎土は黒色・白色微粒を含み灰褐～赤褐色。全面に白化粧土を掛け口縁から肩部に黒褐色の鉄釉を掛け口縁内側をカキ取る。679は備前の小瓶で胴径9㎝。胎土に2㎜大の石英粒を多く含む。680は土師質の外耳鍋の把手部で、幅7長2厚1.2㎝を測る。上部には焼成前の径7㎜の孔を2つ穿ける。胎土は1～5㎜大の白色・褐色粒を多く含む。681は瓦質の甕で口径27.2㎝。682は泥岩の砥石で幅3.6厚1.3㎝を測る。16世紀代。

Ph.104　SK 339（南から）

SK022（Fig.87）　Ⅰ区中央の壁際に位置する。2.75×1.73mの大形の長方形土壙で深54㎝。南側に両隅から3m程幅50㎝程の溝が延びており、雨水の溜井と思われる。

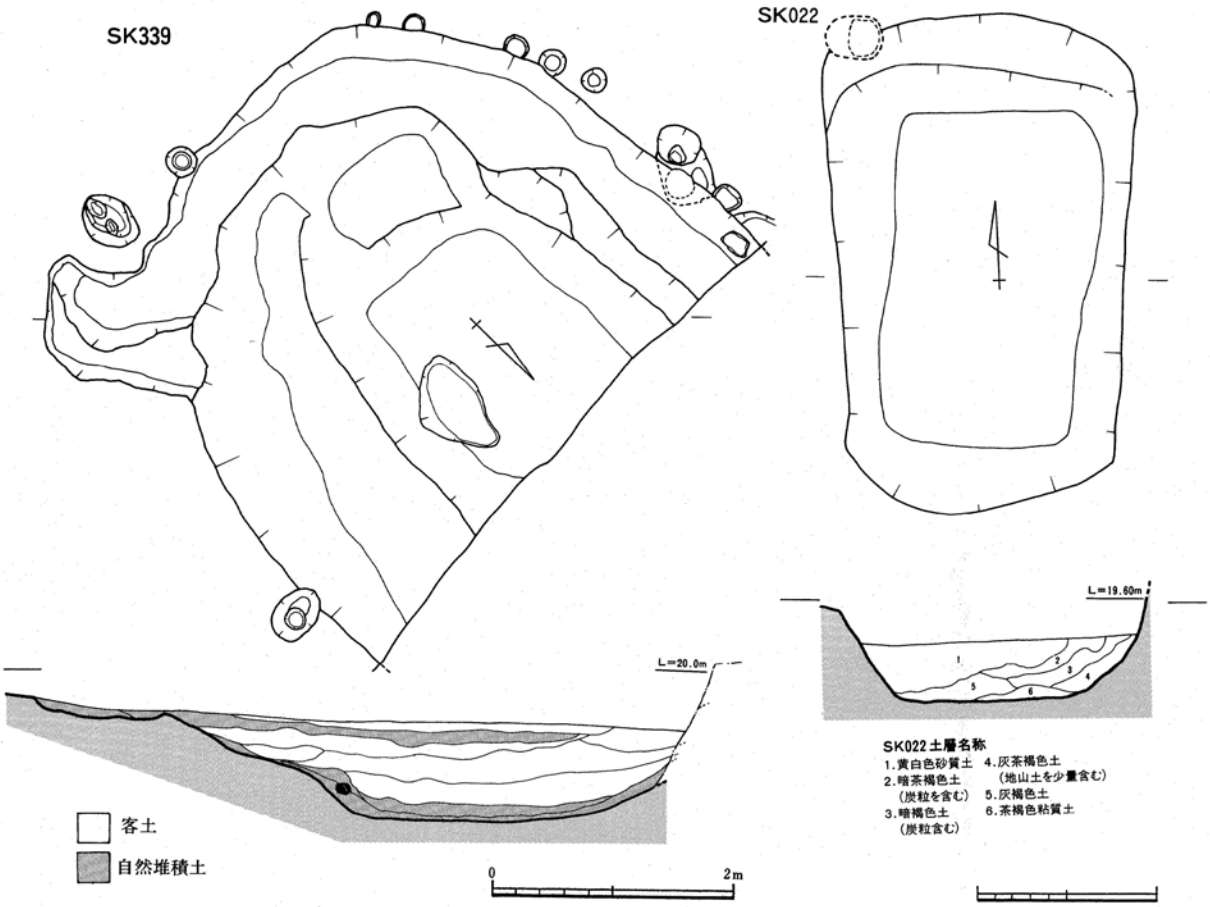


Fig.87　SK 339・022実測図（1/60・1/40）

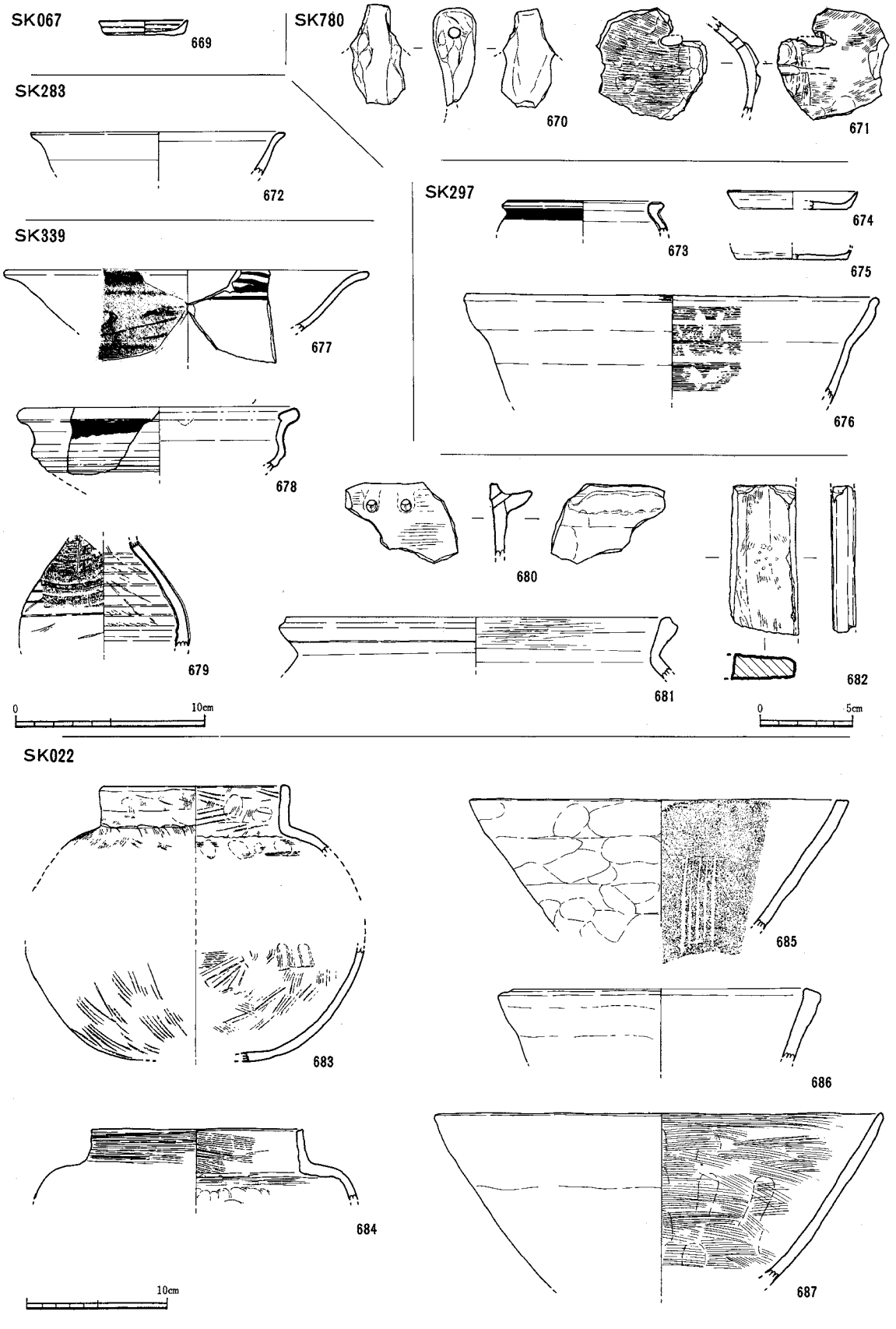
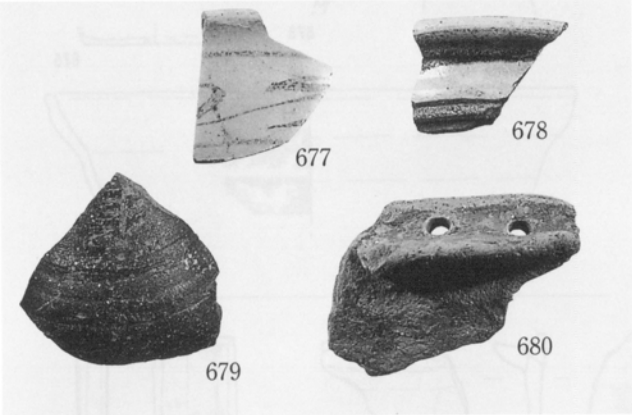


Fig.88 SK067・780・283・297・339・022出土遺物実績図（1/4・1/3）

出土遺物（Fig.88）　683は瓦質の湯釜で、口径13.5㎝。肩部を欠くが胴径24㎝。底部は径9㎝の平底である。外面下半は粗いハケメ、上半は細かなハケメを施す。684も湯釜の口縁部で径15cm。肩が強く張りほぼ直角に屈曲して口縁が垂直に2.5㎝程立ち上がる。外面はヨコナデ、内面は細かなヨコハケを施し、肩部下にはタテの指頭圧痕が多く残る。685・686は土師質の擂鉢で685は口径26.8㎝。外面は指頭圧後ナデ、内面は上半は細かなヨコハケ、下半にナナメハケ後5本単位の擂目を刻む。686は口径23cm。内外面ともヨコナデを施す。破片に擂目がかかっていないため本数等は不明。687は土師質の鍋で口径32㎝。直口口縁の体部の深い鍋で現状で12㎝。傾斜も強い。外面は煤が厚く内面はヨコナデ。16世紀代。

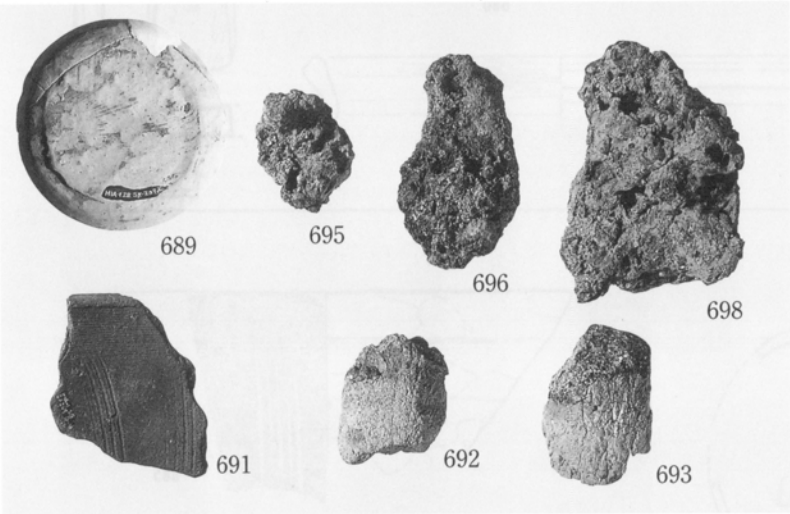


Ph.105　中世土壌出土遺物

④　**地山整形面S×209**（Fig.89）

Ⅱ区の南西端に位置し、現状で9.2×3.2mの大きな円弧を描いて深さ65㎝程掘り下げ平坦部をつくっている。SD132に切られる。

出土遺物（Fig.90 Ph.106）688～690は土師器皿で口径・器高10×1.2・9.9×1.6・9.6×1.5㎝を測る。外底は静止糸切り。691は瓦質の防長系の擂鉢で、口縁内側が肥厚して段を成す。内面は細かなヨコハケ後5本単位の擂目を刻む。692・693は吹子羽口で692は外径7内径2㎝程。底面が平坦で断面は五角形に近い。炉壁との接合痕から、壁とは103°の角度をとっている。693も同様で外径6.5内径2㎝程。底が平坦な多面体で壁との角度は108°。694銅製の輪で切れて開いている。外径2㎝程か。厚2㎜。695～698は椀形鍛冶滓で、697は分析の結果精錬鍛冶滓である事が確認された。破面には気泡・木炭・木炭痕が多数みられる。



Ph.106　地山整形面SX 209出土遺物

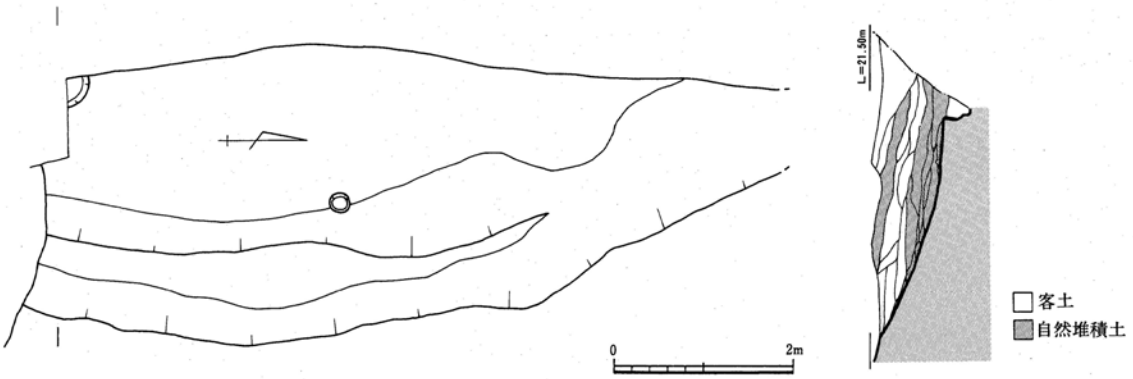


Fig.89　地山整形SX 209実測図（1/80）

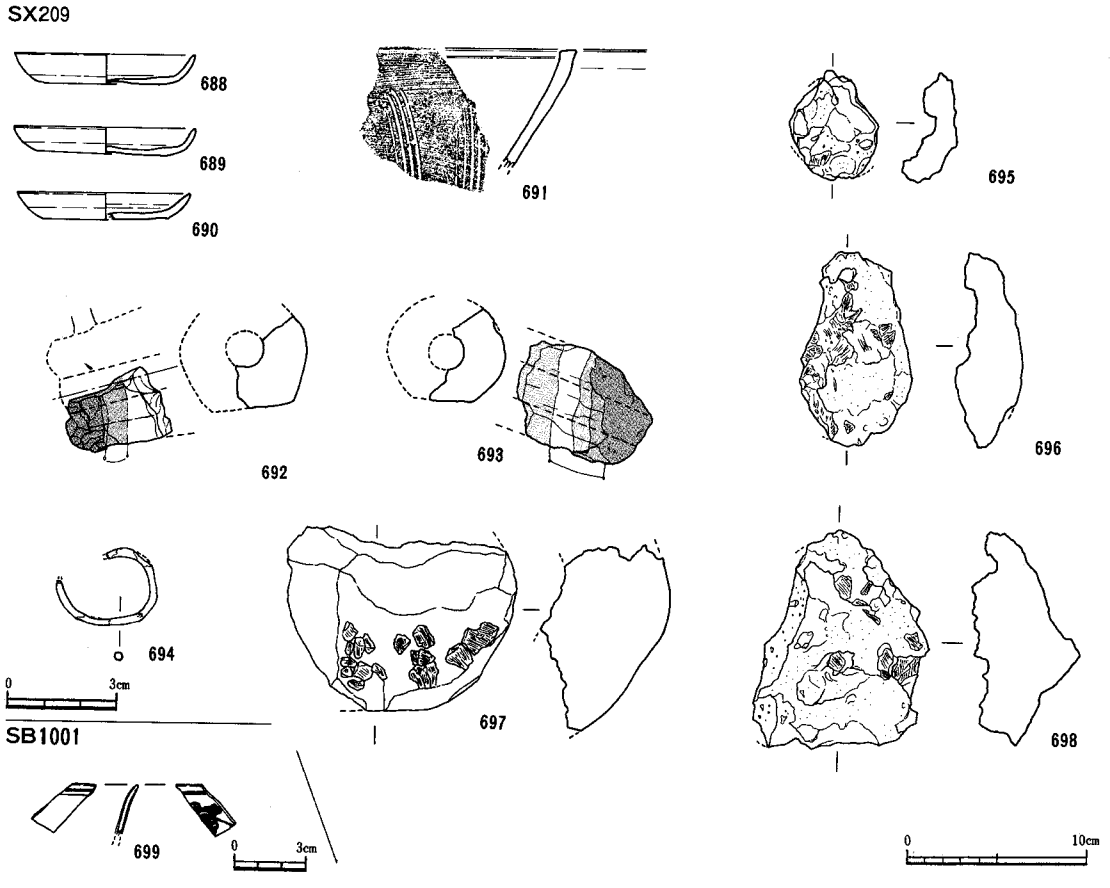


Fig.90　地山造成ＳＸ209・建物　ＳＢ1001出土遺物実測図（1/2・1/4・1/3）

⑤　掘立柱建物

全面で無数の柱穴を確認している。弥生時代の竪穴住居から近世まで多くの時期のものが重なっている。各縄張の区画に沿った建物も多数有ると思われるが、Ⅱ区以外検討し切れていない。

SB1001（Fig.92）　ちょうど近世溝SD063に囲まれる範囲で検出された。2×2間桁行5.8～6m梁間4.4～4.8mの総柱建物で方位をN－75°－Eにとる。掘方は30～80cmの方形に近く柱は径18cm程。倉庫と思われる。

出土遺物（Fig.90）　明青花の端反りの皿で、外面の圏線下に牡丹唐草を描く。16世紀代。

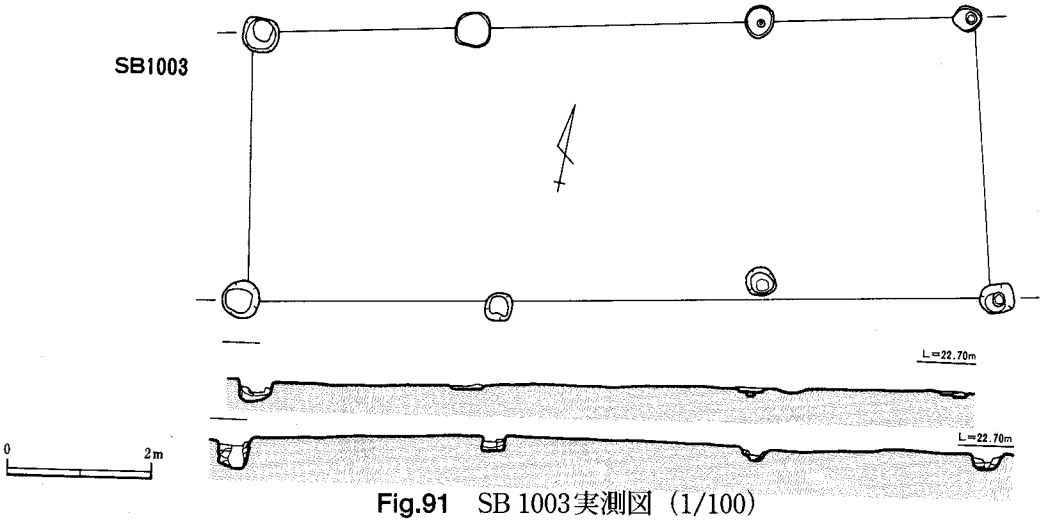


Fig.91　SB 1003実測図（1/100）

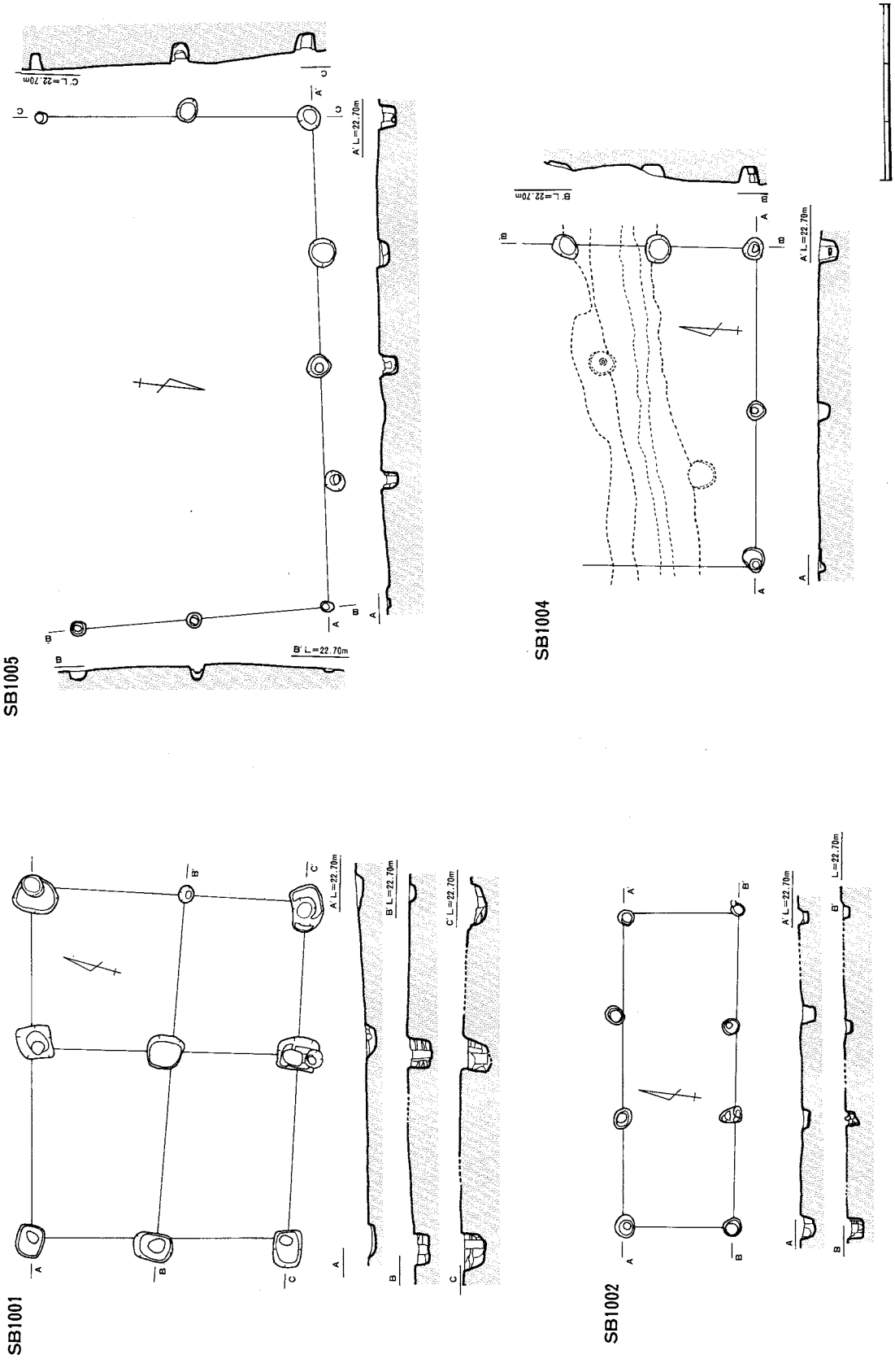
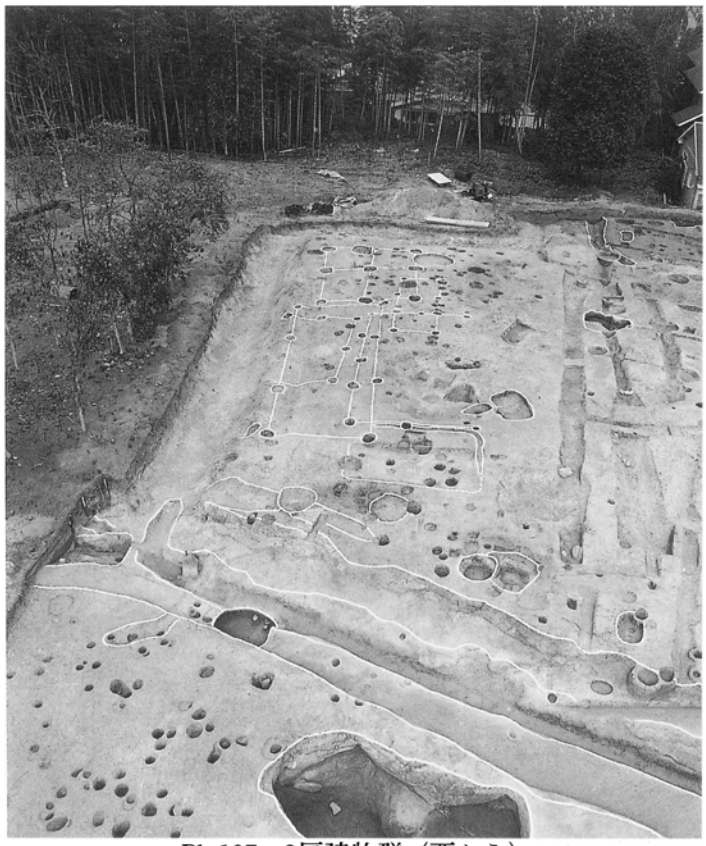


Fig.92 ＳＢ1001・1002・1004・1005実測図（1/100）



Ph.107　2区建物群（西から）

SB1002（Fig.92）　同区画にあり1×3間2×5.3mの側柱建物で方位をN－82°－Eにとる。径20～40cmの円形掘方で柱径10～14cm。

SB1003（Fig.91）　1×3間、3.8×10.3mの側柱建物で方位をN－78°－Eにとる。径35～55cmの円形掘方で柱径16～18cmを測る。

SB1004（Fig.92）　梁間2間5.4m、桁行2間以上で、北側をSD063に切られる。方位をN－4°－Wにとる。掘方は35～45cmの円形で柱径は18cmを測る。

SB1005（Fig.92）　桁行4間8.4m。梁間2間以上の側柱建物で方位をN－82°－Eにとる。径20～50cmの円形掘方で柱径は14～16cmを測る。

1001と1002、1003と1004・1005、1002と1005が重なり合う。方位と重複関係から、1001と1005、1002と1003が同時期の建物と考えられる。

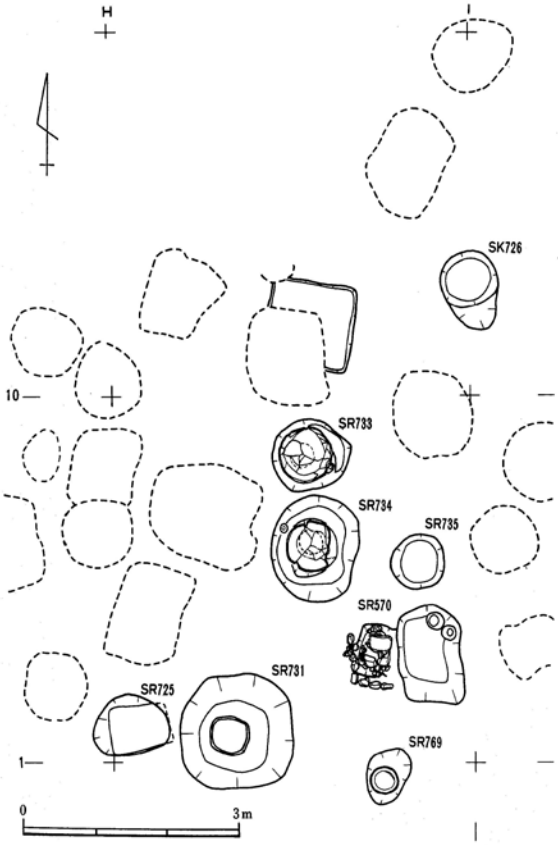


Fig.93　中世墓分布図（1/100）

⑥　墓地

墓は建物群の北西4m程の位置に密集し、近世墓が此等を囲み込む様、墓域を東・西・北に広げている。検出した墓は7基で、内3基は陶棺、4基は土壙墓である。石組基壇のSR570を中心として東西3m、南北7mの狭小な範囲に分布し、三個の宝篋印塔の笠もこの部分に散布している。

SR570（Fig.94　Ph.109～112）　墓域の中心を成しH10グリッドに位置する。基盤層まで周辺を掘り下げて検出を行ったため40cm程高くなっているが、実際は地表を20cm程1×1.6m程の基壇状に掘り下げて20～30cm前後の花崗岩礫を一段積んで囲い基壇としている。主体部は1.4×1.08mの方形の土壙で深85cmを測る。土層断面では壁、床の間に10cm前後の薄い層が囲む様に有り、木櫃を入れていた可能性がある。基壇、石塔はこの空間が潰れて後盛土を行って築かれた様で土層が中央に落ち込んでいる。削り出しで基盤を形成した後上面に10cm前後の角礫を敷き中央に60cm角厚32cmの砂岩製の台座を据えている。 上面中央を5cm程高くつ

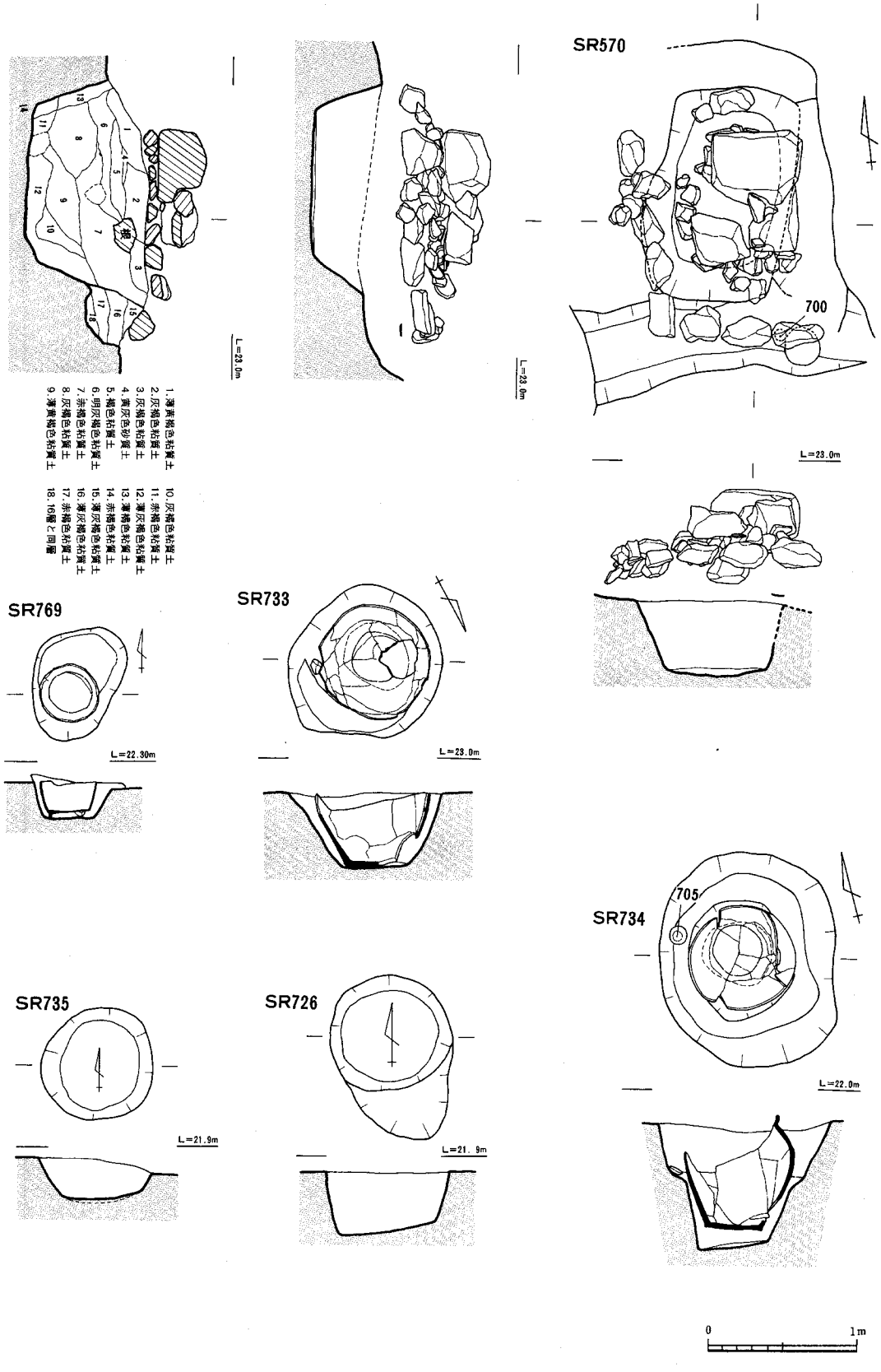


Fig.94　中世墓実測図（1/40）

くられ、この上に篋形に抉った宝篋印塔を建てたと思われる。現状では台座と南・西辺の基盤列石が残るのみで、台座も中央に生えた椿によって分断されている。南側の溝は前代のものである。

Ph.108　中・近世墓全景（西から）

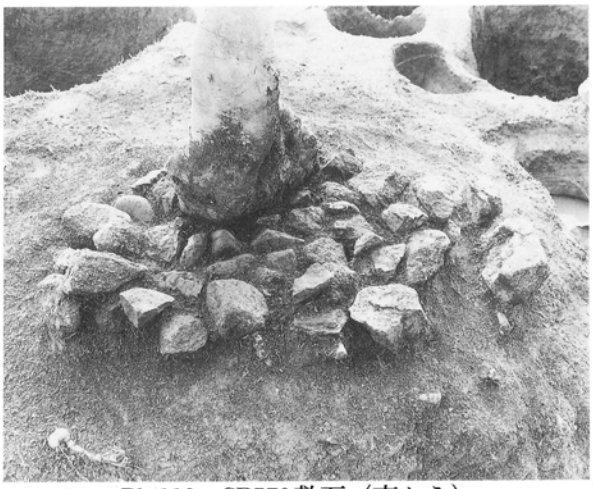
出土遺物（Fig.95）　基壇の下にある溝からの出土で700・701は土師器。700は口径9.4器高1.8㎝で外底は回転糸切りの坏。701は口径6.8器高1.2㎝の皿で外底は回転糸切り。16世紀代か。

SR769（Fig.94　Ph.113）　基壇の南1mに位置する。82×58㎝の不整円形の土壙に径50㎝程の瓦質の火舎を棺としたもの。検出時には礫が数個まばらな方形の列石を成していたが、掘削中に除去してしまっている。内部に焼骨はなかった。

出土遺物（Fig.95）　702は棺で口径50.8器高34㎝の瓦質の火舎で口唇外端が三角に肥厚し3本の三角突帯を貼付する。口縁下には5本単位の櫛歯原体で山形文を刺突する。外面はヨコナデ内面はヨコハケ調整。

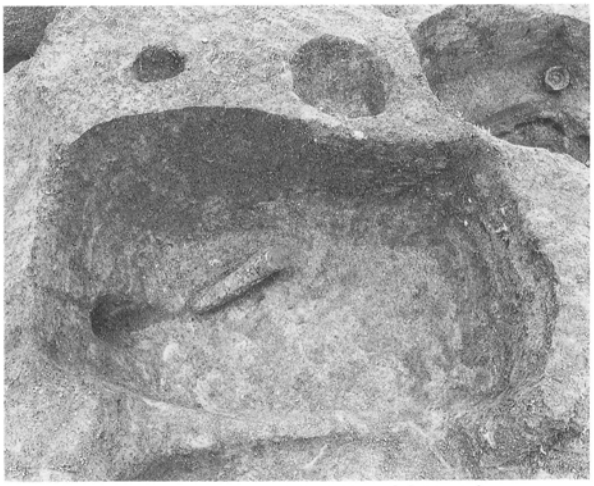
SR733（Fig.94　Ph.114）　基壇の北西2mに位置する陶棺で、1.12～0.98の円形の掘方に胴径66器高81㎝の備

Ph.109　SR570石塔部（西から）



Ph.110　SR570敷石（東から）

Ph.111　SR570土層断面（西から）



Ph.112　SR570完掘状況（東から）

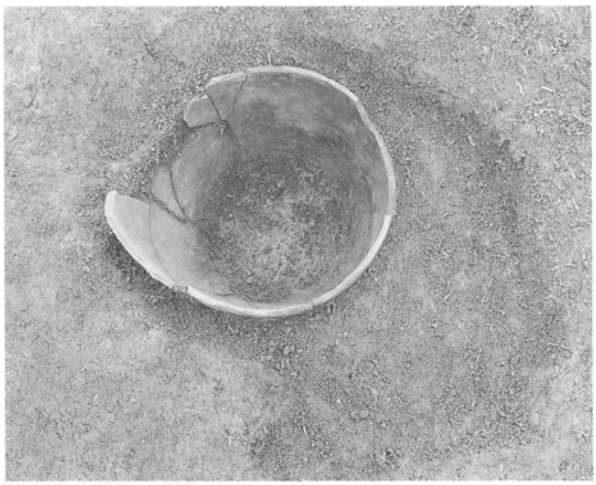
前大甕を据える。残存は50㎝程で30㎝は最低削平され、埋葬時底部の一部を欠いている。

出土遺物（Fig.95）　703は掘方と棺の間に収められた土師器の坏で口径12.6器高2.1㎝。704は口径48器高81㎝の備前Ⅴ期の甕で口縁は幅広の玉縁を成し下位に2条の凹線を施す。肩部にはヘラ描きの格子状の文を刻む。

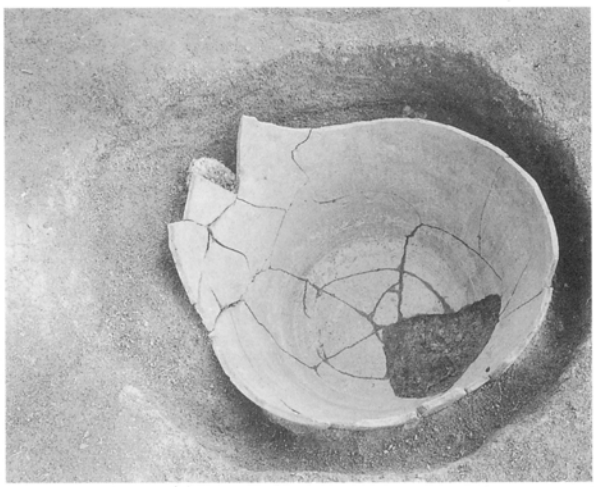
SR734（Fig.94　Ph.116）　SR733の南数㎝程に隣接する陶棺墓で径1.2～1.48mと径70㎝の2段の円形の墓壙に胴径80器高92㎝程の備前大甕を据え、底は床から10㎝程浮く。

出土遺物（Fig.95）　705は墓壙中断に置かれた龍泉窯系青磁の六稜花皿で、口径12器高3.3㎝を測る。片切彫で外面には渦状の、内面口縁の二重縁取下には花文を描く。胎土は灰色で釉は緑灰色を呈し全面に厚く施釉後高台内を輪状にカキ取る。一部トチンが付着している。707は埋土出土で土師器の小片。底径7.5㎝。706・708～711は棺底出土。706は鉄製の鑷で長89幅8厚2㎜を測る。708～711は銅銭で、709は二枚銹着しており、都合5枚出土している。径は23㎜で、711には平織の布の痕跡が残っており被葬者の着物が付着したと思われる。銹化が著しくX線でも銭銘は明瞭に検出できなかったが、字形は「寛永通寶」とも「洪武通寶」とも異なる。16世紀代。

SR735（Fig.94 Ph.117）　SR734の東60㎝程に隣接する土壙墓で、80～75㎝の円形で残存する深さは30㎝と浅い。乳幼児の墓と思われる。内部からは13枚の銅銭を検出している。寛永年20年開基の長徳寺の墓域であったため近世～近代墓との前提で、調査期間の逼迫も有った事から副葬品の回収と掘削状況の記録撮影を主体として行なったため遺物の出土状況が詳らかでない。



Ph.113　SR769（東から）



Ph.114　SR733（北から）

Ph.115　SR734（南から）

Ph.116　SR734棺外副葬品（南から）

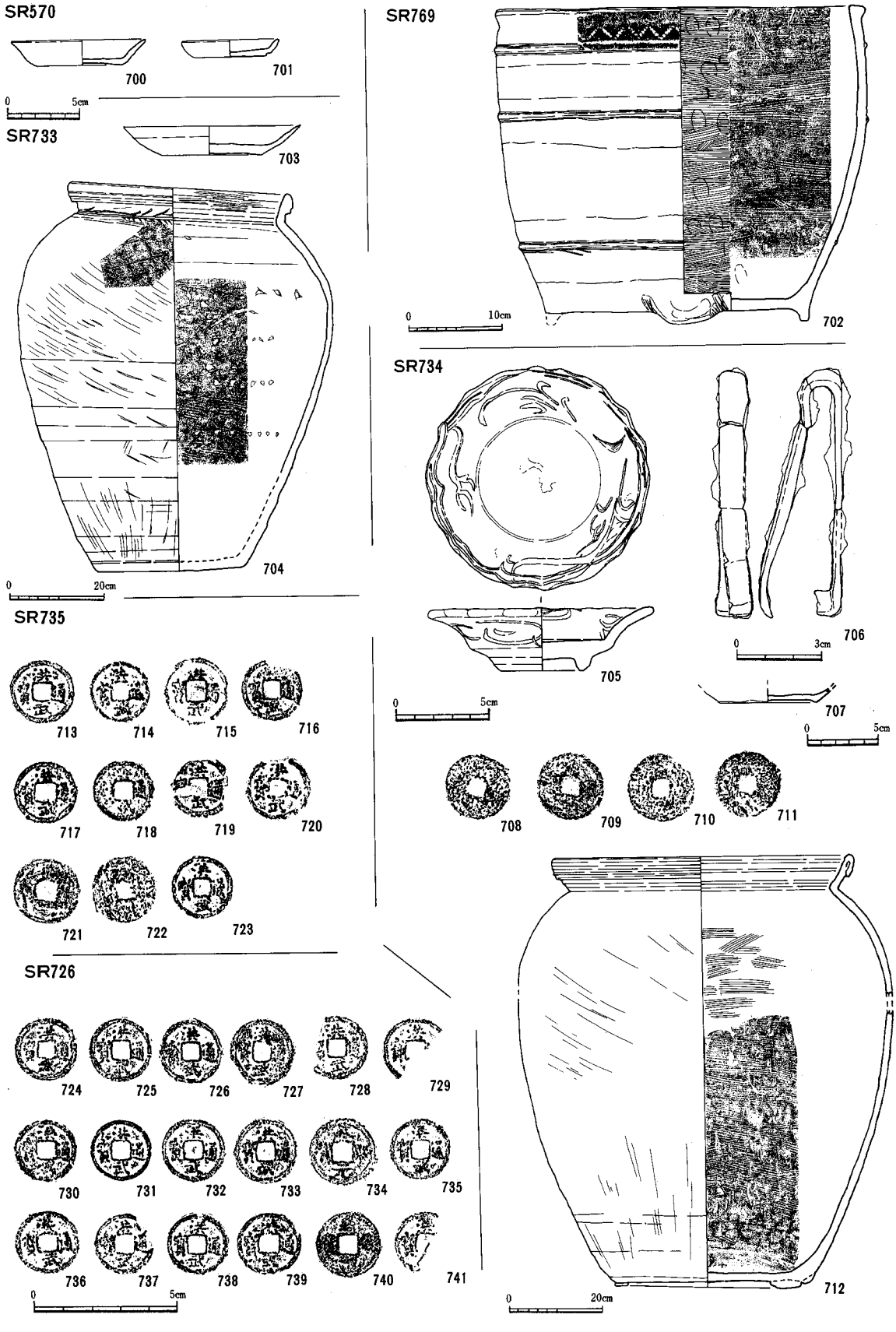


Fig.95　中世墓出土遺物実測図（1/2・1/4・1/3・1/6・1/12）

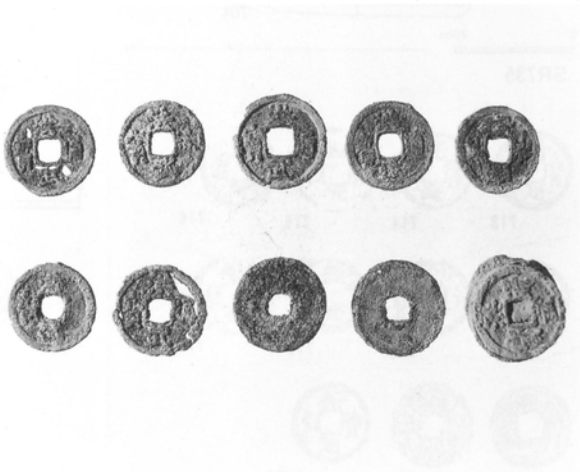
出土遺物（Fig.95　Ph.118）　中央で重なって出土。11枚の銅銭で径は22㎜。内9枚は「洪武通寶」と判読できる。残る3枚も同種の可能性が高い。1368年初鋳。

SR726（Fig.94　Ph.119）　1基のみ集団から2m程北東に離れて位置する。1.05～0.85と0.85×0.76mの二重の墓壙で深さ40㎝で底面は径0.76×0.6mの円形で平坦。銅銭は床面から若干浮いた状態で10㎝程の範囲に広がって検出され、差銭の状態ではない。

出土遺物（Fig.95　Ph.120）　銅銭18枚で内734と740の2枚以外の16枚は「洪武通寶」である。径21～22㎜。734は「□□元寶」で径23㎜、740は「皇□□寶」で径22㎜を測る。

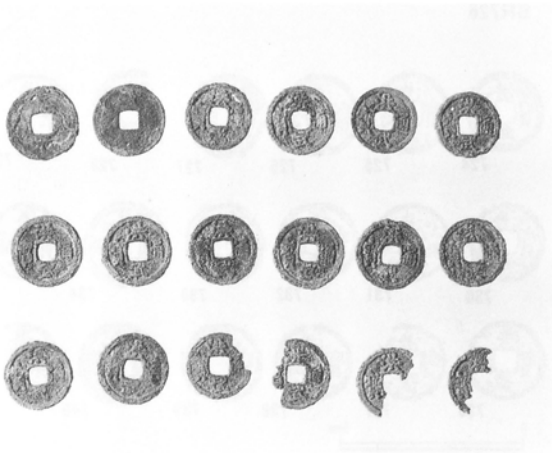
石塔類（Fig.96）　石塔類は石組基盤のSR570の宝篋印塔の塔身と墓域内の笠3点、他にSX133・216の客土中、SD069・781、SU374・SR719から五輪塔の小片を検出し、量としては少い。石材は殆どが砂岩である。中世の溝から多量の砂岩剥片が出土しており、戦闘時の「礫」として転用された可能性がある。742はSR570上面の宝篋印塔の塔身辺で、残存で厚21㎝長18㎝以上幅16.5㎝以上で、底から12㎝上から壁を4㎝程残して方形に刳いている。砂岩製。743は宝篋印塔の笠石で約28㎝角で高17㎝程を測る。下は幅17㎝からの3段の逆段。上は幅23㎝からの6段の階段造りの屋根で隅飾は低く11.2㎝。縁取り二弧でくびれも小さい。開きも2.5㎝程と狭い。上面中央には径8.5深7㎝の相輪受の穴を穿ける。砂岩製。744・745はSU374上面で検出した五輪塔の水輪片で、744は花崗岩製。底径17胴径25.7㎝。底は若干上底。745は底径14胴径24㎝。内径13㎝程の蔵骨部を円形に刳り込んでいる。外面と断口にはこれを打ち割る際のタガネ痕が残っている。底は若干上げ底。

Ph.117　SR735（北から）



Ph.118　SR735出土銭

Ph.119　SR726（西から）



Ph.120　SR726出土銭

Ph.121　中世墓出土遺物

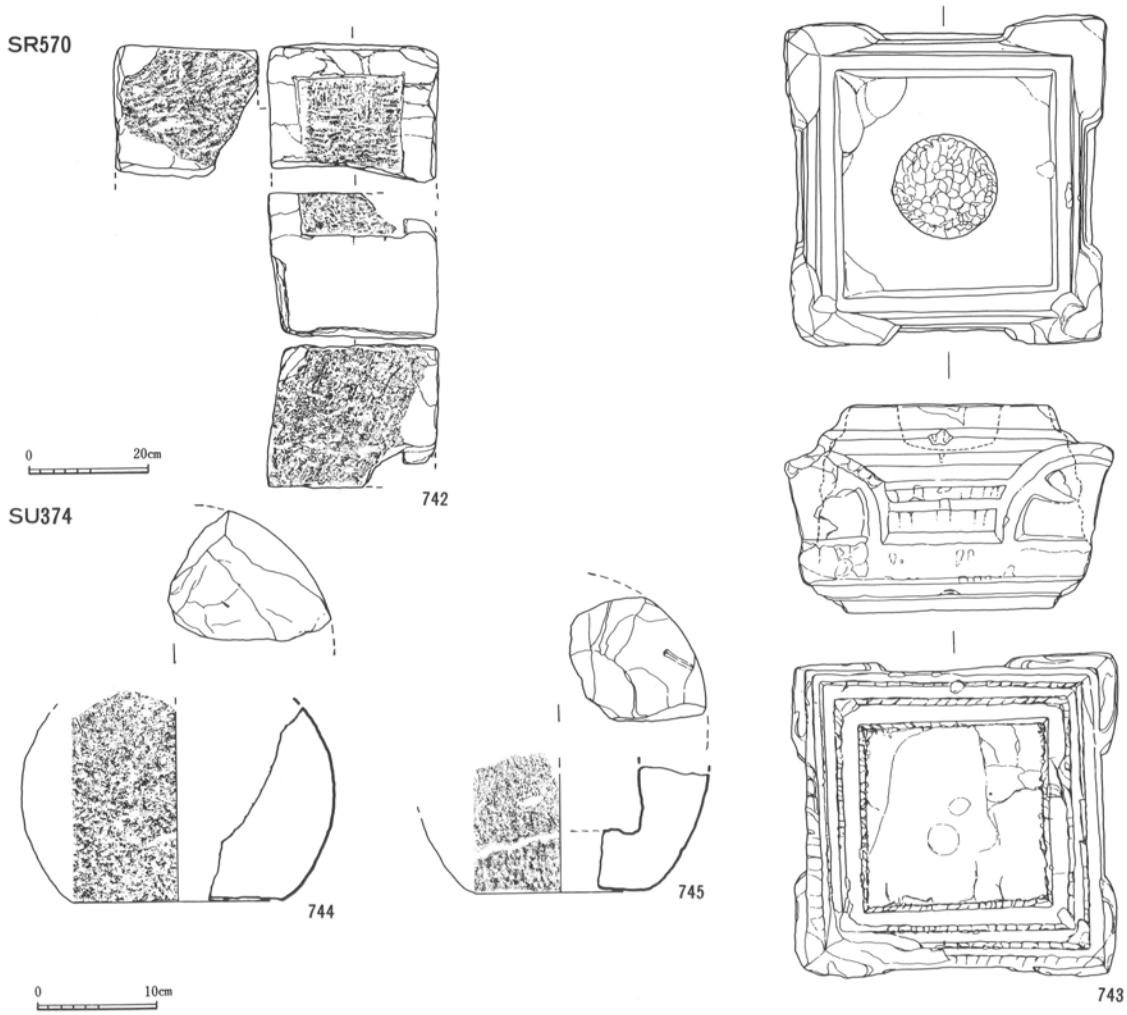


Fig.96　石塔類実測図（1/12・1/6）

⑦ 包含層と客土層

当初中世末の包含層と客土層として整理を実施したが、本文執筆中、E～F12グリッドとD20グリッドの近世包含層・客土層が同一の層である事が判明した。図示は行っていないが、D20グリッドの包含層上面から寛永通寶と永楽通寶が土師器の坏・皿の下から出土し、F12グリッドの客土中からは17世紀前半代の溝口縁の唐津鍔皿と肥前系の陶器甕を検出した。

貝原益軒の『筑前国続風土記』の「早良郡　上　上長尾村」の条に「長徳寺　ナカキド　眞宗佛堂二間四間半　万行寺に属せり。寛永廿年二月木佛寺號を許さる。」との条文がある。1643年に当たり、此等の資料と合致し、長徳寺創建時の大規模地業である可能性が大となった。縄張.4とⅡ区間の南北60m東西9～16mの約750m²程になされた埋立地業である。

Ph.122　中世客土土層断面（南西から）

中世溝SD126・137はこれ以前の中世末に犬走りまで埋め戻されて平坦にされ、段畑として耕作され、10～20cmの暗黄灰色の砂質耕作土が堆積し、これが包含層となっている。

包含層出土遺物（Fig.98　Ph.123）

746は青花瓶の小片で外面に荻文を描く。747は線描蓮弁文の青磁碗の小

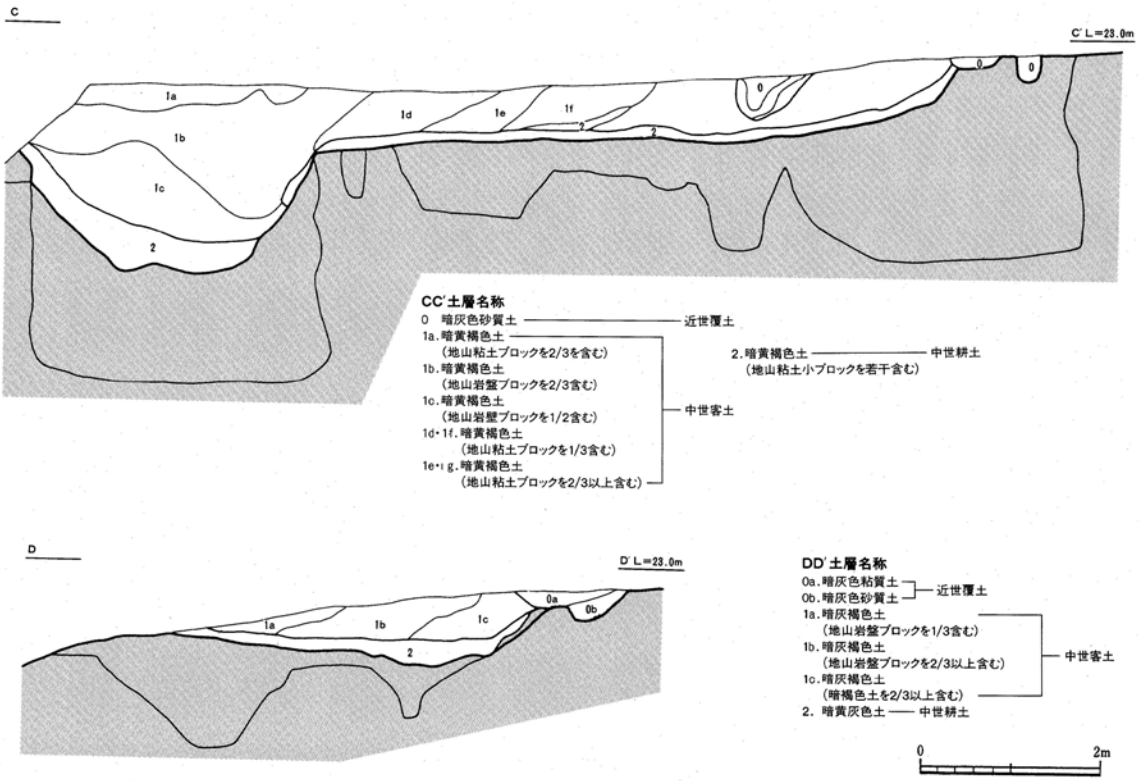


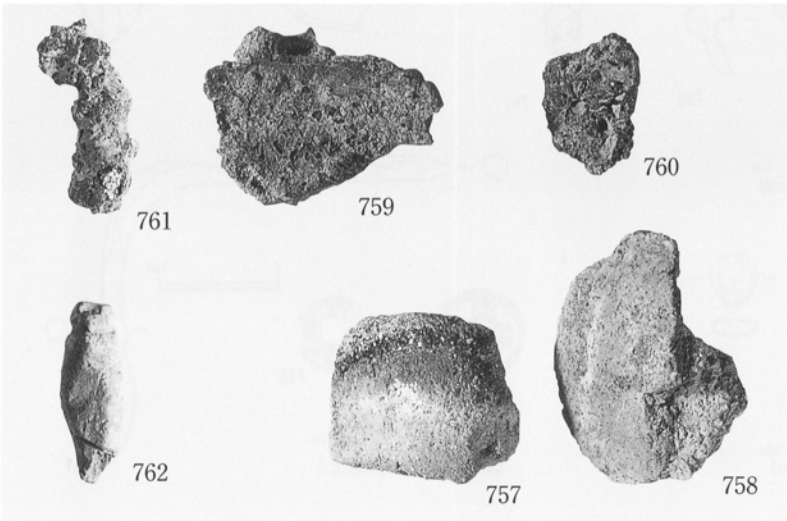
Fig.97　中世包含層・客土土層断面図（1/80）

片で胎土は灰白色で釉は明オリーブ色を呈する。748は朝鮮白磁碗で口径14㎝。胎土は橙色で粗く、釉は不透明の白色で全面に薄く掛ける。749は土師質の擂鉢で口径33.2㎝。指頭とナデによる整形で、内面は磨耗のため擂目が不明瞭となっている。750は瓦質の鍋口縁で幅4㎝程口縁が肥厚し外面がゆるく湾曲する。外面は煤が付着し内面はヨコハケを施す。751・752・753は土師器坏で口径・器高それぞれ11.8×2.6・13×3.2・10.6×2.1㎝を測る。754～756は土師器皿で口径・器高それぞれ7×1.6・6.8×1.7・6.6×1.4㎝を測る。いずれも器壁が荒れ調整不明。757は吹口羽口で、外径8～10㎝孔径2.6㎝でゆがみが大きい。炉壁との接合痕があり、厚1.6㎝程でこれとの角度は108度を測る。先端は厚くガラス化する。758は鍛冶炉の炉底の粘土で下面はレンズ状を成し還元されて黒くなる。他は酸化焼成で橙色を呈する。径18㎝程。759～761は鉄滓。759は椀形鍛冶滓で上面は中央が窪み下面はレンズ状で酸化土砂に覆われる。長13.5㎝。周縁に木炭痕がみられる。760は小形の椀形滓で長8幅6㎝で上面が窪み下面は突起状に突出する。酸化土砂が付着し断面は多量の気泡と木炭痕で穴だらけになっている。761は長4.8幅2㎝程の流出滓と思われ全体が酸化土砂に覆われる。762は滑石製の石錘で下方の端部が欠けるが、両端に紐掛け溝を刻んだものと思われる。現状で長4.6幅1.1～1.6㎝で中央が厚い。763は径2.1～1.9厚0.7㎝の小円礫で、灰～明オリーブ灰色を呈し両平坦面に光沢が有る。碁石と思われる。764は径1㎝の鉄棒を14.5㎝と12.4㎝の直角に折り曲たもので、下端が湾曲しており、鍋等の吊手の残片と考えられる。765・767は銅銭で、765は「皇宋通寶」で径2.5㎝、766は「元祐通寶」である。前述したが他に「永楽通寶」1枚と「寛永通宝」3枚を検出している。

16世紀末～17世紀前半を示す。

客土層出土遺物（Fig.99・100　Ph.124）

767は唐津鉄絵の大鉢で、口径30.7器高12㎝を測る。高台から胴がゆるく張り口縁下2㎝で垂直に屈折して若干湾曲する。屈折部は稜を成す。胎土は橙色で黒色白色の微粒を含み、釉は緑灰色の半濁釉で下の鉄絵がにじんでいる。内面から外面中央位まで薄く掛ける。内面には暗褐～黒褐色の鉄絵で蓮文を描く。見込には胎土目が残る。768は唐津鉄絵の片口と思われ、口縁部を欠くが、胴径18.2器高9.5㎝を測る。胎土は橙色でやや粗く、釉は緑灰色の半濁釉で内面から外面下位まで薄く掛ける。外面には茶褐色の鉄絵で花文を描く。見込には小さな縦長の胎土目が残る。769～771は明末清初代の青花で769は口径22.6㎝の鍔皿。内外面口縁部の圏線間に文様を描く。胎土は灰白色で釉は青味がかった透明で呉須はにじんだ淡藍色を呈する。770は小皿で口径15㎝。内面圏線下に草花文を描く。胎土は白色でやや粗く釉は青味がかった透明で呉須は灰色がかった淡藍色。771は小碗で口径11.5㎝。内外口縁下に2条圏線を描き、外面には花卉文を描く。胎土は白色、釉は青味を帯びた透明で呉須は暗い藍色。772は青磁の菊皿で口径9.4器高3㎝。口唇は細かな輪花で内外を丸彫で菊花を表す。胎土は灰白色で釉は黄味を帯びた淡青色。773は龍泉窯系の輪花皿で、口径11.6器高2.7㎝を測る。口縁内面には片切彫の縁取りが2重になされる。胎土は灰色でやや粗く釉は灰オリーブ色で高台内側まで施



Ph.123　中・近世包含層出土遺物

される。774は景徳窯系の青磁香炉で口唇内外が肥厚し上面は凹線状になる。口縁外面下に沈線を1条施す。胎土は灰白色で釉は明緑青色で透明。口縁内側から外面に掛ける。775は唐津溝口縁の鍔皿で口径13.5cm。胎土は橙色でやや粗く釉は乳白色の半濁で口唇外面から内面に薄く掛ける。776は朝鮮雑釉陶器の輪花皿で、口径12.2cm。胎土は黒色粒を含む暗灰色で釉は黄褐～緑褐色の不透明釉で内外に掛ける。777は朝鮮軟質白磁の皿で口径10.4cm。胎土は黒色粒を含む淡灰色で釉は灰白色の不透明で内外に薄く掛ける。778は朝鮮雑釉の瓶の口縁で径5.4cm。胎土は茶褐～褐灰色を呈し釉は緑褐色の不透明で内外に薄く掛ける。779は擬宝珠形の溲瓶で現状で径15.3高12.4cmを測る。胎土は白色黒色粒を多く含む灰黄～灰白色で外面のみにオリーブ褐色の釉を掛け内面露胎部は黒褐色を呈する。780は瓦質の湯釜で肩が張り径26.2cm。底部は径11cmの平底になる。把手は肩部に付きやや上方に吊り上がる。孔の径は8mm。外面には細かなハケ内面にはやや粗いハケメを施す。胎土は1～3mm大の石英粒を含む。781は防長系の足鍋で口径25.2cm。口縁がゆるく「く」字に屈折しゆるく湾曲して口唇内側が強く張り出す。胎土は1～3mm大の石英粒を多く含む。782は瓦質の焙烙状の鍋で口径50.4器高9cmを測る。外底はレンズ状で1/3程で稜を成して屈折し口縁は外面に肥厚して幅3cm程の玉縁

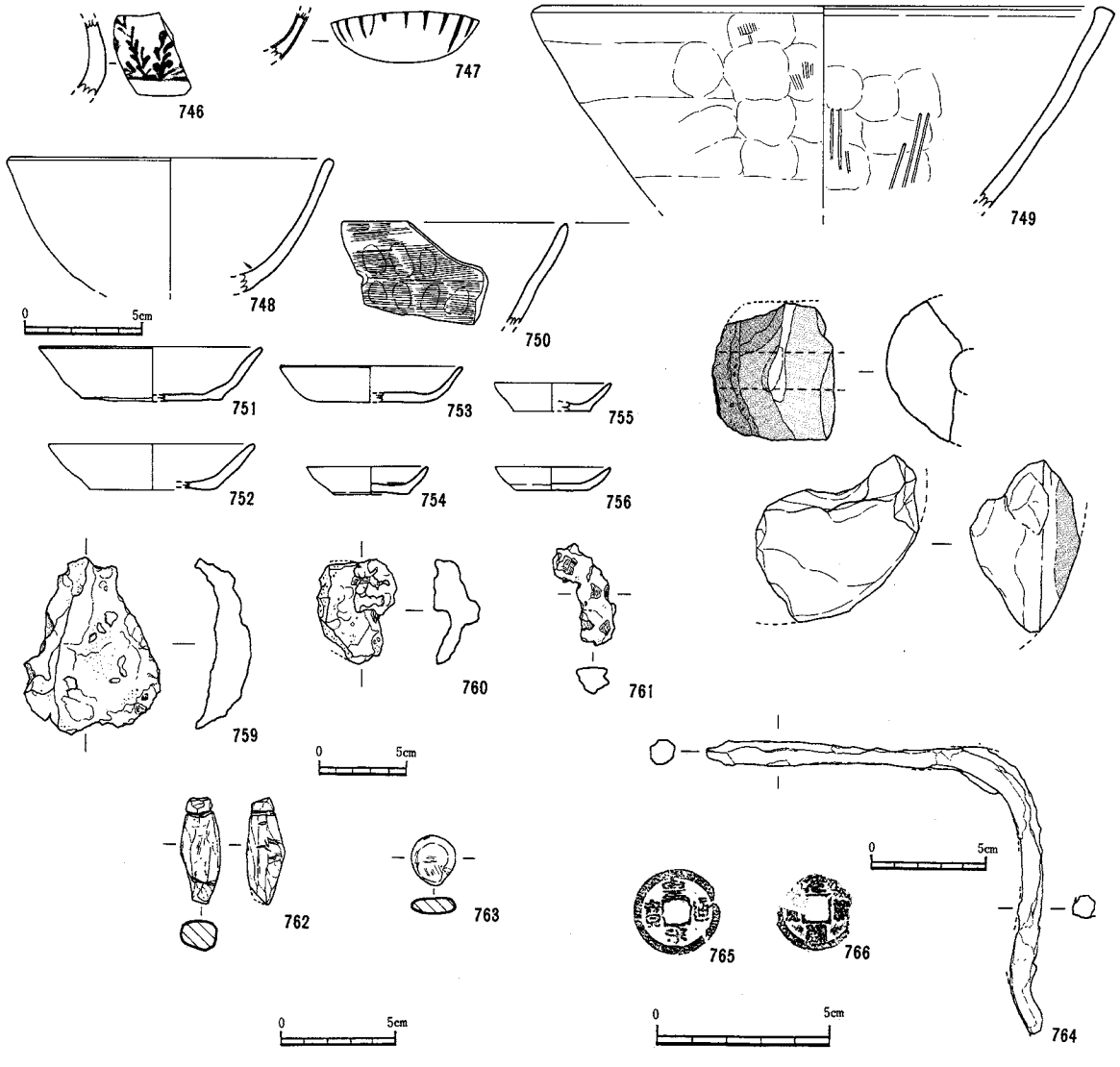


Fig.98 包含層出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

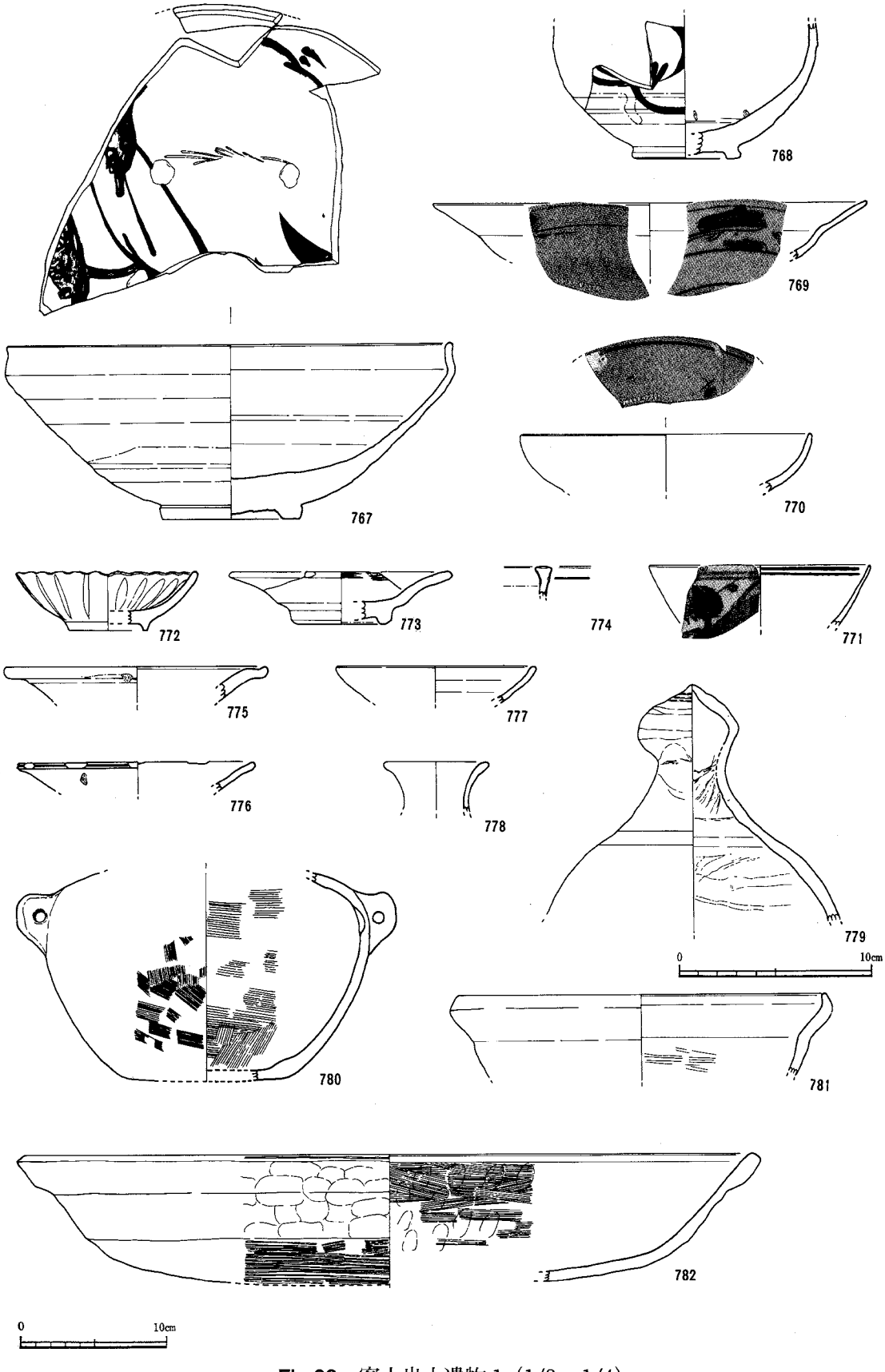


Fig.99　客土出土遺物.1（1/3・1/4）

状を呈する。外底は粗いハケメ以上は指頭圧とナデ、内面は細かなヨコハケを施し内底は丁寧にナデる。口唇には1条沈線を施す。外面には煤が厚く付着する。胎土は1mm大の石英粒を含む。783～786は土師器。783は口径12器高2.2cmの坏。784～786は皿で口径・器高それぞれ9.6×1.8・9.4×.16・8.2×1.5cmを測る。全て器壁が摩滅し調整は不明。787は径1.6～1.8厚0.6cmの碁石で黒く光沢が有る。788は土人形の犬で、頭部と尾を欠くが全長4.7高2.7cmを測る。足は径2cm程の胴の四隅から5mm程つまみ出して整形している。頭部破断面の上面に沈線、中央に2つの穴があり、それぞれ串で耳と目を刺突して表現した痕跡である。一部に白色の顔料が残っており、呉粉で彩色したものと思われる。789は管状土錘で径1.1～1.5cm長3.4cmを測る。径5mm程の棒に粘土を巻いて整形したもので孔は真直である。790～795は鉄滓である。790は方形状の鍛冶滓で長8.2幅8.1厚5cmを測る。上面は平坦で木炭痕が多く見られ、下面は凸面状で分厚く酸化土砂が付着する。791は大きめの椀形滓を4分割したもので、上面は中央が段を成して窪み隅は隅丸方形を呈する。下面は凸面状で酸化土砂が付着する。792は椀形滓を半載したもので長10.1幅6.1厚4.9cmを測る。上面は中央が深く窪み木炭痕が多く見られる。下面は厚く強く突出し酸化土砂が付着している。793は長9.6幅8厚2.8cmの薄めの椀形滓で上面は中央が大きく窪んで気泡・木炭痕が多数見られる。下面は中央が突出し酸化土砂で覆われている。木炭痕も幅広く残る。794は小形の椀形滓で長6.6幅6厚2.2cmを測る。上面は窪んで中央部に木炭痕が集中する。下面は凸面で青味を帯びた黒灰色で光沢が有り、粘土の付着は少量である。795も小形の椀形滓で長5幅3厚1.3cm。上面は多量の木炭痕があり窪み、下面はゆるく突出して酸化土砂が付着する。下位の包含層とともに多くの鍛冶滓が出土している。796は楔状の鉄器で長5.6幅2cm厚3～2mmで頭部をU字に折り曲げる。先端は平たく薄くなる。797は砂岩製の石臼の鉢部を砥石に転用したもので長9.8幅4.4厚4.7cmを測る。手持ち砥石で、平坦部に幅1～3mmの溝状の窪みが出来ている。

16～17世紀前半を中心とする。当初は17世紀代のものは上面遺構分の残存と考えていたが、下層の包含層から寛永通宝が出土した事から、17世紀前半代の客土と判断する。

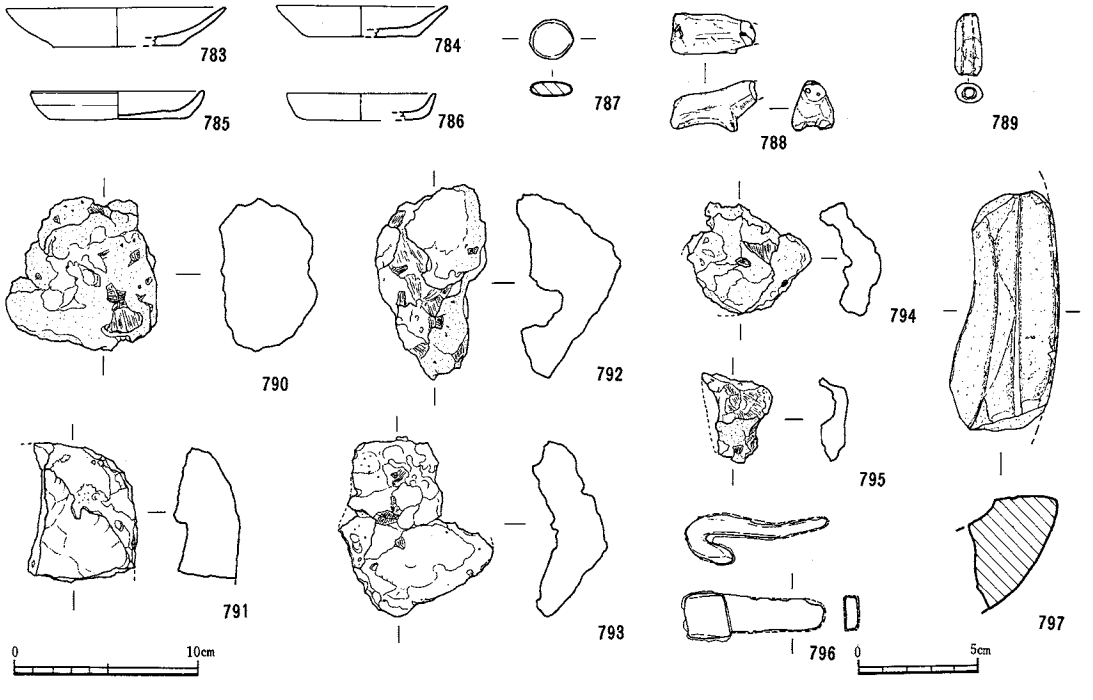
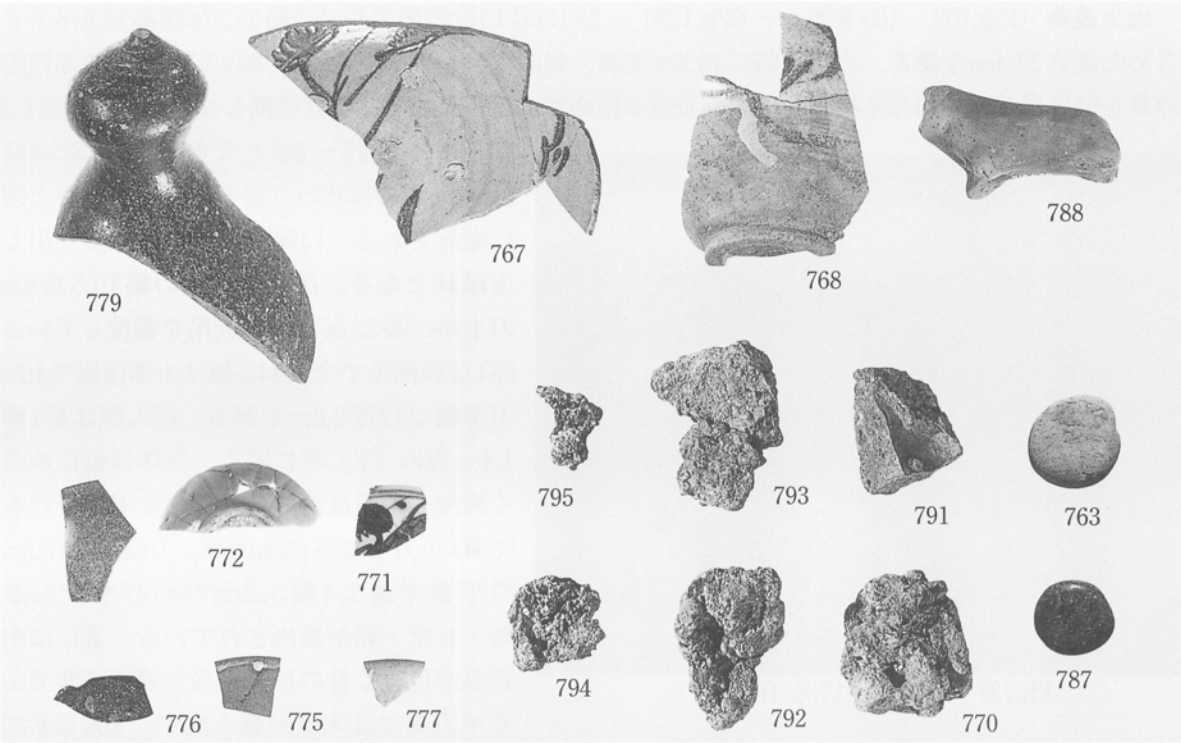


Fig.100 客土出土遺物.2（1/3・1/4）



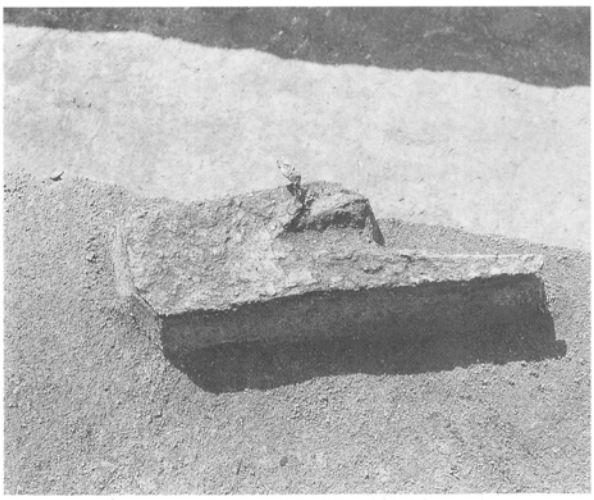
Ph.124　上部客土出土遺物

客土下面埋納遺物

北側のF13グリッドを中心としたSD137上の包含層（旧耕土）上面と南側のE20グリッドを中心としたSD126上の包含層上面の南北それぞれに客土の際の地鎮に用いたと思われる埋納資料がまとまって検出された。

F13グリッドでは（Fig.101　巻頭.4　Ph.125·126）南から北へ壁に沿って直線上の3.8mの範囲に刀子・鉄製鍬先・鉄鍋を、刀子は折り、鍬先は木軸をはずし（左の挿入部の欠損は試掘による）、鍋は吊手をはずして本体を覆せその上に吊手を置いた、いずれも使用できない状態で埋納している。

E20グリッドでは和鏡と笄・金銅製の柄頭と土師器坏・皿の下に永楽銭・寛永銭を入れ、北の鉄器に対して銅製品のみを埋納している。和鏡は鏡面を上にし（Ph.127）鏡背には薄板が残存しており折敷上に置いた可能性がある。


Ph.125　鍬先出土状況（北東から）

Ph.126　刀子出土状況（北東から）

出土遺物（Fig.102・103巻頭4～ 6Ph.128）　553は片口付鉄鍋で長32.5幅25.3体部高12.5吊手を含めた高さ23.4㎝を測る。片口両脇に10.5㎝間隔、対面に1ヶ所の計3ヶ所に幅4.5高1.8㎝の半円形の耳を付け吊手の先端部を折り曲げて刺し込み留めている。よって吊手は稼働しない。片口は長6.2幅6.5～3.2高5～2㎝と大きい。鍋底には径1長2㎝程の棒状の三足を付けるが、耳と逆に配置される。口縁内端は小さく張り出し玉縁状となる。吊手は前部の幅10.5高6㎝の小吊に長23高13㎝の大吊を鍛接している。554は鉄鍬先で全長44.5幅は上部復原で16.8刃部幅で12厚0.8㎝を測る。挿入部は長1幅1.4㎝程の「Y」字に開く。全体は縦にゆるく湾曲し、刃は湾曲の外側に片刃で付ける。555は小刀で全長40㎝弱か。刀幅3.5厚0.8㎝の平造で長3.4幅3.2㎝のハバキが入る。銅・ヒ素・鉛が検出されている。茎には木質痕が付着し竹の目釘も残り着柄状態であるが刀身には木質が残らない。556はE20グリッド出土の和鏡で、径6.2高0.4幅0.5㎝の角縁で鈕高0.8㎝を測る。背面には陽刻で3本の菊花を鋳出している。分析の結果銅・錫・鉛とヒ素少量の銀・鉄が検出されている。鈕には紐が残っておりFT－IRでの分析の結果麻である事が判明した(Tab.1)。557は11面観音の懸仏で長5.3幅3.1厚1.2㎝で、裏面に光背を固定する突起があり棒を差し込み固定する。顔と頭部の九面部はタガネで刻み、同手法の11面観音は博多・箱崎遺跡でも検出される。E14グリッド出土。558は金銅製の刀柄頭飾で長3.6幅1.3高1.8㎝で撚紐を意匠した袋部と蓋とからなり、袋部は分析の結果地金は銅と銀、その他少量の鉄とヒ素を検出、蓋の薄板からは銅と微量の鉄・ヒ素を検出し別素材である事が判明した。E20出土。ph.129の897は笄でE20グリッド出土。長18.4幅1.1高0.6㎝を測る。径1.1㎝の釦状の装飾を付け、本体は銅・銀・鉄が、釦は銅・錫・鉛・亜鉛・ヒ素・鉄が検出され別個の素材である事が判かった。

以上装身と刀装具・刀が目立つ。

Ph.127　和鏡出土状況（南から）

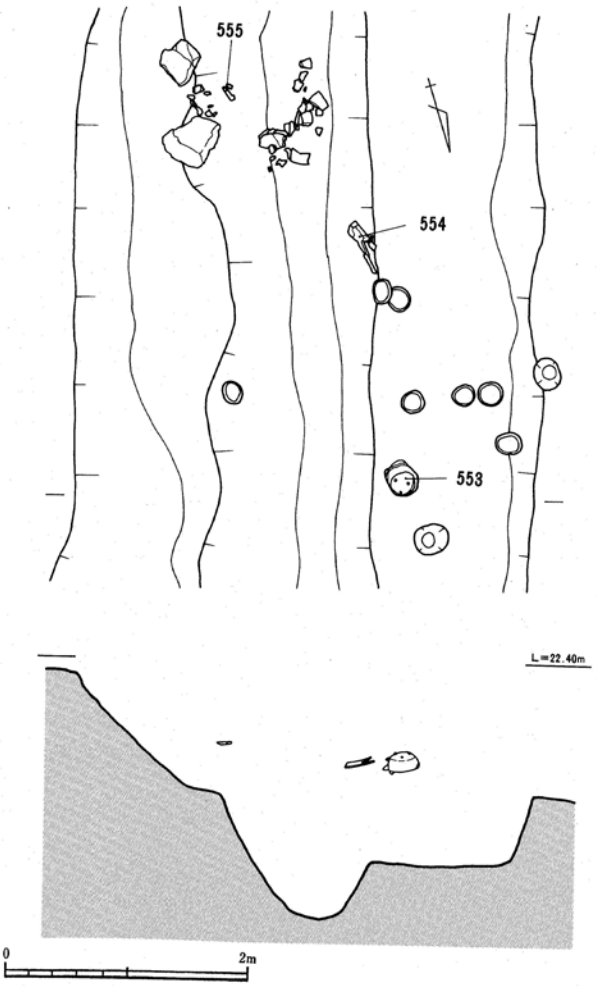


Fig.101　上部客土下埋納遺物出土状況（1/60）

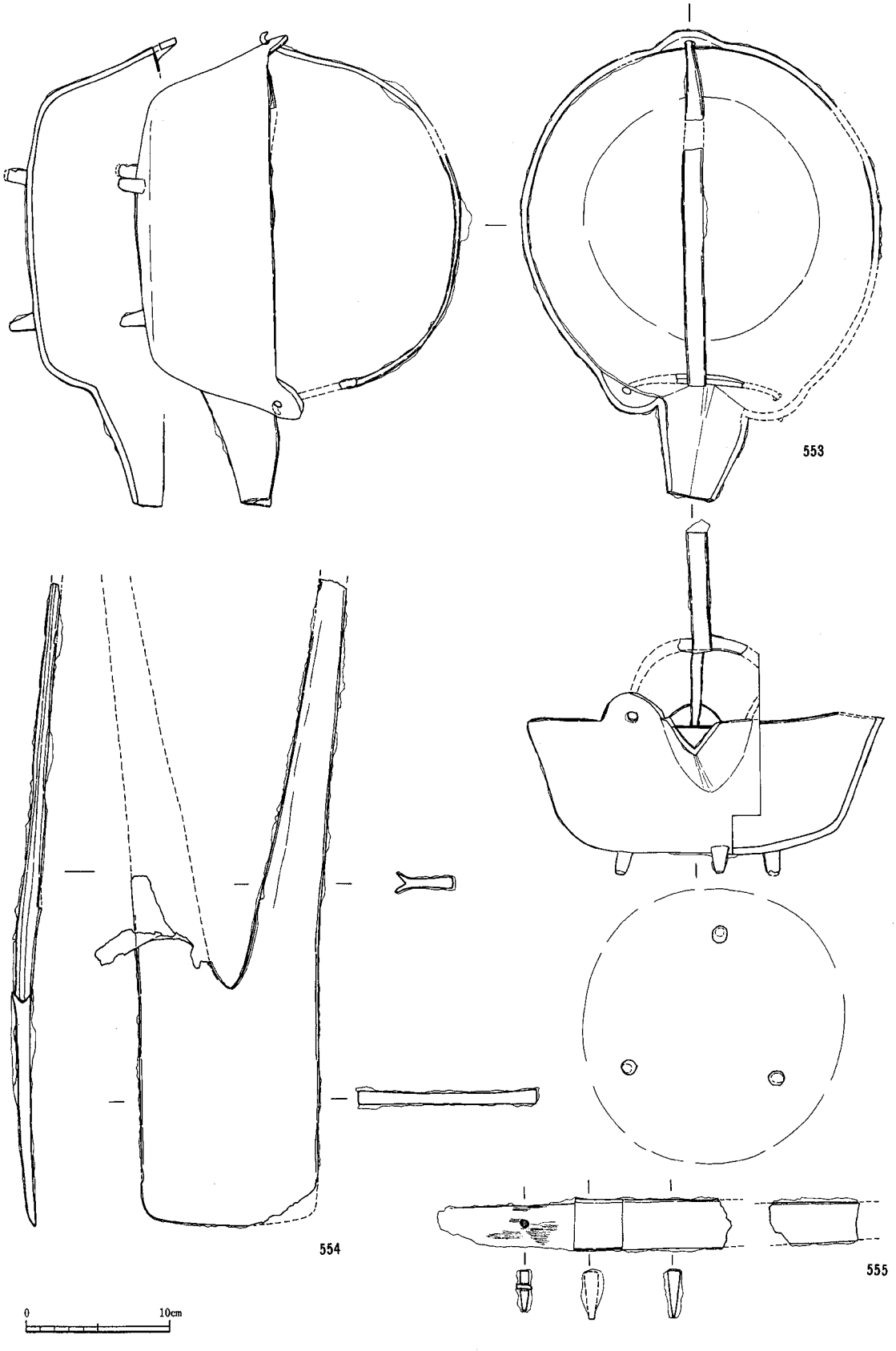


Fig.102　上部客土埋納遺物実測図（1/4）

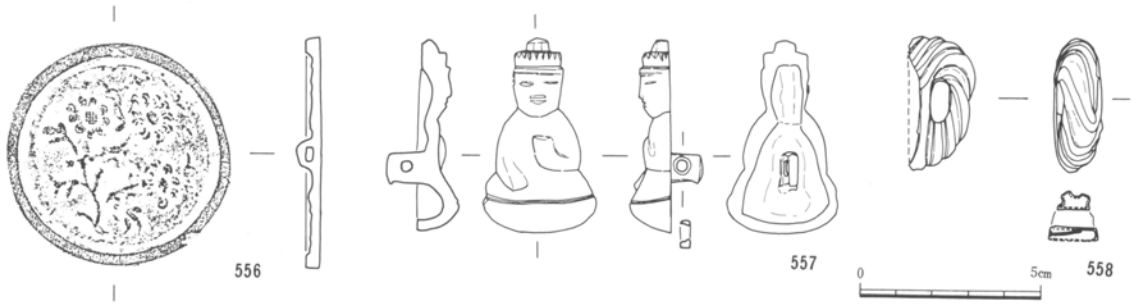
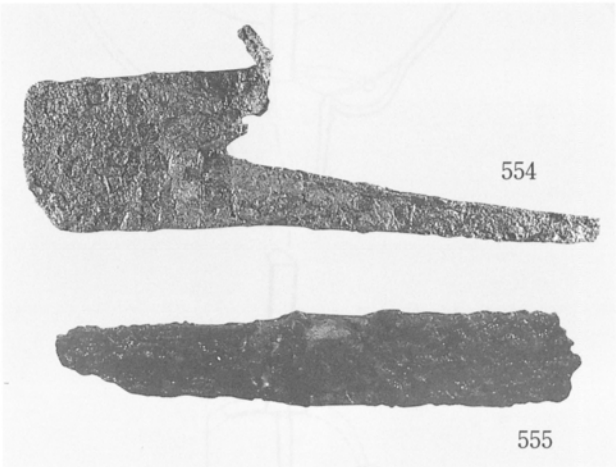
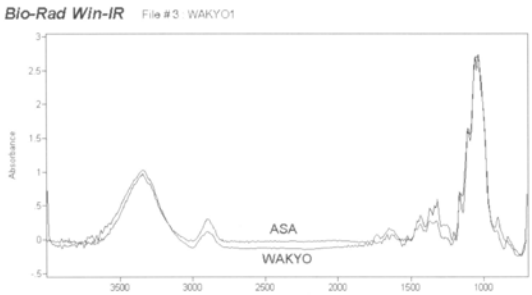


Fig.103　上部客土埋納遺物実測図.2（1/2）



Ph.128　中世上部客土遺物.1



Ph.129　上部客土埋納遺物.2

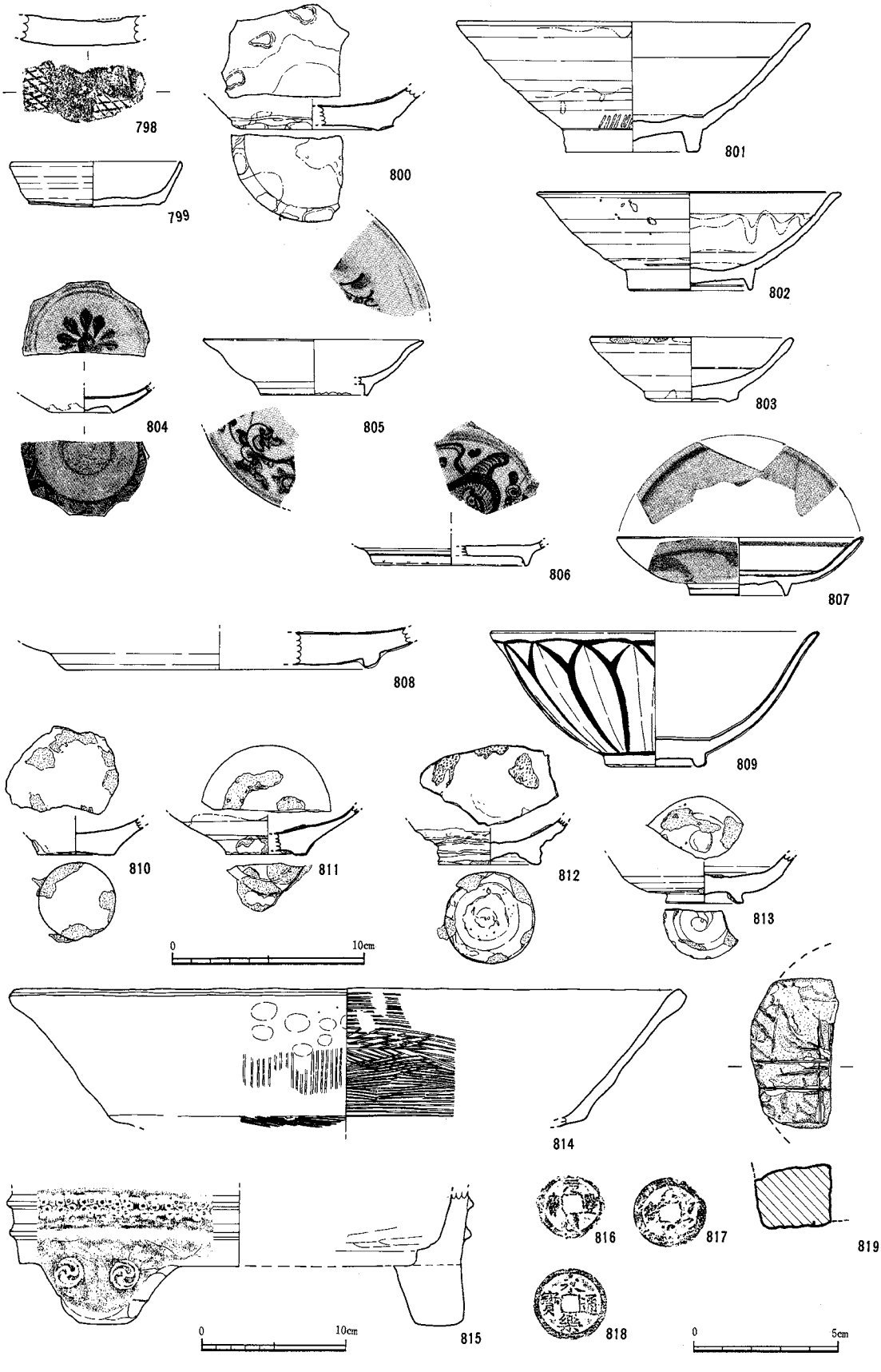
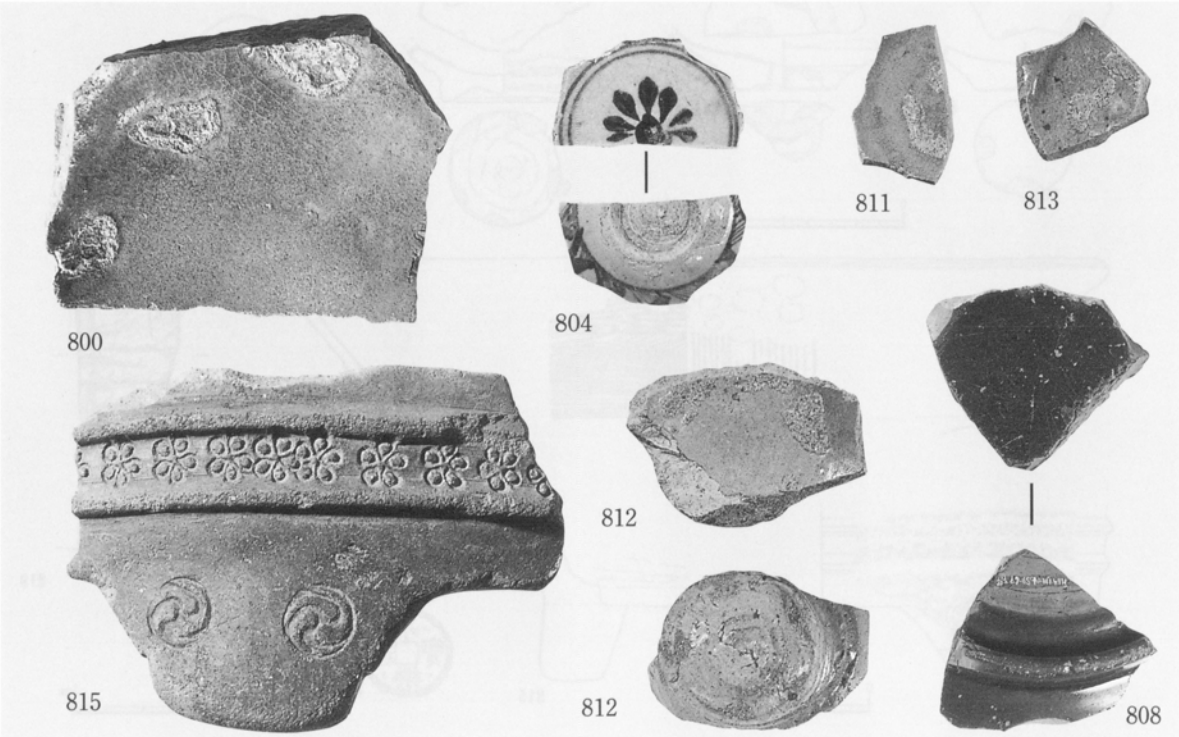


Fig.104　その他の古代・中世遺物実測図（1/3・1/4・1/2）

⑧その他の古代・中世遺物（Fig.104　Ph.130）

798は斜格子叩の平瓦片で10～11世紀代。799は土師器坏で口径12.6器高3.2㎝。外底は糸切りで13世紀代。800は粗製の越州窯系青磁大碗で、底径8.4㎝。削り出し高台で胎土は灰白色。釉は明黄褐～オリーブ色で内面のみ掛ける。見込と畳付に胎土目が残る。801は直口縁の白磁碗で口径18.4器高6.7㎝。胎土は灰白色で釉は灰オリーブ色の透明で内面から外面中位まで掛ける。見込は蛇ノ目にカキ取る。802は口縁が若干外反し上面が平坦な白磁碗で口径16器高5.1㎝を測る。胎土は灰白で釉は緑がかった灰白色。内面の口縁に厚く、外面下位まで掛ける。見込は蛇ノ目にカキ取る。803は直口縁の白磁高台付皿で口径10.7器高4.8㎝。胎土は灰白色で釉はオリーブがかった透明で内面から高台脇まで掛ける。804は安南青花の碁笥底の皿で底径3.1㎝。胎土は淡黄色で褐色微粒を含みやや軟質。見込に暗青色のにじんだ呉須で花文を外面体部に蕉葉文を描く。釉は厚く透明で外底脇まで掛ける。805は明青花の端反り皿で外面と見込に唐草文を描く。口径11.4器高2.8㎝。806は見込に玉取獅子を描く明青花皿で底径7.6㎝を測る。807は明末清初の青花皿で口径12.8器高3㎝を測る。外面には草花文を描く。808は龍泉窯系青磁盤で底径15.7㎝。全面施釉後、高台内を蛇ノ目にカキ取っている。809は半肉彫の鎬蓮弁文碗で口径17器高7㎝を測り高台脇まで施釉する。810は朝鮮軟質白磁碗で底径4㎝。胎土は浅黄橙色で釉は灰白。全面に施釉し見込、畳付に砂目が残る。811は朝鮮雑釉の碗で底径4㎝。胎土は灰白で黒色粒を含み釉は明褐色の不透明釉で全面に掛け見込と畳付に砂目が残る。812は竹節高台の朝鮮軟質白磁碗で底径5.3㎝。胎土は黒色茶色粒子を含む淡黄色で軟質。釉は灰青色で全面施釉し畳付はフキ取る。見込畳付に砂目が残る。813は朝鮮硬質白磁碗で底径4㎝。胎土は灰白で黒色粒を含み緻密。釉は不透明のオリーブ黄白色で全面施釉後畳付のみカキ取り、高台内と見込に砂目が残る。814は瓦質の焙烙鍋で口径45.4器高9.5㎝。外底はレンズ底で口縁外面が肥厚する。815は瓦質火舎で突帯間に梅花、脚に三巴文を押印する。816～818はD20グリッド包含層出土。816・817は「元豊通寶」818は「永楽通寶」で土師器坏下から出土したもの。819は五輪塔の水輪を転用した有溝砥石で底径26㎝程であったと思われる。砂岩製。



Ph.130　その他の古代・中世遺物

5.　近世の調査

近世ではⅡ区を中心として、Ⅱ・Ⅲ区を分かつクランク状の大溝SD063・SD485を境に南北で遺構の性格が異なる。北には土塁を巡らして墓域として区画し、前代の中世墓を取り囲んで北に拡張して、17基の墓を設けている。生活遺構は少なく、土壙が3基散見されるのみである。

南側は生活域として、最高所の前代の建物群を溝と段で東西25南北11mの矩形に囲い、この空白域に主屋を設けたと思われる。以南は東西南北方向の溝11条で区画し、溝の末端に溜井を設ける水利システムを取り畑地として活用した様で、土壙も8基東側に集中し東西2列に分布する。

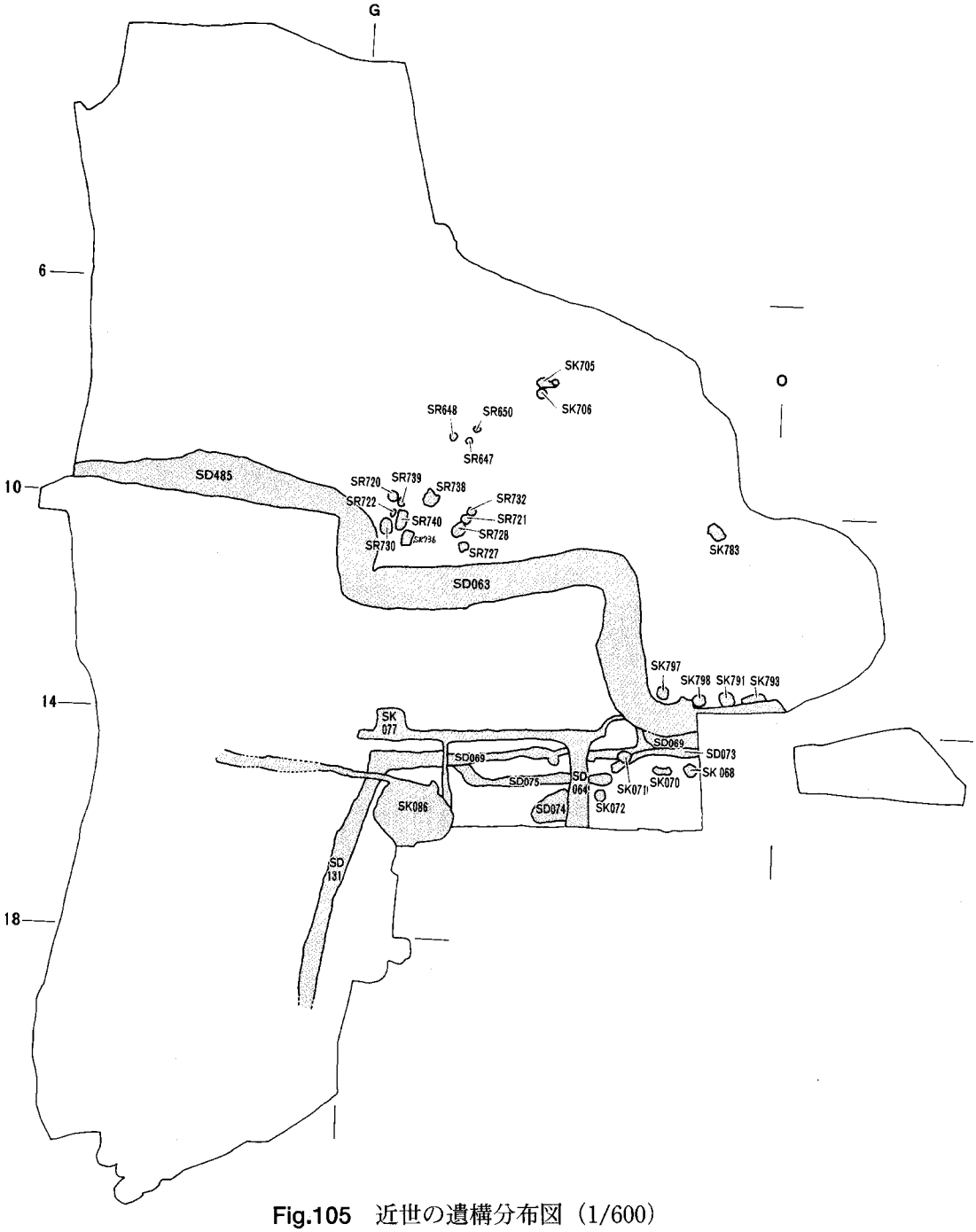


Fig.105　近世の遺構分布図（1/600）

1） 溝と溜井

SD064・085とSK677・086（Ph.131）

Ⅱ区建物群の南で東西20m南北7m以上の方形に区画する溝がSD064で、南北溝が幅2mと広く、東西溝は幅60cm程と狭くなる。西端近くに3.5×2.3mの方形の溜桝SK077を、東の南北溝の西11m程の位置に幅30cm程の南北溝を5m延ばして径7.4×5.8mの大形の円形の溜桝SK086に連げ、さらにSD086の北辺から西の整地部分へSD085が延びている。この様に水に不自由する丘陵上での雨水を利用した灌漑システムを計画的に行っている。

出土遺物（Fig.106・107） 820～823は肥前系染付の碗で820は口径9.7器高4.9cm。外面体部に団菊文と草花文を描く。高台脇に圏線を3条施す。畳付のみ露胎でわずかに敷砂が付着する。高台内面には渦福を描く。821は口径10器高6.1cmを測る。高台際に圏線を2条施し、以上に草花文を描く。畳付のみ露胎で胎土は淡黄色。釉は灰白色で厚く掛ける。822は口径10.6器高5.5cmで、高台脇に圏線を2条、以上に円文と花文をコンニャク印判で施す。呉須は発色が悪く黒ずんでいる。畳付のみ露胎で砂が少量付着する。823は口径10器高5cmで、高台脇に太い圏線を1条施し以上に松竹梅文を施す。松文はコンニャク印判で他は筆描き。呉須はにじんだ暗青色で、釉は畳付のみ露胎で砂が少量付着する。824は染付の小坏で口径7.6器高5.5cmを測る。外面には草花文と松文を描き、松文はコンニャク印判手である。呉須は暗青色でにじむ。畳付は露胎で砂が少量付着する。825は肥前系青磁染付の蓋物の蓋で口径9.6器高2.9cmを測る。体部外面は厚い明緑灰色の青磁釉で口唇は口銹。内面見込に呉須で花籠を描き周囲にコンニャク印判で桐文を3つ描く。高台内には「大明成化年製」を記す。826は染付の稜花皿で、見込にコンニャク印判で五弁花を描き口縁内側を窓絵にして芙蓉手を描く。外面には唐草文を描く。高台内には渦福を描いている。827は同じく肥前系の染付輪花皿で口径14.9器高3.9cmを測る。内面見込にコンニャク印判で五弁花を描き口縁内面には筆書で唐草文を描き外面には略化した唐草文を描く。高台は露胎で砂が少量付着し、内面に「太明年製」を記す。828は浅い輪花皿で内面見込にコンニャク印判の五弁花を口縁内面には島や波などを描く。体部外面には略化した唐草を描き高台内に渦福を描く。高台は畳付のみ露胎。829も同様に輪花皿であるが内面に稜をつくって花弁を表現している。見込にはコンニャク印判の五弁花を、口縁内面には花卉文を描く。外面は略化された唐草文で高台内に渦福を描く。高台畳付のみ露胎。口径15.6器高5.1cmを測る。830は口径15.1器高2.8cmの皿で見込に「日」字周囲に鳳凰文を描く。呉須は暗青色で、畳付のみ露胎で外底には細かな砂が多く付着する。831も同じく背の低い染付皿で口径13器高2.5cmを測る。内面には菊花文を外面には花蝶文を描く。畳付は露胎で砂が付着する。832は小形の染付皿で口径9.6器高2.4cmを測る。内面にコンニャク印判による牡丹文を3つ描き、外面には筆描の折松葉文を3ヶ所描く。畳付のみ露胎で敷砂が付着する。833は腰折れの中皿で、底径11cm。肥前系陶器鉄絵皿で、胎土は淡黄色・鉄絵は暗オリーブ～暗藍色で見込に山水文を描く。釉は淡黄色で高台際まで掛ける。834・835は唐津系螢手碗で、834は口径10.4cm。胎土は黄橙色で釉は不透明の飴釉で淡黄色化粧土で円文を描く。835は現川系の螢手碗で口径10器高5.2cmを測る。胎土は暗赤褐色で固く、内面には白化粧で刷毛目外面に円文を描く。畳付のみ露胎で砂目が残る。837・838は上野系の陶器碗で、837は口径8.5器高4.9cm。胎土は灰白で釉は全面に飴釉を施し口縁部に灰～オリーブ黄色の藁灰釉を二重掛けする。畳付は露胎で砂目が残る。836は口径8器高5.2cmの沓形碗で、胴部の一方が窪む。胎土は灰色で緻密。釉は飴釉を全面施釉後口縁に藁灰釉を二重掛けする。畳付は露胎。838は唐津系陶器端反り皿で口径20.6器高5.2cmを測る。胎土は灰色で細かな砂粒を含み、釉は灰褐色で全面に薄く施釉し見込と畳付は輪状にカキ取る。839も唐津系の陶器小皿で口径12.6器高4cm。胎土は灰黄色で白色・褐色粒を多

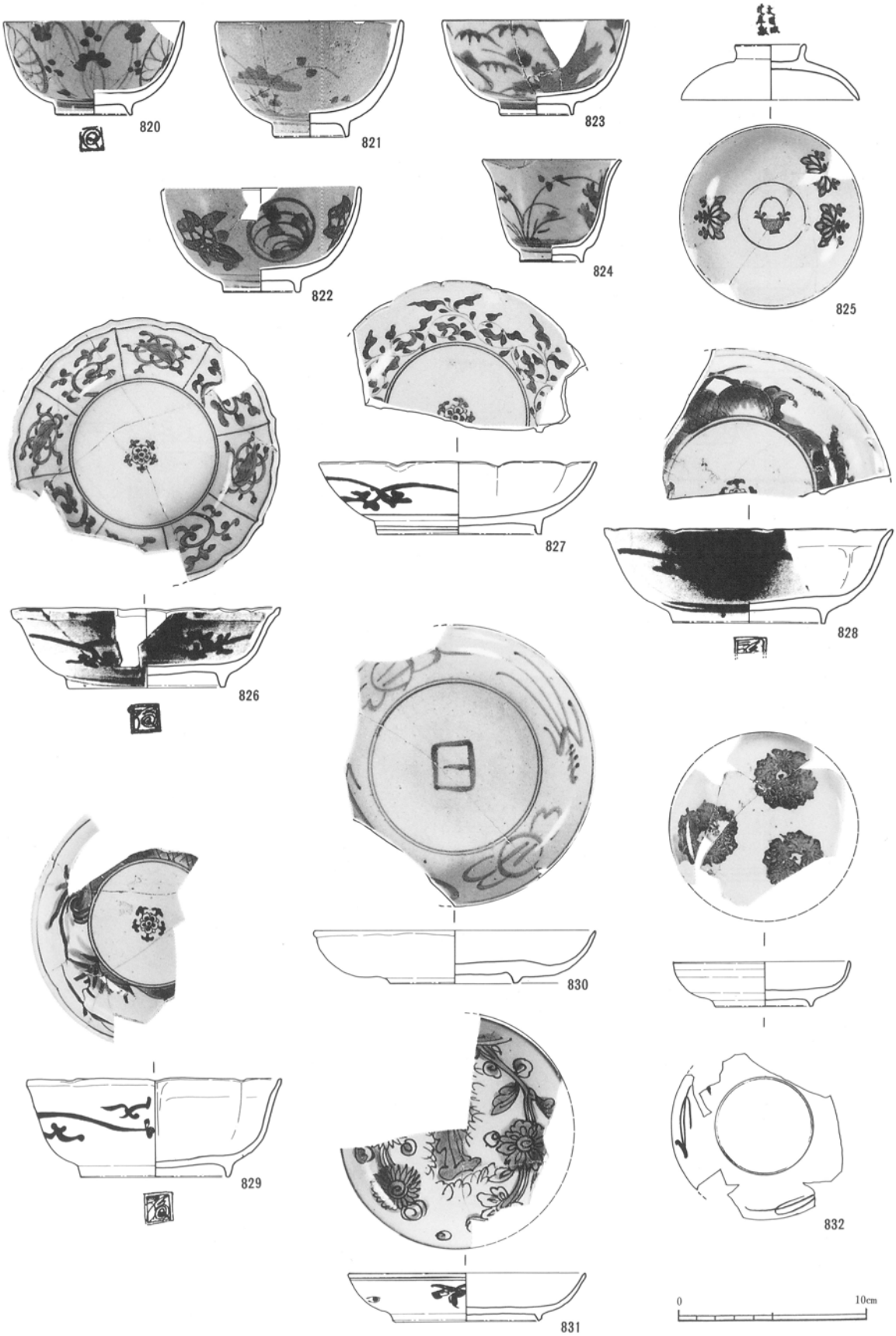


Fig.106　SD064出土遺物実測図（1/3）

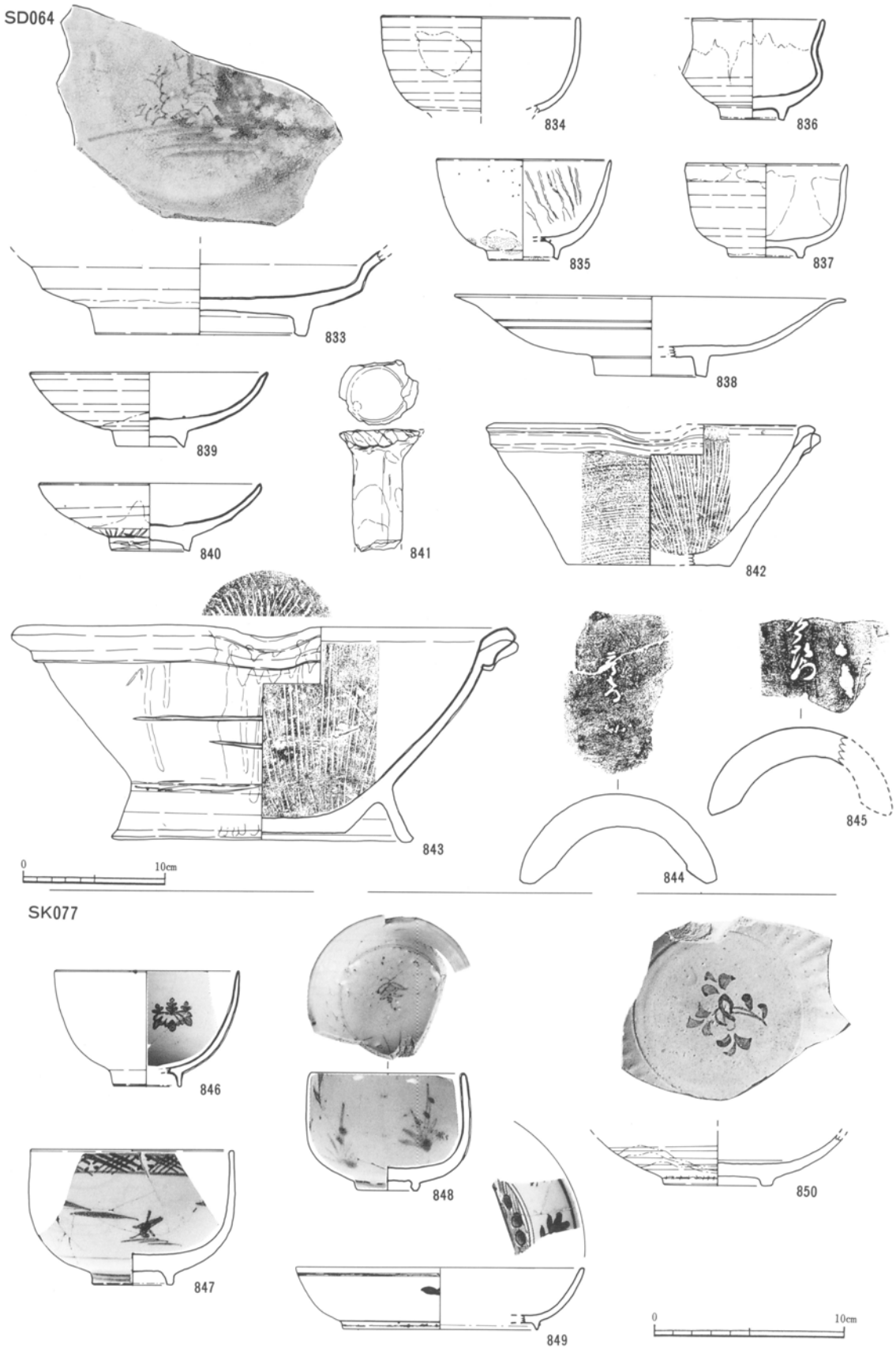


Fig.107　SD064・ＳＫ077出土遺物実測図（1/3・1/4）

く含み釉は明黄褐色で外面高台際まで掛け、見込を輪状にカキ取る。840は青緑釉の小皿で口径12器高3.5cm。胎土は淡黄色で緻密。釉は透明感のある青緑釉で外面下位まで施釉し見込は輪状にカキ取る。841はトチンで径5.5cmで残存長8cm。受部上面に高台の焼付痕がある。浅黄～暗赤褐色を呈する。842・843は肥前系陶器擂鉢。842は口径23器高9.9cm。胎土は黄褐色で3～4mm大の砂粒を含む。外面は焼締めで暗褐色を呈する。内面全面に擂目を施す。843は長大な高台を付けるもので口径35.1器高15cm。胎土は赤褐色で外面は焼締めでにぶい褐色を呈し、白い自然釉がまばらに垂れる。擂目は全面に施し細い。844は丸瓦片で径14、845は径13cmを測る。ともに山部の中央にヘラ描の記名があり、「五郎右衛門」と読める。

846からはSK077出土。846は肥前系青磁染付碗で、口径9.8器高6cmを測る。外面は明オリー

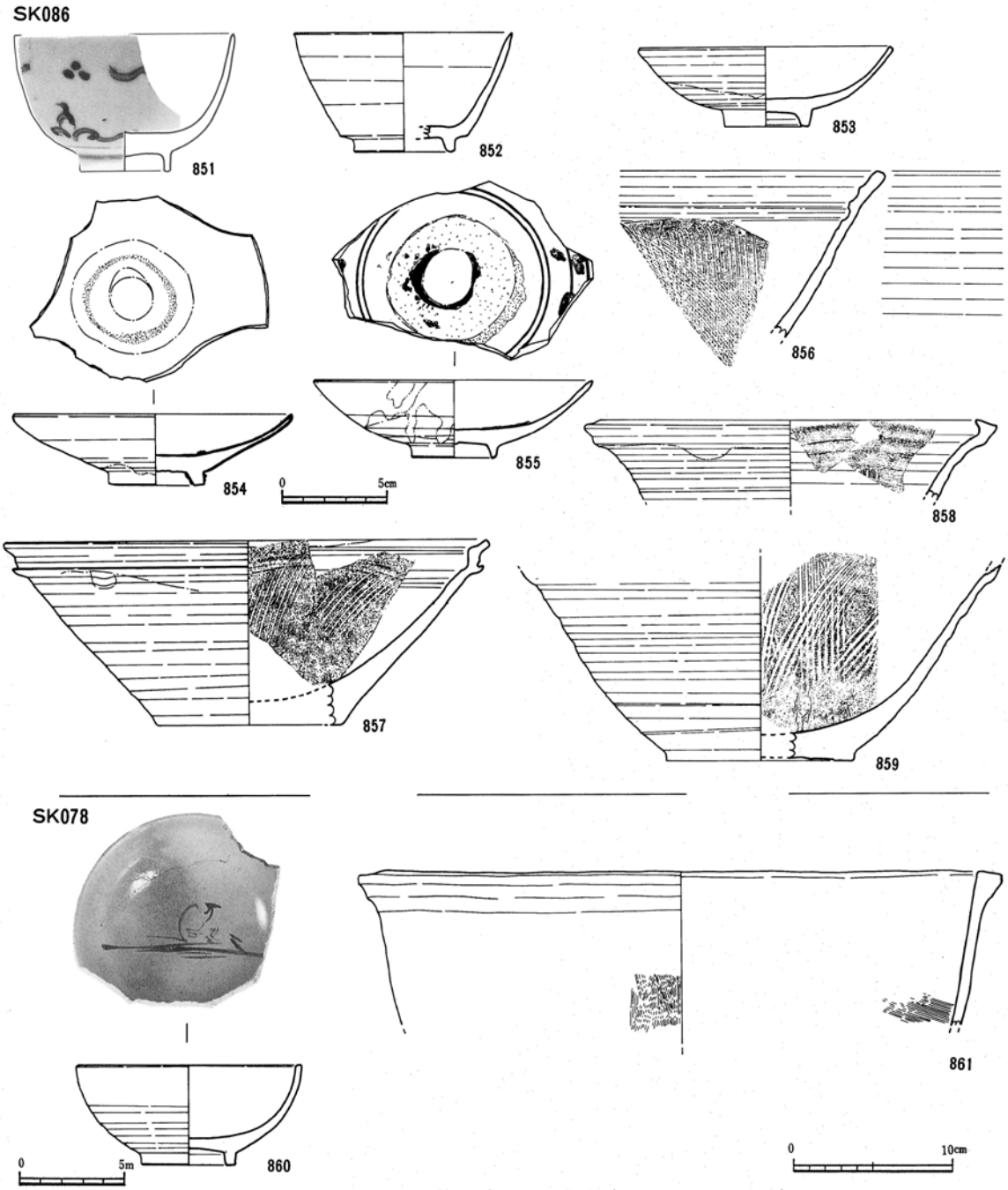


Fig.108 SK086・078出土遺物実測図（1/3・1/4・1/8）

ブ灰色の青磁釉で内面にコンニャク印判の桐文を描く。口唇は口銹。畳付のみ露胎となる。825とセットである。847は染付の碗で口径10.8器高7.1㎝を測る。口縁外面に四方襷文以下に遠山文を描く。畳付は露胎で敷砂が若干残る。848は能古焼の染付碗で口径8.2器高6.1㎝。見込に「寿」をくずした昆虫文、外面に草花文を描く。呉須はくすんだ青色。畳付のみ露胎。849は明青花皿で見込は玉取獅子か。釉は畳付のみ鋭角にカキ取る。口縁内面は牡丹唐草、外面にも唐草文を施す。850は朝鮮染付の皿で底径5.7㎝。胎土は淡黄色で軟質。内面は丸彫の蓮弁で釉は淡黄色で外面下位まで掛け見込に藍色の呉須で花文を描く。17世紀後半～18世紀後半を示す。

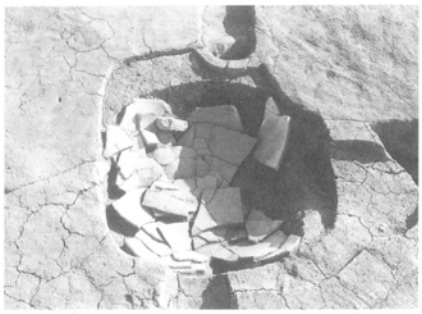
Ph.131　SK 086（南から）

SD069・131とSK078（Ph.132・133）

SD069に切られるが、基本的には同じ設計で、東西方向はSD069がSD064の南1.5mに並行し、南にはこれとは逆に西端で折れて南に23㎝程延びて方形に区画している。南北部をSD131としたが同一の溝で、幅1.5深0.7mを測る。しっかりとした溝で、東西溝の中央でSX229が溜井として再利用され、これが埋没後、規模を縮めて瓦質甕敷きのSK078を設けている。

出土遺物（Fig.108）　860は京焼系の陶器鉄絵碗で口径10.2器高4.7㎝。胎土は褐色粒を含む淡黄色やや軟質。釉は淡黄～明黄褐色で透明で高台脇まで掛ける。見込には鉄絵で帆掛舟を描く。861は土壙底に敷かれた

Ph.132　SD069（西から）



Ph.133　SK 078（北から）

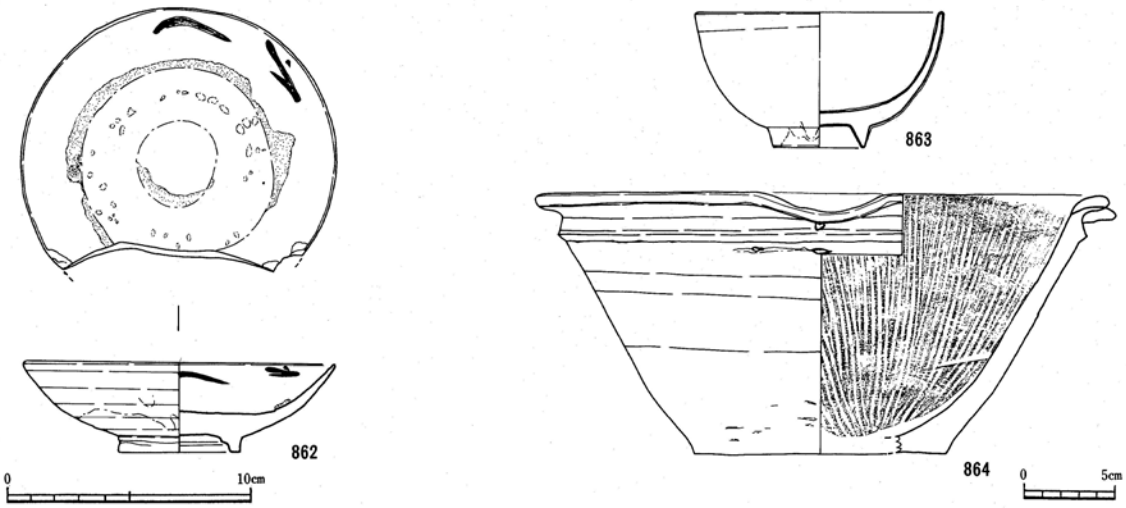


Fig.109　ＳＤ063出土遺物実測図（1/3・1/4）

瓦質の大甕で、口径81㎝。口唇外面が肥厚し突出する。胎土は淡赤褐色で2㎜大の石英粒を多く含む。外面はタテハケ後ナデ、内面はナナメハケ後ナデ消す。18世紀前半代。

SD063（Ph.134）

現代まで現存し、北の墓域と南の生活域を区切る大形の溝で幅4.6深1.25mを測る。西のSD485とも連結して、この丘陵を三段のクランク状に屈折して南北に分断している。北東の屈曲部には幅1m程の陸橋部を残して北の墓地との通路となっている。

出土遺物（Fig.109）　862は肥前系の染付皿で口径13器高3.8㎝を測る。胎土は白色で緻密。釉は灰白色で外面下位まで施釉後見込は輪状にカキ取り、この部分には重焼の高台跡が残っている。口縁内面にくすんだ褐青色の呉須で折枝文を描く。863は現川の碗で口径10.4器高5.6㎝を測る。胎土は明赤褐色で、白化粧土で内外面に巻刷毛目を施す。釉は透明で全面に施す。864は肥前系陶器擂鉢で口径32器高14㎝で深い。胎土は白色微粒を含み橙色を呈する。焼締で外面は褐色を呈する。内面には全面に粗い擂目を施す。溝は主屋部分を囲って掘削されており、長徳寺創建時の17世紀前半の掘削と思われる。

Ph.134　ＳＤ063北辺（西から）

(2)　墓地

Ⅲ区の中世墓を中心に囲む様に墓域を広げ、東12m南北13mの範囲に縦3列の列状を見せながら17基が分布している。内分けは陶棺4基・座棺2基・円形土壙7基・方形土壙3基・小児墓1基である。このうち11基からは何等かの形で副葬品を検出した。

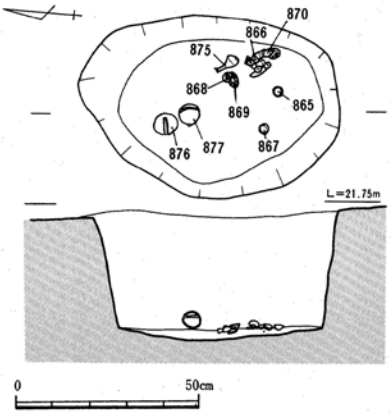
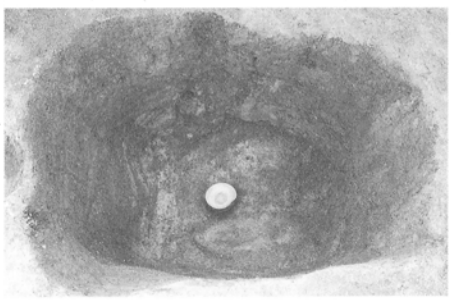


Fig.110　SR 722実測図（1/20）

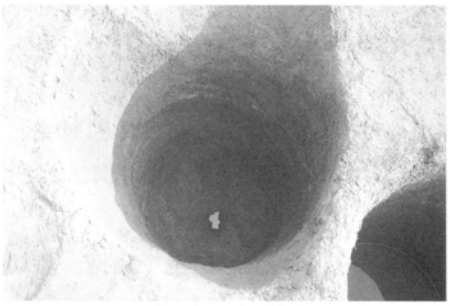
SR722（Fig.110　Ph.135）　G10グリッドに位置する長73×51㎝の楕円形で深さ37㎝を測る。床は平坦で、床直上の北西側に土鈴2個、南東側を中心にミニチュアの白磁碗4点、菊皿1点、赤絵瓶1点・灯心人形1点・寛永通寶4枚を副葬していた。内容から小児墓と考えられる。

出土遺物（Fig.111　巻頭.6）　865～868は型作りの肥前系の白磁紅皿で口径・器高それぞれ3.3×1.5・3.2×1.5・3.4×1.3・3.2×1.3㎝を測る。薄いつくりで、胎土は灰白色で釉は明青灰色を呈し、低い高台脇まで掛ける。869は同じく型作りの菊皿形の紅皿で長6.1幅3.7器高1.7㎝。胎土釉ともに灰白色で高台際まで掛ける。870は肥前系白磁の灯心人形で、底面から背面にかけ灯心穴があく。器高5㎝。釉は明青灰色で、頭部は露胎。871～874は寛永通寶で新寛永である。875は赤絵の小瓶で口径1.7器高6㎝を測る。釉は明青灰色で胴下位まで掛け赤絵は暗赤色を呈する。876・877は土鈴で径・高それぞれ6.3×6・6.2×7.1㎝。18世紀前半。



Ph.135　ＳＲ730

SR739（Ph.136）　G9グリッドに位置する。1.04×0.9×1.49mの円形の深い墓壙で、底面より赤絵の水滴を検出した。



Ph.136　SR739

Ph.137　SR723（南から）

出土遺物（Fig.111　巻頭.6）　879は竹節をモチーフにした水滴で長9.4高3㎝を測る。竹に棕櫚と柿実を描いており、実の下と竹上部に4㎜の孔を穿けている。17世紀後半

SR720　G9グリッドに位置する1×0.9×1.41mの円形墓壙で、床面から現川の刷毛目碗と寛永通寶を5枚検出し、銅銭は碗の高台内から出土した。

出土遺物（Fig.111）　880は現川焼の碗で口径10.2器高5.5㎝。胎土は灰白色で内外面に巻刷毛目を施す。畳付は露胎で見込に目痕が残る。寛永通寶は新寛永が混じる。18世紀前半。

SR723（Ph.137）　G10グリッドに位置する1.05×1.03×1.35mの円形墓壙で、漆器と土師皿・鉄鏃と鋏・勾状の鉄器を床面から検出した。

出土遺物（Fig.111）　886は鉄製の鋏と思われ、現状で12㎝を測る。887は鉄製の鏃で長10.6幅0.9㎝。888は鉄製の釣針状の製品で長6.3厚0.6㎝を測る。889は土師器皿で口径8.4器高1.5㎝。外底は糸切りで内外にヨコナデを施す。17世紀前半か。

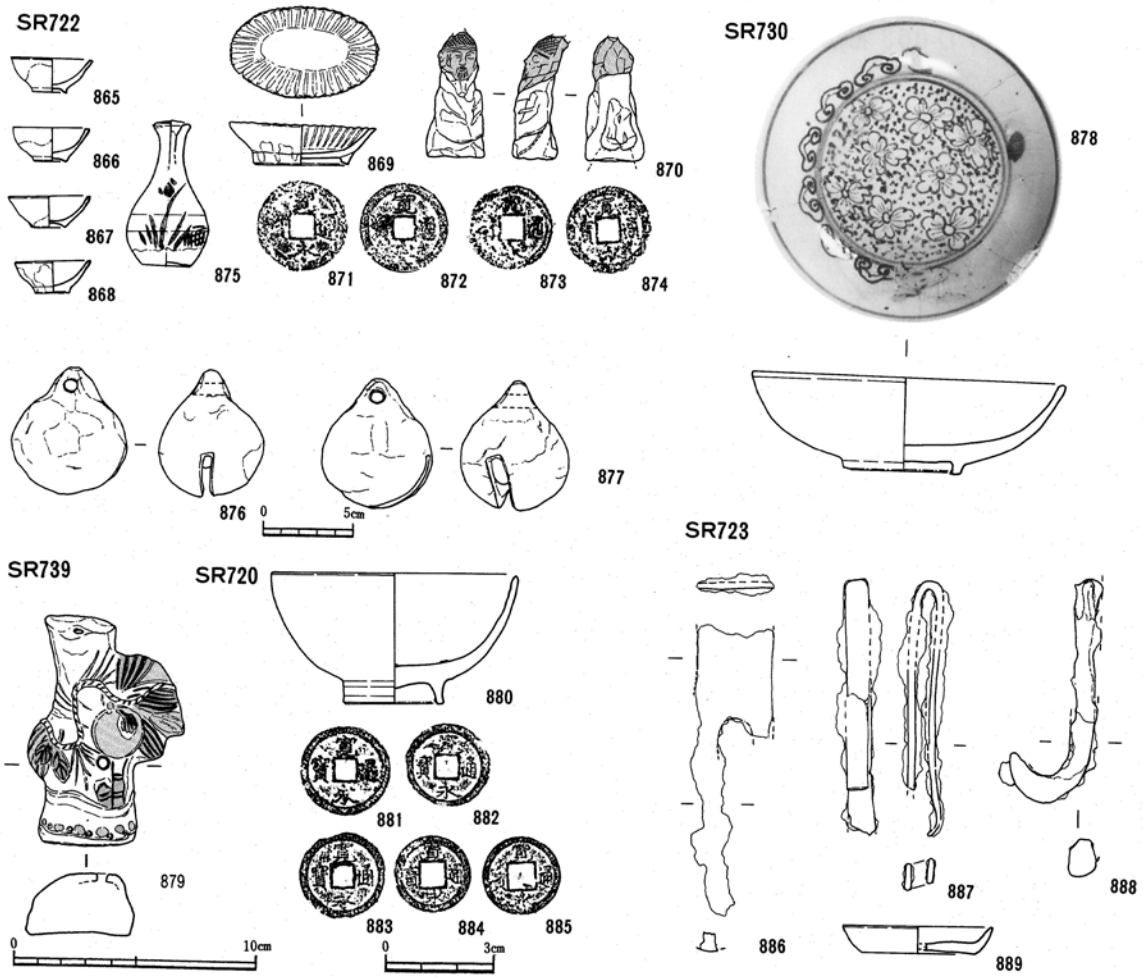


Fig.111　近世墓出土遺物実測図（1/3・1/2・1/4）

6. 小 結

今回の調査で得られた成果は以下の通りである。

本調査区が生活の場として活用が始まるのは縄文時代中期以降で、遺物のみの散布地として認められる。資料的には晩期前半代が目立つ。

本格的に集落が営まれるのは弥生時代前期中頃～中期初頭で、貯蔵穴を23基・土壙8基・円形竪穴住居1軒を検出している。中世以降の著しい削平のため遺構の残存状況が均一ではないと思われるが西側斜面の南北2ヶ所に集中する傾向にある。時期的には前期後半が多く、末～中期初頭の遺構は少い。該期で注目されるのは15・37・62・81・82・139の半島の無文系土器の出土で、樋井川流域では初めての検出である。近年、那珂・比恵遺跡や博多遺跡などの海岸部の遺跡のみならず早良区の東入部遺跡・吉武遺跡などの内陸部の遺跡での検出も増えている。殊に62は松菊里タイプの甕にベンガラを貯えたもので特筆に値する。81は形態的に後期無文土器に属する資料で時期的に古すぎ検討を要する。遺跡の時期的にも浄泉寺や田島B遺跡をさかのぼって樋井川上・中流域で、最古の弥生集落である事が認められた。資料的には板付1式の範疇に入りそうな資料も有るが、今回の調査では突帯文土器は一片も検出されていない。また磨製石剣等の武器の出土が多く、該期の不安定な社会情勢を物語っている。

次に集落の発展する時期は後期で、丘陵の西と北を囲う環溝が検出された。後期前半に掘削され、中頃に最盛期を迎え、終末期改削された後古墳時代初頭に廃棄されている。中世以降の削平で住居は1軒も検出できなかったが、溝内からは2t近い多量な土器の出土があり、大きな集落があった事を暗示している。南に位置する御子神社の箱式石棺墓からは銅鏡が出土しており、本集落の墓城があり首長層が葬られていたと考えられる。近隣の集落を絡めてみると、当遺跡では弥生時代中期と後期初めが欠落し、西に対面する丘陵上の宝台遺跡・長尾遺跡では前期・後期中頃以降が欠落しており、この2丘陵間の遺跡で補完し連続する。今回の調査では西の駄ノ原川に面した低地は洪水砂が多く堆積しており、この様な洪水や長年の水田耕作による連作障害などの為、集落に隣接する耕地を放棄し、西に隣接する長尾丘陵と数百年単位で集落を移動していたのではないかと考える。

市域の環溝集落としては、博多区那珂遺跡群37次調査の夜臼期の二重環濠・同じく博多区前期初頭の板付遺跡・早良区前期初頭・前期後半の有田遺跡・博多区那珂遺跡群67次調査の前期後半の環濠・早良区入部遺跡の環濠・早良区飯盛谷遺跡の後期の環溝・西区野方遺跡の後期の環溝があり、これで8ヶ所目、後期としては3遺跡目の検出となる。

古墳時代前期は西側斜面で竪穴住居4軒・土壙4基・溝1条と集落規模は縮小している。分布は北西側にまとまりがある。

古墳時代後期は竪穴住居18軒・土壙7基・溝6条を検出した。31基中の28基までが前期の分布と重なって西側斜面部に位置する。集落は前期と比べ6倍に広がっている。住居は19mと20mの等高線に沿って並んでおり、階段状の造成を行なっている事が伺がえる。住居は2.6～7.8mを測る大形まであり4～5mクラスが主体をなし、多くが竈を設けている。数軒の住居から小量の鉄滓と吹子羽口を検出しており小規模な鍛冶を行っていた様である。

古代は遺構が全く存在せず、遺物が数点検出されるだけの、本遺跡での空白期となっている。

中世前期は土壙6基・溝4条・土壙墓1基・地山整形面1ヶ所で、11世紀後半～14世紀代の遺構でⅢ区北西部とⅠ・Ⅱ区の中央部に位置し、中央部の溝が建物群に沿っており、建物のいくつかは該期に属している。しかし遺構数は少数であり、11世紀後半～12世紀を中心として、集落の継続性はない。

中世後期は中心となる時期で、方形の堀で区画された屋敷を中心に、溝12条・土壙18基・地下式土壙27基・掘立柱建物2棟以上の計65基で全体の3割を占める。周辺の地名にも「字下屋敷」・「字向屋敷」などの地名が残っており、戦国期の名主層の居館と考えられる。中央の建物群の北には集団墓も形成されている。

今回の調査で特筆されるものは27基の地下式土壙である。南九州の墓である「地下式横穴」との混同を避けるため「地下式土壙」の名称にした。前述した様に方形プランをA類・円形プランをB類、竪坑の床面が主室と同一面のものを1類・主室床面より高いものを2類として分類し、A_1－3基・A_2－10基・B_2－14基で、B_1類は存在しない。また、A_1・A_2類が16世紀後半の溝に切られ、B_2はこれと切り合うものはない。A1とA2、A_2とB_2に切り合いが有る事などから、A_1→A_2→B_2へと形態の変化が追認できる。A_1には15世紀代にさかのぼるものもあり、B_2にその様に古いものはない。最近、大分県の原田昭一氏は詳細な検討を加えられ、鎌倉の「やぐら」の移入で始まった新しい葬送の形態と考えられている。初源の状況は本調査区では確かめ様がないが、少くとも当地では墓地としての機能は考え難い。

○屋敷に近接して陶棺墓や土壙墓の集団墓地が営まれ、これらと時期差もない。

○天井崩落後の客土中に石塔片が混入する2例があるが、床上もしくは地表に墓標（石塔）を置いた例がない。同時期の集団墓の1基には間違いなく石塔を置く。

○人骨の検出、また六道銭の様な副葬品も検出されない。集団墓には宋・明銭を副葬する。SX134の青磁盤と朝鮮碗は、土壙に収納中に天井が落盤したため回収を放棄したものと考える。

○竪坑が閉塞状態のまま埋没した例がなく、全て開口した竪坑から流土が数10㎝～数m堆積後に天井が崩落した段階で始めて埋め戻しており、それまで開口したまま自然に埋まるにまかせている。

○少なくとも2基は天井崩落後の穴をゴミ穴として使い、1基は掘り上げられて溜桝として転用されている。中世屋形の整地後造営されたのは寺院で有り、埋葬遺構をこの様に転用するのは考え難い。また一部のものは天井部で耕作を行っている。

以上の事由で埋葬の施設とは考えられない。当時は戦国期の緊迫した情勢にあり当地でも石塔を砕いて礫とする状況であり、この遺構は戦乱時に家材を一時保管・隠匿し、人身も避難する様な退避壕的な施設と考える。結果平和時には何も収めず無関心に埋没していくものと考える。埋葬の事例はゴミ穴や溜桝などの様々な転用の一例と考える。市域では諸岡館を筆頭に、板付遺跡A－3区・那珂遺跡28次・47次・板付遺跡F－7a区の中世屋形を有する洪積台地に分布しており、有田遺跡にも可能性がある。

出土遺物では防長系の足鍋・擂鉢が目立ち、朝鮮陶器が目立つ。有田遺跡の有様に極めて近い。

17世紀前半には中世屋形は長徳寺造営で整地され、旧溝部分を埋め立てる際には北と南で、鍋・刀・鍬を使用不能の状態にして埋納する。また、土師皿・坏の下に銅線1枚を敷く、鏡・銅・笄・刀装具・仏を埋納するなどの儀式をとり行なっている。これに近い溝の埋め立時の祭詞は、博多遺跡群第33次調査で大溝を16世紀末に埋める際に、大刀・小刀・腰刀と漆器椀を埋納した例がある。該期の溝埋立の祭事に金物・刀を用いる共通認識が存在している様である。

参考文献

「宝台遺跡」　1970　日本住宅公団
「神松寺遺跡」　1978　福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集
「浄泉寺遺跡」　1974　東洋開発株式会社
「浄泉寺遺跡－遺構編－」　1983　福岡市埋蔵文化財調査報告書第99集
「長尾遺跡」　1995　福岡市埋蔵文化財調査報告書第417集
「板付周辺遺跡調査報告書（2）」　1975　福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集
「板付－県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書」　1977　福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集
「板付周辺遺跡調査報告書（7）」　1981　福岡市埋蔵文化財調査報告書第65集
「諸岡遺跡－第14・17次調査報告－」　1984　福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集
「板付周辺遺跡調査報告書（12）」　1987　福岡市埋蔵文化財調査報告書第154集
「那珂6」　1992　福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集
「那珂遺跡15」　1996　福岡市埋蔵文化財調査報告書第454集
「板付周辺遺跡調査報告書第19集」　1998　福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集
「九州・山口における中世「地下式壙」の諸様相」　原田昭一　2000『古文化談叢』　第45集
「博多（11）」　1988　福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集

遺物一覧表

遺構No.	地　点	種　別	時　期	規　模(m)	主な出土遺物
SX−039	C−19	地山整形	15～16C		須恵器(甕)　土師器　土師質土器(鍋)
SX−129	E−21	地下式土壙	16C	3.60×3.08×2.38	弥生土器(甕・壺・器台)　須恵器(甕・坏)　土師器(坏)　石(鏃)　焼石
SX−130	E−21	地下式土壙	16C	3.55×2.92×1.92	弥生土器　土師器　須恵器(甕)　白磁(碗)　青磁(龍泉碗Ⅱ類)　瓦質土器(鍋)　鉄器(鉄板)
SX−133	G−16～17	地下式土壙	16C～近世	3.96×3.43×2.13	弥生土器(甕)　須恵器(甕・坏)　土師器(Ⅲ)　白磁(Ⅲ・瓶)　肥前系青磁(香炉・Ⅲ・猪口)　伊万里染付(碗・Ⅲ・瓶・坏・蓋)　上野焼(碗・壺・瓶)　京焼(白磁小碗)　明青花(碗)　青磁(龍泉双層碗・Ⅱ・Ⅵ類碗・盤)　朝鮮雑釉(瓶)　中国産陶器(甕・擂鉢・短頸壷・注口)　国産陶器(壺・甕・碗・香炉)　備前(片口鉢・甕)　瓦質土器(火舎・鍋)　土師質土器(擂鉢・鉢・火舎)　瓦器(椀)　瓦(丸・平)　炉壁　石製品(硯・叩石・五輪塔の地輪)　母岩　割石　焼石　黒耀石　鉄製品　鉄滓(鍛治)　自然遺物(炭・貝)
SX−134	F−18	地下式土壙	16C	4.15×3.85×2.03	須恵器(甕・坏蓋)　土師器(Ⅲ・坏・坩)　青磁(越州窯系鉢・龍泉Ⅲ)　朝鮮(粉粧Ⅲ・青磁Ⅲ)　陶器(甕)　高取焼　瓦質土器(火舎・擂鉢・釜)　土師質土器(鍋・支柱・擂鉢)　炉壁　石製品(凹石・磨石・叩石・砥石)　黒耀石　鉄滓
SX−135	F～G−18	地下式土壙	16C	3.75×2.60×1.70	白磁(碗)　土師器(坏)
SX−136	D～E−17	地下式土壙	16C	5.00×4.09×3.40	弥生土器(甕・器台・鉢・壺・ミニチュア)　須恵器(甕)　白磁(碗)　青磁(碗・鉢)　明青花(碗)　中国陶器　瓦質土器(火舎・擂鉢)　土師質土器(擂鉢)　瓦　石製品(石鍋・叩石・石庖丁)
SX−138	F−16～17	地下式土壙	16C	3.33×2.73×2.02	弥生土器　須恵器(甕)　土師器(Ⅲ)　白磁(Ⅲ)　青花(碗)　朝鮮(碗)　石(黒耀石・サヌカイト・滑石)　炭
SX−149	D−16	地下式土壙	16C	4.08×3.33×2.60	弥生土器(甕・鉢)　須恵器(甕)　土師器(甕・Ⅲ・鍋)　青磁(Ⅵ類碗)　伊万里(碗)　中国陶器(盤)　陶器(Ⅲ)　瓦質土器(火舎)　土師質(擂鉢)　土製品(吹子羽口)　石製品(石鍋転用・砥石)　黒耀石　炭
SX−157	D−12～13	地下式土壙	16C	1.05×0.78×1.04	須恵器(甕)　土師器(甕・Ⅲ)　白磁(碗)　瓦質土器(火舎)　石製品(滑石鍋・砥石)　黒耀石
SX−209	D−18	地下式土壙	16C	9.27×3.28+α×1.16	弥生土器(甕)　須恵器(甕)　土師器(Ⅲ・坏)　白磁(碗)　陶器　瓦質土器(火舎)　土師質土器(擂鉢)　瓦　土製品(吹子羽口)　炉壁　黒耀石　自然遺物(骨・炭)　鉄滓(椀形)　銅製品(輪状)　鉄製品
SX−210	E−15	地下式土壙	16C	3.70×3.33×3.01	弥生土器(甕・壺・高坏・器台・鉢・ミニチュア・支脚)　須恵器(甕)　陶器(備前擂鉢・朝鮮)　青磁　石製品(砥石・叩石)　黒耀石
SX−216	E−13～14	地下式土壙	16C	6.40×2.88×	弥生土器(甕・壺・高坏)　須恵器(甕・盤)　土師器(甕・Ⅲ・坏)　白磁(Ⅲ類碗)　青磁(碗・盤・龍泉双層壺)　青花(碗)　朝鮮陶器(瓶)　瓦質土器(擂鉢)　土師質土器(擂鉢)　瓦質土器(釜・擂鉢)　石製品(石塔)　石(サヌカイト・黒耀石・石塔片)　鉄製品(カスガイ)　炭
SX−226	D～E−14	地下式土壙	16C	7.20×2.72×2.63	弥生土器(甕・壺・器台・高坏・鉢・支脚)須恵器(捏鉢)　土師器(坏)　白磁(碗)　青白磁(合子)　青磁(龍泉磁)　瓦質土器(擂鉢)　土師質土器(擂鉢・鍋)　石製品(鏃・砥石)　黒耀石　鉄器(鎌・斧)　鉄滓(椀形)　炭
SX−229	J−14	地下式土壙	16C	2.70×2.50×1.89	青花(Ⅲ)　瓦質土器(火舎)　鉄滓(椀形)　木器(杭)
SX−241	G～H−18	地下式土壙		2.93×2.41×1.74	遺物なし
SX−303	E−4	地下式土壙	16C	3.58×2.65×2.70	弥生土器(甕)　須恵器(甕・坏)　土師器(坏)　白磁(碗)　土師質土器(鍋)
SX−366	D～E−5	地下式土壙	16C	4.66×3.76×2.77	弥生土器(甕・壺)　須恵器(甕)　土師器(鍋)　青花　瓦質土器　瓦　黒耀石
SX−371	E～F−5	地下式土壙	16C	4.38×3.82×2.55	弥生土器(甕)　須恵器(甕)　土師器(坏)　朝鮮(青磁壺・粉粧碗)　備前　土師質土器(擂鉢・釜)　石製品(鍋・臼・砥石)　黒耀石　焼石　鉄滓(炉底・鍛治)
SX−385	B−4	樹　根	中世	0.90×0.70	須恵器(甕)　土師器(坏)
SX−400	C−6	地下式土壙	16C	2.90×2.50×2.68	弥生土器(甕・高坏)　須恵器(甕)　土師器(坏・Ⅲ)　白磁(碗・朝鮮紛粧)　朝鮮雑釉碗　瓦質土器　土師質土器(鍋・釜)　陶器(壺or甕)　炉壁　黒耀石　鍋製品(斧
SX−426	D−6	地下式土壙		2.89×2.85×2.37	須恵器(甕)　土師器　白磁(碗)　青白磁(合子)　土師質土器(鍋)　瓦器
SX−713	I−9	地下式土壙	16C	2.63×2.40×2.02	須恵器(坏・擂鉢)　土師器(坏)　白磁　青花(Ⅲ)　朝鮮雑釉(碗)　陶器(備前甕)　瓦質土器(擂鉢)　土師質土器(鍋)　黒耀石　鉄滓(炉底塊)　銅製品(装飾品)
SX−770	K−9	地下式土壙	16C	3.16×3.16×1.72	弥生土器(甕or壺)　須恵器(甕・高台付坏)　土師器(坏・Ⅲ)　白磁(Ⅲ)　青花(Ⅲ・碗)　朝鮮(雑釉碗・粉粧Ⅲ)　陶器(備前甕)　瓦質土器(捏鉢・釜・火舎)　土師質土器(鍋)　石製品(砥石)　黒耀石
SX−771	O～P−10～11	地下式土壙	16C	4.03×3.00×20.07	弥生土器(甕or壺)　須恵器(甕)　土師器(Ⅲ・坏)　青花(碗)　白磁(Ⅲ)　青磁(輪花Ⅲ)　備前(甕・擂鉢)　上野系(壺・Ⅲ)　瓦質土器(捏鉢)　砥石　黒耀石　炭
SX−798	L−9	地下式土壙	16C～近世	4.55×3.73×2.65	土師器(Ⅲ)　白磁(ぐい呑・花器)　染付(壺)　辰砂壺　青磁(碗)　陶器(片口・甕・擂鉢)　瓦質土器(擂鉢・捏鉢・風呂?)　土師質土器(火舎・鍋)　瓦(軒丸・軒平)　石製品(砥石)　自然遺物(石炭)　鉄滓(鍛治)
SX−802	O−13	地下式土壙	16C	1.58×1.42×0.83	陶器(擂鉢)　瓦質土器
SX−809	Q−14	地下式土壙	16C	1.39×1.33×1.16	青花
SX−810	R−15	地下式土壙	16C	1.50×1.50×	なし

遺物一覧表

No.2

遺構No.	地点	種別	時期	規模(m)	主な出土遺物
SD−006	B−20~21	溝	古墳後期	1.3×0.26	弥生土器　須恵器甕　土師器
SD−007	A−20~B−18	溝	古墳後期	1.6×0.4	須恵器(甕・坏)　土師器(甑・坏・甕)　黒耀石
SD−024	B−18	溝		0.58×0.2	なし
SD−029	A−9~11	溝	古墳後期	0.58×0.15	弥生土器　須恵器(坏・壺・甑)　黒耀石(スクレーパー)
SD−063	G−11~M−13	溝	近世	4.6×1.25	白磁(碗・皿)　伊万里染付(碗・皿・瓶)　国産陶器(甕・壺・灯明皿・擂鉢・現川碗)　土師器　瓦質土器(火舎)　瓦　黒耀石　鉄滓　炭 鉄器(釘)
SD−64	G−14~L−13	溝	近世	3.03×0.25	弥生土器(鉢・壺)　須恵器　土師器　伊万里(輪花皿・碗・猪口・日字鳳凰文・皿・青磁香炉)　唐津(擂鉢)　現川碗・皿・青緑釉皿　明青花　青磁染付陶器(トチン)　上野焼(碗)　高取焼(碗)　瓦(丸・平)　瓦質土器(大甕)桂化木　鉄滓(椀形)　鉄器(釘)
SD−69	G~M−14	溝	近世	2.18×0.7	弥生土器(器台・甕)　須恵器(甕・坏・蓋)　土師器　明青花(皿)　白磁(菊皿)　青磁盤、陶器(甕・湯たんぽ・擂鉢)　中国陶器(無頸大甕)　李朝(雑釉碗・皿・染付皿)　伊万里染付碗　備前大甕　瓦質土器(火舎・鍋・擂鉢・捏鉢・火鉢)　土師質土器(鍋・七輪・捏鉢)　瓦器(碗)　瓦(平・丸)　瓦玉(青磁)　炉壁　石製品(砥石・打製石斧)　黒耀石　割石　焼石　鉄滓(碗形・炉底塊)　鉄器　桂化木　炭
SD−73	L~M−14	溝	近世	1.14×0.5	弥生土器(壺)　土師器　伊万里染付碗　中国陶器(無頸大甕)　瓦質土器(甕)　鉄滓(炉底塊)　炭
SD−74	J−15	溝 溝	近世	3.14×0.2	土師器　伊万里染付碗　李朝染付皿　唐津系刷毛目皿　白磁碗　陶器(擂鉢・鉢)　瓦質土器　瓦(平・丸・軒)
SD−75	I−14~K−15	溝	近世	1.22×0.5	明青花碗　陶器(備前大甕・擂鉢)　瓦質土器(擂鉢)　土師質土器
SD−82	H−13	溝	7C		弥生土器　土師器
SD−84	G−12	溝	11C後半 ~12C前半	0.5×0.2	弥生土器(甕)　須恵器(甕)　土師器(皿・坏)　白磁碗　瓦質土器(擂鉢)　瓦器碗　滑石鍋　黒耀石
SD−85	G~H−14	溝	近世	1.55×0.2	土師器　瓦質土器(火鉢)　縄文土器(鉢)
SD−126	E−19~D−23	溝	16C	3.19×1.4	弥生土器(甕・壺・鉢)　土師器(高坏・坏・甑)　須恵器(甕・坏・脚付)白磁(碗・口ハゲ皿)　青磁(龍泉Ⅲ類碗)　陶器(甕)　瓦質土器　石製品(石斧・叩石)　黒耀石　鉄器(釘)　銅器(金銅製刀装具・笄・和鏡)　炭
SD−127	G-1~D-11 ~C−23	溝	弥生後期	3.22×0.9	弥生土器(壺・甕・鉢・器台・高坏・支脚・匙・ミニチュア土器・甕棺蓋)　土師器(坏・甕・壺・皿・)　須恵器(甕・坏・坏蓋・高台付)　白磁(碗・Ⅳ類)　青磁(皿)　陶器(鉢・皿・甕)　瓦質土器(擂鉢)　土師質土器(擂鉢)　土製品(投弾・紡錘車)　炉壁　石製品(鎌・掻器・石包丁・叩石・砥石・鏃・剣・紡錘車・扁平片刃石斧・磨石)　黒耀石　軽石　鉄器(鎌、斧、鉈、錐)　鉄滓　ガラス玉　自然遺物(歯・貝、炭)
SD−131	F−19~G−15	溝	近世?	1.74×0.5	弥生土器　須恵器(瓶)　土師器(坏・皿)　伊万里染付皿　瓦質土器(擂鉢・釜・火舎)　瓦器碗　炉壁　鉄滓(椀形)　黒耀石　玄武岩
SD−132	D~F−19	溝	16C	3.49×0.5	弥生土器　土師器(坏・皿)　須恵器(甕)　備前(大甕)　瓦質土器(捏鉢)　土師質土器(擂鉢・鍋・捏鉢)　炉壁　土製品(吹子の羽口)　黒耀石　鉄滓
SD−137	E−18~F−11	溝	16C	3.12×1.5	弥生土器(甕・甑)　須恵器(甕・捏鉢・坏・硯)　土師器(坏・皿・甕)　白磁(Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ類碗)　・口ハゲ皿・菊皿)　青白磁(口ハゲ皿)　青磁(Ⅲ・Ⅳ類碗)朝鮮(雑釉碗・象嵌壺)　伊万里染付皿　陶器(備前大甕・擂鉢・甕)瓦質土器(擂鉢・捏鉢・釜・八角火舎)　土師質土器(擂鉢・釜・鍋、火舎、捏鉢)　瓦器碗　炉壁　石製品(砥石・臼・抉入片刃石斧・扁平片刃石斧)　黒耀石　瓦玉　土錘　鉄釘　炭　鉄滓
SD−190	I−12	溝	中世	0.07×0.05	土師器(坏・皿)
SD−231	E−21	溝	弥生後期前半 ~中	0.77×0.25	弥生土器(甕・壺)　黒耀石
SD−239	E−16~17	溝	中世?	0.56×0.1	弥生土器(甕・支脚)　土師器(坏・皿)　黒耀石
SD−262	E~G−3	溝	16C	1.9×0.35	弥生土器(甕・丹塗壺・円盤)　須恵器(甕)　明青花(皿)　伊万里染付　青磁(龍泉Ⅲ類椀)　朝鮮系陶器碗　瓦質土器(擂鉢・足鍋)　土師質土器　砥石　黒耀石　鉄滓
SD−264	D−1~G−4		16C	3.41×0.15	弥生土器(高坏・甕)　須恵器(甕)　土師器(坏・皿)　白磁碗　陶器(甕)　瓦質土器(釜)　土師質土器(擂鉢・鍋・鉢)　黒耀石　鉄滓

遺物一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模(m)	主な出土遺物
SD−285	E−3	溝	古墳	0.25×0.1	弥生土器(甕・壺)
SD−327	C−3	溝	12C?	0.95×0.1	弥生土器　白磁碗
SD−328	A−3~4	溝	古墳後期	0.56×0.1	弥生土器(甕)
SD−329	A−2~3	溝	弥生~古墳	0.29×0.05	弥生土器　土師器
SD−336	C−1~2	溝	中世	0.85×0.1	土師器(坏)　青磁碗　陶器(四耳壺)
SD−370	G9~H4	溝	16C	5.08×0.8	弥生土器　土師器(甑・坏)　須恵器(高坏・甕・坏蓋)　白磁碗　陶器瓶　瓦質土器(擂鉢・捏鉢・湯釜)　土師質(鼎・鍋・擂鉢・捏鉢)　瓦玉　叩石
SD−375	B−5	自然流路	11C後半~12C前半	1.38×1.4	弥生土器(甕)　土師器(坏)　須恵器(高台坏・坏・甕・蓋)　白磁(碗・皿)　青磁碗　土師質土器(擂鉢・鍋)　瓦器碗　滑石鍋　黒耀石　鉄器(釘)　炭
SD−462	B−6	自然流路	不明	2.03×0.3	土器小片
SD−463	C−8	自然流路	12C	1.28×0.35	弥生土器(甕)　須恵器　土師器(坏)　白磁V類碗　陶器　黒耀石　鉄器(釘)
SD−464	B−8	溝?風倒木	弥生中期前半	2.44×0.1	弥生土器(甕・壺)　黒耀石　サヌカイト
SD−475	B−9	住居壁溝	古墳前	0.5×0.1	弥生土器(甕)　土師器(甕)　黒耀石
SD−480	A−9	溝	古墳後期?	0.94×0.15	弥生土器(甕)　須恵器　黒耀石
SD−483	E~F−8	溝	16C?	1.08×0.15	土師器(坏)　白磁碗　土錘　砥石
SD−484	B−8	住居壁溝	古墳初?	0.57×0.2	弥生土器(甕・高坏・大甕)　黒耀石
SD−485	A−9~G−11	溝	16C~近世	4.23×1.4	弥生土器(甕・壺・高坏・器台・支脚)　土師器(坏・Ⅲ)　須恵器(甕)　白磁碗　青白磁　朝鮮雑釉碗　陶器瓶　土師質土器(鍋・捏鉢・鉢)　瓦質土器(火舎)　偏平打製石斧　石球　黒耀石　鉄器　鉄滓
SD−501	F−10	溝?	中世	0.24	土師器
SD−521	B−9	溝	16C	0.80×0.2	土師質火舎
SD−646	H−9~M−7	溝	16C	3.4×1.0	弥生土器(甕・壺・器台)　須恵器(甕・坏)　土師器(坏・Ⅲ)　白磁(碗・Ⅲ)　青磁(碗)　朝鮮雑釉碗　陶器(瓶・備前甕・Ⅲ)　天目碗　瓦質土器(擂鉢・釜)　土師質土器(鍋・釜・擂鉢)　瓦玉　石鍋　叩石　炭
SD−781	M−10~N−9	自然流路	16C	4.25×1.1	弥生土器(甕)　須恵器(擂鉢・甕・坏)　土師器(坏・Ⅲ)　白磁　赤絵Ⅲ　青磁(Ⅱ類碗)　朝鮮(雑釉碗・粉粧碗)明青花(碗・Ⅲ)　備前甕　瓦質(釜・火舎・鍋)　土師質土器(鍋・擂鉢)　土鈴　石製品(茶臼・石塔・五輪地輪・石臼・割石・礫石)　黒耀石　鉄滓(碗形)
SD−801	H−8~I−5	溝	古墳~中世	1.27×0.05	弥生土器　土師器(坏)　縄文土器(粗製深鉢)
SU−003	B−20	貯蔵穴	弥生前期	0.87×0.83×1.34	弥生土器(甕)
SU−004	C−20	貯蔵穴	弥生前期	0.88×0.78×1.27	なし
SU−066	M−15	貯蔵穴	弥生前期	2.23+α×0.80+α×0.16(21.99)	弥生土器(甕・壺)　縄文土器(粗製深鉢)　五彩団桜茶碗　炉壁　投弾　柱状片刀石斧　割石　黒耀石　炭
SU−079	H−13	貯蔵穴	弥生前期後半	1.92×1.34×0.32	弥生土器(甕・壺)　黒耀石
SU−227	F−12	貯蔵穴	弥生中期初~前半	2.14×2.14×0.96	弥生土器(甕・壺・蓋)　須恵器(坏)　無文土器　土製品(防錘車・円盤)　焼土塊　石製品(防錘車・Ⅲ・偏平打斧)　サヌカイト　チャート
SU−230	G−17	貯蔵穴	弥生前期後半	2.03×1.80×0.91	弥生土器(赤色顔料入甕・甕・壺)　石製品(斧・砥石・叩石・錐)　黒耀石　炭
SU−242	C~D−22	貯蔵穴	弥生前期	1.85×1.63×2.23	なし
SU−243	D−22	貯蔵穴	弥生前期	2.38×1.72+α×1.69	なし
SU−244	D−22	貯蔵穴	弥生前期	2.27×1.65+α×1.65	なし
SU−245	D−22	貯蔵穴	弥生前期	2.84×1.98×1.50	なし
SU−249	F−16	貯蔵穴	弥生前期	1.58×1.30×1.23×1.69	なし
SU−250	D−22	貯蔵穴	弥生前期	1.50+α×1.75×0.58	なし
SU−251	C−22	貯蔵穴	弥生前期	2.40+α×2.10×1.41	なし
SU−252	C−22	貯蔵穴	弥生前期	1.85×1.03+α×1.35	なし
SU−253	C−22	貯蔵穴	弥生前期	2.05×1.60×1.81	なし
SU−254	C−21	貯蔵穴	弥生前~後半	2.18×2.00×1.53	弥生土器(甕・壺・蓋・ミニチュア鉢)　砥石　黒耀石
SU−255	C−21	貯蔵穴	弥生前期中頃	2.50×2.05×1.66	弥生土器(甕)
SU−281	C−1	貯蔵穴	弥生前期後半~末	1.03×0.94×0.61	弥生土器(甕)　黒耀石
SU−313	B−3	貯蔵穴	弥生前期	1.42×1.40×0.55	弥生土器(甕・壺)　石製品　(石斧・砥石)　黒耀石　炭
SU−350	A−2	貯蔵穴	弥生中期初頭	1.46×1.05×1.17	弥生土器(甕)・土師器・石鏃・黒耀石
SU−374	B−6	貯蔵穴	弥生前期後半	1.72×1.33×1.03	弥生土器(大壺・甕)　土師器(坏・Ⅲ)　陶器(備前大甕・高取系花瓶)　瓦(丸・平)　石製品　(石臼・水輪)　黒耀石

遺物一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模(m)	主な出土遺物
SU−558	F〜F−8	方形貯蔵穴	弥生前期	2.10×1.81×0.43	弥生土器(甕・壺・高坏・鉢)　石製品(柱状片刀石斧・鏃・槍・砥石・叩石)　黒耀石　サヌカイト　炭
SU−786	N−10	方形貯蔵穴	弥生前期後半	1.91×1.53×0.52	弥生土器(甕・壺)　炉壁　石製品(磨石・叩石)　黒耀石
SC−010	A−18	竪穴住居	古墳前期	4.25+α×1.20+α×0.74	須恵器坏　土師器(壺・甕・器台)
SC−011	A−17	竪穴住居	古墳後期?	2.03+α×0.80+α×0.27	弥生土器(壺)　須恵器
SC−012	B−17	竪穴住居	古墳後期	3.95×2.75+α×1.02	須恵器(甕・坏)　土師器(甕・壺・手捏ね)　黒耀石　種子
SC−015	B−16	竪穴住居	古墳後期	2.55×0.12+α×0.26	須恵器(坏)　土師器(高坏)　鉄釘　鉄滓
SC−017	B−16	竪穴住居	弥生後期〜古墳	2.80+α+1.40+α+0.48	弥生土器　黒耀石
SC−018	B−16	竪穴住居	古墳	3.63×1.53+α×0.24	弥生土器(甕)
SC−019	B−15	竪穴住居	古墳後期	4.60×2.43+α×0.64	須恵器(甕)　土師器(甕・壺・坏・高坏・鉢・ミニチュア)　吹子の羽口　石斧　鉄滓
SC−020	B−14〜15	竪穴住居	古墳後期	6.50+α×1.6+α×1.21	弥生土器　須恵器(坏・甕・甑・壺)　黒色研磨土器　黒耀石　滑石
SC−028	B−11〜12	竪穴住居	古墳後期	4.60×2.50×0.65	弥生土器　須恵器(坏・壺・甑)　土師器(壺)
SC−037	B−13〜14	竪穴住居	11C〜12C	7.80×1.25×0.87	須恵器(坏)　土師器(甕)　白磁碗　陶器甕　土錘　石製品　黒耀石
SC−081	G−13	竪穴住居	7C前半	4.41×3.25×0.58	弥生土器　須恵器　土師器(高坏・甕)　伊万里染付　緑釉壺　青白磁　滑石　炭
SC−296	A−3〜4	竪穴住居	7C	3.76×1.65×0.79	弥生土器(甕)　須恵器(坏・坏蓋)　土師器(坏・高坏)　砥石　黒耀石　鉄刀
SC−301	C−4	竪穴住居	6C中	4.75×1.38×0.31	弥生土器(甕・高坏)　須恵器(甕・坏・坏蓋・壺蓋)　土師器ミニチュア　縄文深鉢　砥石　黒耀石　炭
SC−337	A〜B−4	竪穴住居	6C末〜7C	3.54×2.32+α×0.45	弥生土器(甕)　須恵器(坏・坏蓋・甕)　土師器(甑・坏)　黒耀石　サヌカイト　鉄製品(刃子)
SC−369	C−4〜5	竪穴住居	古墳後期	5.14×2.32×0.82	弥生土器(甕・高坏・支脚)　土師器(高坏)　スクレイパー　黒耀石
SC−376	C−5	竪穴住居	古墳後期	4.25+α×2.02×0.24	弥生土器(器台・支脚・蓋)　須恵器(坏身・坏・甕・方形透穴高坏)　土師器(坏・甕・坩)　砥石　黒耀石　鉄滓
SC−404	B−6	竪穴住居	古墳前期?	1.90+α×1.05+α×0.59	弥生土器　土師器(甕・高坏)　黒耀石
SC−427	C−5	竪穴住居	古墳後期	4.10×1.74×0.68	弥生土器　須恵器(坏・甕)　黒耀石　滑石製平玉
SC−430	C〜D−7	竪穴住居	古墳後期	5.10×4.45×0.54	弥生土器(甕・壺・鉢・高坏)　須恵器(甕・坏・坏蓋)　土師器(坩・古式甕・高坏)　炉壁　石包丁　砥石　黒耀石　サヌカイト　鉄滓
SC−494	C−8	竪穴住居	6C前半	4.65×1.62×0.32	弥生土器(甕・壺・鉢)　須恵器(坏・甕・坏蓋)　土師器(坏)　砥石　黒耀石
SC−550	A−4	竪穴住居(壁溝)	古墳後期	0.93+α×0.65+α×0.23	弥生土器　土師器(坏)
SC−772	O〜P−10	竪穴住居	6C初頭	3.65+α×2.50+α×1.08	弥生土器(甕・鉢・高坏・器台・壺)　須恵器(壺・甑)　土師器(甕・坏・鉢・皿)　炉壁　黒耀石　炭
SC−811	D〜E−10〜11	竪穴住居	弥生中期初頭	3.96×2.86+α×0.7	弥生土器(甕)　石斧　黒耀石

遺物一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模(m)	主な出土遺物
SR−240	D−15	土壙墓	11C後半~12C前	2.36×0.87×0.44	弥生土器　須恵器甕　白磁Ⅲ類碗
SR−247	D−13	土壙墓	11C~12C	2.43×1.30×0.41	弥生土器甕　土師器坏　白磁(Ⅲ~Ⅴ類碗・皿)　叩石　鉄器(短刀・鏃)
SR−570	H−10	石組基壇墓	16C	1.43×0.98×0.50	土師器(坏・皿)　白磁碗　備前甕　瓦質土器(火舎)　土師質土器(火舎)　石塔
SR−647	I−8	近世墓(甕棺)	近世	0.98×0.96×1.30	中国陶器(甕)　国産陶器(甕)
SR−648	H−8	近世墓(円形)	近世	0.80×0.72×0.63	伊万里(小碗・染付合子)　土師質土器(鍋)
SR−650	I−8	近世墓(円形)	近世	0.80×0.72×0.59	なし
SR−719	H−9	近世墓(座棺)	近世	1.17×0.96×0.93	瓦質土器(捏鉢)　水輪片
SR−720	G−9	近世墓(円形)	近世	1.00×0.90×1.41	現川碗　銅銭(寛永通寶)
SR−721	I−10	近世墓(甕棺)	近世	1.06×1.02×	土師器(灯明皿)　中国陶器(大甕)　陶器皿　平瓦　叩石　銅銭(寛永通寶)　人骨
SR−722	G−10	近世墓(小児)	近世	0.73×0.51×0.37	青白磁ミニチュア(碗・皿・壺・老人像)　銅銭(寛永通寶)　土鈴　木箱片
SR−723	G−10	近世墓(円形)	近世	1.05×1.03×1.35	弥生土器　土師器皿　瓦質土器　炉壁　鉄製品(刃物・鐇)　漆椀片
SR−725	G−10	近世墓	近世	1.05×0.85×0.86	土師器坏　土師質土器　銅銭(寛永通寶)
SR−726	I−9	中世墓(二重円形)	16C?	1.05×0.84×0.40	銅製品(洪武通寶)
SR−727	I−10	近世墓(甕棺)	近世	0.88×0.72	陶器甕　瓦　銅銭(寛永通寶)
SR−728	I−10	近世墓(甕棺)	近世	1.16×1.36×0.33	土師器坏　白磁　陶器甕　銅銭　人骨
SR−729	I−10	近世墓?・(円形)	中世~近世	1.18×1.10×1.68	瓦質土器　平瓦
SR−730	G−10	近世墓(方形)	近世	1.35×1.05×0.84	伊万里染付皿
SR−731	G−10	中世墓(座棺)	16C	1.70×1.65×1.44	土師器坏　瓦質土器　土師質土器(鍋)
SR−732	I−10	近世墓(円形)	近世	0.83×0.75×0.64	土師器(皿・灯明皿)　伊万里(湯呑・老人像)　瓦質土器　平瓦
SR−733	H−10	中世墓(甕棺)	16C	1.12×0.98×0.50	土師器坏　備前大甕　頭蓋骨片
SR−734	H−10	中世墓(甕棺)	16C	1.48×1.20×0.83	須恵器　土師器坏　青磁皿　備前大甕　平瓦　鉄製品(鐇)　銅銭
SR−735	H−10	中世墓(円形)	16C	0.80×0.75×0.30	銅銭(洪武通寶)
SR−736	H−10	近世墓(方形)	近世	1.38×0.98×0.90	土師器皿　伊万里染付皿　木箱片
SR−737	H−10	中世墓?(円形)	中世~近世16C?	1.72×1.60×1.19	土師器皿
SR−738	H−9	近世墓?(方形)	中世~近世16C?	1.33×1.07×0.50	銅銭
SR−739	G−9	近世墓(円形)	近世	1.04×0.90×1.49	伊万里赤絵水滴
SR−740	G−10	中世墓?(方形)	中世~近世16C?	1.00×0.97×0.89	土師皿
SR−769	H−11	近世墓(甕棺)	中世?	0.82×0.58×0.25	瓦質土器(火舎)　土師質土器(鍋)
SR−790	M−13	土壙墓	11~12C?	不明	弥生土器　白磁小碗
SK−001	B−21	土壙	古墳後期	2.20×1.57×0.79	弥生土器　土師器(壺・甕)
SK−002	B−20	土壙		0.83×0.53×0.8	なし
SK−005	C−20	土壙		1.00×0.90×0.55	なし
SK−008	A−21	土壙	弥生後期	1.40×1.22×1.31	弥生土器(壺・甕)
SK−009	B−18	土壙	弥生前期	0.90×0.65×0.35	弥生土器甕
SK−022	C−14	土壙	16C	2.75×1.73×0.54	弥生土器甕　須恵器(甕・坏)　白磁碗　国産陶器(鉢)　土師質土器(鍋・擂鉢・湯釜)　黒耀石
SK−025	C−16	土壙	不明	0.56×0.52×0.25	なし
SK−026	C−11	土壙	15~16C	2.40×2.00×0.29	弥生土器甕　土師器坏　白磁碗　陶器皿　土師質土器(鍋)　黒耀石
SK−027	C−11	土壙	不明	1.23×0.95×0.29	なし

遺物一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模(m)	主な出土遺物
SK−038	B−13	土壙	11~12C	2.65×0.67×0.31	須恵器(甕・坏)　土師器　白磁碗　瓦器椀　黒耀石
SK−051	B−17	土壙	弥生前期	1.35×1.23×0.61	弥生土器甕
SK−058	B−14	土壙	古墳後期	0.97×0.63×0.61	須恵器(甕・坏)　土師器　焼石　サヌカイト
SK−065	M−15	土壙	16C?	1.57×1.15×0.29	弥生土器　青白皿　褐釉陶器　瓦質土器(擂鉢)　瓦(平・丸)
SK−067	M−15	土壙	16C	1.02×0.97×0.34	弥生土器　土師器(皿・坏)　伊万里染付碗　瓦質土器　土師質土器(擂鉢)
SK−068	M−14	土壙	近世	1.25×1.23×0.43	弥生土器　須恵器　伊万里染付碗　唐津系刷目碗　瓦質土器(鍋)　土師質土器　平瓦　太形蛤刃石斧　鉄滓(椀形)　鉄器
SK−070	L−14	土壙	近世	1.82×0.65×0.27	瓦質土器(甕)
SK−071	L−14	土壙	近世	1.21×1.20×0.23	弥生土器　土師器皿　白磁小碗　伊万里染付碗　青磁　陶器(現川・唐津系)　瓦質土器　平瓦　鉄釘　石灰
SK−072	K−15	土壙	近世	1.18×1.02×0.45	弥生土器　平瓦
SK−076	J−14	土壙	近世	0.97×1.03×0.41	弥生土器　陶器(擂鉢)　土師質土器
SK−077	G−14	土壙(溜桝)	近世	3.50×2.28+α×0.59	弥生土器　須恵器甕　染付(伊万里碗・皿・朝鮮皿・能古碗)　東播系鉢　陶器(唐津系皿・瓶・高取系瓶・皿・擂鉢)　瓦質土器(大甕・火舎・甕)　土師質土器(火舎・鍋)　瓦(平・丸)　土製品(吹子羽口・鈴)　石製品(剣・砥石・粉引臼)　鉄滓(炉底・椀形)
SK−078	J−14	土壙(溜桝)	近世	1.11×1.09×0.28	伊万里染付碗　京都系碗　土師質土器(火舎・大甕)
SK−080	K−14	土壙	近世	0.65+α×0.43+α×0.06	瓦質土器(擂鉢)　丸瓦　黒耀石
SK−083	G−13	土壙	11C後半~12C前半	1.32×1.14×0.12	弥生土器　須恵器甕　土師器(坏・碗)　白磁(碗・皿)　瓦器椀　滑石製品
SK−086	H−15	土壙	近世	7.42×5.75+α×1.04	須恵器(坏・甕)　土師器(皿・甑)　伊万里染付(碗・瓶・皿)　朝鮮雑釉碗　青磁(碗・染付碗・皿)　陶器(擂鉢・甕・皿)　瓦質土器(火舎・甕・大甕)　土師質土器(鍋)　瓦　炉壁　石斧　鉄滓(椀形)
SK−087	K−12	土壙	16C	2.07×1.88×0.33	弥生土器甕　須恵器甕　土師器坏　白磁碗　明青花碗　陶器(磁灶窯盤)　石錐　黒耀石　鉄滓　炭
SK−088	G−13	土壙	11C後半~12C前半	1.10×0.90×0.53	弥生土器甕　須恵器甕　白磁(碗・染付)　陶器甕
SK−089	G−13	土壙	12C前半	16.8×14.2×0.41	弥生土器(器台)　須恵器坏　土師器坏　白磁碗　陶器甕　瓦器椀
SK−117	D−14	土壙	16C	1.04×0.85×0.07	弥生土器　土師器　土師質土器(鍋)　瓦質土器(鉢)
SK−173	K−11	土壙	弥生後期?	1.45×1.05×0.42	弥生土器(甕・高坏)　焼土塊　黒耀石
SK−192	H−11	土壙	古墳前期初頭	0.80×0.28+α×	弥生土器甕　土師器(高坏・壺)　青磁
SK−194	H−13	土壙	中世	1.11×0.68×0.22	弥生土器　中国陶器甕
SK−196	G−13	土壙	古墳初	2.65×1.02+α×0.34	土師器(高坏)
SK−197	G−12	土壙	16C	1.15×1.08×0.29	弥生土器　瓦質土器(釜)
SK−208	F−14	土壙	弥生前期後半	1.02×0.68×0.26	弥生土器(壺)
SK−228	G−17	土壙	中世	0.90×0.88×0.54	弥生土器(壺)　青白磁
SK−246	D−13	土壙立柱?	中世	1.20×0.82×1.00	弥生土器　須恵器　黒耀石
SK−248	L−14	土壙	16C	1.32×0.87+α×0.25	瓦質土器(鉢)
SK−263	F−2	土壙	中世?	1.49×1.13×0.2	弥生土器(甕)　土師器(坏)
SK−283	E−2~3	土壙	16C	5.21×1.84×0.46	弥生土器(甕・壺)　須恵器　土師器坏　白磁碗　瓦質土器　瓦器　黒耀石
SK−284	D−2	土壙	16C	1.78×0.70×0.14	瓦質土器(釜)
SK−295	D−3	土壙	中世	1.03×0.75×0.21	土師器(皿・甕)　須恵器　土師器皿　青磁(香炉)　陶器　瓦器　鉄滓　炭
SK−297	D−1	土壙	16C	1.28×1.10×0.32	須恵器　土師器皿　青磁(香炉)　陶器　土師質土器(鍋)　瓦器　鉄滓　炭
SK−339	B−1	土壙(溜桝)	中世16C	4.64×3.82+α×1.06	弥生土器(甕)　須恵器(坏・甕)　土師器(皿)　白磁碗　ベトナム鉄絵碗　備前(甕・小壺)　朝鮮雑釉皿　陶器(鉢)　瓦質土器(擂鉢・甕)　土師質土器(鉢・鼎・鍋)　炉壁　砥石　割石　黒耀石　鉄滓
SK−373	B−2		弥生前期?	1.43×1.18×0.21	弥生土器(甕・壺)　黒耀石

遺物一覧表

遺構No.	地点	種別	時期	規模(m)	主な出土遺物
SK−377	C−5	土壙	弥生前期後半	2.70×1.30+α×0.47	弥生土器(甕・鉢・大壺)　サヌカイト　チャート　黒耀石
SK−387	B−5	土壙	弥生?	1.35+α×1.10×0.47	弥生土器
SK−424	E−6	土壙	弥生後半	1.33×1.12×0.13	弥生土器(甕・鉢)
SK−447	D−7	土壙	中世	2.22×1.30×0.43	弥生土器(甕)　鉄滓
SK−470	C−9	土壙	16C	2.58×2.36×0.88	弥生土器(甕・壺・高坏)　土師器(坏・Ⅲ)　土師質土器(鍋・火舎)　焼土塊　鉄器
SK−471	D−8	方形土壙	古墳後期	1.90×1.55×0.52	弥生土器(甕)　須恵器(甕)　炉壁　焼土塊　炭
SK−481	A−B−8	土壙	古墳前期	1.16+α×0.30+α×0.27	弥生土器(高坏・甕)
SK−511	B−7	土壙	弥生	1.13+α×0.70+α×0.54	弥生土器(甕)
SK−512	B−8	土壙	弥生	1.65+α×1.67×0.92	弥生土器(甕・壺)
SK−524	C−10	土壙	弥生終末～古墳初	1.07×0.45×0.31	弥生土器
SK−540	D−10	土壙	弥生後期後半～末	1.43×0.90×0.22	弥生土器(甕・高坏・鉢)　黒耀石
SK−544	C−9	土壙	古墳～中世		弥生土器
SK−545	C−10	土壙	6C～7C		弥生土器(甕)　須恵器(甕)
SK−556	C−4	土壙	古墳後期	1.58×1.34+α×0.31	弥生土器(甕・高坏・壺)　土師器　黒耀石
SK−655	J−7	円形土壙	16C	0.99×0.95×0.62	須恵器(甕)　土師器(坏)　朝鮮雑釉瓶　黒耀石
SK−661	K−6	方形土壙	11C後～12C	1.00×0.85×0.31	土師器　白磁碗(Ⅲ類)
SK−684	K−7	土壙	弥生	1.42+α×0.55×0.24	弥生土器
SK−705	J−7	土壙	近世	1.75×1.08×0.61	弥生土器　土師器(Ⅲ・坏)　陶器大甕　瓦質土器　土師質土器(鍋)　黒耀石
SK−706	J−7	土壙	近世	1.05×0.80×0.57	須恵器　伊万里染付皿　土師質土器(鍋)
SK−710	M−7	土壙(焼土)	弥生後期	0.59×0.55×0.17	弥生土器(甕・壺・二重口縁壺)　焼土塊
SK−744	H−8	方形土壙	弥生中期初頭	0.82×0.72×0.30	弥生土器(甕)　黒耀石
SK−745	H−8	円形土壙	16C	0.78×0.76×0.30	土師器(鍋)　瓦質土器
SK−749	I−7	円形土壙	5~6C初Ⅰ~Ⅱ	0.92×0.80×0.54	弥生土器(甕)　須恵器(壺)　土師器
SK−750	I−7	円形土壙	不明	0.67×0.63×0.30	弥生土器　土師器
SK−780	M−10	円形土壙	16C	2.45×1.50×0.23	弥生土器(甕)　須恵器(擂鉢)　土師器(坏・耳鍋)　青磁Ⅳ～Ⅵ類碗　備前甕　瓦質土器(釜・火舎・擂鉢)　土師質土器(鍋)　鉄滓(炉底塊)
SK−783	M−10	方形土壙	近世	1.70×1.15×0.48	伊万里　鉄滓(ガラス質滓)
SK−784	N−10	土壙	16C	1.20×0.80×0.25	明青花碗　土師質土器(鍋)　黒耀石
SK−785	O−10	土壙	16C	1.72×1.23×0.31	弥生土器　須恵器(甕)　青磁(龍泉Ⅵ類碗)
SK−789	M−13	円形土壙	近世	1.27×1.13×0.83	弥生土器(甕)　伊万里染付(赤絵小碗・Ⅲ)　陶器(朝鮮雑釉Ⅲ・柿釉Ⅲ・　現川系碗・高取系碗)　瓦　黒耀石　石炭
SK−791	N−13	隅丸方形土壙	近世	1.69×1.53×0.26	弥生土器(甕)　陶器(上野碗・高取碗・唐津刷毛目鉢、甕)
SK−792	N−13	土壙	弥生前期前半	1.20×1.02×0.12	弥生土器(甕)　サヌカイト
SK−793	N−13	方形土壙	近世	1.58×0.80+α×0.77	弥生土器(甕)　伊万里染付(青磁小鉢・碗・ぐい呑・Ⅲ)　京都系(鉄絵小碗・碗・染付)　土師質土器(火舎)　瓦(丸・平)　石製品(茶臼)　焼石
SK−797	L−13	土壙	近世	1.15×1.18×0.32	土師器　伊万里染付(碗・徳利・小坏)　土師質土器(火舎)
SK−904	P−12	土壙	近世	2.24×1.70×0.51	弥生土器(器台・甕)　須恵器(甕)　土師器(坏)　瓦質土器(壺)　土師質土器(鍋)　瓦器椀　黒耀石
SB−1001		掘立柱建物	16C	5.95×4.52×	弥生土器(甕・壺・支脚)　明青花皿　陶器
SB−1002		掘立柱建物	中世	5.50×1.96×	弥生土器
SB−1003		掘立柱建物	中世	10.10×3.92×	弥生土器
SB−1004		掘立柱建物	中世	3.95+α×5.17×	弥生土器
SB−1005		掘立柱建物	中世	8.27×4.15+α	土師器

付編1

樋井川A遺跡第1次調査出土鉄滓等の分析報告書

（財）安来市体育文化振興財団　和鋼博物館
日立金属株式会社　冶金研究所

1.　経緯および調査地区の概要

樋井川A遺跡（福岡市城南区樋井川3丁目473－2）の出土品3点について分析調査した結果を報告する。

油山の北麓から派生して北に延びる標高23ｍ、幅250ｍ程の低い舌状丘陵の中央部に位置する。西に隣接する丘陵上には宝台遺跡・長尾遺跡の弥生集落が立地する。

丘陵の西と北縁辺に沿って幅3ｍ、深さ1ｍ程の断面逆台形状の溝がめぐり東の自然崖に連なっており、一種の環濠集落を呈している。弥生後期前半～終末期の遺物を多量に検出する。環濠内は戦国期～近世初期に1.5～2ｍ程削平を受けており、同期の生活遺構は検出されない。

周縁の緩斜面部に弥生前期の貯蔵穴26基と竪穴住居1軒、古墳後期の竪穴住居21軒、平安後期の土壙墓3基と環濠の内側に一辺50ｍ以上の方形の環濠がめぐり、内側に掘建柱建物5棟以上。土葬墓5基と溝の内外に床面積2～13㎡の地下式横穴26基を検出し、戦国期の館の体を成している。

2.　調査資料明細

表1に、調査資料の明細を示す。

表1　出土調査品明細

資料No.	性質	出土位置	外観所見	重量（g）
1	鉄器	F－13　SD－137 中世客土	赤茶色の薄片、僅かにRあり。 ほとんど錆び化	18＋20
2	椀型滓	D－18 SK－209 2層	赤茶色。ガスの抜けた気泡多数あり上面は大きな気泡、底部は小さな気泡、一部ガラス化した釜土付着。木炭噛み込みあり。	890
3	椀型滓	SX－136　上層	明瞭な椀型ではない。底部に土が付着。上部は大きな粒子堆積状、木炭噛み込み、気泡も若干含む、赤茶色	350

3.　出土調査品の外観写真

調査品の外観写真を写真1～写真3示す。

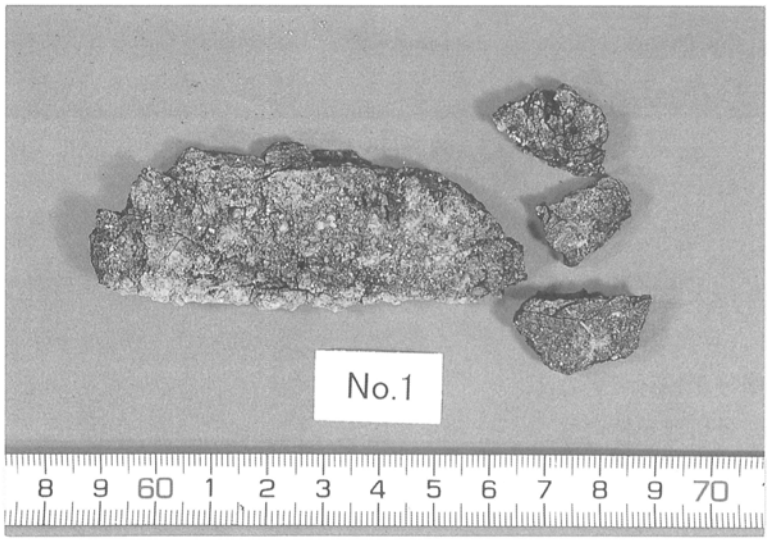


写真1　資料No.1の外観

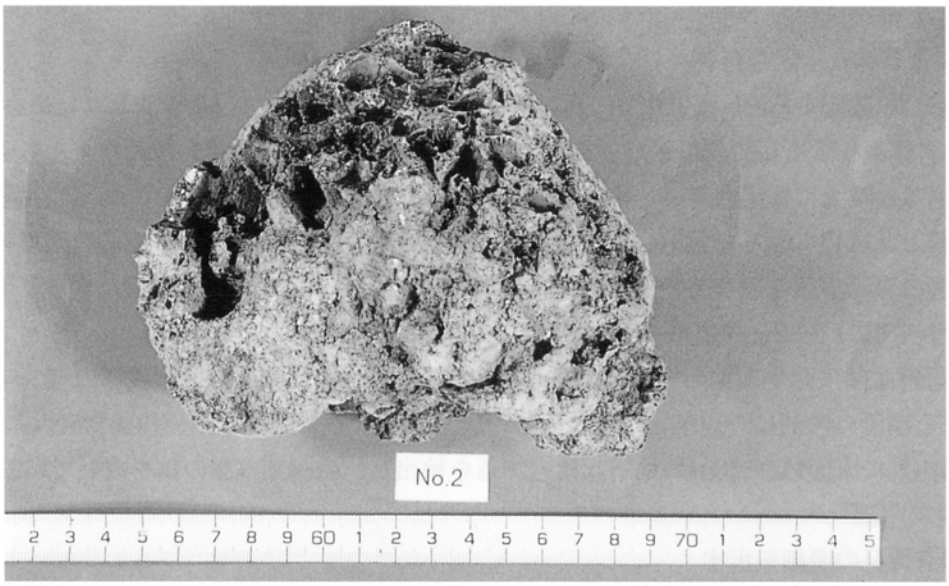


写真2　資料No.2の外観

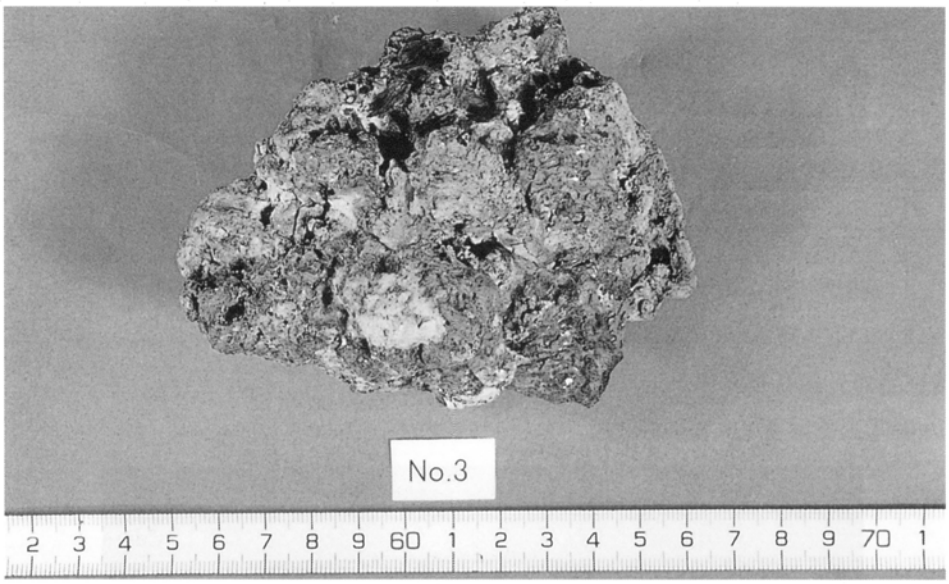


写真3　資料No.3の外観

4.　X線透過

資料No.1（鉄器）の大片についてX線透過撮影を行い、写真4に示す。本結果よりメタル部分が残っていないと判断し、以下の分析は小片にて実施した。

写真4　資料No.1のX線透過写真

5. 資料切断位置

資料No.2，No.3の分析試料採取切断位置を図1、図2に示す。

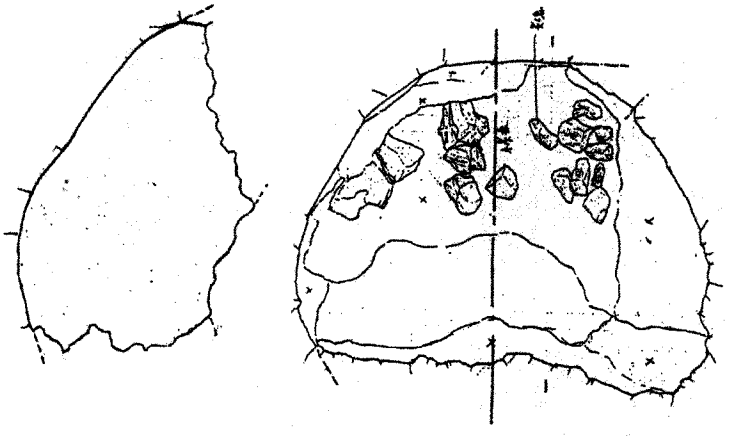


図1　資料No.2の分析試料採取切断位置

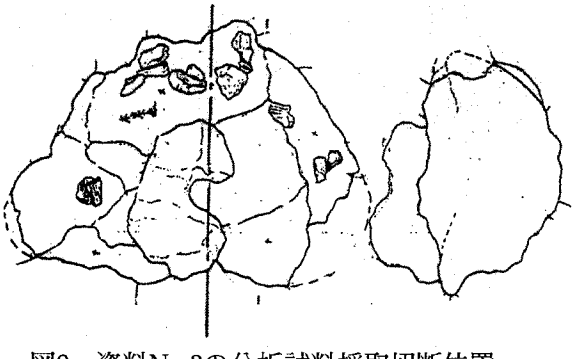


図2　資料No.3の分析試料採取切断位置

6. 化学分析結果

各資料の化学成分分析結果を表2、表3に示す。元素中、C（炭素）、S（硫黄）については、燃焼赤外線吸収法、其の他は高周波誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP）によった。

表2　化学成分分析値（wt%）

No		C	Si	Mn	P	S	Ni	Cr	V	Co	Cu	Al	Ti	Ca
1	鉄器	4.56	0.81	0.07	0.12	0.19	0.03	0.01	0.006	0.01	0.01	0.41	0.01	0.05

No	Sn	As	As	Zr	Mg	Zn	T/Fe
1	0.004	0.004	0.004	<0.01	0.01	<0.01	68.22

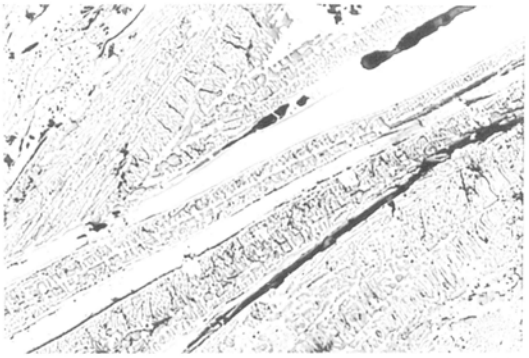
表3　化学成分分析値（wt%）

No		C	SiO_2	MnO	P	S	Ni	Cr_2O_3	Na	K	CaO
2	鉄滓	0.022	18.17	0.11	0.21	0.081	0.03	0.03	0.01	1.50	2.45
3	鉄滓	0.26	13.94	0.06	0.16	0.064	0.02	0.01	0.05	0.05	1.45

No	MgO	V_2O_5	TiO_2	Cu	Al_2O_3	T/Fe	FeO	Fe_2O_3	M/Fe
2	0.85	0.040	0.18	0.01	5.98	52.90	58.24	10.64	0.19
3	0.46	0.007	0.08	0.01	4.12	59.01	48.83	29.82	0.19

7. 顕微鏡組織観察

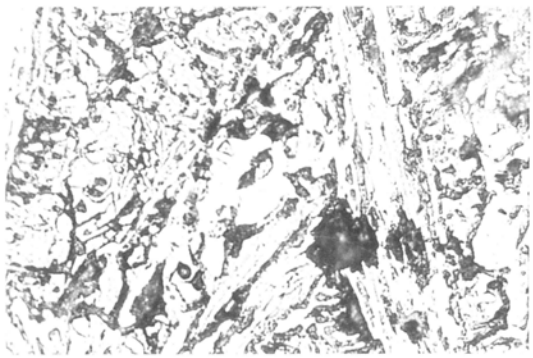
資料の光学顕微鏡組織を写真5～写真7に示す。



×100

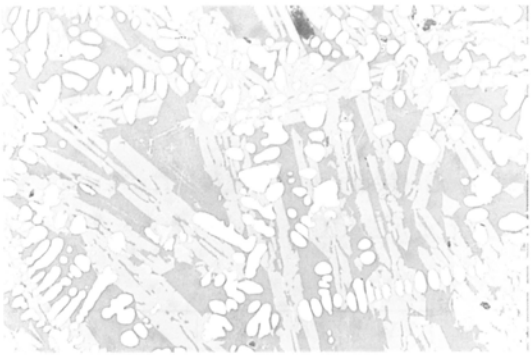
×400

×100

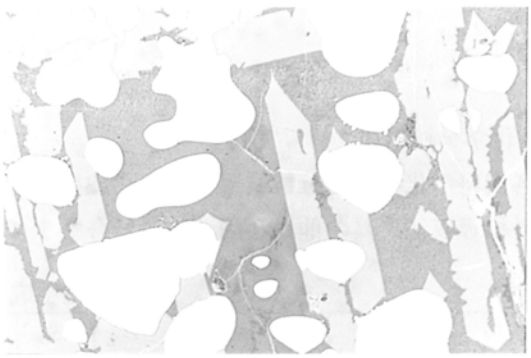


×400

写真5　資料No.1の顕微鏡組織

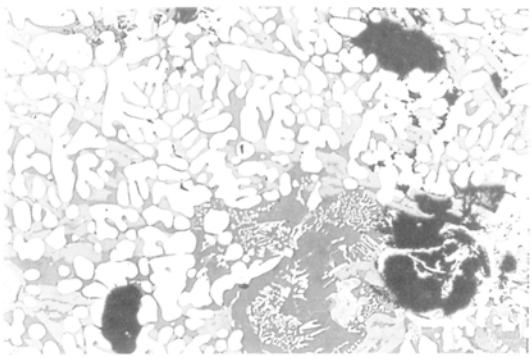


×100

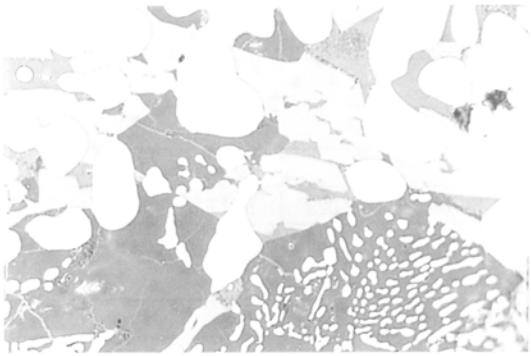


×400

写真6　資料No.2の顕微鏡組織



×100



×400

写真7　資料No.3の顕微鏡組織

8. 構成相の解析

8.1 SEM－EDX分析

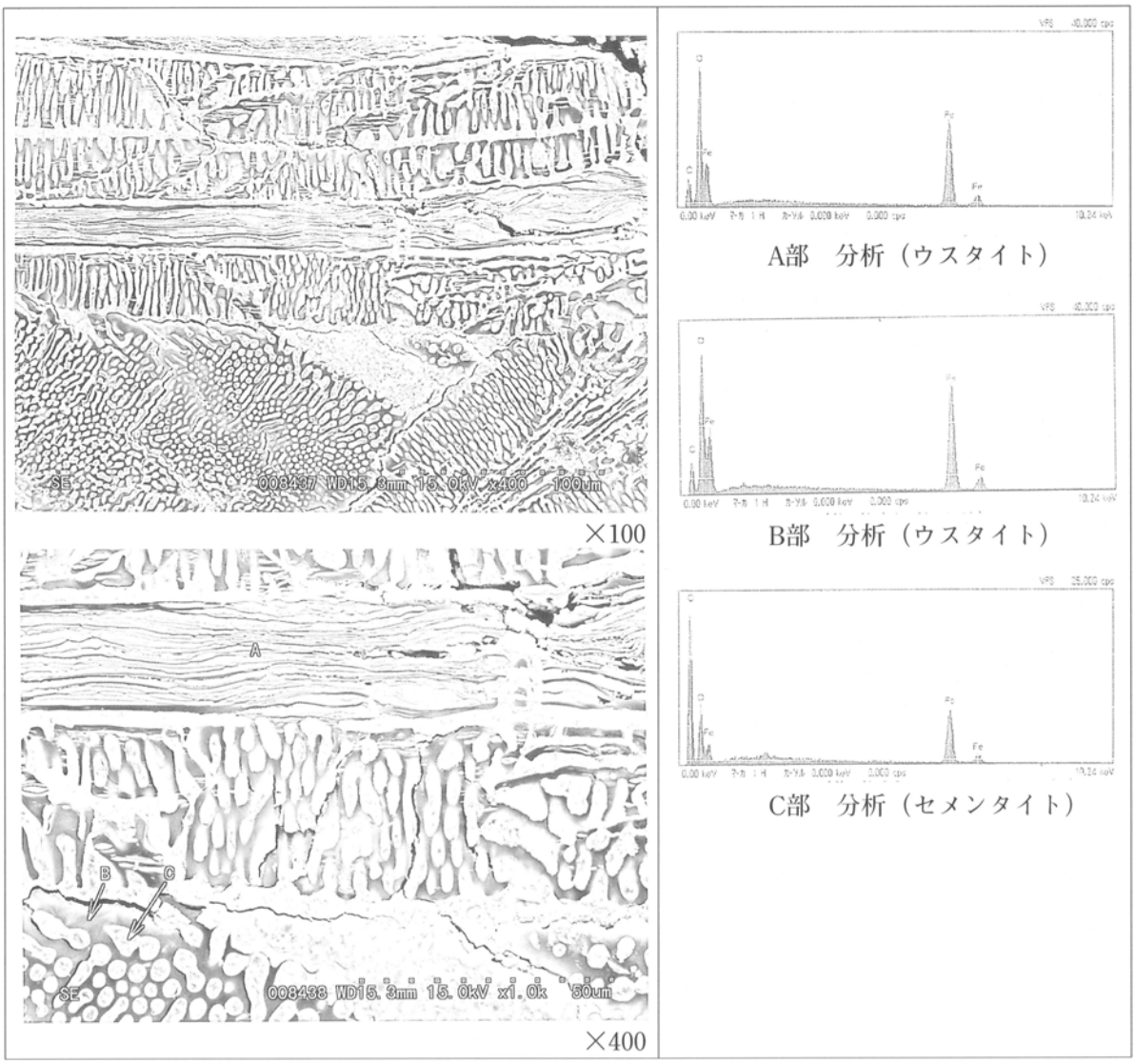
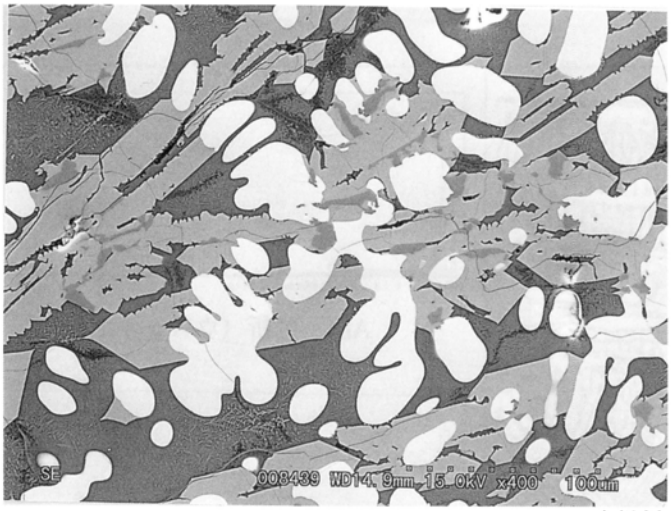
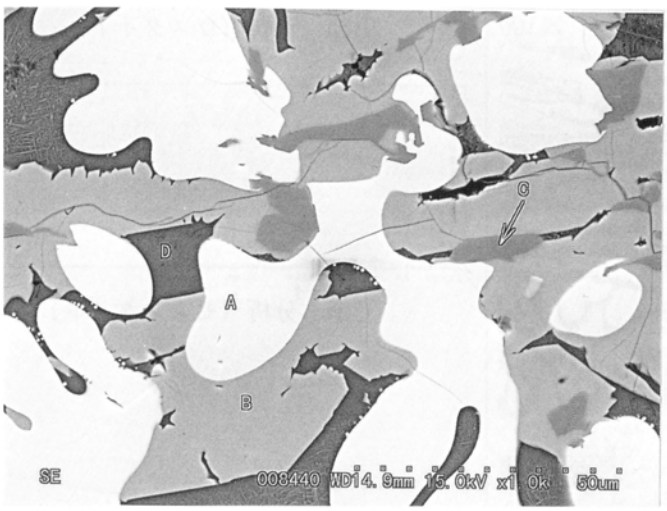


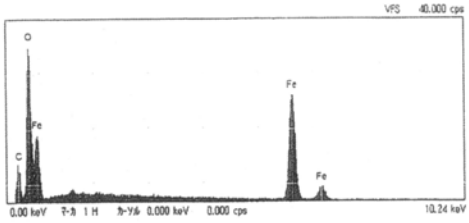
写真8　資料No.1のSEM観察像と各部のEDX分析



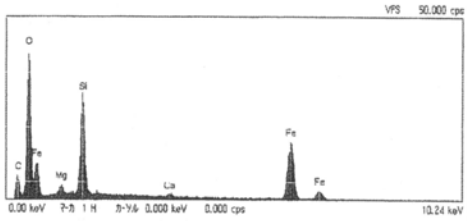
×100



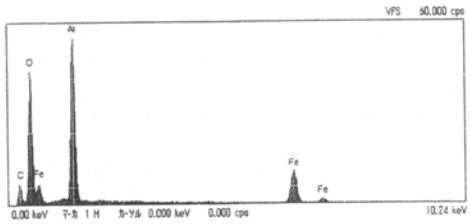
×1000



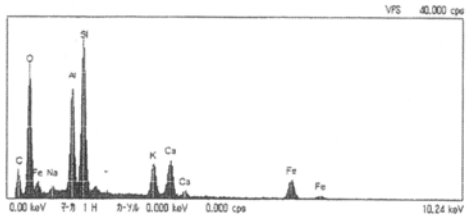
A部　分析（ウスタイト）



B部　分析（ファイヤライト）



C部　分析（ハーシナイト）

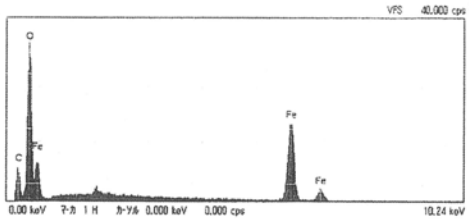


D部　分析（ガラス質）

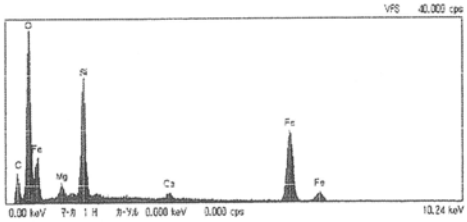
写真9　資料No.2のSEM観察像と各部のEDX分析

×100

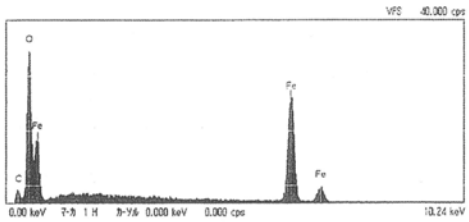
×1000



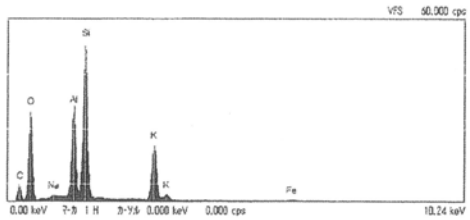
A部　分析（ウスタイト）



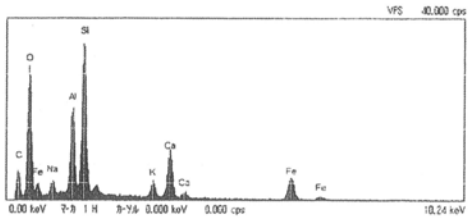
B部　分析（ファイヤライト）



C部　分析（ウスタイト）



D部　分析（ルーサイト）



E部　分析（ガラス質）

写真10　資料No.3のSEM観察像と各部のEDX分析

9.2　X線回折

サンプル名：樋井川遺跡　A−1　　[平　　滑　　化] 方法：加重平均　　平 滑 化 点 数　：9
ファイル　：和銅博物館．3052　　[バックグラウンド除去]
コメント　：F−13　SD−137　鉄器
測定日　　：06−Mar−99　11：28　[Kα2　除　　去]　　ピーク幅しきい値　：0.50
測定者　　：dmax　　[ピ　ー　ク　サ　ー　チ]　　ピーク強度しきい値：300.000

樋井川A遺跡　NO1

○：Fe_3O_4　19−0629
⊖：FeO（OH）　29−0713

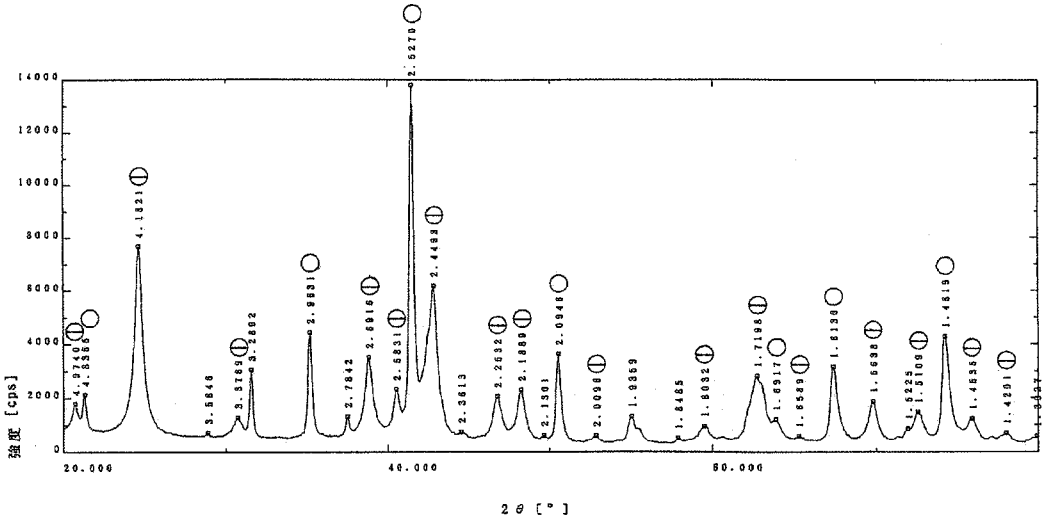


図3　資料No.1のX線回折結果

サンプル名：樋井川遺跡　A−2　　[平　　滑　　化] 方法：加重平均　　平 滑 化 点 数　：9
ファイル　：和銅博物館．3052　　[バックグラウンド除去]
コメント　：D−18　SK−209　鉄滓
測定日　　：06−Mar−99　11：59　[Kα2　除　　去]　　ピーク幅しきい値　：0.50
測定者　　：dmax　　[ピ　ー　ク　サ　ー　チ]　　ピーク強度しきい値：300.000

樋井川A遺跡　NO2

●：FeO　06−0615
△：Fe_2SiO_4　24−0178
0：$KAlSi_2O_6$　38−1423
▲：$FeAl_2O_4$　34−0192

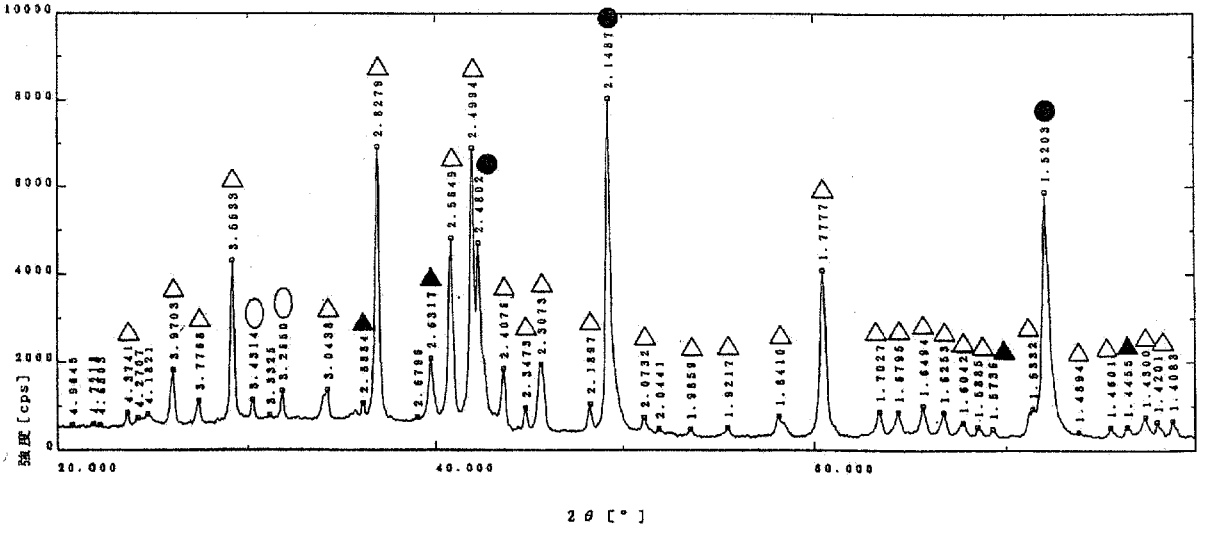


図4　資料No.2のX線回折結果

サンプル名：樋井川遺跡　A−3　　[平　　滑　　化] 方法：加重平均　　平 滑 化 点 数　：9
ファイル　：和銅博物館. 3052　　[バックグラウンド除去]
コメント　：SX−136　鉄滓
測定日　　：06−Mar−99　12：30　[Kα2　除　　去]　　ピーク幅しきい値　：0.50
測定者　　：dmax　　[ピ ー ク サ ー チ]　　ピーク強度しきい値：300.000

樋井川A遺跡　NO3

●：FeO	06−0615
△：Fe_2SiO_4	24−0178
0：$KAlSi_2O_6$	38−1423
○：Fe_3O_4	19−0629

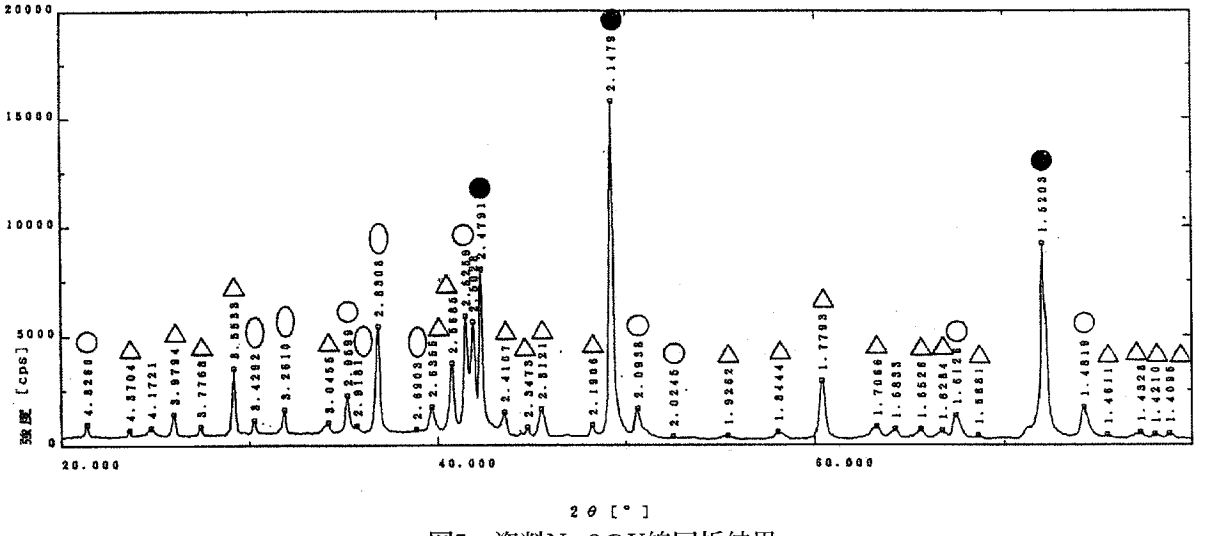


図5　資料No.3のX線回折結果

9.　まとめ

(1)　資料No.1(鉄器について)

X線透過検査では殆ど錆化していると判断されたが、小片の断面の光学顕微鏡観察において炭化物が辛うじて錆化を免れていた。また、ほとんどが錆化しているものの元の組織は推定できる状態であった。それによると、レデブライト共晶（オーステナイト十セメンタイト）からなる白鋳鉄と推定される。

また原料が砂鉄か鉱石（岩鉄）かについて化学組成から推定すると、Ti=0.01%、V=0.006%であり、砂鉄を原料とした可能性は考えられるが、汚染によるTi、Vの増加を考慮せねばならない。汚染=粘度質はSi、Alを多量に含有し、また約1%のTiを含むため、汚染によりTi量も増加するが、Ti／Si，Ti／Al比はあまり変化しないので、砂鉄系原料ならば介在物中のTiに由来してTi／Si，Ti／Al比も増大とすると考えられる。そこで、清永[1] がまとめた砂鉄および岩鉄を原料としたと考えられている鉄器の当該値と比較すると表4に示すようになり、岩鉄を原料と推定する鉄器により近いことが分かる。

また、Mn、P量も多く、Pの鉄対比0.176%は佐々木ら[2] が鉄鉱石原料の一応の目安としている0.1%を超えていることから鉄鉱石原料使用の確度は高い。ただし、Cu量が比較的低いことからCu含有量の低い原料地金であったと推定される。

表4　砂鉄および岩鉄系鉄器のTi／Si，Ti／Al，V／Si，V／Al値

資　料	Ti/Si	Ti/Al	V/Si	V/Al
資料No.1	0.0123	0.0244	0.0074	0.0146
岩鉄と推定される鉄器	0.011～0.076	0.030～0.217	0.0013～0.0069	0.0054～0.057
	Av=0.038	Av=0.107	Av=0.0041	Av=0.020
砂鉄と推定される鉄器	0.109～0.889	0.830～2，28	0.0556～0.214	0.143～1.50
	Av=0.421	Av=1.38	Av=0.169	Av=0.936

(2) 資料No.2、3（鉄滓）について

資料No.2、No.3の分析結果を、大沢正巳氏（3）が調査された古墳出鉄滓の化学組成および構成相のまとめを参考にして、まとめると表5のようになる。

表5　各資料の化学組成と鉱物組成

資料No	Total　Fe	造滓成分（*1）	TiO2	V	鉱物組成（*2）
2	52.90	27.45	0.18	0.02	W，F，H
3	59.01	19.97	0.08	0.004	W，F，L

（*1）：造滓成分＝SiO2＋CaO＋MgO＋Al2O3

（*2）：F：ファイヤライト、W：ウスタイト、H：ハーシナイト、L：ルーサイト

表5から、No.2、No.3についてみると、全鉄分：52.9%～59.0%、造滓成分：20%～27.4%は鍛冶滓の範囲であるが、鍛冶滓としては造滓成分が多いことから精錬鍛冶滓と思われる。また材料が砂鉄系か鉱石系かについては、No.2はTiO2、Vの含有量が比較的高いことから砂鉄系材料と推定されるが、No.3はTiO2、Vの含有量が共に低いことから岩鉄系材料と推定される。

10. 結論

資料No.1は、岩鉄系材料を原料した鋳鉄であると推定される。

資料No.2は、砂鉄系材料の精錬鍛冶滓であると思われる。

資料No.3は、岩鉄系材料の精錬鍛冶滓であると思われる。

以上の分析は日立金属（株）冶金研究所、ハイメック（株）中国事業所にて実施した。

11. 引用文献

(1) 清永欣吾：「奈良県下の古墳より出土した鉄刀剣の化学分析」、橿原考古学研究所紀要考古学論功第9冊、（1983）

(2) 佐々木稔、他：「短甲・挂甲錆片の金属学的解析」、考古学評論、第2号（1991）

(3) 大沢正巳：「古代出土鉄滓からみた古代製鉄」、日本製鉄史論集、たたら研究会（1984）

樋井川A遺跡1次調査出土赤色顔料について

1. はじめに

福岡市樋井川A遺跡1次調査出土の赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡観察および蛍光X線分析を行った。

出土赤色顔料に関する現在までの知見に寄れば出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄Fe_2O_3を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

2. 試料

実体顕微鏡下で出来る限り調整（混入土砂、骨片等夾雑物の除去）し、赤色物を針先に付く程度の量を採り検鏡用に、残りを研和して蛍光X線分析に供した。X線分析試料には土砂がかなり含まれている。

3. 顕微鏡調査

顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、二種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無等を観察するものである。三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。朱粒子は、やや角張った塊状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等に特徴が認められる。ベンガラ粒子は、管（パイプ）状、塊状、棒状、板（扁平）状、球状、不定形等様々な外観を持つ。

今回の試料には、赤色顔料としてはベンガラ粒子のみが認められ、朱粒子は認められなかった。出土ベンガラは管状粒子を持つ物と持たない物に大きく分けられるが、本試料のベンガラには、いわゆるパイプ状粒子は含まれていなかった。

4. 蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。別府大学設置の（株）堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MESA500を使用し、15kV-440 μA；50秒、50kV-20 μA；50秒、真空、の条件により測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2種の元素の有無を見た。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂部分に由来すると考えられる。但し、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

5. SEM調査

Scanning Electron Microscope 走査型電子顕微鏡（フィッリップス社製 XL20）により、赤色物の種類、特にベンガラの種類と状態を調査するために行った。扁平なベンガラ粒子からなり、透明な管状（パイプ）粒子は含まれていなかった。

6. 結果と考察

以上の分析結果から、赤色物は赤色顔料の一つであるベンガラであることがあきらかになった。パイプ状粒子を含まないため、ベンガラ自身からの材質的情報は現時点ではこれ以上のことは不明である。（パイプ状粒子は鉄細菌の鞘が焼成された物であることが明らかにされているので、意図的に製造した物であるということがわかる）

近年、弥生時代後期から古墳時代の住居跡より赤色顔料がまとまって出土する例が時折報告されるが、ほとんどがベンガラのようである。この時期の赤色顔料の用途は、大きく3つに分けられる。第1は土器等器物その他の装飾、第2は葬送儀礼の中で塗布、散布等で使用、第3は特に朱については、葬送儀礼以外の何らかの特別な儀礼に「擦る、加熱する」等で使用、である。ベンガラのみの出土については第3の用途が認定されていないが、例えば住居跡出土の鏡片等へのベンガラ付着等と同様な行為の範囲内で捉えられる事象かも知れない。

樋井川A遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第682集

2001年（平成13年）3月30日

発　行　福岡市教育委員会
〒810-0001　福岡市中央区天神
1丁目8の1

印　刷　有限会社 瀧川印刷